

# 大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書

— 大生郷 遺跡 —

(財)茨城県教育財團調査課	
受理年月日	57. 6. 1.
受理番号	82 - 62
寄贈団体	

昭和 56 年 9 月

財團法人 茨城県教育財團

## 序

大生郷遺跡は、水海道市大生郷に造成される大生郷工業団地内に確認された埋蔵文化財の包蔵地であります。この調査に当たり、茨城県教育委員会は、日本住宅公団の委託により大生郷遺跡調査会を設立し、昭和50年度から昭和51年度にわたり発掘調査を実施しました。

昭和52年度より、茨城県教育委員会は県内各地の開発事業の進展に伴う埋蔵文化財の発掘調査の増加に鑑み、財團法人 茨城県教育財団に調査課を設置し、埋蔵文化財の発掘調査及び整理事業を実施することになりました。

本報告書は、大生郷遺跡調査会が発掘調査を実施した人生郷遺跡の調査結果を茨城県教育財団が引き継ぎ、昭和56年度に整理し、集録したものです。

本書が、原始・古代文化解明の一環として、より多くの方々に御活用いただけるよう希望いたします。

なお、調査及び整理にあたりまして御指導・御協力をいただいた茨城県教育委員会・水海道市教育委員会はじめ各関係機関ならびに地元関係者各位に対し深く感謝の意を表します。

昭和56年9月

財團法人 茨城県教育財団

理事長 竹内 藤男

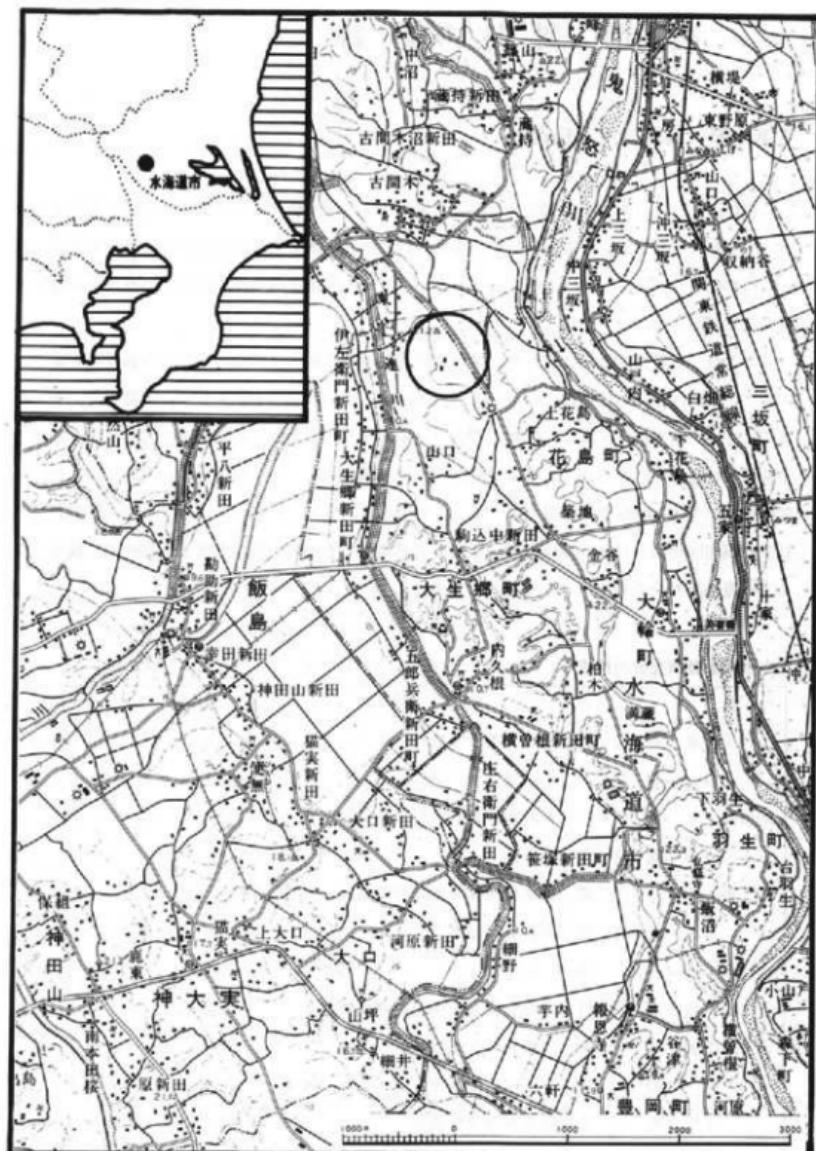
## 例　　言

1. 本書は日本住宅公団が施行する茨城県水海道市人生郷町における大生郷工業団地造成事業区域内の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は日本住宅公団の委託により、人生郷遺跡調査会調査員川俣吉之助・小室勉・桜井二郎が担当し、調査期間中の期間実施した。
3. 発掘調査は人生郷遺跡調査会調査員川俣吉之助・小室勉・桜井二郎が担当し、調査期間中、茨城県教育委員会・水海道市教育委員会・他関係機関及び地元有志ならびに多くの研究者から御協力を得た。
4. 出土遺物等の整理作業は、調査期間中に上記担当調査員が当たり、それを引き継いで財團法人茨城県教育財団本部調査課調査員桜井二郎が担当し、本書の執筆をした。
5. 採用に使用した記号は下記の通りであり、遺構実測図の方位はすべて磁北である。  
S I 住居跡 S K 上 墓

6. 調査によって確認された遺構は、中調査区を仮称番号とし、住居跡はM41-1[I]…、土墳はA 2 IPとして表示したが、その後整理の段階で時代ごとに番号をつけ直した。

# 目 次

・序	
・例 言	
・目 次	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	2
第2節 調査の経過	3
第2章 遺跡の立地と環境	10
第1節 遺跡の位置と地形	10
第2節 歴史的環境	10
第3節 遺跡の地質	15
第3章 遺構と遺物	18
第1節 住居跡	19
1. 繩文時代	19
2. 古墳時代	72
3. 歴史時代	110
第2節 土 墓	126
1. 繩文時代	126
2. 古墳時代	128
第4章 ま と め	134
写真図版	139



第1図 大生郷遺跡位置図

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経過

昭和48年3月、日本住宅公団は水海道市大生郷地区に総面積73haの工業団地造成事業計画を決定し、昭和49年3月、「日本住宅公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」(昭和40年6月22日…文化庁と調印)にもとづいて、上記地区内の埋蔵文化財の有無を茨城県教育委員会に照会した。

同年5月、県教育委員会はこれを受けて水海道市教育委員会と同地区内の分布調査を実施し、A・B・C地区からなる遺跡、約37,000m<sup>2</sup>を確認し、この旨を日本住宅公団に回答した。その取扱いについて日本住宅公団から県教育委員会に申し入れがあり、その後、県教育委員会・水海道市教育委員会は保存の方向で日本住宅公団と再三協議を重ねたが、現状保存は困難であるため、発掘調査のうえ記録保存の措置を講ずることで合意し、文化庁に報告した。この結果、県教育委員会は昭和50年11月17日、関係各課・県西教育事務所・水海道市教育委員会等関係者で構成する大生郷遺跡調査会を発足させ、発掘調査を実施することになった。

大生郷遺跡調査会の構成

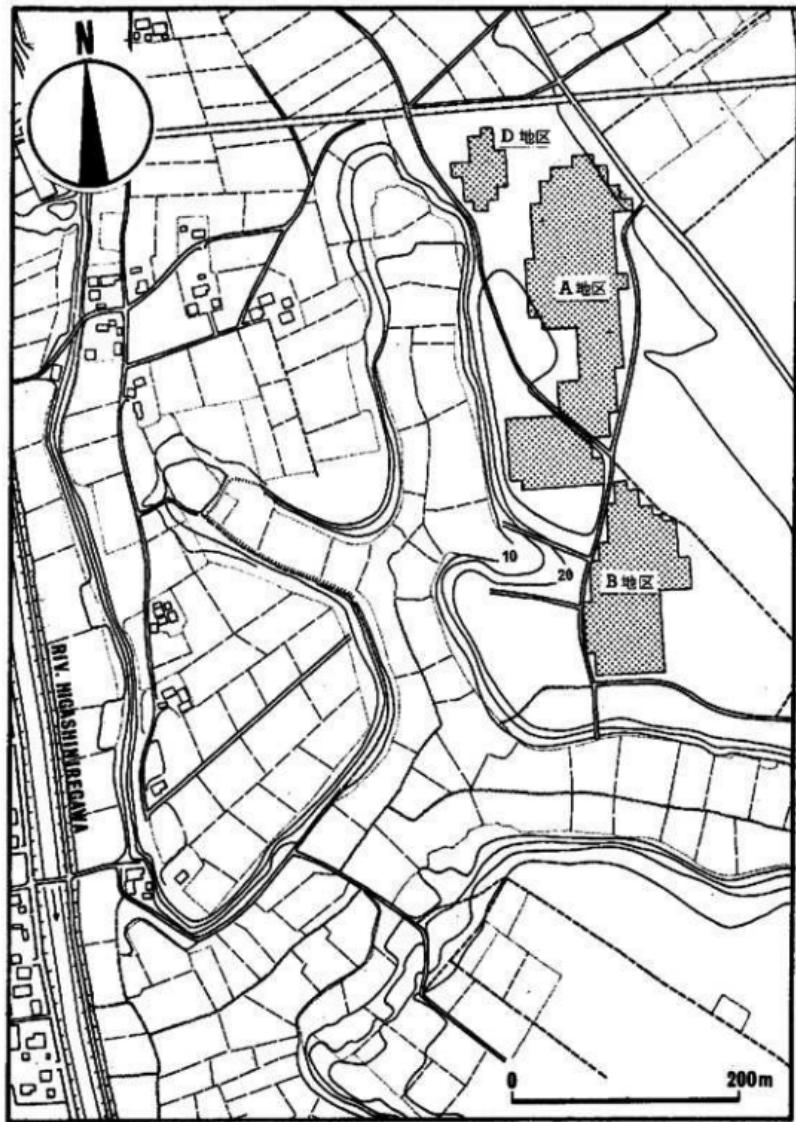
役名	氏名	職名	期間
会長	成瀬 孟男	県教育委員会教育長	昭和50. 11. 17-51. 3. 31
	大金 新一	同 上	昭和51. 4. 1-52. 3. 31
副会長	大金 新一	県教育庁教育次長	昭和50. 11. 17-51. 3. 31
	塙 越 喜一郎	同 上	昭和51. 4. 1-52. 3. 31
理事	滝田 源三郎	県文化財保護審議会委員	昭和50. 11. 17-52. 3. 31
	塙 越 喜一郎	県教育庁参事	昭和50. 11. 17-51. 3. 31
監修	張替 勇	同 上	昭和50. 11. 17-52. 3. 31
	鈴木 友之介	県総合開発部開発計画課長	同 上
監修	大賀 力	県教育庁企画室長	同 上
	川野辺 四郎	県教育庁総務課長	同 上
監修	板垣 久敬	県教育庁文化課長	昭和50. 11. 17-51. 3. 31
	島田 孝一	同 上	昭和51. 4. 1-52. 3. 31
監修	永塚 進	県西教育事務所長	同 上

	小林 伝	水海道市教育委員会教育長	昭和51. 4. 1 - 52. 3. 31
	高橋 杏二	県教育庁文化課副参事	同 上
監事	磯田 勇	県教育庁総務課長補佐	同 上
	小橋 和男	水海道市教育委員会総務課長	同 上
幹事	高橋 杏二	県教育庁文化課長補佐	昭和50. 11. 17 - 51. 3. 31
	大森 信英	県教育庁文化課文化財第二係長	昭和50. 11. 17 - 52. 3. 31
	畠田 博	県西教育事務所社会教育課長	同 上
	保多 正五	県西教育事務所社会教育主事	同 上
	岡 政夫	同 上	同 上
	高野 拓	県教育庁文化課庶務係長	同 上
	飯島 弘道	県教育庁文化課主幹	同 上
	伊勢山 司郎	県教育庁文化課主幹	昭和51. 4. 1 - 52. 3. 31
	須藤 武男	水海道市教育委員会社会教育課長	昭和50. 11. 17 - 52. 3. 31
	片岡 留	水海道市教育委員会社会教育係長	同 上
	堀込 外	水海道市教育委員会	同 上
	五木田 大樹	同 上	同 上
	川俣 吉之助	県教育庁文化課文化財保護主事	同 上
	細谷 弘一	同 上	昭和50. 11. 17 - 51. 3. 31
	豊田 雄義	同 上	昭和51. 4. 1 - 52. 3. 31
	大塚 博	同 上	昭和50. 11. 17 - 52. 3. 31
	高根 信和	同 上	同 上
	山本 貴之	県教育庁文化課主事	同 上
嘱託	小室 魁	大生郷遺跡調査会調査員	同 上
	桜井 二郎	同 上	昭和51. 4. 1 - 52. 3. 31
	岩本 みつ江	大生郷遺跡調査会事務員	同 上

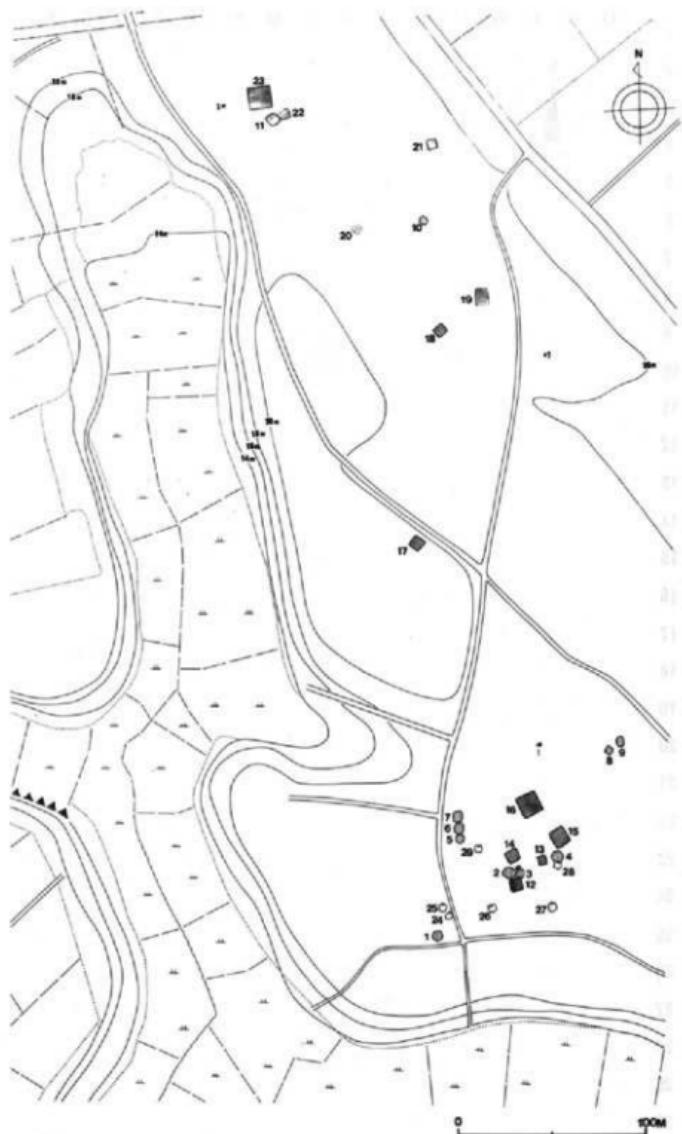
## 第2節 調査の経過

昭和50年11月17日に大生郷遺跡調査会が発足し、発掘調査に係る諸準備を行い、12月10日、水海道市大生郷町字後中丸地において、茨城県教育委員会・県西教育事務所・水海道市教育委員会等関係者の臨席を得て歎入式を挙行した。

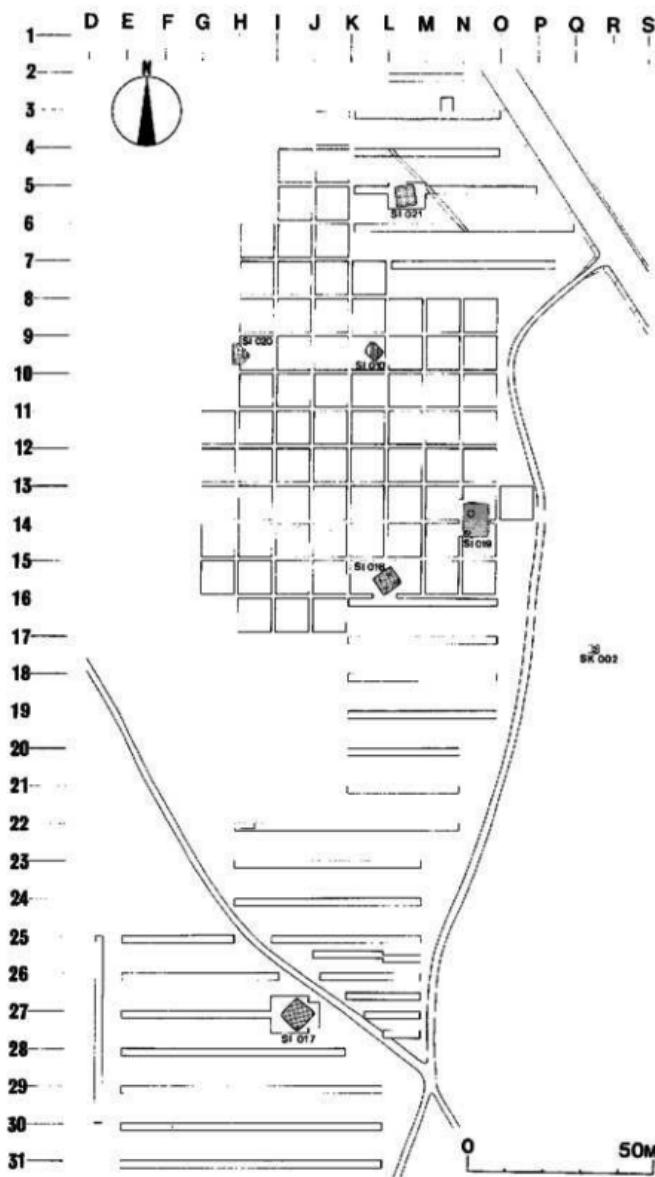
12月中旬より調査区域内の土物除去作業を開始する。



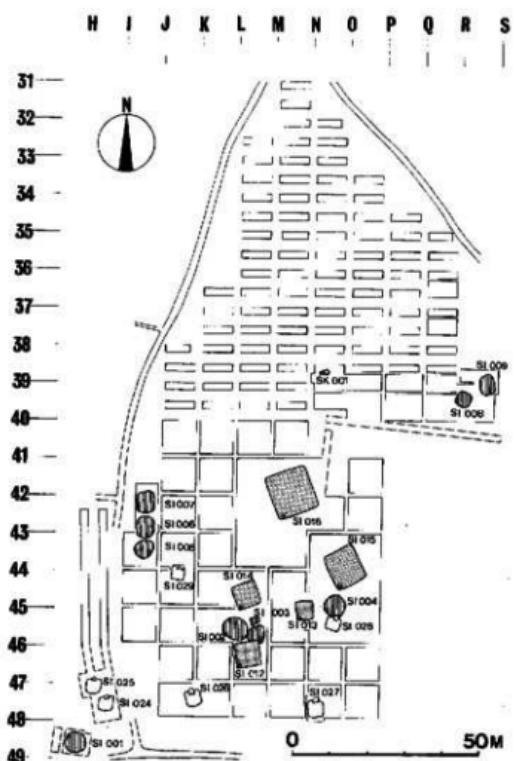
第2図 調査区域地形図 I



### 第3図 遺構全体図



第4図 A地区 全測図



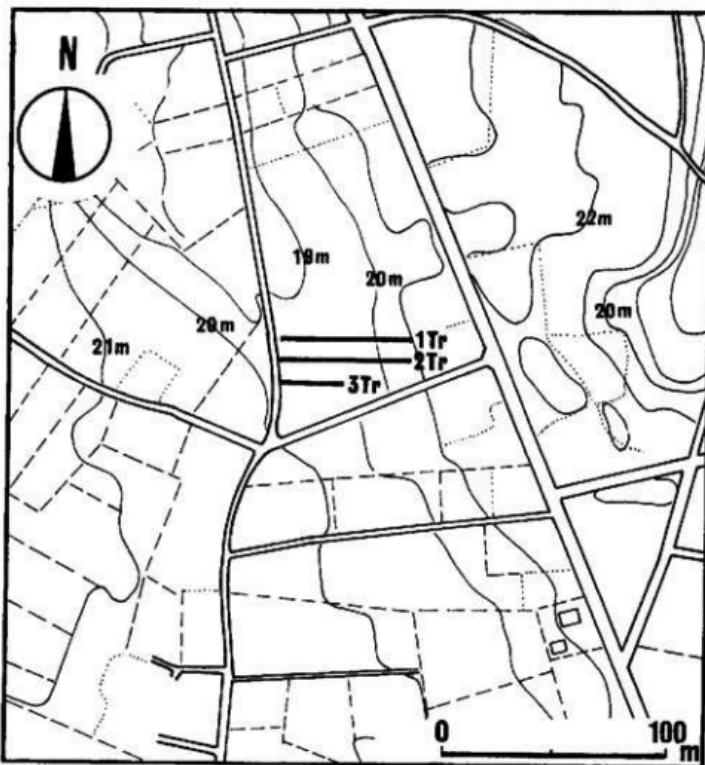
第5図 B地区 全測図

地区設定は、調査対象区域内の任意点（日本住宅公団による基準杭No.八17）を基準として磁北線に沿って、遺跡内を10m四方の中調査区に分割し西から東へA～R、北から南へ1～47の地区に分け北西の座標を地区名とし、昭和51年1月より調査区域内の杭打ち作業を実施する。調査はA地区とB地区的接点がほぼ中心部にあたるため、B地区的北部より南部に向かう方法を取り、終了後はA地区的南部より北上する方針で発掘調査計画を立てた。

B地区的北側は比較的遺物の散布が稀薄であったため杭打ちをした中調査区（10m×10m）内に2本のトレンチを設定して調査を進める。

3月上旬までにB地区的北側に設定したトレンチの発掘調査を完了した。検出された遺物は少量で、遺構もほとんどみられなかった。しかし、B地区的ほぼ中央部N38区からは、縄文時代前期に比定される土器を伴う地点貝塚が確認され、その地区周辺の拡張作業を行い、この地区以南はグリッド（8m×8m）による発掘調査を実施した。

その結果、M41区において一辺11m程の方形プランで古墳時代に比定される大型住居跡が検出された。その後3月末日までに確認された遺構は、縄文時代前期に比定される住居跡が6軒、古墳時代中期に比定される住居跡がM41区に確認されたものを含めて3軒、歴史時代の小型方形の



第6図 調査区域地形図 II (C地区)

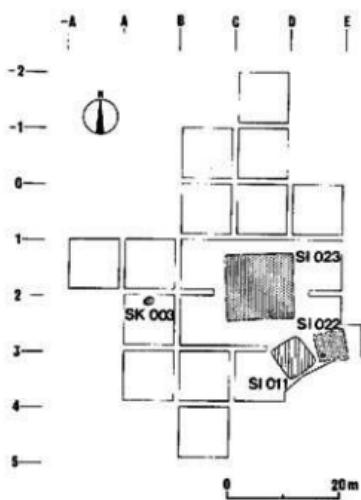
住居跡が2軒確認された。(第5図)

昭和51年4月、前年度に調査した遺構の継続調査と新しい遺構の検出・拡張作業を行った。

5月、B地区(10,542m<sup>2</sup>)のグリッド発掘を完了した。

6月、B地区の遺構精査とあわせてA地区(22,298m<sup>2</sup>)の上物除去、杭打ち作業を行い、南側はトレンチで、中央部はグリッド、さらにその北側は遺物等の分布状況からトレンチで発掘調査を実施した。

7月～8月、A地区は面積のわりに比較的の遺物・遺構の分布が稀薄であり、確認できた遺構は縄文時代中期に比定される遺構が1軒、古墳時代中期に比定される住居跡が5軒ほどみられ、他に古墳時代中期に比定される上塙を1基確認した。しかし、炎天下の中での調査でなかなか進展



第7図 D地区全測図

がみられなかった。(第4図)

9月、A地区の調査およびその周辺の分布調査により、A地区の北西約50mほどの地区をD地区(2,700m<sup>2</sup>)として追加し調査を実施することになった。

10月、D地区的調査を実施した結果、確認された遺構は縄文時代前期の住居跡1軒と上塙1基、古墳時代中期の大型住居跡など住居跡2軒を検出できたが、いずれもトレンチャ等による擾乱が激しい。(第7図)

A・B・D地区を調査した結果、A地区の中央部には遺構等が少なく、B地区の南部より多くの住居跡が位置していることが判明し、集落の分布は南部中心であり、公園と再度協議した結果、B地区の排土置場に指定していた南東部を拡張区として1,500m<sup>2</sup>ほど追加して調査をすることになる。これにより確認された遺構は縄文時代前期の住居跡が3軒、古墳時代中期の住居跡が2軒、歴史時代の住居跡が4軒確認され、それぞれ調査を実施した。

11月～12月、B地区のさらに南東約750m程の谷津を越した位置にあるC地区(4,673m<sup>2</sup>)の調査を実施したが擾乱等がひどく遺構を確認することはできなかった。C地区的調査期間の短縮により、その後A地区およびB地区の補足調査を12月下旬まで行い、予定地内の発掘調査作業を終了した。

その後3月末まで出土遺物等の整理を行い、現場事務所を撤収し、昭和50年11月から昭和52年3月までの約17ヶ月を費した人生郷遺跡の発掘調査は終了した。

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の位置と地形

水海道市は県の南西部に位置し79.62km<sup>2</sup>ほどの面積を有し、周辺の市町村とともに近郊整備地域の指定をうけている。市域には鬼怒川をはじめとして小貝川・飯沼川などの河川が屈折して南流し、猿島台地の段丘面を複雑に開析している。猿島台地の段丘面は標高15~24mほどの低位で、水田面との比高は10m内外である。(第1図)

大生郷上葉園地造成事業は水海道市北西部の石下町に隣接する地域に予定され、大生郷遺跡は鬼怒川と飯沼川にはさまれた水海道市人生郷町字後中丸に位置している。鬼怒川・飯沼川の両河川によって19~20mの段丘面は複雑に開析され、段丘は急崖によって谷津に向いている。遺跡全体はほぼ平坦な地形を呈し、谷津の各所に湧水点を観察することができる。

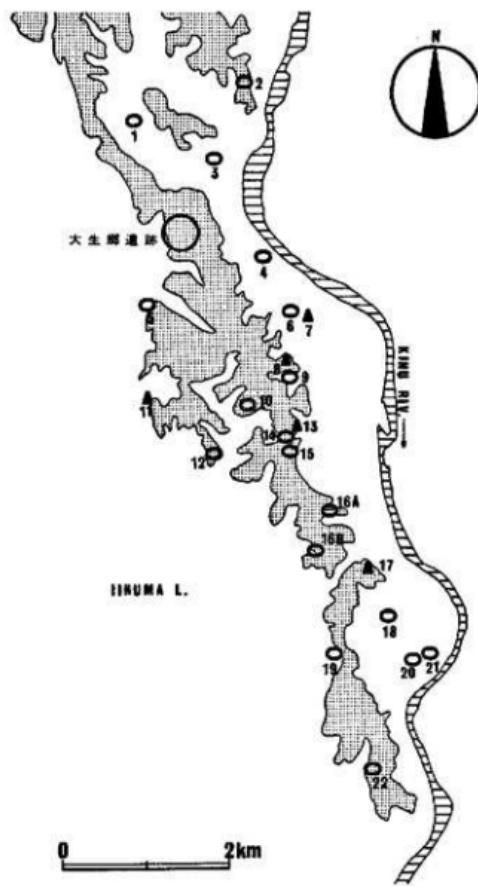
大生郷遺跡の調査対象面積は約40,000m<sup>2</sup>ほどで、A~D地区に分割して調査を進めた。調査方法等については前述したが、次に各地区についてその位置を述べる。

A地区は調査対象地域の北部に位置し、飯沼水系から樹枝状に入りこんだ支谷に西面している。調査区域内はほぼ平坦で、標高は19~21mほどである。A地区の南部には小支谷が東に入り込み、谷頭部にB地区が設けられた。B地区も調査区域内はほぼ平坦をなし、標高はA地区同様に19~21mほどである。C地区は東南にのびた支谷の谷頭部に設定し、標高は21mほどである。D地区はA地区に隣接した北西部に設けられ、北にのびた支谷の谷頭部の東に位置している。(第2図)

### 第2節 歴史的環境

蛇行して南流する鬼怒川と飯沼川にはさまれた標高21mほどの低位の段丘上には、大生郷遺跡をはじめ多くの遺跡が点在している。

水海道市内には現在のところ先土器時代に編年されている遺跡・遺物は発見されていないが、縄文時代になると多くの遺跡の分布がみられる。この地域は貝塚の分布などにもとづいた海進・海退の研究にも重要な地域であり、古鬼怒川流域における汀線の変動が貝塚の形成にも密接な関係のあったことを示唆している。大生郷遺跡の南東部に位置する花鳥貝塚は、昭和16年に日本古代文化学会によって調査が行われ、貝殻条痕文系土器を主体とする貝塚であることが判明し、ヤマトシジミを中心としてサルボウ・マカキ・ハマグリ・オキシジミ・シオフキなどが出土している。<sup>(1)</sup>



第8図 大生郷遺跡と周辺の遺跡

周辺遺跡の分布

No.	県番号	遺跡名	時代	時 期	備 考
1	3009	占間木遺跡	縄・古	縄(前)	—
2	2398	神子埋古墳群	古	後	円墳66 墓輪
3	2404	宮内遺跡	縄・古	縄(前・中)	宮内貝塚を含む

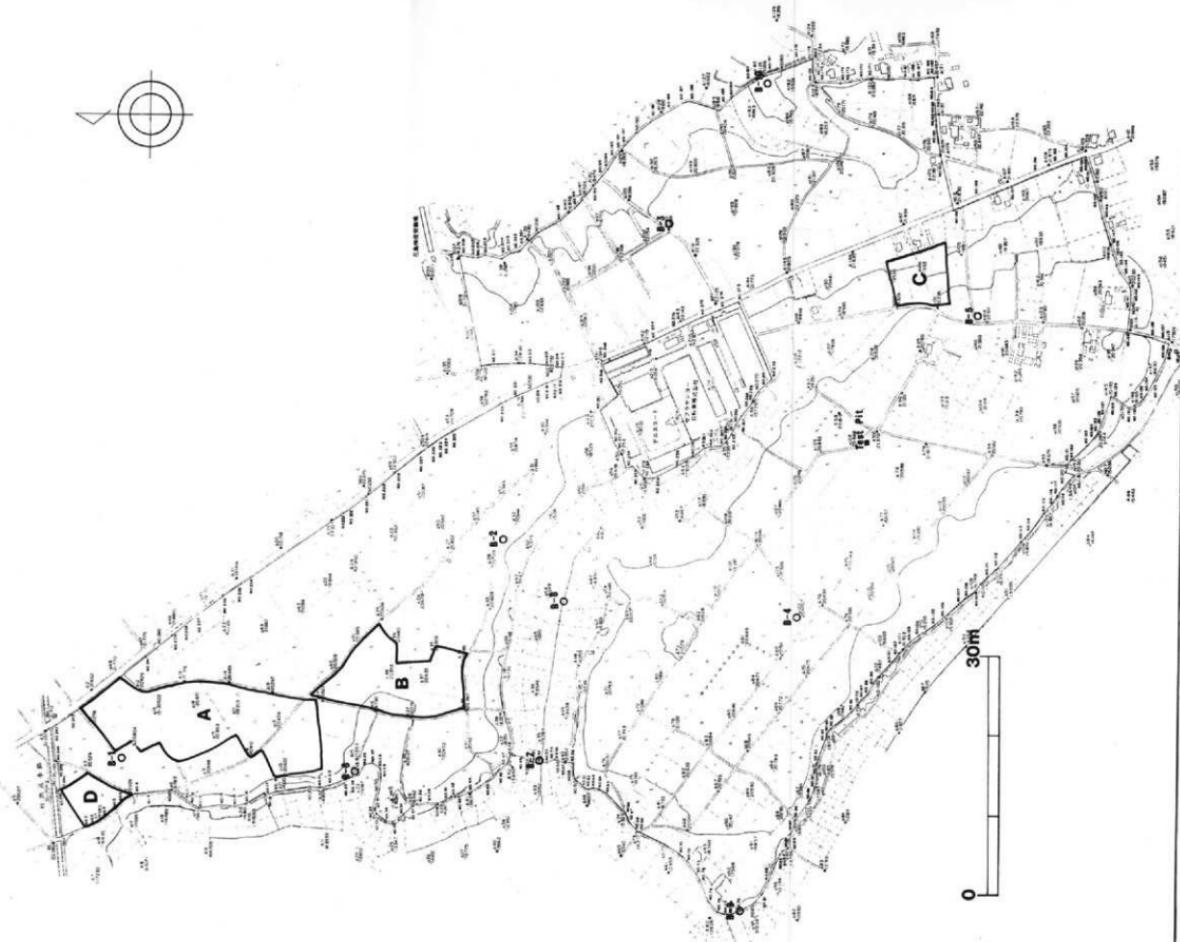
4	3002	花島遺跡	古			
5	3519	上新田遺跡	繩	後		
6	2360	花島古墳群	古		円墳5	
7	2357	花島貝塚	繩	早		
8	2363	築地貝塚	繩	早		
9	3001	築地遺跡	繩	後・晚	昭和28年 清水潤三氏発掘(貝塚山貝塚)	
10	3518	上口遺跡	繩・歴	繩(後)歴(須)		
11	2354	大生郷貝塚	繩	後		
12	3520	内久根遺跡	繩	後		
13	2355	大日山貝塚	繩			
14	3523	大塚山古墳			円墳	
15	3003	大日山遺跡	古			
16A	3521	満蔵A遺跡	繩	後		
16B	3522	満蔵B遺跡	古			
17	2364	横曾根貝塚	繩	早・前・後	ヤマトシジミ(貝塚貝塚)	
18	3524	貝塚古墳	古		埴輪	
19		貝塚遺跡	繩			
20	2358	七ツ塚古墳群	古		前方後円1 円墳7 昭和38年 上智大学発掘	
21	2356	権現塚古墳	古		円墳	
22	2359	敷岡古墳	古		円墳	

花島貝塚の南には築地貝塚・築地遺跡が位置し、築地貝塚は貝殻条痕文系土器を主体とする小貝塚が点在していたといわれている。築地遺跡は、中期から晩期に形成された遺跡であり、昭和28年に慶應義塾高等学校歴史学研究会によって発掘が実施された。<sup>22)</sup>

大生郷遺跡の南には大生郷遺跡と同様に飯沼水系に西面して大生郷貝塚があり、昭和34年、県立水海道第二高等学校によって発掘が行われた。その結果、後期から晩期にかけて形成された貝塚であることが判明し、土器・石器のほかに多くの骨角器などが出土した。さらに、大日山貝塚・横曾根貝塚などが点在している。また、繩文時代の遺跡としては上新田遺跡・上口遺跡・内久根遺跡・満蔵A遺跡などがあげられる。

弥生時代に編年される遺跡の分布はそれほど顕著には認められず、花島遺跡・横曾根遺跡にわずかに土器片が確認されているだけである。

古墳時代から歴史時代にわたる集落の分布は、繩文時代の遺跡と複合して確認される場合が多く、花島遺跡・上口遺跡・大日山遺跡・満蔵B遺跡などが知られている。古墳の分布も多くみら



第9図 大生郷遺跡現況図

れ、古墳群を形成しているものには花島古墳群・七ツ塚古墳群などがある。貝塚の発掘例と同様に古墳の発掘例も多く、上智大学による七ツ塚古墳群の調査などがあげられる。<sup>18)</sup> 七ツ塚古墳群は前方後円墳1基と円墳6基からなる古墳群で、主体部は竪穴式石室・横穴式石室・箱式石棺・粘土塗などがあり、変化に富んだ古墳群であることが判明した。このほか、調査された古墳としては貝塚古墳・大塚川・猿山古墳群などがあげられ、多くの副葬品が発見されている。

このほか、内守谷町本郷遺跡からは土師器・須恵器とともに鉄滓・羽口・砾石などが出土し、奈良時代から平安時代頃の踏跡跡と考えられている。

古代においては耕土面積がそれほど多くなかつた当地方において、鬼怒川・飯沼川(広河の川)流域の整田が進められ、集落の定着が多くみられるようになつたのは平安時代以降と考えられる。

(第8図)

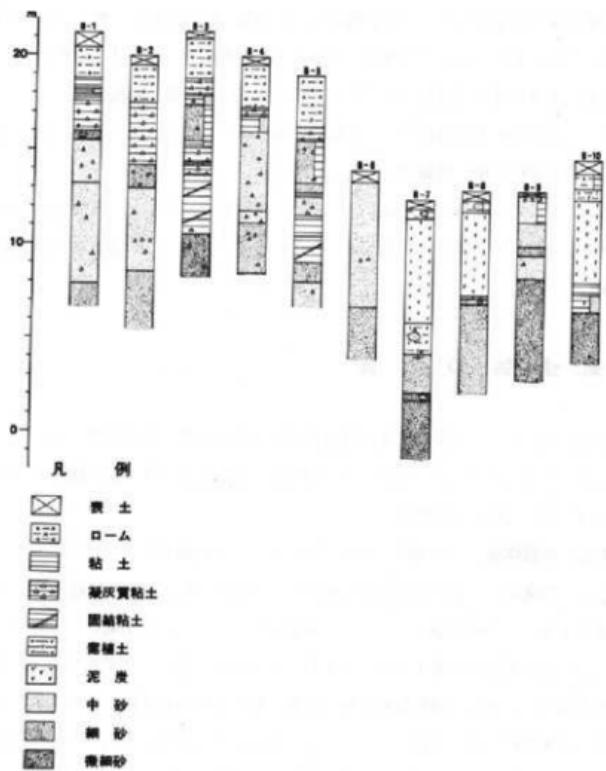
### 第3節 遺 跡 の 地 質

日本住宅公団によって大生郷工業団地造成に伴う造成地内の土質調査が行われた。調査地点は第9図に示したように10地点である。その内容は台地部に5ヶ所、谷津部に3ヶ所、台地の裾部に2ヶ所ほど選んで柱状図を作成した。

各調査地の地質構成は、台地部と谷部では異なった地質構成を示し、台地部では洪積層に限られ、上位より関東ローム層・凝灰質粘土層および砂質土層からなる常総粘土層があり、その下層に砂層を主体とした成田層がみられる。各部分についてみれば関東ローム層は台地にほぼ平坦に分布し、台地の裾部に位置するB-6・B-9地点では確認されていない。関東ローム層の下の常総粘土層は、上層から凝灰質粘土層・砂質上層・凝灰質粘土層となり、B-1・B-2地点では下部の凝灰質粘土層が欠如している。この層は、西から東の方向へゆるやかな傾斜を示している。さらにこの層下の成田層は、粘性土層および砂質土層からなり、西側地区においては砂層によって構成され、東側地区では粘性土層・砂層の層序がみられる。したがって、この大生郷地区の成田層は、東側にむかって粘性土層が次第に消滅していると推定される。

谷部は、泥炭層ないし腐蝕上層・粘性上層によって構成され、全般的に上流から下流に向かってゆるやかな傾斜面を形成している。(第10図)

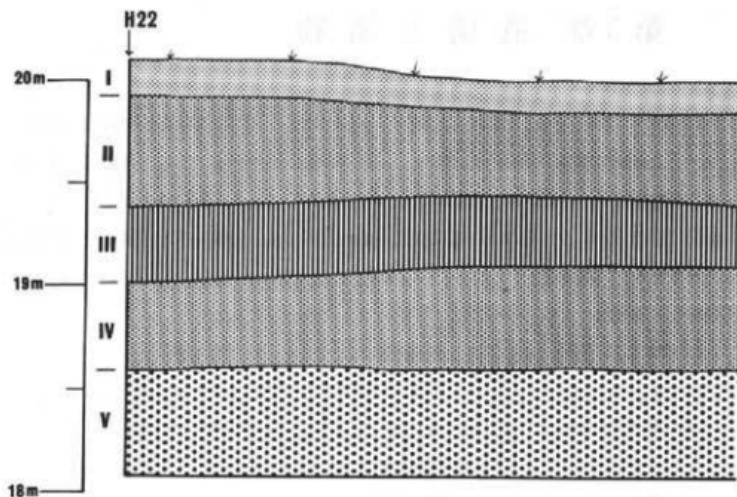
これらの地質調査によって得られた結果により、A地区H22区に上層観察用のテストビットを穿ち、とくに上部ローム層の観察を行つた。第I層は15~20cmほどの耕作上層で、その下部に関東ローム層が堆積している。ローム層は前述の調査例によれば2~2.1mほどの堆積を示している。第II~IV層は立川ローム層に比定され、第V層に有機質を含む暗褐色土層が30~40cmほど堆積し、火山活動の休止期間と推定される。さらに第VI層は武藏野ローム層に比定されるものであ



### 第10図 大生郷地区土層調査図

ろう。(第11図)

大生郷遺跡において検出されている住居跡群は、第Ⅱ層を掘りこんで構築されており、住居跡内の柱穴は、第Ⅲ層に達しているものもみられる。



第11図 大生郷遺跡の地層

### 参考文献および引用文献

#### 『国説水海道市史』

- (1) 江坂輝弥・吉田格「貝柄山貝塚」『古代文化』13-9 昭和17年  
直良信夫・江坂輝弥「貝柄山貝塚及指扇五味戸貝塚発見の貝類」『古代文化』13-9 昭和17年  
江坂輝弥「貝柄山貝塚」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 昭和54年
- (2) 藤村東男「築地遺跡発掘報告」『Archaeology』28, 29 昭和40年  
星山芳樹「水海道市築地遺跡出土の注口土器について」『常總台地』7 昭和51年  
清水潤三「築地遺跡」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 昭和54年
- (3) 吉田章一郎「茨城県水海道市羽生七塚第六号墳」『日本考古学年報』15 昭和42年

### 第3章 遺構と遺物

大生郷遺跡から検出された住居跡は、南より樹枝状に入り込む小支谷の東側台地に散在してみられ、とくに南側小支谷の谷頭の奥に集中し、総計29軒ほどである。そのうち縄文時代の住居跡は11軒で南地域に多く確認され、古墳時代は12軒で散在しており、歴史時代は6軒すべてB地区の南部に位置している。そのほか縄文時代の地点貝塚1基・土壙1基・古墳時代の土壙1基が確認されている。(第3図)

(住居跡など遺構内の土層については、下記のように統一した。)

1 表上層	6 赤褐色土	11 黒色土
2 黄色土	7 茶褐色土	12 地山
3 明褐色土	8 棕色土	K 扰乱
4 淡黄褐色土	9 暗褐色土	
5 黄褐色土	10 黑褐色土	

大生郷遺跡から出土した遺物は土器類が主体であり、縄文土器・土師器・須恵器などがみられる。また、遺構内から出土したもののがほとんどであり、各調査区内から出土したものは少ない。

遺構・遺物については各時代ごとに説明するが、縄文土器について大別すると、胎土中に纖維を含むものと含まないものに分類することができ、これらの土器の特徴によって全体的に類別し、さらに各遺構ごとに説明を加える。土師器・須恵器に関しては、表としてその特徴を記す。

#### 縄文土器分類

I群 胎土中に纖維を含むもの II群 胎土中に纖維を含まないもの

1類 沈線文を主体とするもの

1種 コンバス文がみられるもの

2種 波状文および曲線文がみられるもの

3種 直線状文・平行沈線文がみられるもの

4種 檜齒状文がみられるもの

5種 その他

2類 縄文を主体とするもの

1種 単節縄文がみられるもの

2種 羽状縄文がみられるもの

3種 無節および無節の羽状縄文がみられるもの

4種 その他

## 第1節 住居跡

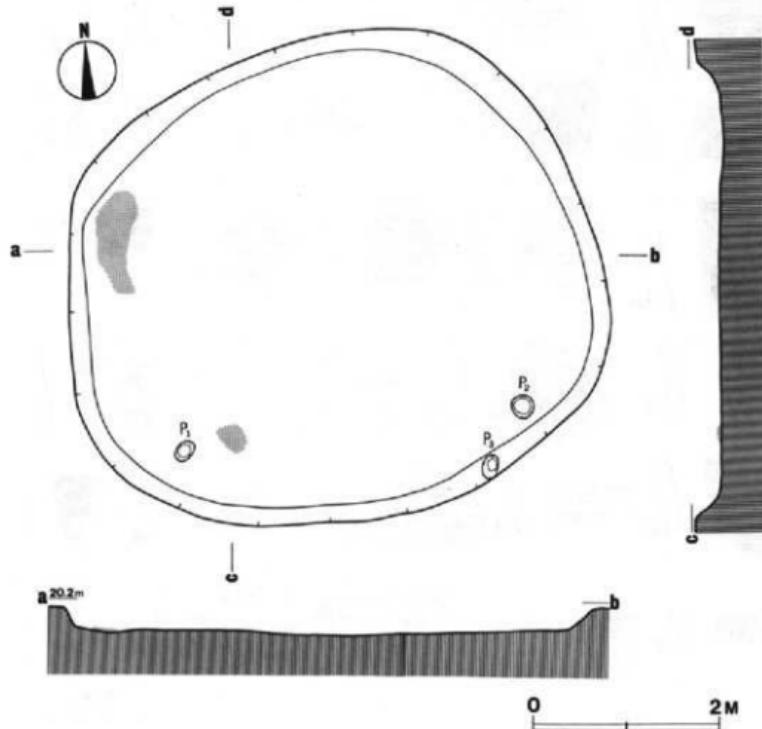
### 1. 繩文時代

#### 第1号住居跡（第12図）

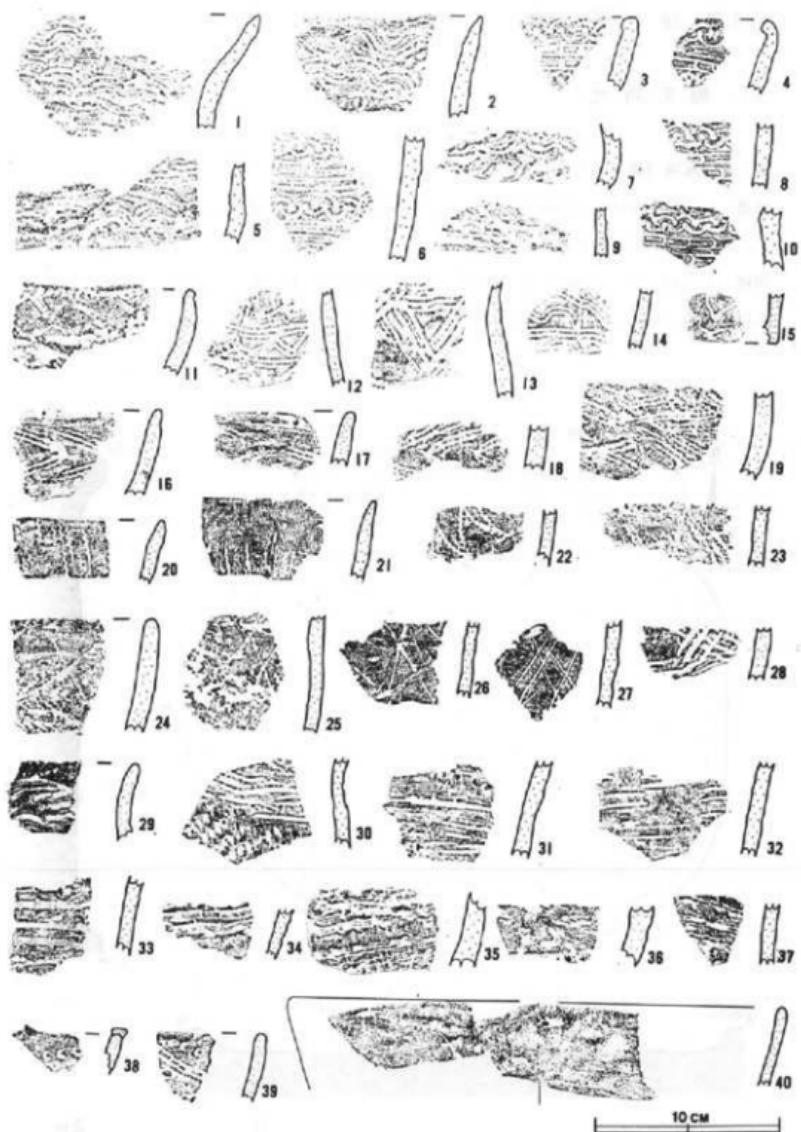
位置 B地区の南部（G48区）に位置し、近接する縄文時代の遺構は、北東部に第2号住居跡さらに北方には第5号住居跡がみられる。

規模 N-83°-E 長軸5.6m 短軸5.1m 平面形状 楕円形 面積 19.6m<sup>2</sup>

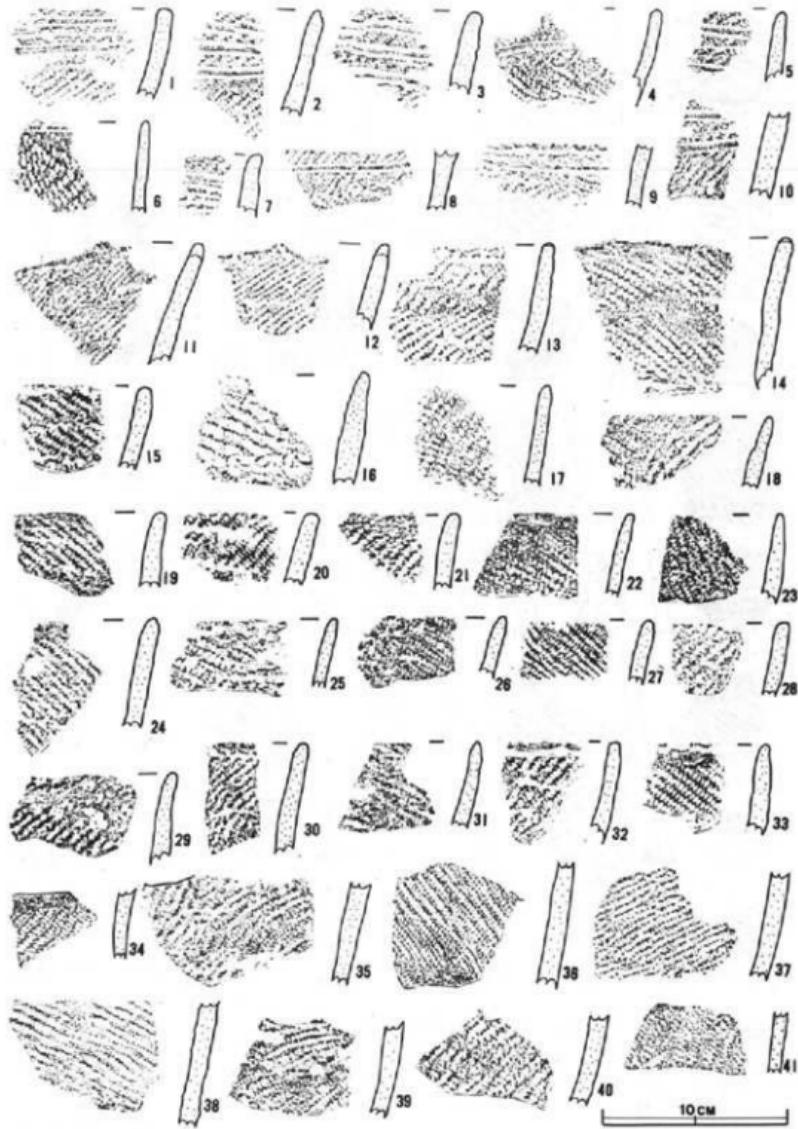
各部の状況 壁はいずれもゆるやかな立ちあがりを示す。壁高は24~28cmほどで、西壁部が高



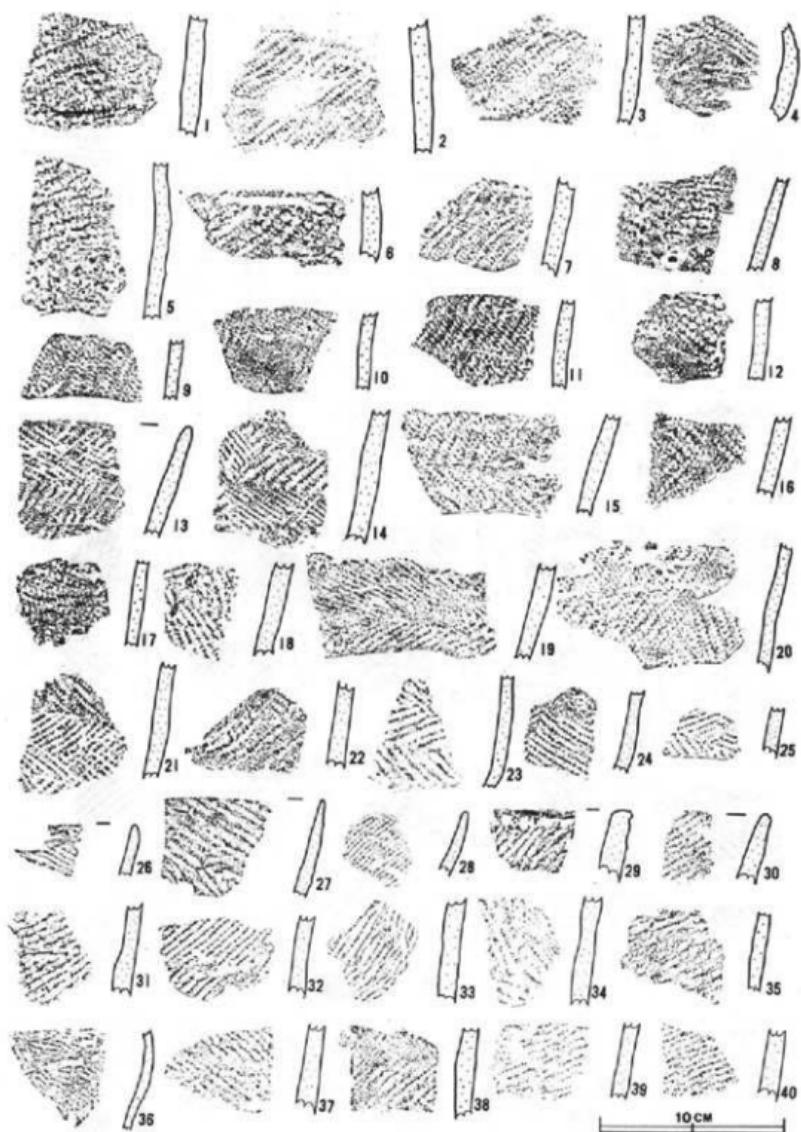
第12図 第1号住居跡実測図



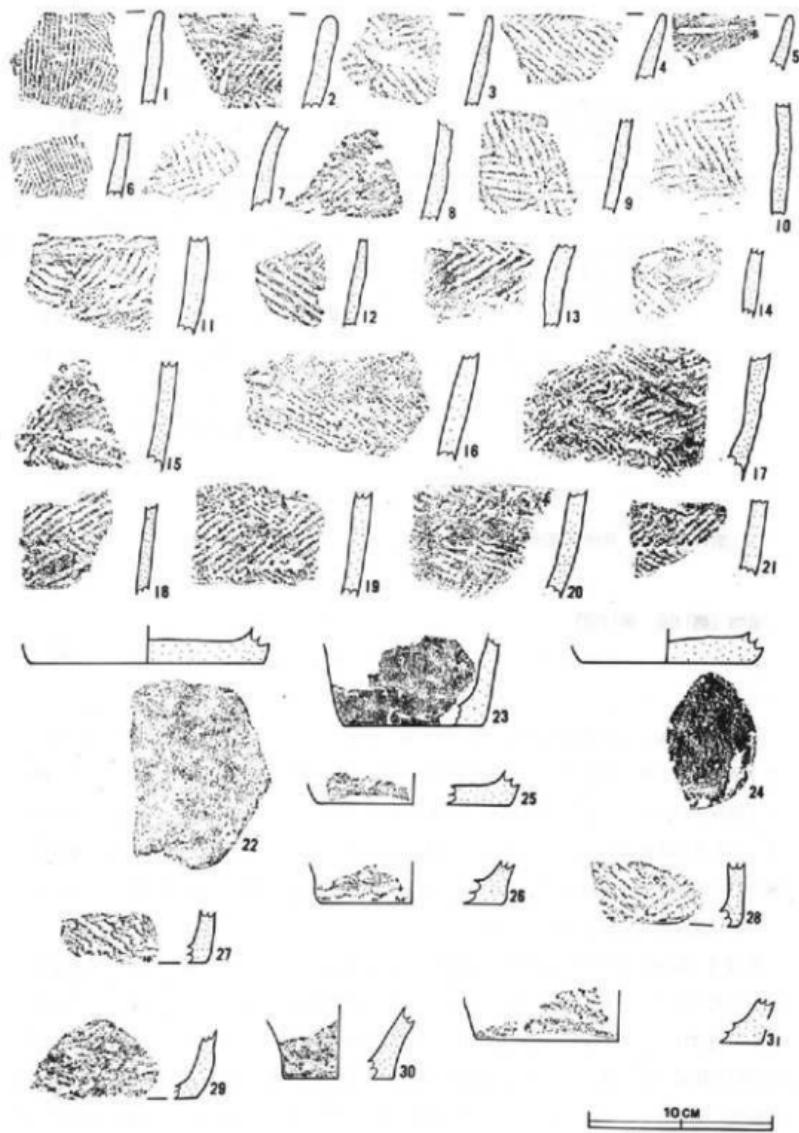
第13図 第1号住居跡出土遺物（1）



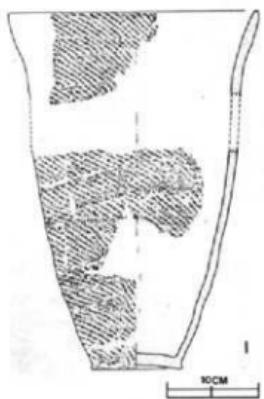
第14図 第1号住居跡出土遺物（2）



第15図 第1号住居跡出土遺物（3）



第16図 第1号住居跡出土遺物 (4)



第17図 第1号住居跡出土遺物（5）

#### 遺物（第13図～第17図）

本跡から出土した土器群は、ほとんどが破片で住居跡中央部の覆土中より出土したI群土器である。

第13図1～10は1類1種であり、1・2・5・7・9はコンパス文がやくずれたもので、器面は全体的に丁寧に整形されている。同図12～15は1類3種で、半截竹管による直線文と鋸歯状文の組み合わせがみられる。同図24～28は格子状の沈線がみられ、さらに、同図29～34も半截竹管による平行沈線文がみられ、38・39には刺突文が認められる。35～37はI群1類4種の土器で横位に小さな波状の櫛歯状文が施されている。16～19は単軸絡条体による木目状文がみられ、20～23は貝殻腹縁文が施されている。

第14図～第16図は2類土器群で、第14図1～10は繩文を地文として半截竹管の平行沈線文が横位に施されている。同図11～41・第15図1～12は2類1種の土器で、0段多条のものも含まれる。第14図11・12は口縁部に小突起を有し、13・14は口唇部にスリットが認められる。第17図1は器形が推定される唯一のもので、口径27.0cm・底径9.8cm・推定器高38.3cmの深鉢形土器である。口縁部はやや外反してたちあがり、胴部は胴上部がくびれて底部に移行し、底部はややあげ底状を呈している。文様は $R < \frac{L}{L}$ の繩文が器面全体に施され、焼成・胎土ともに良好である。第15図13～25は2類2種の土器群で、羽状構成は横位あるいは縦位にみられる。

東壁部がやや低い。また、東南壁部が一部はりだしている。床はほぼ平坦であるが、北側が少しくほみ、全体的にやや軟弱である。西壁および南壁よりの床に少量の焼土が確認されただけで、炉は検出されていない。

**柱穴** 南壁に接してP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>がみられ、直径は25cm内外で深さ10～34cmほどである。その他にピットは検出されていない。

**覆土** 上層は暗褐色土で、下層は多量のローム粒子を含む黄褐色土がみられる。自然流入の堆積状況を示している。

**遺物出土状況** 遺物は覆土および床面より出土し、ほとんどが住居跡中央部の覆土中から出土している。

19.3  
10:10  
第15図26~40は無節縞文の土器群であり、第15図29は口辺部に刺突文がみられる。第16図1~21は無節縞文による羽状構成を示した土器群であり、半節羽状同様横位・縱位などみられる。

第16図22~31は底部片であり、22・31など大形の底部片もみられる。

全体的に器形は深鉢形土器片であり、一般的に沈線文など有する土器群の方が焼成・整形ともに良好である。

## 第2号住居跡（第18図）

**位置** B地区の南部（L45区）に位置し、東側に第3号住居跡が隣接している。

**規模** N-28°-W 長軸6.46m 短軸5.65m 半面形状 圓丸方形形状 面積 約38m<sup>2</sup>

**各部の状況** 駐はほとんどゆるやかな傾斜を示して立ちあがっているが、北駐はほぼ垂直に立ちあがっている。壁高は23~30cmで北部が高く、南部がかやや低くなり、南西壁は擾乱を受けて不明瞭である。南東壁部をのぞき、ほぼ等間隔に壁柱穴を有する。床はほぼ平坦で北側がややくぼむ。中央やや北側の床面に半円形状の焼土が検出されているが、焼土の量はそれほど多いものではなく、炉は確認されていない。

**柱穴** 壁柱穴と主柱穴がみられ、主柱穴は、対角線上に位置するP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>が考えられる。直径は、20~40cm内外で、深さ10~30cmをはかる。

**覆土** 上層はロームブロック混りのしまりを持つ黄褐色土で、下層は多量のローム粒子を含む黄色土がみられる。自然流入の堆積を呈している。

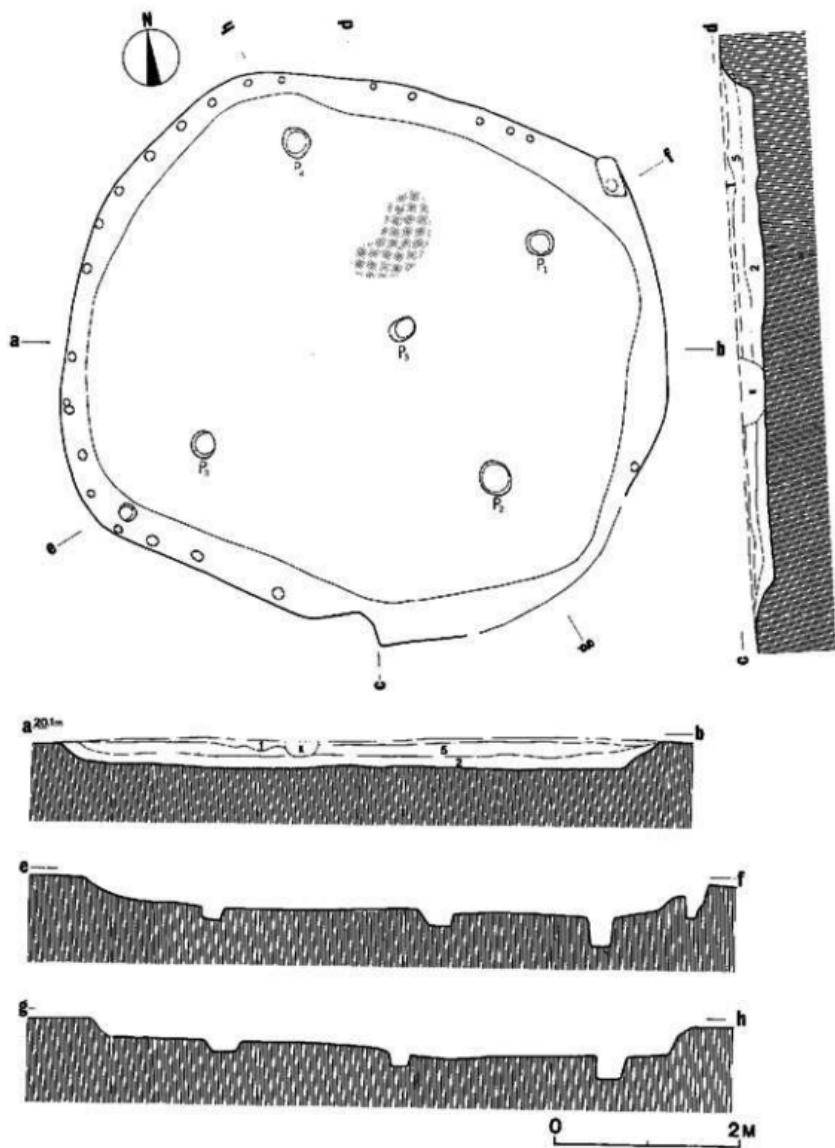
**遺物出土状況** ほとんどが中央部付近の覆土中から出土している。

## 遺物（第19図~第21図）

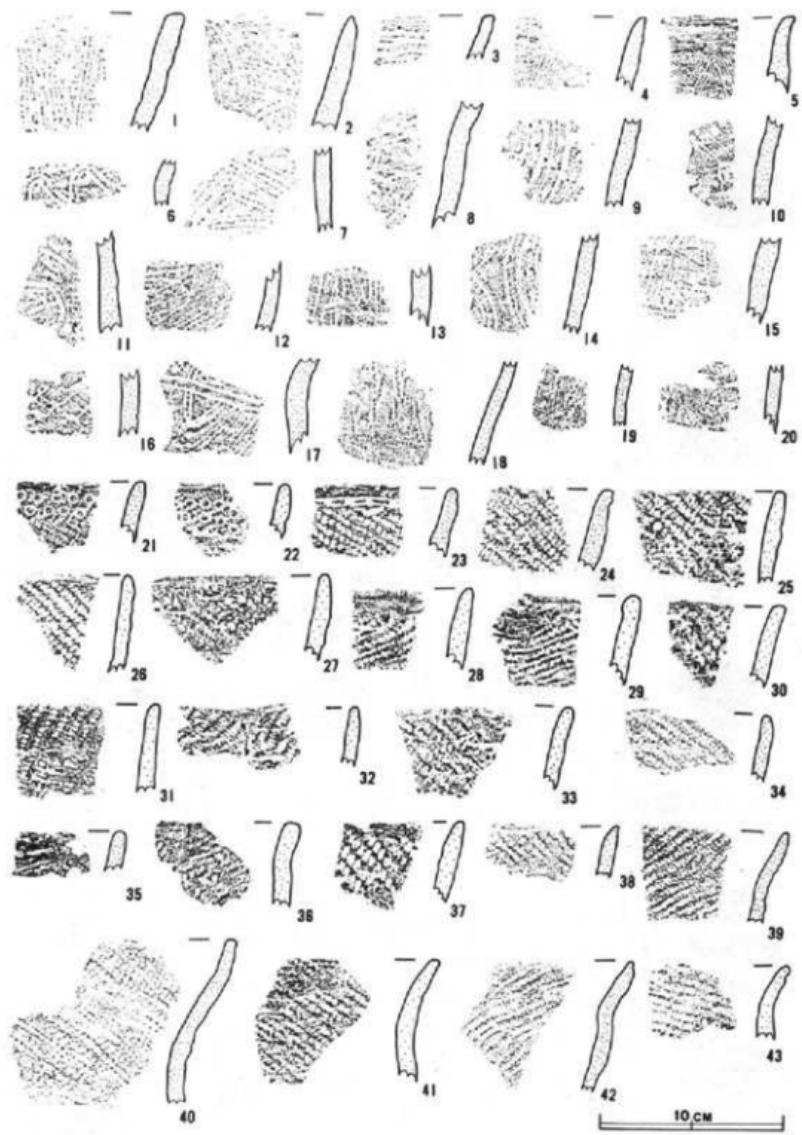
本跡から出土した上器群は、ほとんどが破片で住居跡中央部の覆土中から出土したI群土器である。

第19図1~15はI類2種の土器群であり、半截竹管を使用したもの、三木同時施文したものなどがみられる。1・7・12は直線的な文様であるが、そのほかは曲線的な要素が多く、4~6はやや曲線的な網目文がみられる。同図17は木目状文を地文に半截竹管による横位の沈線がみられ、18~20は貝殻腹縞文がみられる。

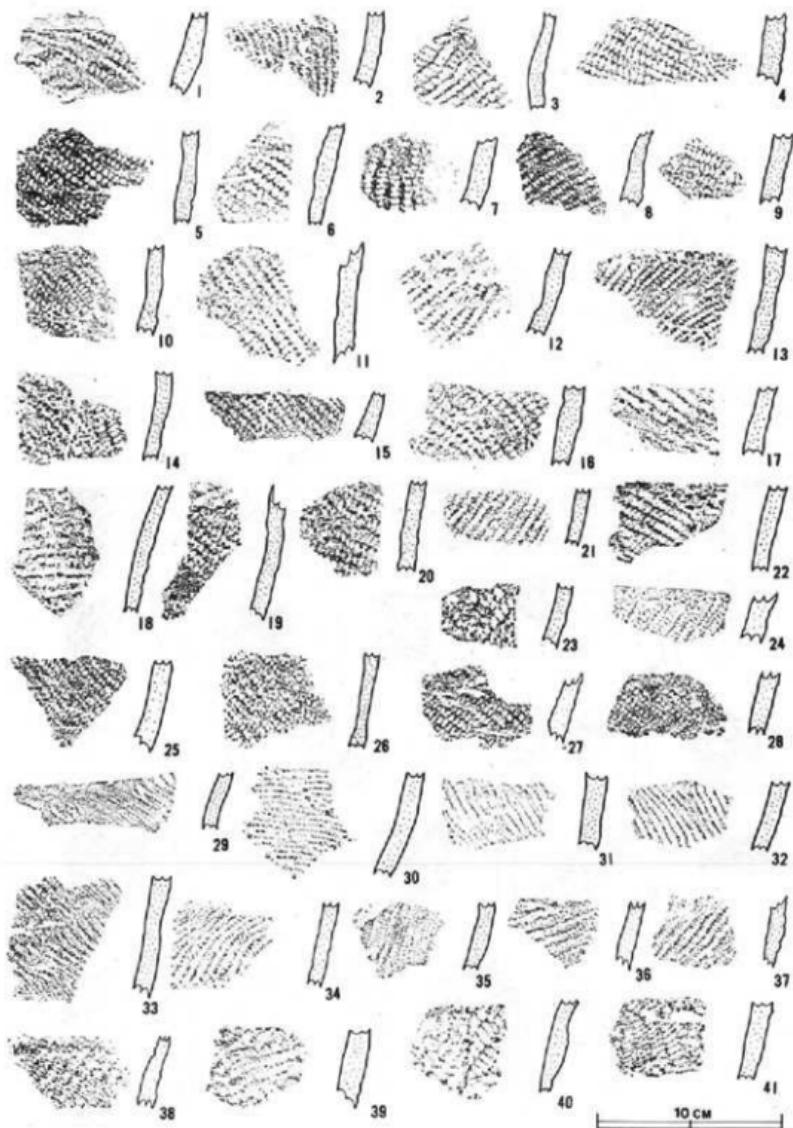
第19図21~43・第20図・第21図は2類土器で、第19図21~23は縞文を地文として口辺部に竹管刺突のみられる21・22と有節沈線がみられるものがある。同図24~43・第20図は2類1種であり0段多条のものも多く含まれる。器形は深鉢形上器であり、口縁部の形態にも種々みられる。第21図1~15は2類2種の上器群で、原体を交差に何段にも重ねて施文しているものもみられる。同図16~30は2類3種であり、16~29は無節を呈し、30は羽状構成をなしている。



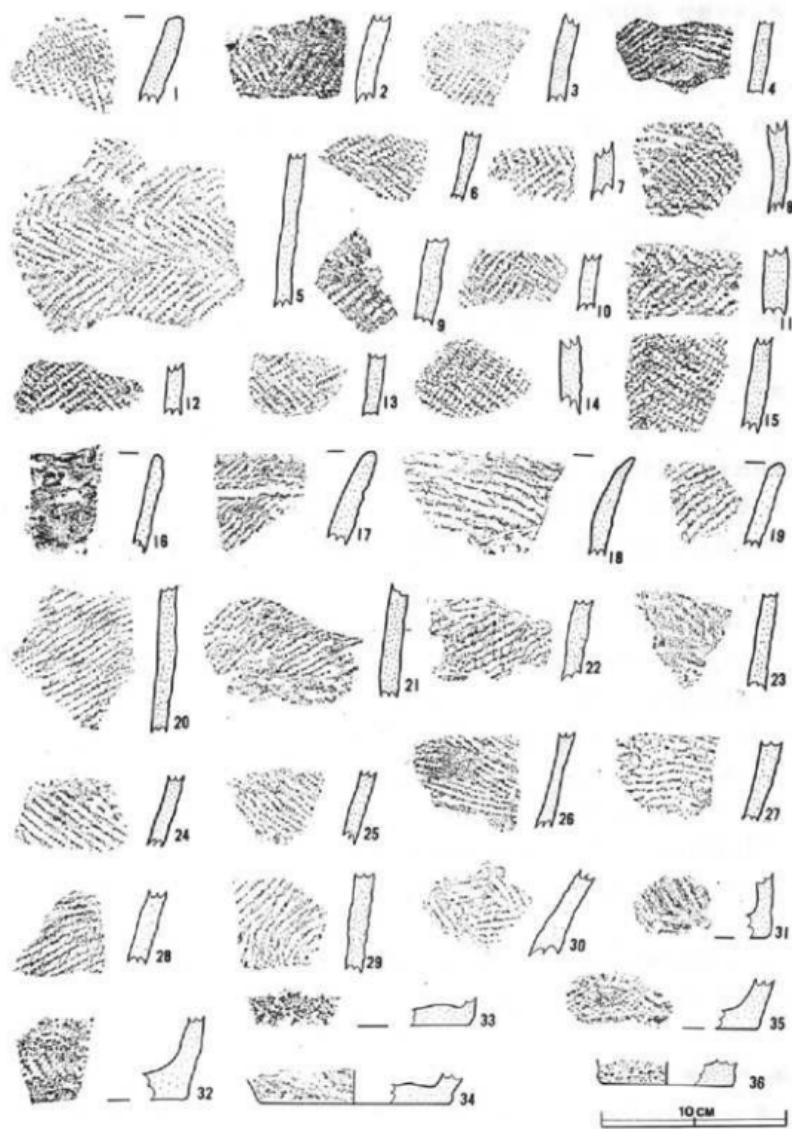
第18図 第2号住居跡実測図



第19図 第2号住居跡出土遺物（1）



第20図 第2号住居跡出土遺物（2）



第21図 第2号住居跡出土遺物（3）

### 第3号住居跡（第22図）

**位置** B地区の南部（L45区）に位置し、西側に同時代の第2号住居跡が接し、南壁の一部は第12号住居跡によって切られている。

**規模** N-84° W 長軸5m 短軸3.5m 平面形状 南が第12号住居跡によって切られているため不明であるが、現況では長方形を呈していると考えられる。面積 13.2m<sup>2</sup>

**各部の状況** 壁はゆるやかに立ちあがり、壁高は10~24cm内外で北壁の一部がはりだしている。南壁は占墳時代の第12号住居跡によって切られている。床はやや凹凸がみられるがほぼ平坦で東壁に擾乱がみられる。柱は検出されていないが、中央部付近に少量の焼土がみられた。

**柱穴** 南東コーナー一部にP<sub>1</sub>がみられ、直径は33cm、深さ15cmほどで、その他にピットは検出されていない。

**覆土** 上層は暗褐色土、下層は褐色土で少量のローム粒子を含み、擾乱が入り複雑な堆積状況を呈している。

**遺物出土状況** 遺物はほとんど住居跡中央部の覆土中より出土している。

**その他** 本住居跡の北西0.5mに、不定横円形を呈する土壙状の擾乱場がみられるが、覆土の堆積状況より、後世の所産と考えられ、当住居跡との関連は考えられない。

### 遺物（第23・24図）

本跡から出土した上器群は、ほとんどが破片で住居跡中央部の覆土中から出土したI群上器であり、遺物量はそれほど多いものではない。

第23区1~5・9・10は半截竹管による直線文を主体としたもので、11~15は細線によって格子状文が施文されている。また、8には波状の鶴歯状文がみられる。

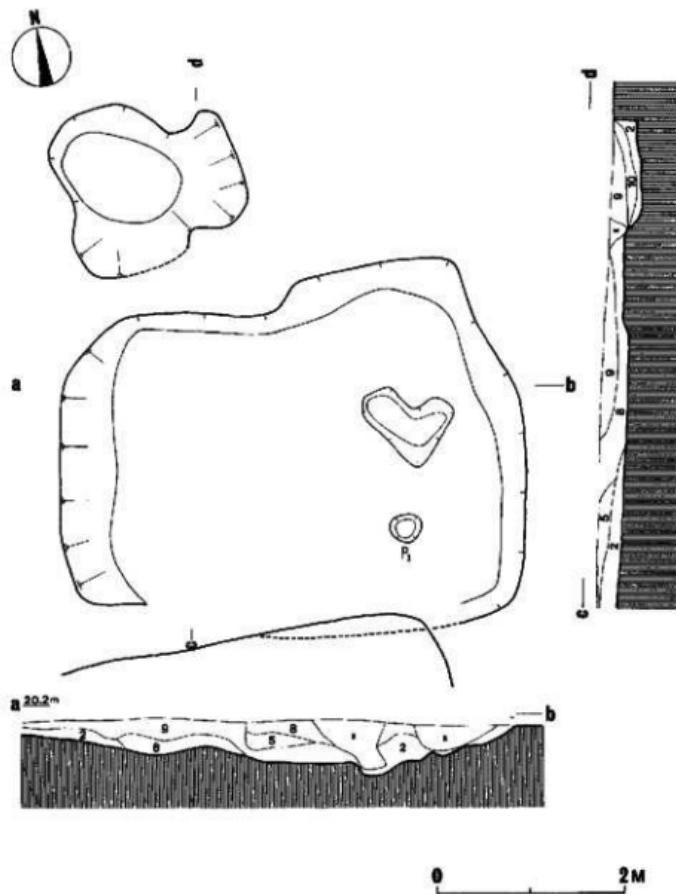
そのほかほとんどは2類土器で、2類1種は第23図19~47がみられ、0段多条のものも含まれる。2種は第24図1~5があり、4・5は附加条の原体がみられる。

3種は6~20がみられ、14・18・19が羽状構成をなす。21~28は器面に繊維痕のため文様が不鮮明である。

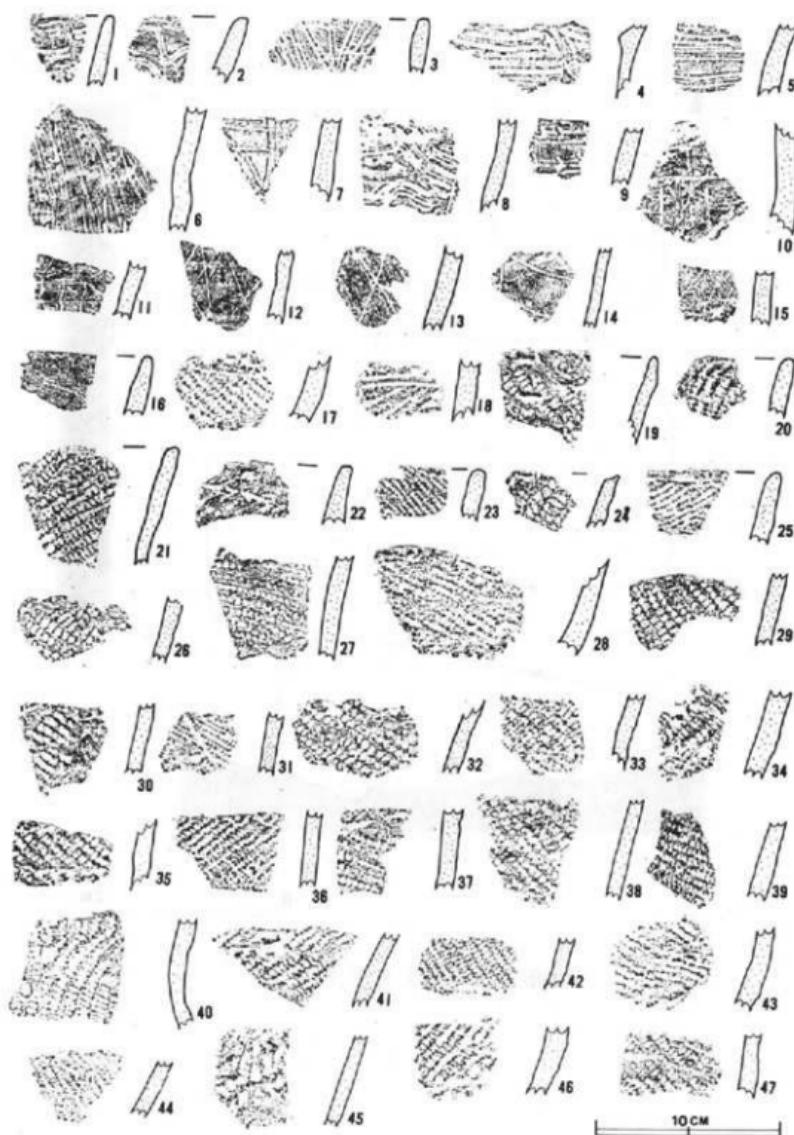
これらの土器の焼成はそれほど良好なものではないが、第24図21~28は器面に繊維痕がみられ焼成は粗雑である。

### 第4号住居跡（第25図）

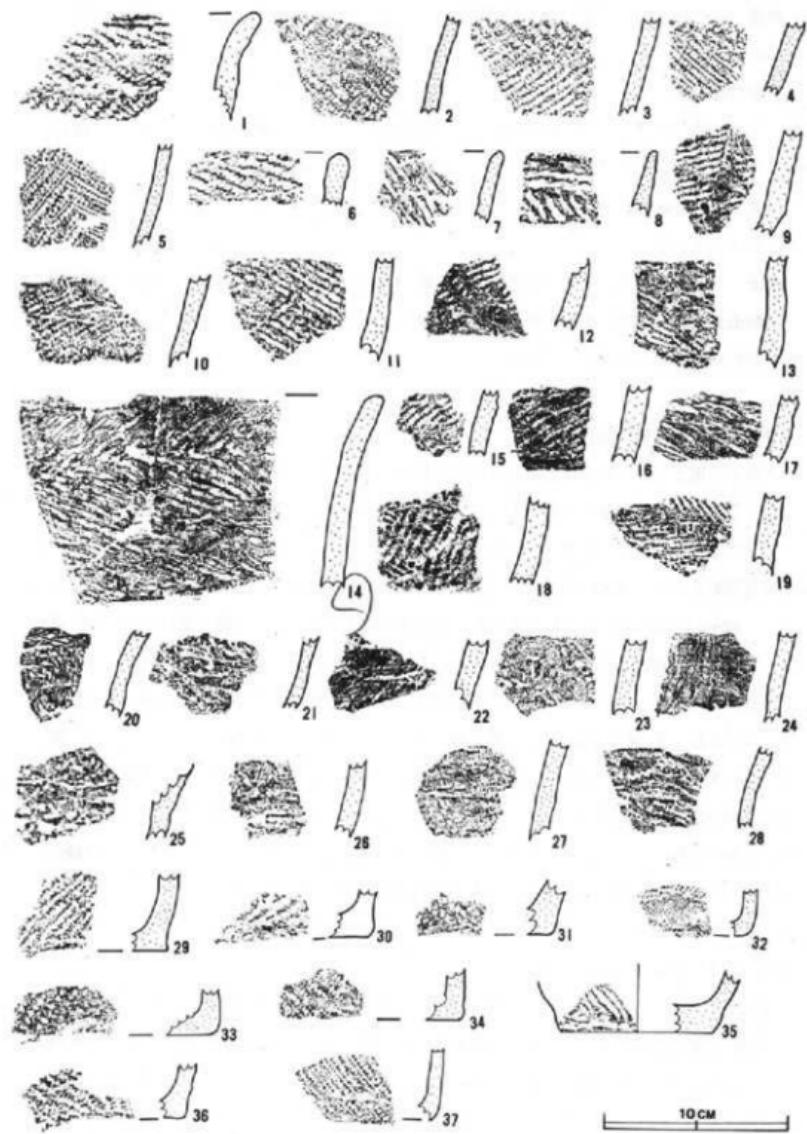
**位置** B地区の南部（N44区）東端に位置し、南壁の一部を窓をもつ第28号住居跡によって切られている。



第22図 第3号住居跡実測図



第23図 第3号住居跡出土遺物（1）



第24図 第3号住居跡出土遺物（2）

**規模** N -35° -W 長軸6.3m 短軸5.6m 平面形状 北東隅がやや丸まる長方形状 面積24m<sup>2</sup>

**各部の状況** 壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがり、壁高は45~60cmで北が高く、西が低くなっている。底にはほぼ平坦であるが、中央部付近が若干凸状をなす。窓は確認されていないが、西および東の壁ぎわに少量の焼土が看取される。

**柱穴** 2ヶ所確認されるのみである。P<sub>1</sub>は直径34~40cm内外で深さ32cm、P<sub>2</sub>は直徑26cm内外で深さ45cmをはかる。

**覆土** 上層が褐色土、下層が暗褐色土で多量のローム粒を含んでいる。自然流入的な堆積である。

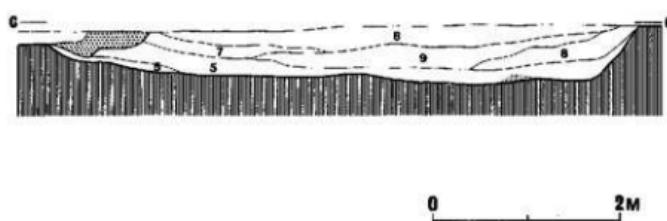
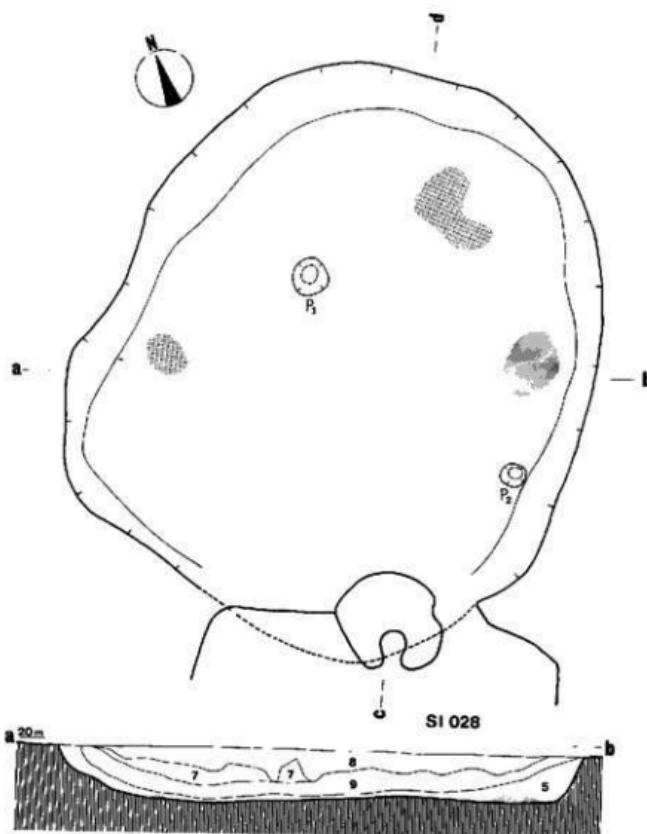
**遺物出土状況** 遺物は多量の縄文土器片で覆土および床面より出土し、ほとんどが住居跡中央より西側の覆土中から出土している。

#### 遺物（第26図～第35図）

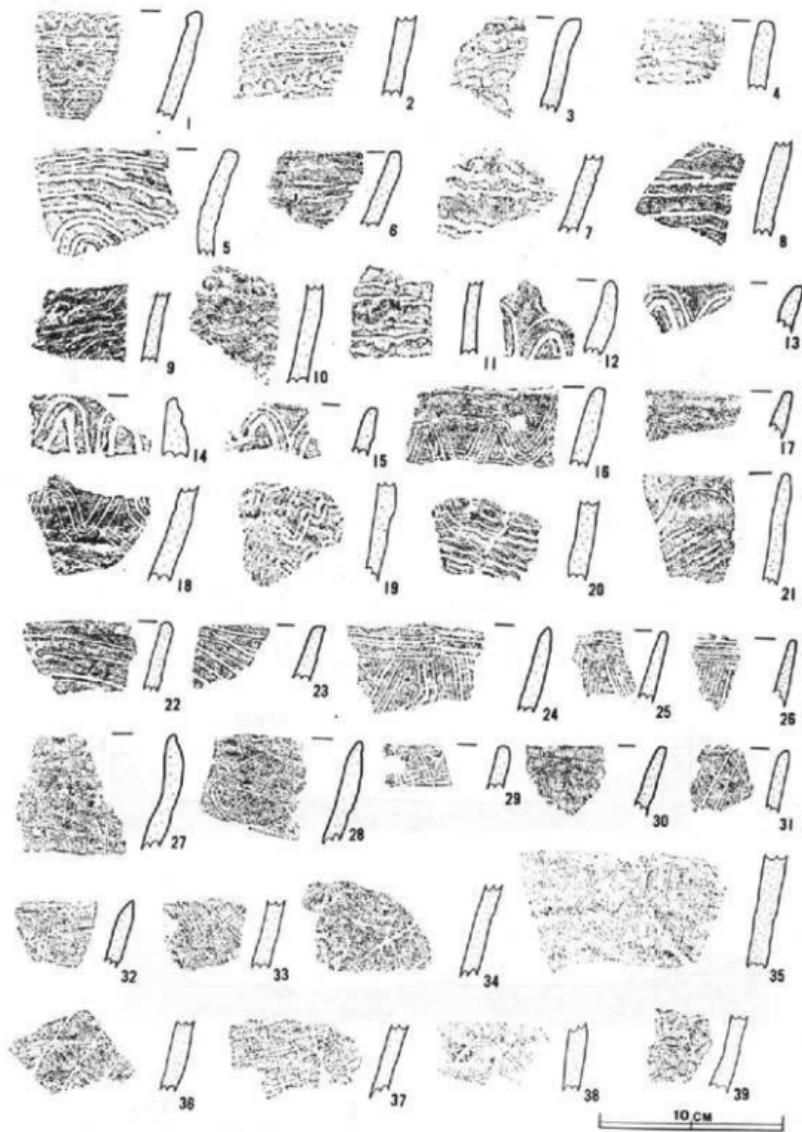
住跡から出土した土器はほとんどが破片であり、住居跡中央部から西側にかけて覆土中から多く出土している。出土量もかなり多く、すべてI群土器であるが、2類土器を主体としている。

第26図1・2はコンバス文がみられ、3～11はコンバス文の退化した沈線文である。12～18は半截竹管あるいは二本同時施文の波状文がみられ、21も同種のものであり、胴部には縄文がみられる。22～26・第27図1～27は半截竹管による直線文を主体とし、文様を構成している。第26図27～39は細い沈線による格子状文がみられるもので、それらが不規則に施文されているものもみられる。第27図36～38は1類4種の櫛齒状文がみられる土器群であり、第27図28～35は貝殻腹縫文がみられる。第28図～第34図は2類土器であり、かなり人形の土器片も含まれている。第28図1～30・第29図1～36・第30図1～36・第31図1～34は1種の上器群で、0段多条のものも含まれる。第28図1は口辺部にスリットがみられ、2は0段多条のR.L.の縫文地を有し、口辺部に横位の沈線文が施文されている。また、3～5の口唇部には浅いスリットがみられる。口縁部の形状も種々で直線的に開いて立ちあがるものや口辺部で内反するものなどもあり、外反して立ちあがるものが多い。さらに、口唇部の断面形もやや尖るもの、直線的なもの、曲線的に丸みを有するものなどに分けることができる。

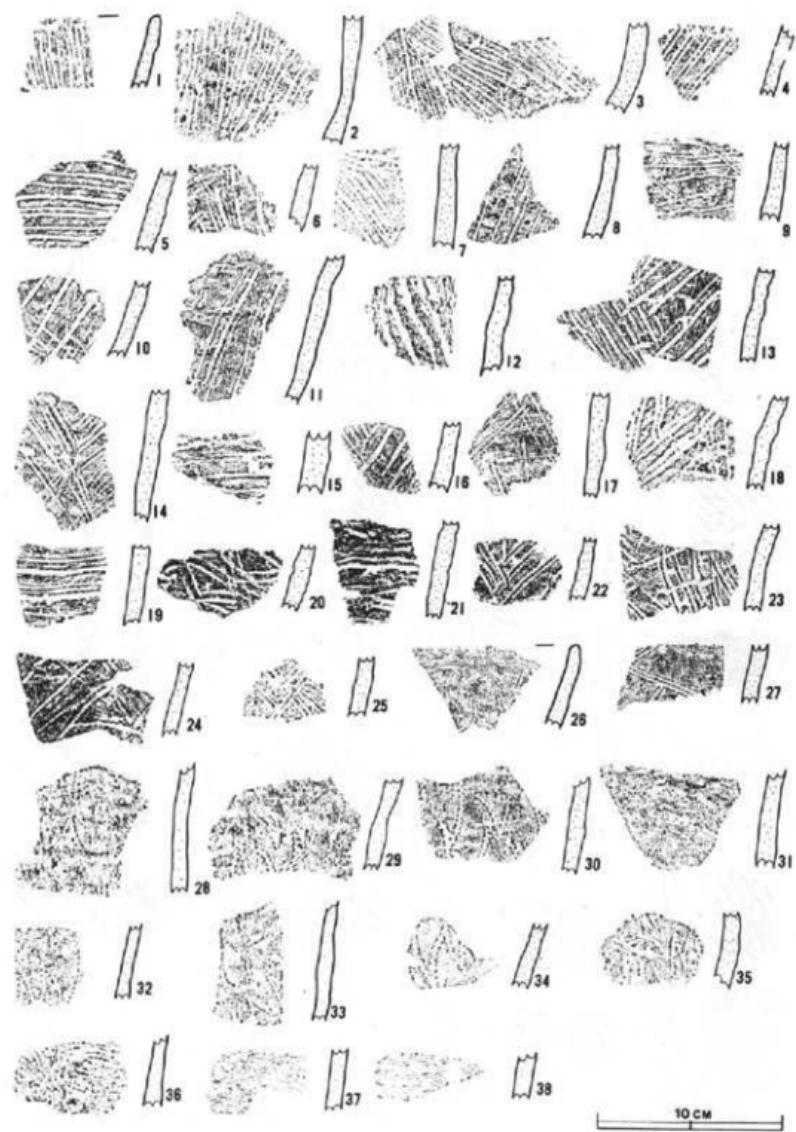
第32図1～30・第33図1～15は2種であり、羽状縄文を有する上器群である。第32図1～2は口辺部に有筋沈線文を有し、同図3は沈線文が施されている。羽状構成も横位のものと縦位のものがみられ、また、羽状縄文を菱形状に施して文様的効果をあげているものもある。第32図28にはループ文がみられる。羽状縄文の中には明確に結束が判明するものと、原体の施文方向を変えて羽状構成を作出しているものとがある。また、羽状縄文が丁寧に施されているものとそうでないものがあり、全体的にみて羽状構成がやや粗雑化してきたようにみられる。



第25図 第4号住居跡実測図



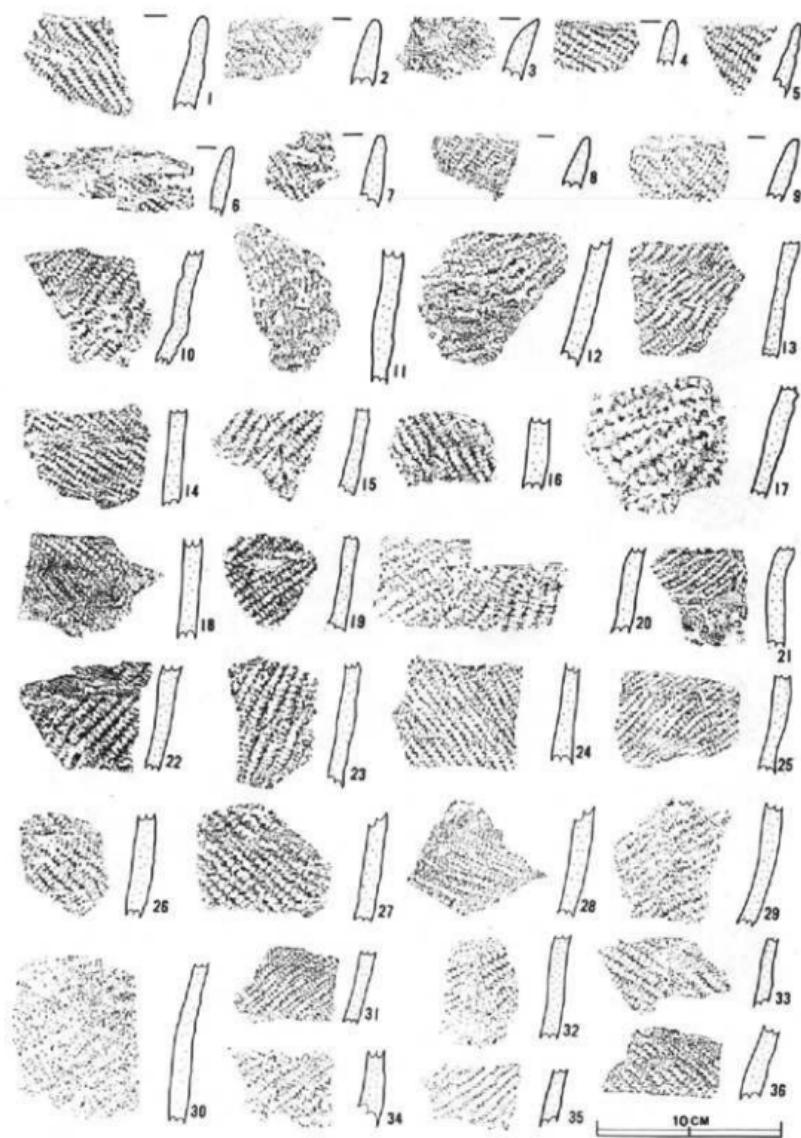
第26図 第4号住居跡出土遺物（1）



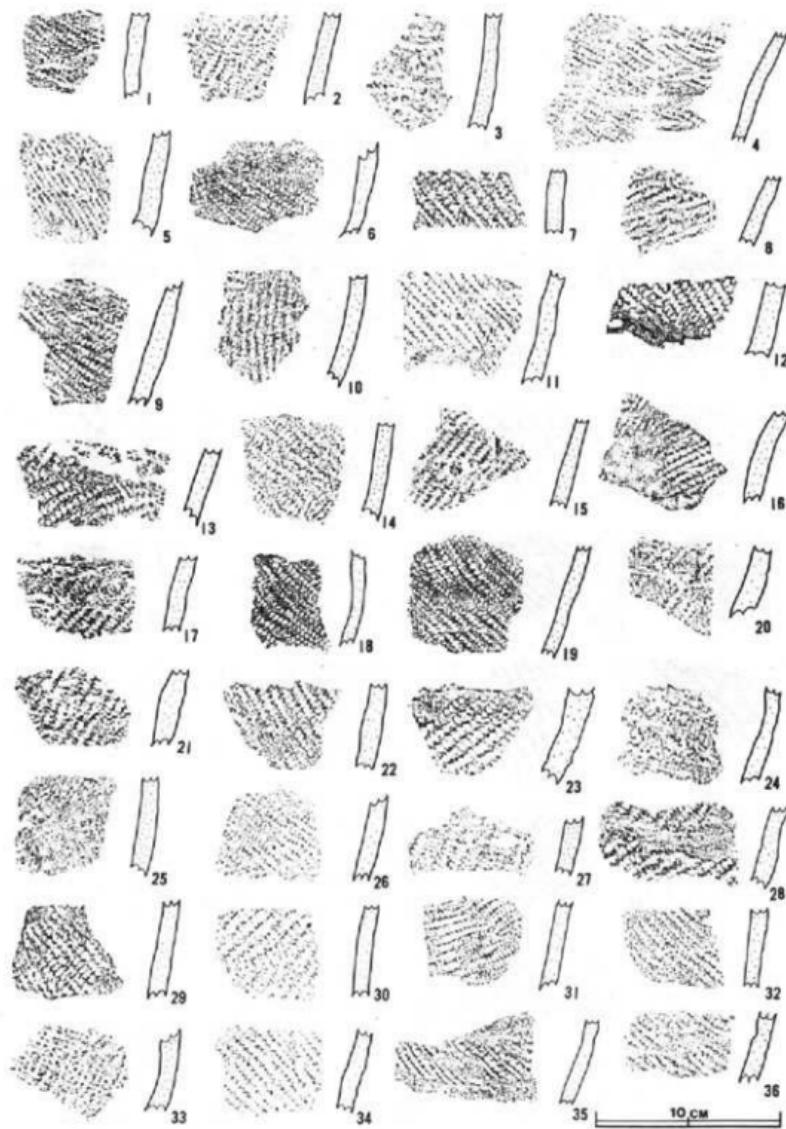
第27図 第4号住居跡出土遺物（2）



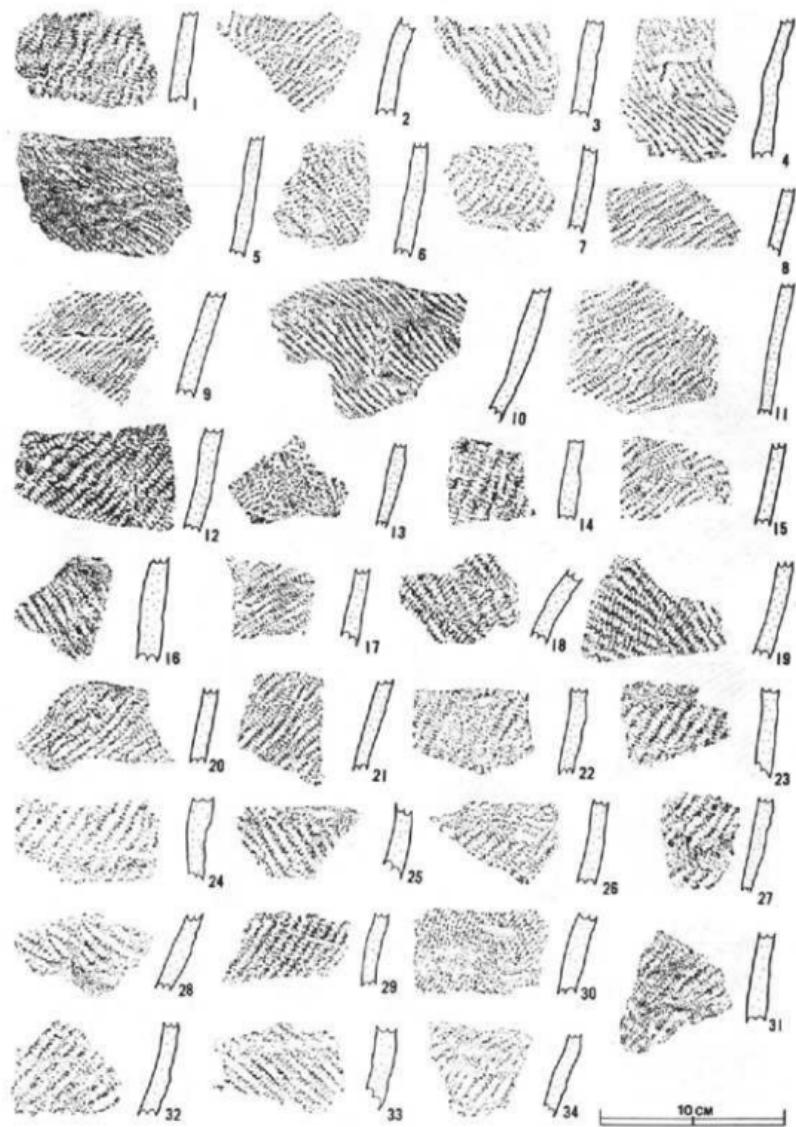
第28図 第4号住居跡出土遺物（3）



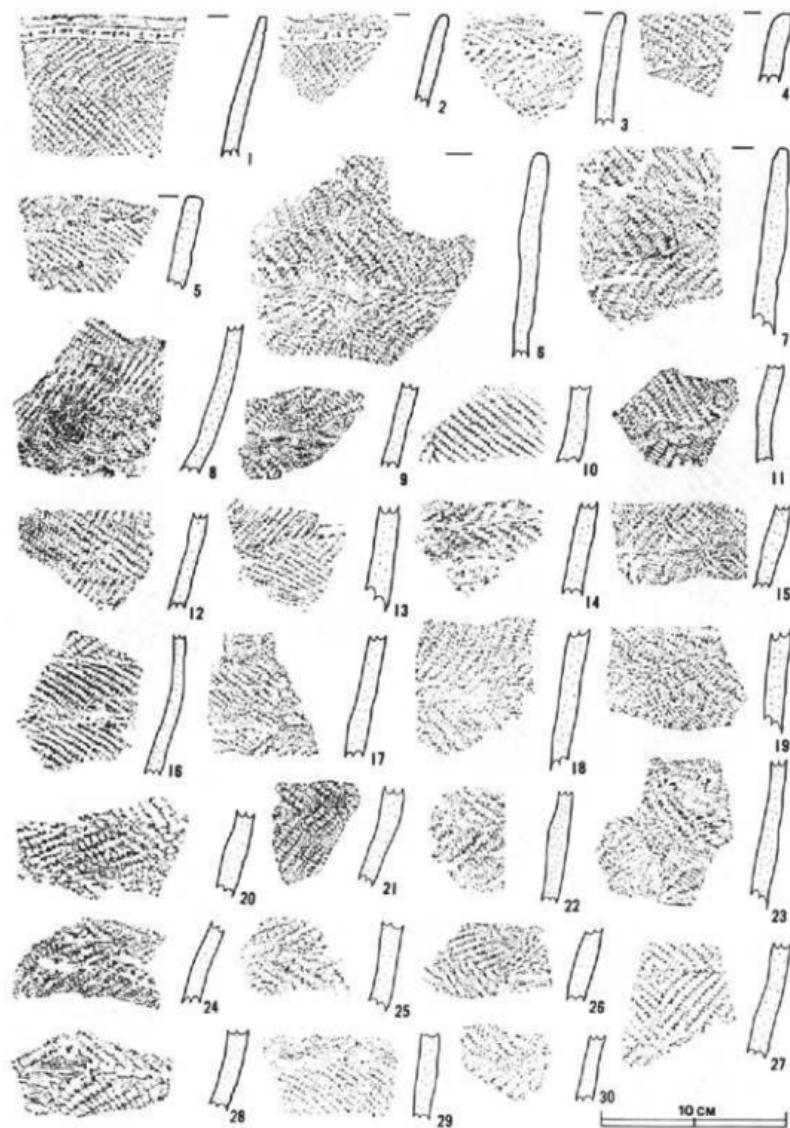
第29図 第4号住跡出土遺物(4)



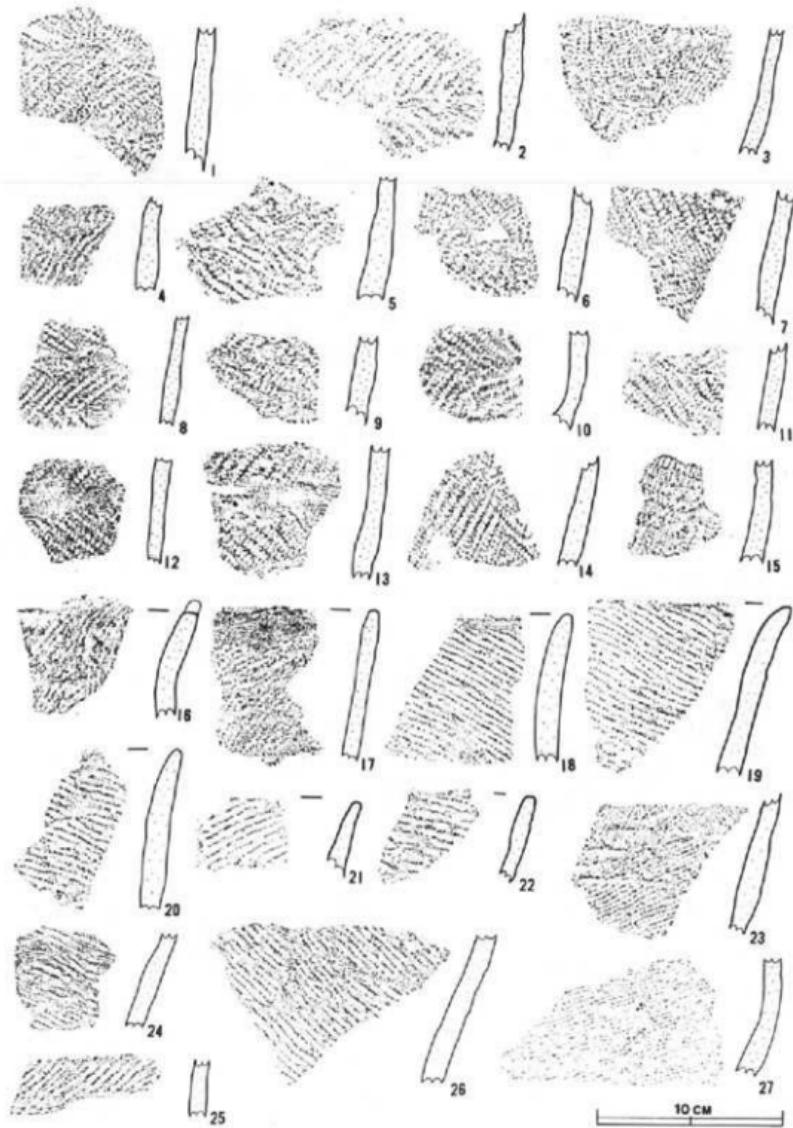
第30図 第4号住居跡出土遺物（5）



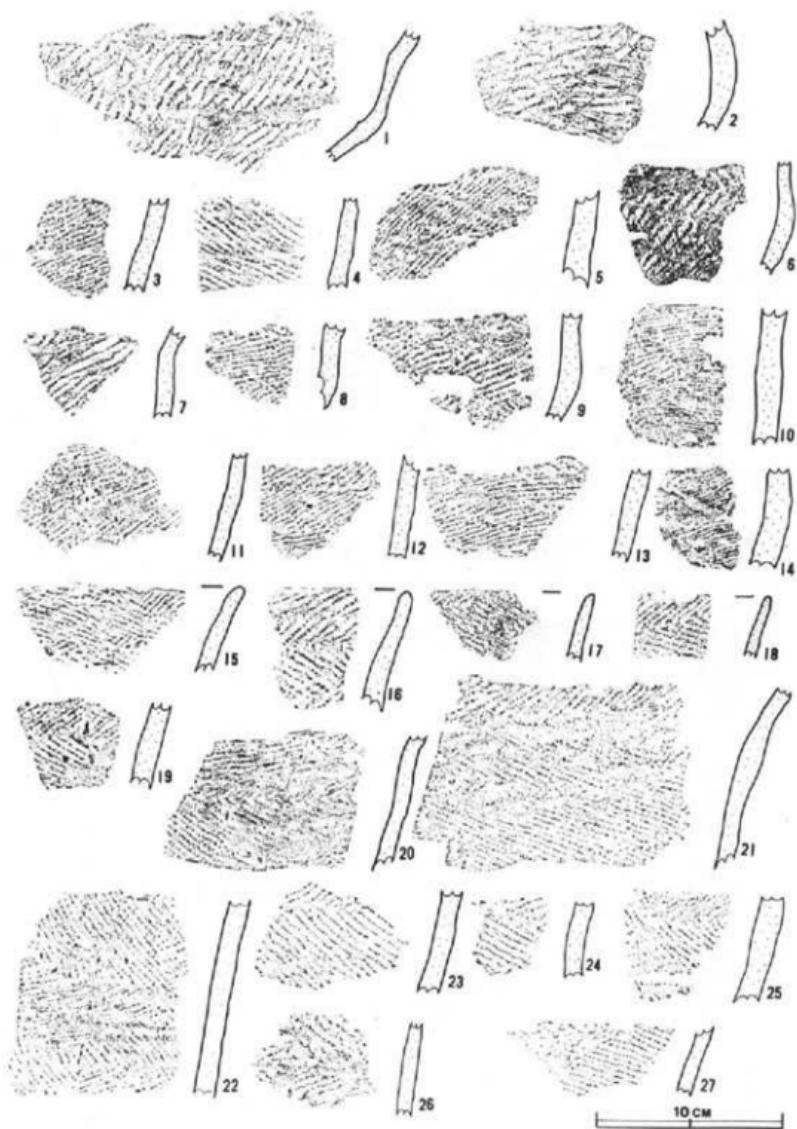
第31図 第4号住居跡出土遺物（6）



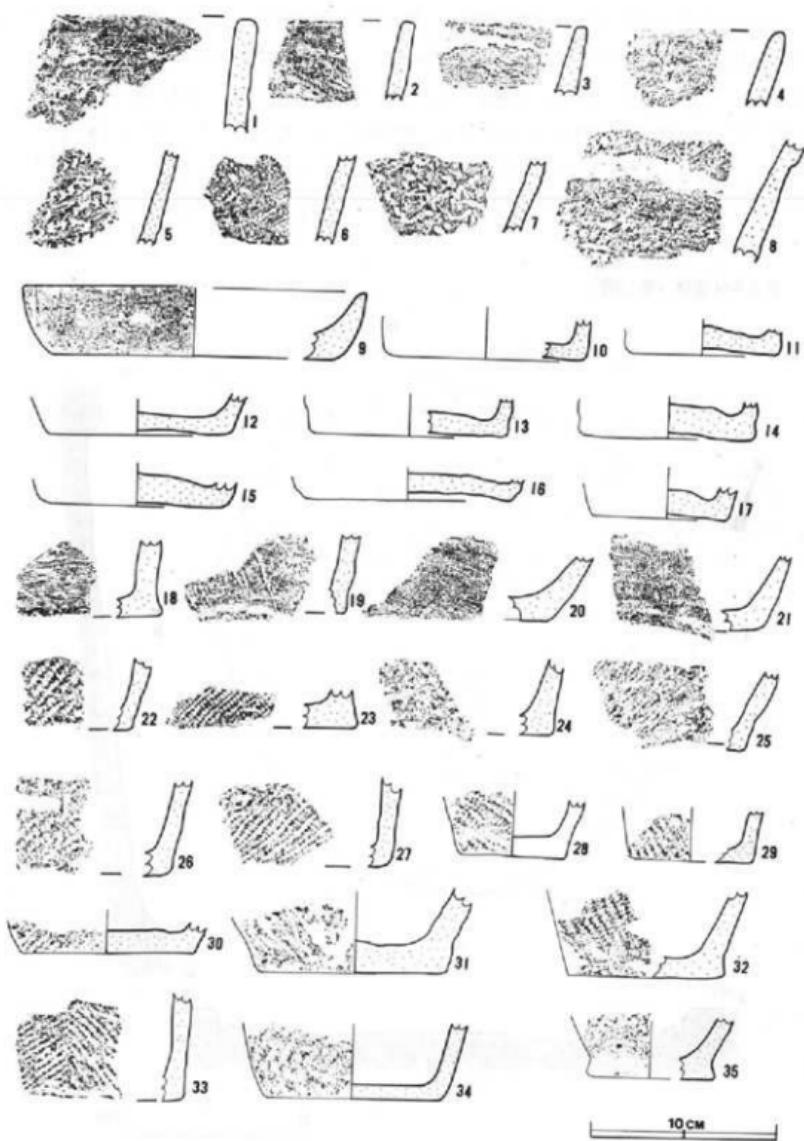
第32図 第4号住居跡出土遺物（7）



第33図 第4号住居跡出土遺物(8)



第34図 第4号住居跡出土遺物 (9)

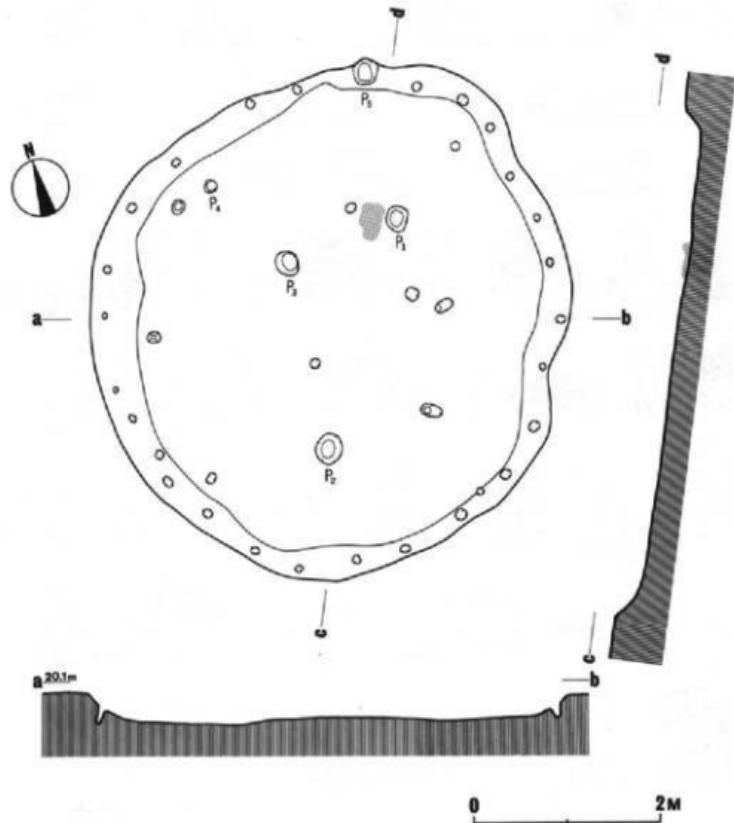


第35図 第4号住居跡出土遺物 (10)

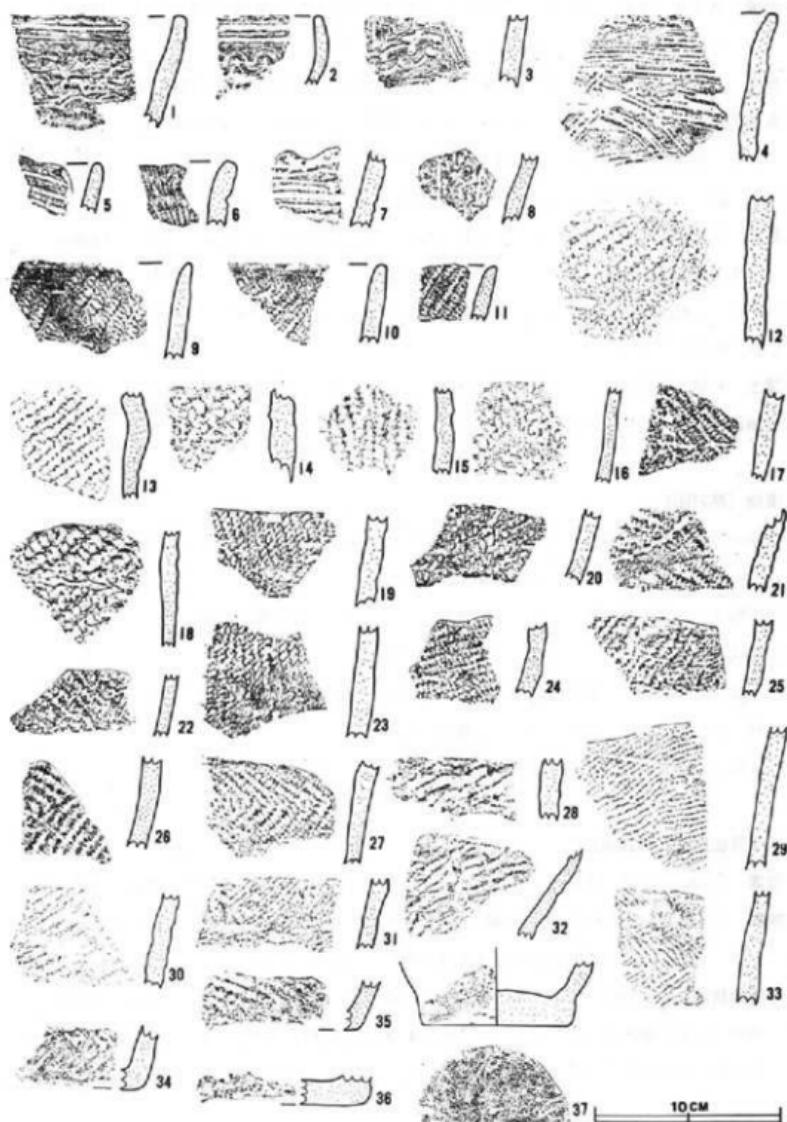
第33図16～27・第34図1～27は無節縞文の3種であり、第34図15～27が羽状構成を示している。第33図16は口縁部に小突起を有し、17は口辺部に幅2cmほどの無文帯がみられる。また、同図23は上部に三本同時施文の鋸歯状の沈線文がみられる。第34図16～22などは結束の状態が把握されるもので、22は部分的に菱形状文がみられる。無節縞文には一般的なもののはかに、細い原体を使用しているものも認められる。第35図5～8はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \end{array} \right\}$ の異節斜縞文である。

第35図9～35は底部片であるが、9は浅鉢状を呈している。底部中上げ底状のものもみられる。

第5号住居跡（第36図）



第36図 第5号住居跡実測図



第37図 第5号住居跡出土遺物

**位置** B地区の南部（143区）に位置し、近接する縄文時代の遺構は北側に第6号住居跡、さらに第7号住居跡がありほぼ一直線上に並んでいる。

**規模** N-8°-E 長軸6.3m 短軸5.6m 平面形状 楕円形 面積15.8m<sup>2</sup>

**各部の状況** 壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがり、壁高は20cm内外で、東壁外辺部の一部がはりだしている。壁下には、壁柱穴がほぼ等間隔に配され、床はほぼ平坦である。床面の中央やや北よりのP<sub>1</sub>に接して少量の焼土がみられるが、炉と考えられる。

**柱穴** P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5ヶ所が考えられ、土柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>で直径25～35cm、深さは30～40cm内外である。床面に他の小穴がみられるが、これらは補助的なピットと考えられる。壁柱穴の間隔は40～70cm内外で、最大幅は北壁で1m、最少幅は西壁で35cmをはかる。深さはほぼ20cm内外で、同心円形状に配されている。

**覆土** 上層が褐色土で、下層壁ぎわにはローム粒子を多く含む黄褐色土が流入している。

**遺物出土状況** 遺物はそれほど多くはないが、中央部から南にかけての覆土中に検出された。

#### 遺物（第37図）

本跡から出土した土器はほとんどが破片であり、住居跡中央部から南にかけての覆土中から出土している。出土量は少なく、すべて第I群土器である。

第37図1～3は1類1種であり、平行沈線とコンバス文が文様帯を構成している。4～8は平行沈線文を主体としたもので3種とすることができる。

9～25は2類1種の土器群で、原体が太いものもみられ、0段多条のものも含まれる。26・27は2種、29～33は3種であり、34～37は底部である。

出土量は少ないが、全体的に焼成など粗雑なものはみられない。

#### 第6号住居跡（第38図）

**位置** B地区の南部（142区）に位置し、南に第5号住居跡、北に第7号住居跡がみられる。

**規模** N-1°-E 長軸5.8m 短軸5.3m 平面形状 東側南北コーナーは丸味をもち、西南コーナーがやや張りだし直角状を呈する隅丸方形。面積 約19m<sup>2</sup>

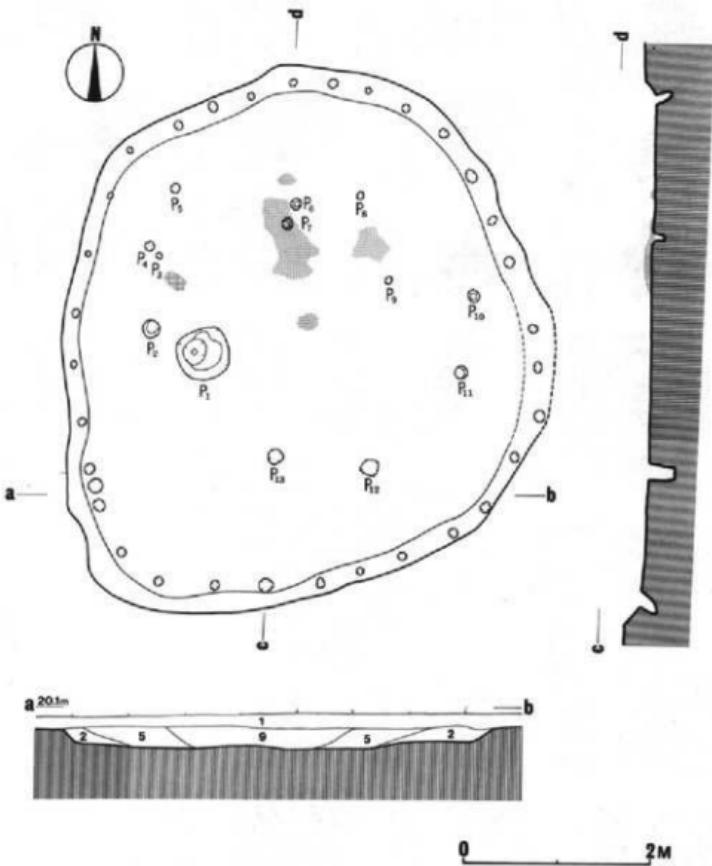
**各部の状況** 壁は外方に開いて立ちあがり、壁高は14～20cmをはかる。西南壁が一部はりだし、東壁の一部は搅乱を受けている。この住居も第5号住居跡と同様にほぼ等間隔に壁柱穴を配し、中央部にもむいて55°～65°内外の角度を有する。床はほぼ平坦で、中央のやや北よりに焼土がみられる。

**柱穴** 中央やや西よりに方形状の大きめのピットがみられるが、他は小さく円形状に配されている。P<sub>1</sub>は直径55cmの方形状に掘り、その両側に柱痕がみられ、深さは84cmをはかる。他のピッ

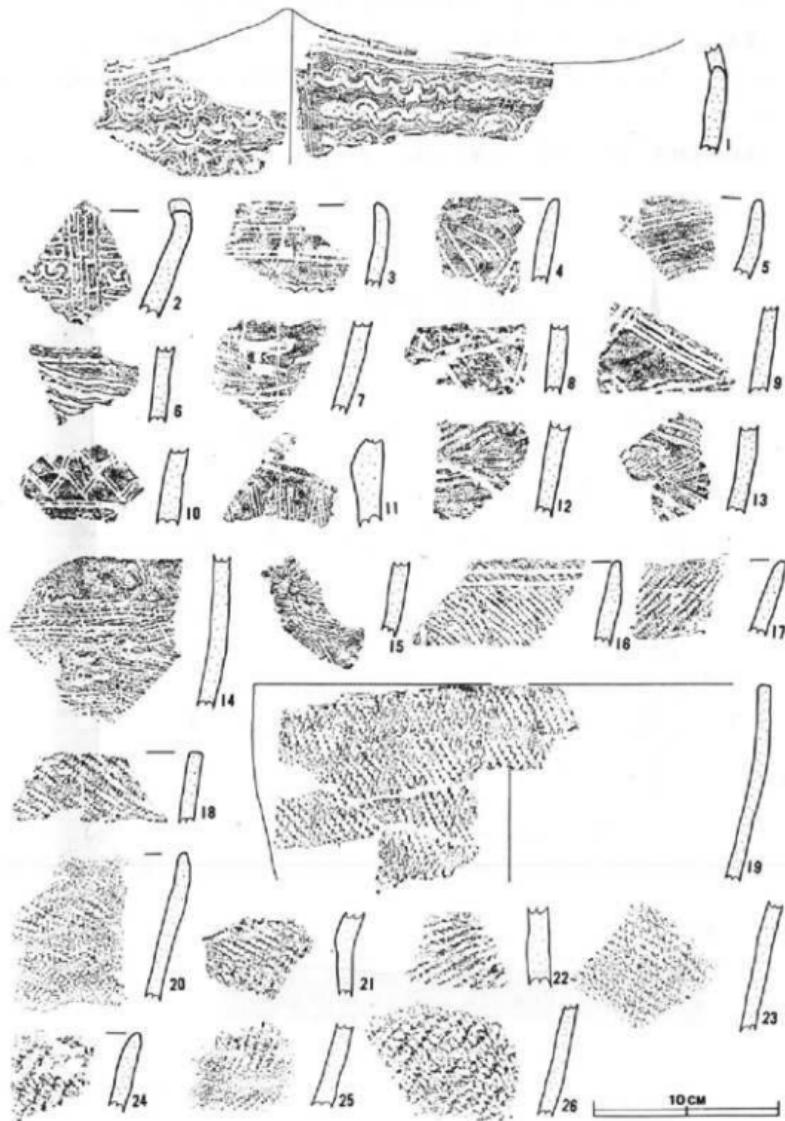
ト  $P_2$ ~ $P_{13}$  は、ほぼ同様なタイプで、直径20cm内外、深さ30~50cmである。

**覆土** 1は表土層で、住居中央付近の9は少量のロームブロックを含む暗褐色土で、9の両側は黄褐色土がみられる。壁ぎわの2はロームブロックを含む黄褐色土で、自然堆積の流入と考えられる。

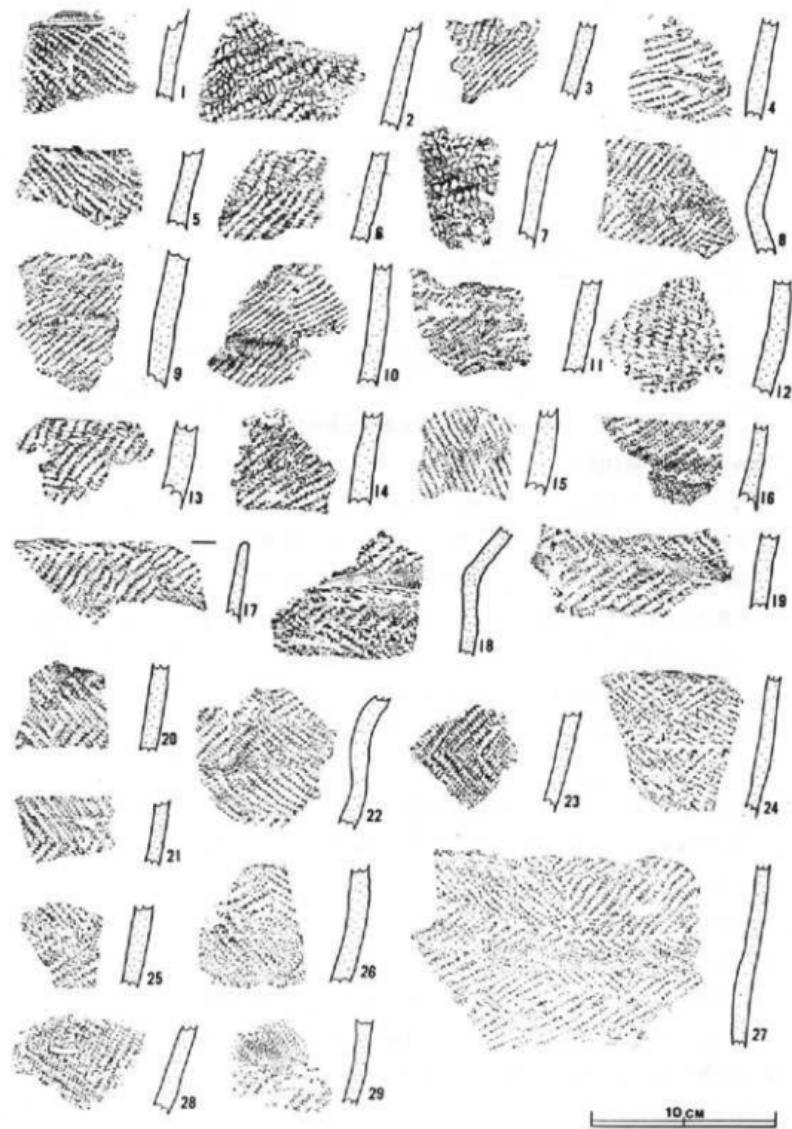
**遺物出土状況** 中央やや西よりの覆土上層面に多くの土器片が検出されている。



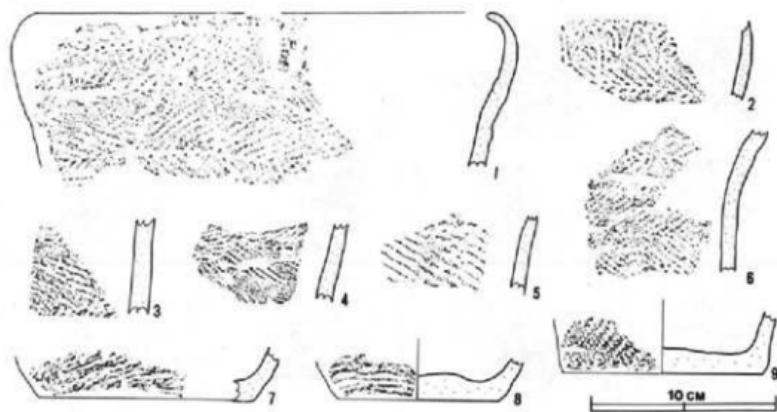
第38図 第6号住居跡実測図



第39図 第6号住居跡出土遺物（1）



第40図 第6号住居跡出土遺物（2）



第41図 第6号住居跡出土遺物（3）

#### 遺物（第39図～第41図）

本跡から出土した土器はほとんどが破片であるが、器形が推定できるものも含まれる。土器は住居跡中央部西よりの覆土上層に多く出土し、すべて第I群土器である。

第39図1～3は1類1種であり、1は口縁部の形状が推定されるもので、推定口径47cmほどの大形の深鉢形土器である。口縁部は波状を呈し、突起から垂下する平行沈線がみられ、区画内にはコンパス文が施文されている。2はコンパス文と平行沈線を交互に施し、縦位の区画がみられる。4～11は直線的な平行沈線文などがみられる3種で、9・10は鋸歯状文が施文されている。

同図12～15は、単軸絡条体による本目状文がみられ、14は上部に压痕文らしきものが施されている。

同図16～26・第40図1～16は2類1種の土器群で、第39図19は器形が推定される。口径は28cmほどで、口縁部はゆるやかに開いて立ちあがる深鉢形土器であり、器面全体にはR<Lが施文されている。

第40図17～29は2種の土器群であり、18は頭部が「く」の字状に屈曲している。羽状構成も結束によるものと、回転方向を変えたものもみられ、菱形を呈する部分もみられる。

第41図1～4・6は無筋の羽状繩文がみられるもので、1は器形が推定できうるものである。口径は25cmほどで、口縁部は大きく内反した深鉢形土器である。口辺部には半截竹管による鋸歯様の文様帯がみられ、下部には無筋の羽状繩文が施文されている。

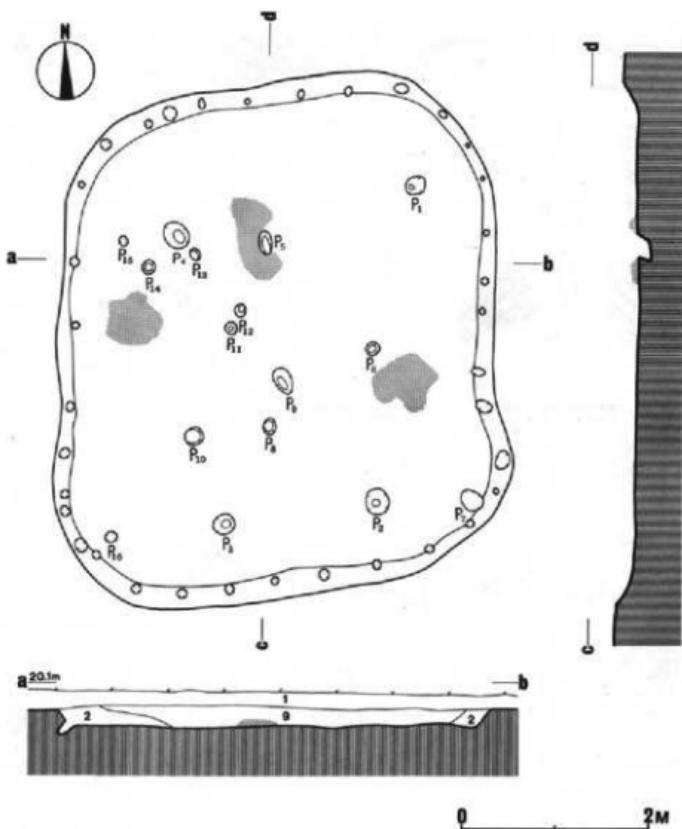
第41図7～9は底部片である。

第7号住居跡（第42図）

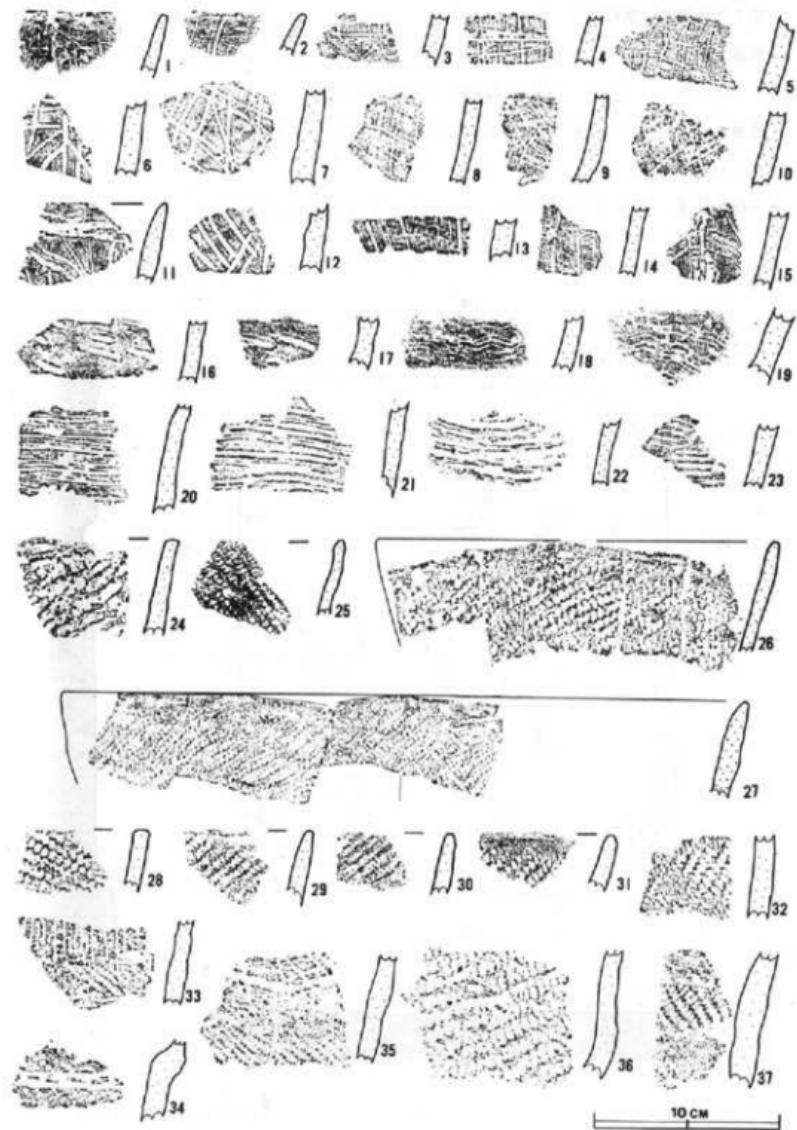
位置 B地区の南部（I 42区）に位置し、西北に傾斜のゆるい谷津が入る。東北55mに地点貝塚がみられるが、これより以北に同時期の住居跡は確認されていない。

規模 N-4°-E 長軸5.7m 短軸5.4m 平面形状 南東コーナーがやや張りだす隅丸方形 面積 約21.1m<sup>2</sup>

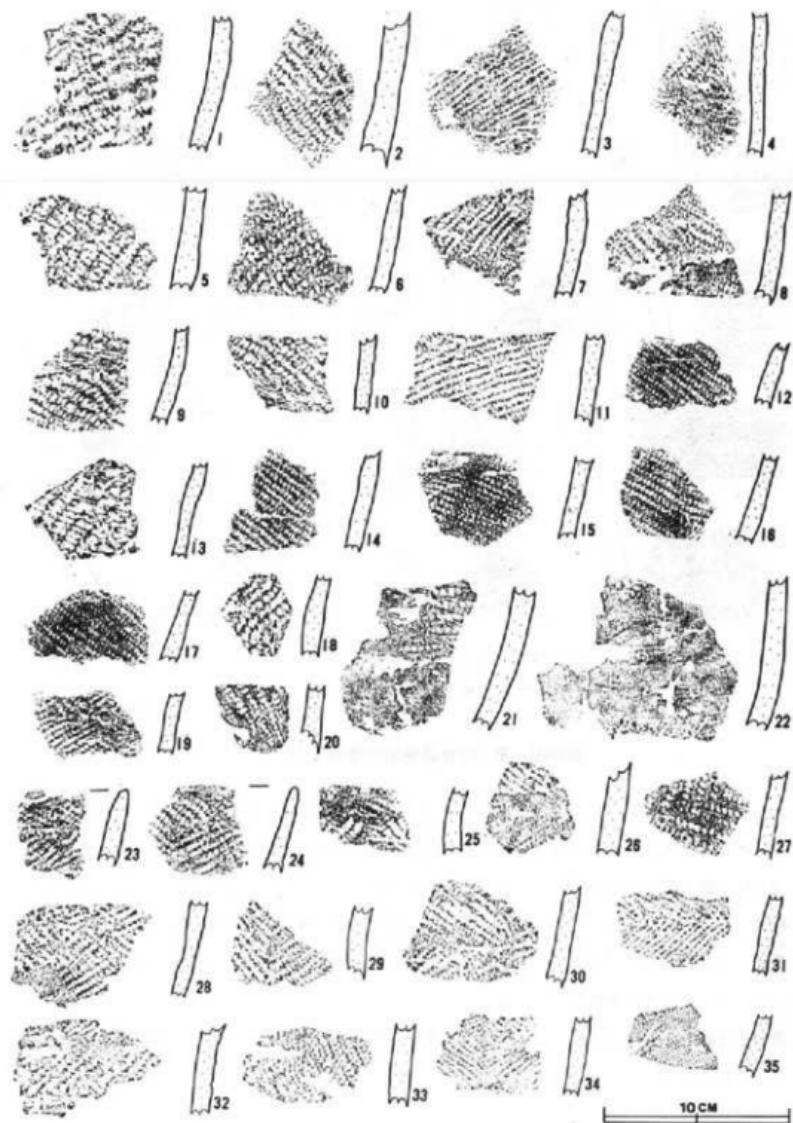
各部の状況 壁はやや外方に開いて立ちあかり、壁高は20cm内外である。壁下にはほぼ等間隔に



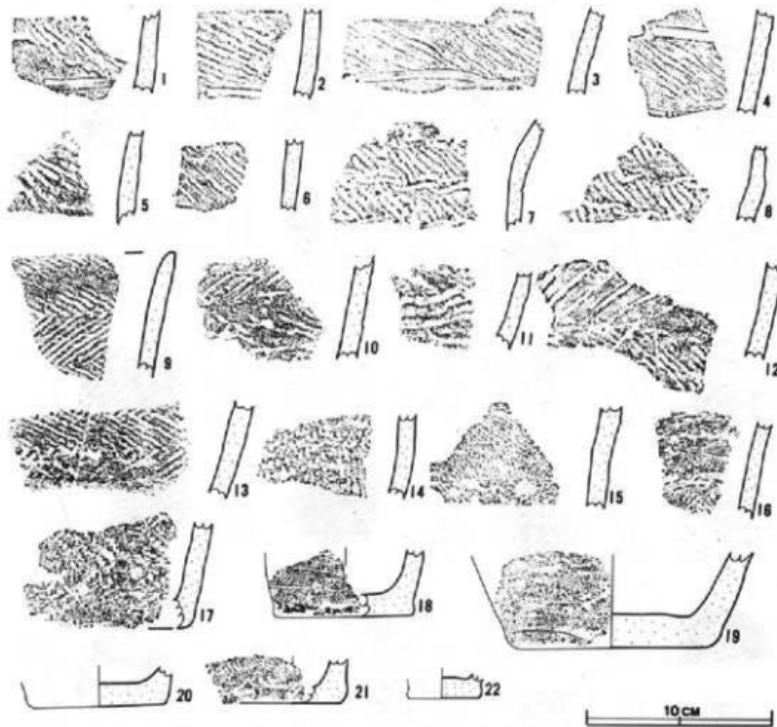
第42図 第7号住居跡実測図



第43図 第7号住居跡出土遺物（1）



第44図 第7号住居跡出土遺物（2）



第45図 第7号住居跡出土遺物（3）

壁柱穴を有し、中央部に向いて50°内外の角度をはかる。直径は10cm内外でそれほど大きいものはみられない。床面はほぼ平坦であるが中央付近が浅い凹状をなす。床中央の北西および東側に不定形状の焼土が3ヶ所みられ、一部はP<sub>8</sub>と接している。

**柱穴** 16ヶ所確認され、主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>で、直径20～30cm・深さ40cm内外である。

**覆土** 1は表土層、9はロームブロック、黒色土ブロックを混入する暗褐色土で、2は多量のロームブロックを含む黄褐色土である。

**遺物出土状況** 遺物は中央からやや南方の覆土上面に多く検出され、住居跡廃絶後に投棄されたものと思われる。

#### 遺物（第43図～第45図）

本跡から出土した土器はほとんどが破片であり、住居跡中央部南よりの覆土上層に多く検出さ

れ、すべて第I群土器である。

第43図1～14は直線的な沈線文が主体で、3～10は格子文がみられる。同図18～23は1類4種の横曲状文が施文されている。

同図24～37・第44図1～22は2類1種の土器群であり、第43図26・27は口縁部の形状が推定できうるものである。26は口径22cmほどで、直線的に開く口縁部を有した深鉢形土器である。27は口径37cmほどの大形の深鉢形土器で、口縁部は26同様直線的に開いている。33・35は上部に沈線文がみられ、34はR<sup>L</sup>の縦文を地文に横位の有節沈線文が施されている。

第44図23～35は2類2種の羽状縦文を有する土器群であり、35は細い縦文が施文されている。

第45図1～13は2類3種の上器群であるが、1～4はR<sup>L</sup>を地文として横位の沈線文がみられ、7・8には結束痕がみられる。

同図17～22は底部片である。

#### 第8号住居跡（第46図）

位置 B地区の東部（K39区）に位置し、東方3mに第9号住居跡、西方34mに地点貝塚がみられる。

規模 N-24°-E 長軸3.8m 短軸3.5m 平面形状 北東コーナーが丸味をもつ方形

面積 10.4m<sup>2</sup>

各部の状況 壁は垂直ぎみに立ちあがり、床面から壁高は35～37cmである。床面はほぼ平坦で、中央付近に菱形状の焼土ブロックがみられる。柱穴および壁柱穴は確認されていない。

覆土 上層はしまりのある暗褐色土で、下層はロームブロックを含む茶褐色土がレンズ状に堆積している。

遺物出土状況 遺物は少量の縄文土器片で、覆土中および床面より検出されている。

#### 遺物（第47図）

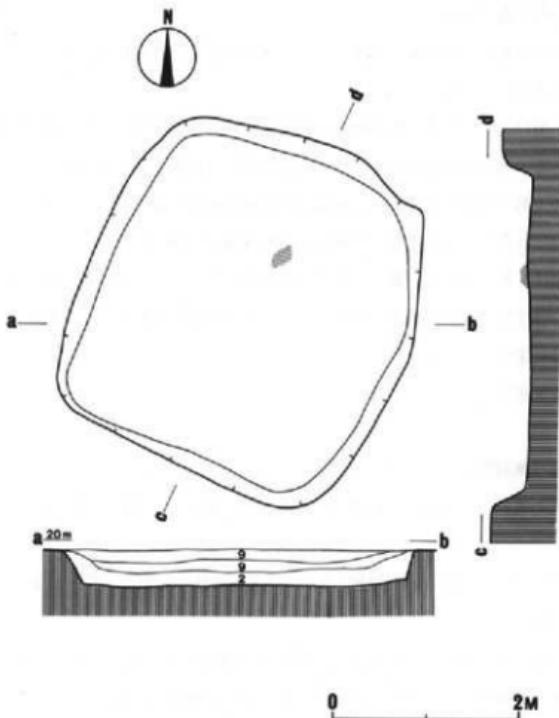
本跡から出土した土器は少量で、すべて住居跡の覆土および床面から出土した第I群土器である。

第47図1～4は1類の土器であり、1は横位に多条の沈線が施され、2は半截竹管による文様帯がみられる。また、4は底部片である。

同図5～31は2類の土器群で9～17は1種、18～23は2種であり、縄文は粗雑なものもみられる。また、24～31は3種の土器である。

#### 第9号住居跡（第48図）

位置 B地区の東端（R38区）に位置し、南西3mに第8号住居跡がみられ、東は区域外に至



第46図 第8号住居跡実測図

る。

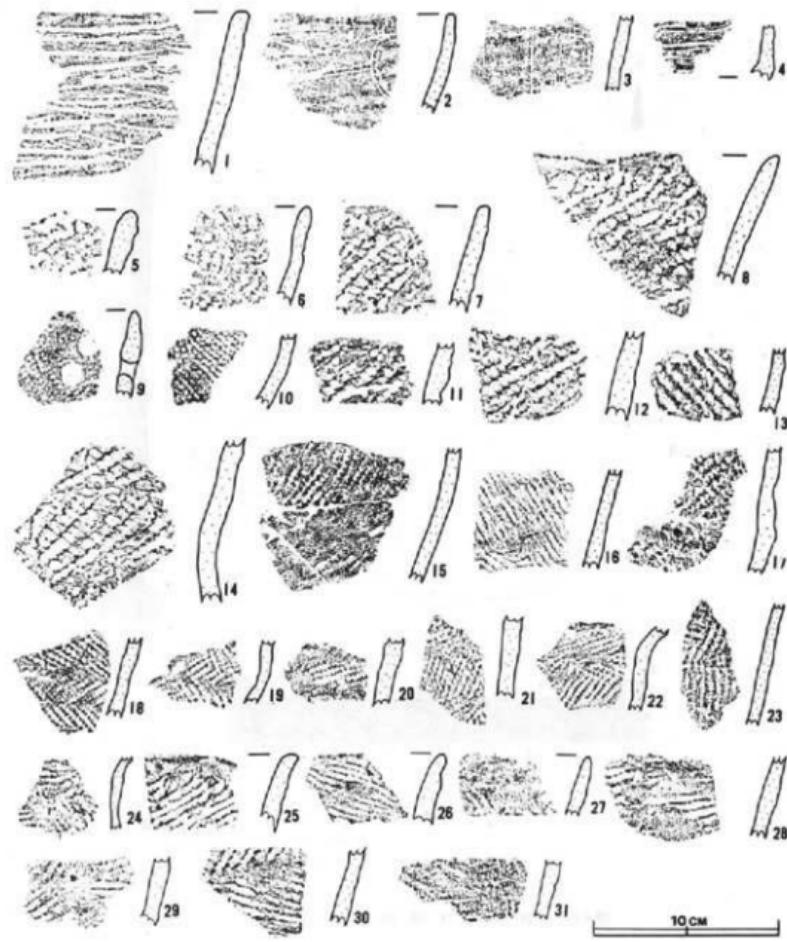
規模 N-4°-W 長軸5.5m 短軸4m 平面形状 不定長方形 面積 約19m<sup>2</sup>

各部の状況 壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがり、壁高は16~23cmで西壁が低く、南壁はやや南に張り出し、西壁中央部分に擾乱がみられる。床面はほぼ平坦であるが、中央付近に段を有し、その北側はやや低くなる。中央に長方形状の焼土ブロックが検出され、規模は110×40cm内外であり炉と考えられる。

柱穴 7ヶ所確認されているが、主柱穴は明瞭でない。南東側にP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>がみられ、P<sub>4</sub>は段部分にP<sub>7</sub>は北東側に位置している。直径は10cm内外で、深さ10~20cmである。

覆土 中央部上層の10は黒褐色土で、9はローム粒子をわずかに含む暗褐色土である。下層は多量のロームブロックを含む黄褐色土がみられ、自然堆積を示している。

遺物出土状況 覆土中に少量の土器片を検出したにとどまる。

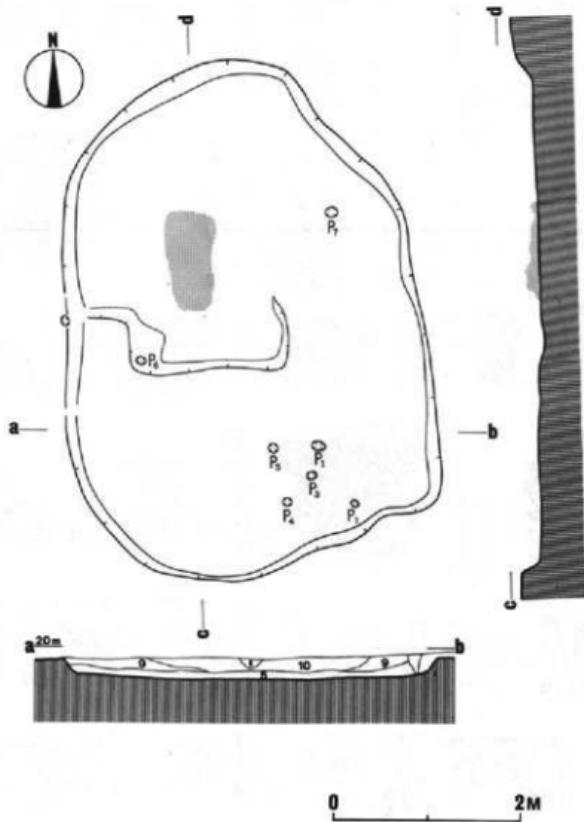


第47図 第8号住居跡出土遺物

#### 遺物（第49図）

本跡から出土した土器は少量で、ほとんど覆土中より出土した第I群土器である。

第49図1～13はすべて2類土器で、粗雑な整形がみられるが同一個体とも考えられる。口縁部はやや内反ぎみに開く深鉢形土器であり、地文は $L < R$ の縦文をやや雜に施し、その上に不規則な沈線文を部分的に施している。焼成はほぼ良好である。



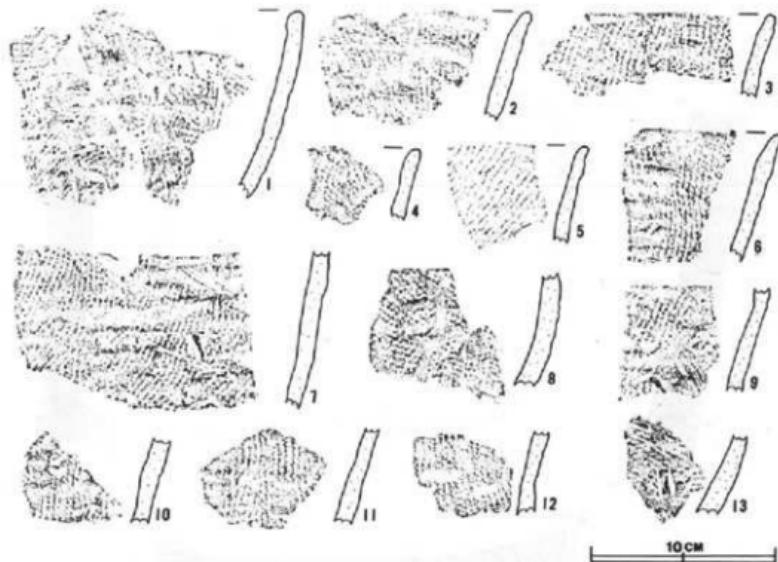
第48図 第9号住居跡実測図

**第10号住居跡（第50図）**

**位置** A地区のほぼ中央部（K9区）に位置し、周辺には縄文時代の住居跡は確認されていない。

**規模** N-33°-W 長軸4.1m 短軸3.6m 平面形状 台形状 面積 約10.7m<sup>2</sup>

**各部の状況** 壁はややゆるやかに立ちあがり、壁高は10~30cmで西北側は低く南側は高い。また、北・東コーナーがやや張り出している。床面はほぼ平坦であるがわずかに北より南へ傾斜を



第49図 第9号住居跡出土遺物

示し、床・壁とも軟弱である。

**炉** 床面中央に少量の焼土等がみられるが、床はそれほど焼化されていない。

**柱穴** 北コーナー一部に、長軸65cm・短軸50cm・深さ20cmの長方形を呈するピットがみられるが柱穴は確認されていない。

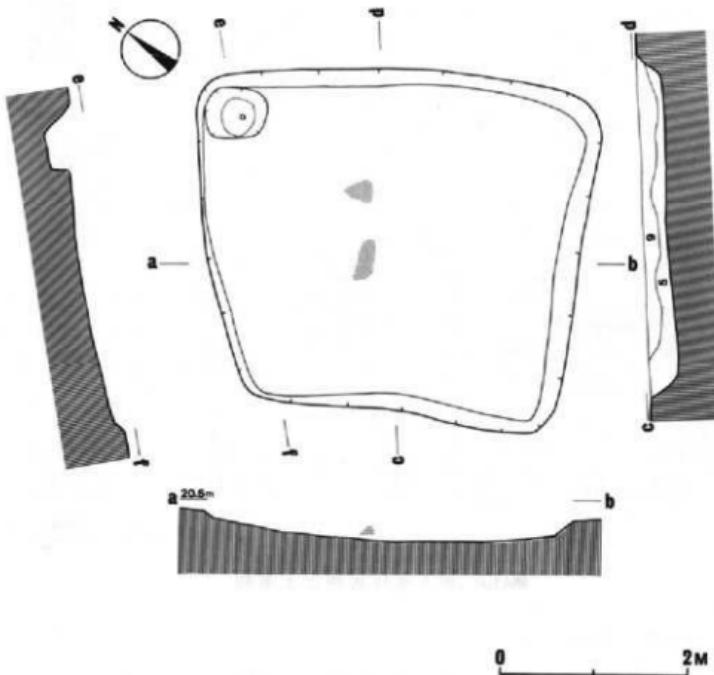
**覆土** 上層が暗褐色土で、下層はロームブロックを中量含む黄褐色土の堆積がみられる。

**遺物出土状況** 遺物の出土は少量で住居跡の中央やや東よりの覆土中より出土している。

#### 遺物（第51図）

本跡から出土した土器は極少量で、住居跡中央部の東よりの覆土中より出土した第II群土器である。

第51図1・2は同一個体片であり、口縁部は波状を呈し、胴部がくびれる深鉢形土器の破片である。波状口縁の頂部には有孔の円形および8字形の突起部がみられ、口辺部には無文帯が微隆起線によって区画されている。胴部は繩文帯と無文帯に微隆帯で区画し、繩文帯には $R < L$ の繩文が施文され、無文帯部は箒による研磨がなされている。焼成は良好で、器面には部分的に煤が付着している。



第50図 第10号住居跡実測図

**第11号住居跡（第52図）**

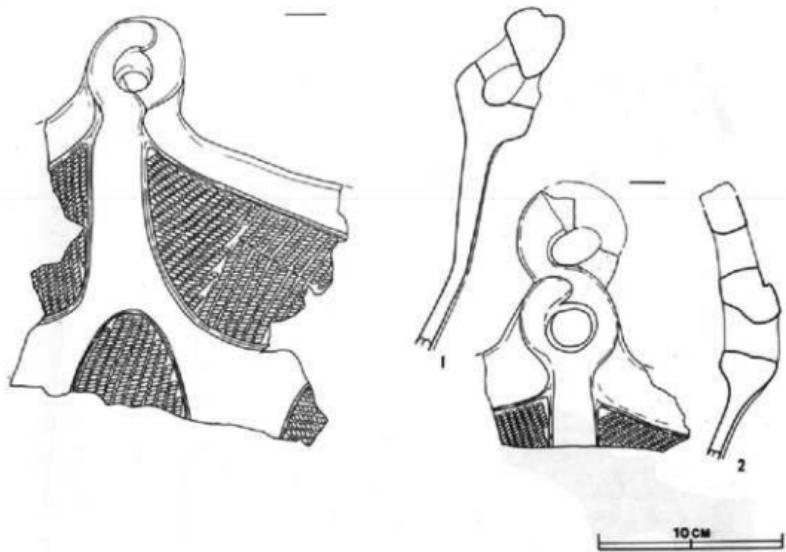
**位置** D地区の中央やや南より（D3区）に位置し、東1mに古墳時代中期に比定される第22号住居跡が隣接している。

**規模** N-25°-W 長軸6.09m 短軸5.92m 平面形状 方形 面積 約32.6m<sup>2</sup>

**各部の状況** 壁は垂直ぎみに立ちあがり、壁高は26~36cmで、南・西壁が高く、東壁はやや低くなる。床は平坦であるが、北および東壁より中央付近にかけて傾斜を示している。西壁の中央やや南よりの覆土上面より中央の床面に後世の炭焼窓跡が確認され、多量の炭化物・焼土を包含する黒色土がみられる。炉は確認されていない。

**柱穴** 6ヶ所確認されているが、床中央付近のP<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>が主柱穴と考えられる。直径30~45cmでP<sub>3</sub>~P<sub>6</sub>はは壁ぎわに位置し、規模はそれほど大きいものではない。

**覆土** 上層はローム粒子を含む暗褐色土であるが、部分的に褐色土・黄褐色土が混入する。下



第51図 第10号住居跡出土遺物

層はローム小ブロックを含む黄褐色土・暗褐色土がみられ、後世にかなり搅乱を受けている。

**遺物出土状況** 覆土上面から中層にかけて多量の土器片が検出され、土器片の接合関係からみれば、その状況はきわめて散在した分布状況を示している。住居跡の廃絶後に投棄されたと考えられる。

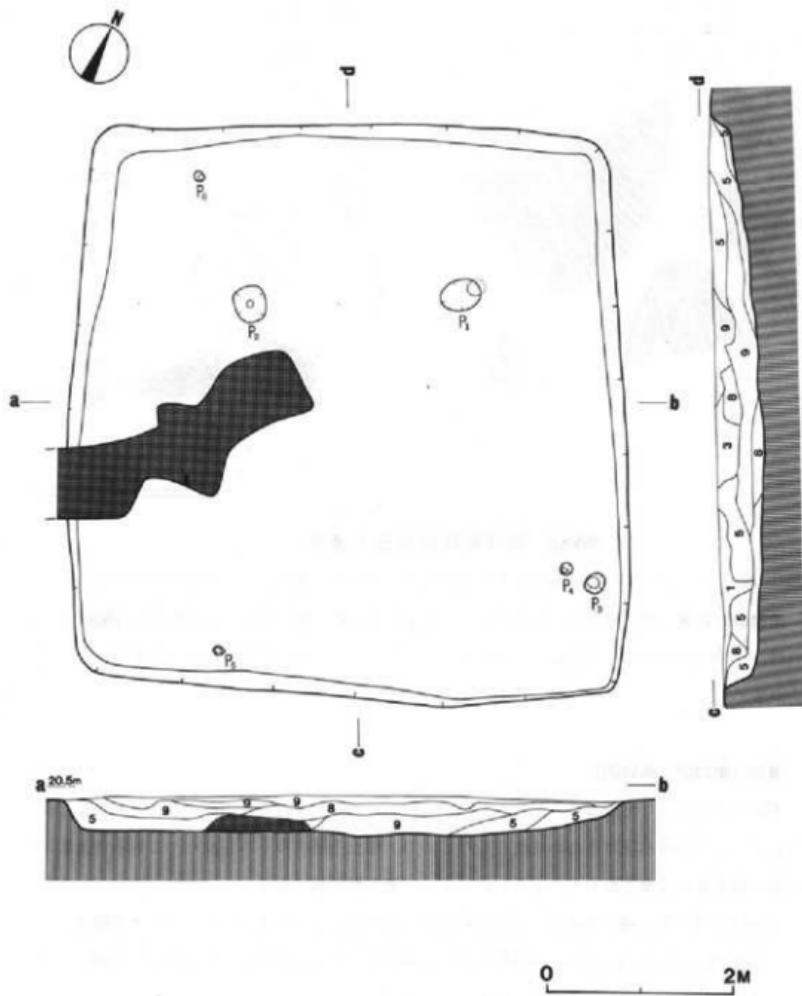
#### 遺物（第53図～第59図）

本跡から出土した土器は多く、器形が推定されるものも含まれる。土器片の接合関係などからみれば、その分布状況はきわめて散在したもので、覆土上層に多くみられた。これらの土器は住居跡の廃絶後に投棄されたものとみられ、すべて第I群土器である。

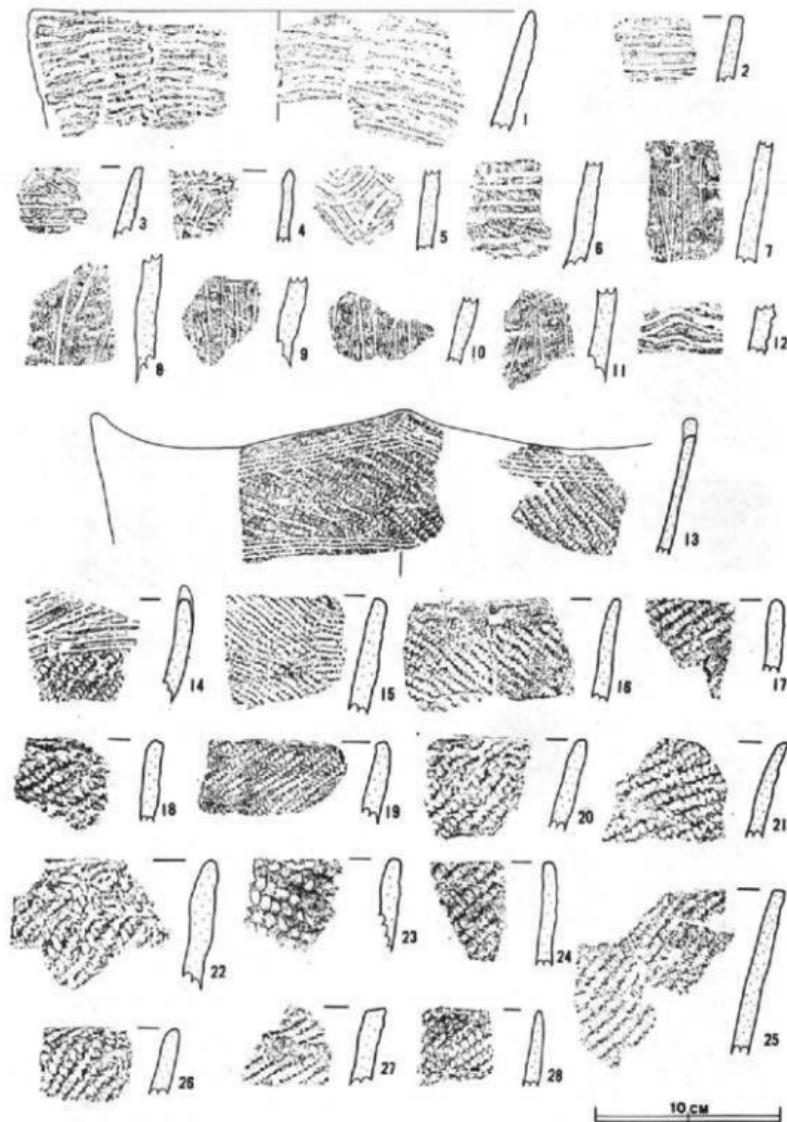
第59図2は1類1種の土器で、口辺部から胴下部までコンバス文がややくずれた文様帯を形成し、口径24cm・現高21cmほどの深鉢形土器で口縁部は小さな波状を呈しやや外反して開き、胴部でかすかにくびれ、底部へ移行する器形をしている。

第53図1～12は1類3種の土器が主体であり、1は推定口径27cmほどの口縁部が直線的に開いて立ちあがる深鉢形土器である。口辺部以下には横位の平行沈線文がみられ、焼成はほぼ良好である。

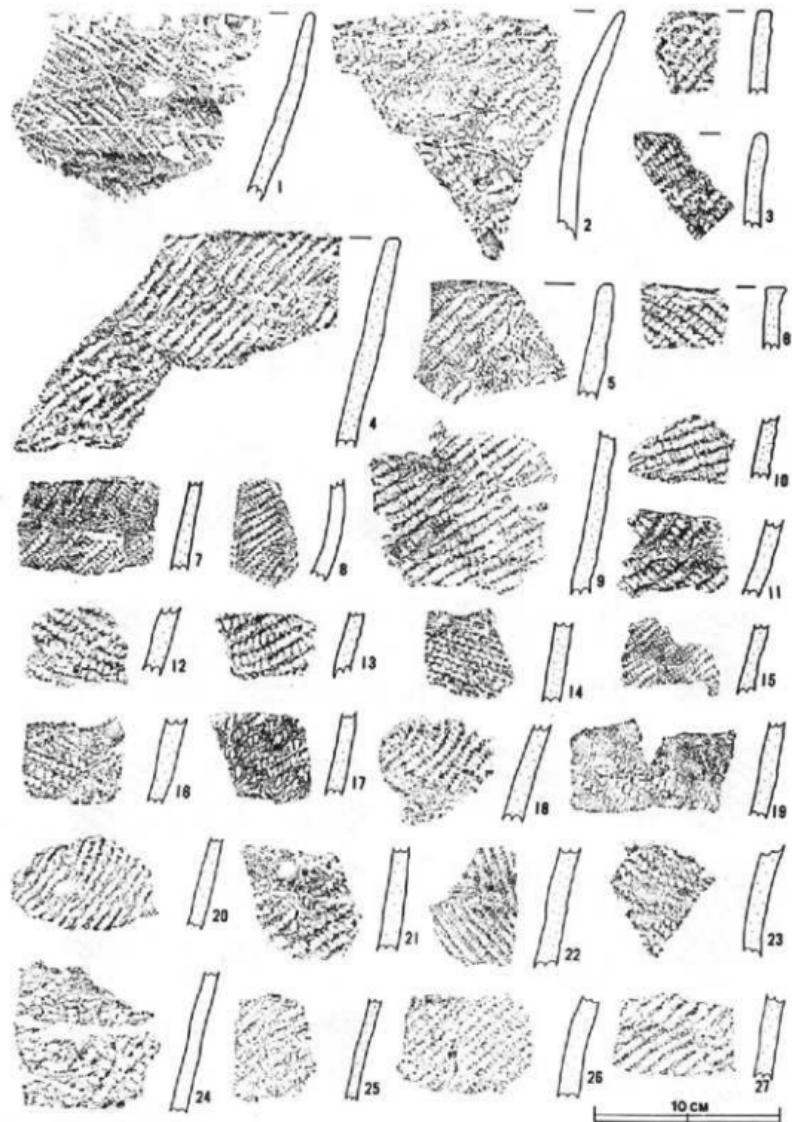
第53図13～28・第54図～第59図は2類土器で、本跡出土土器の主体となっている。第53図13～



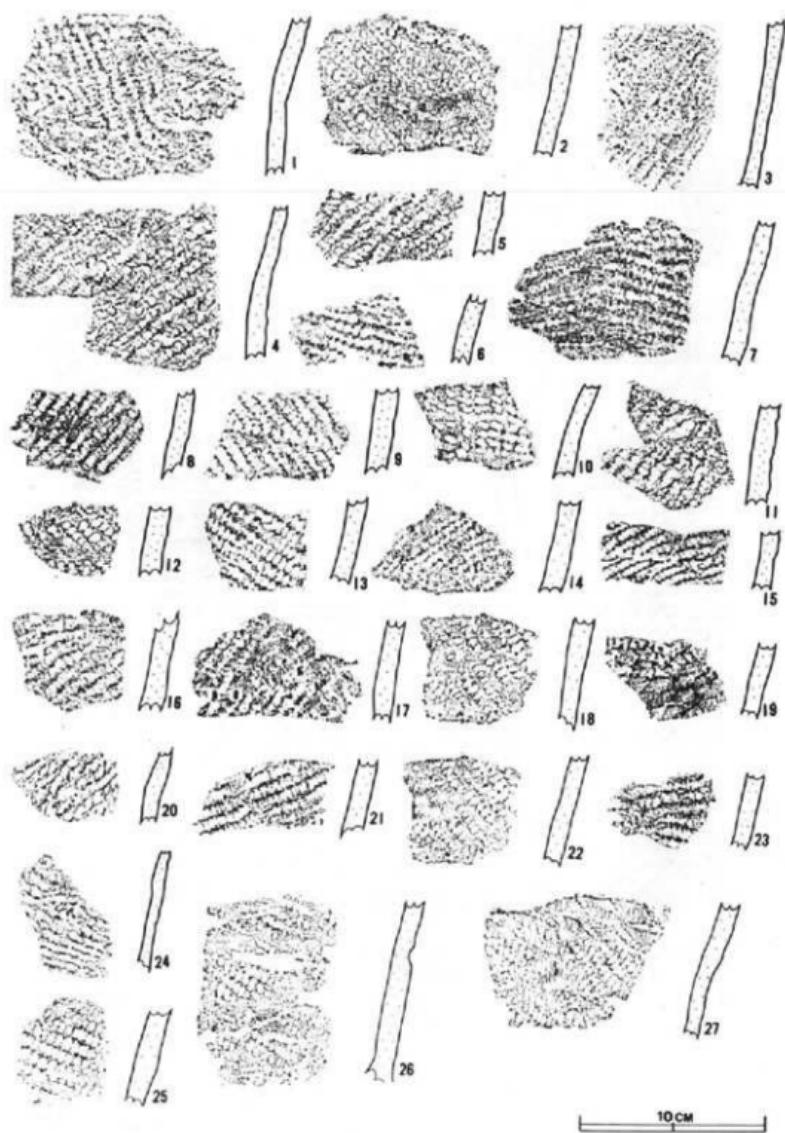
第52図 第11号住居跡実測図



第53図 第11号住居跡出土遺物（1）



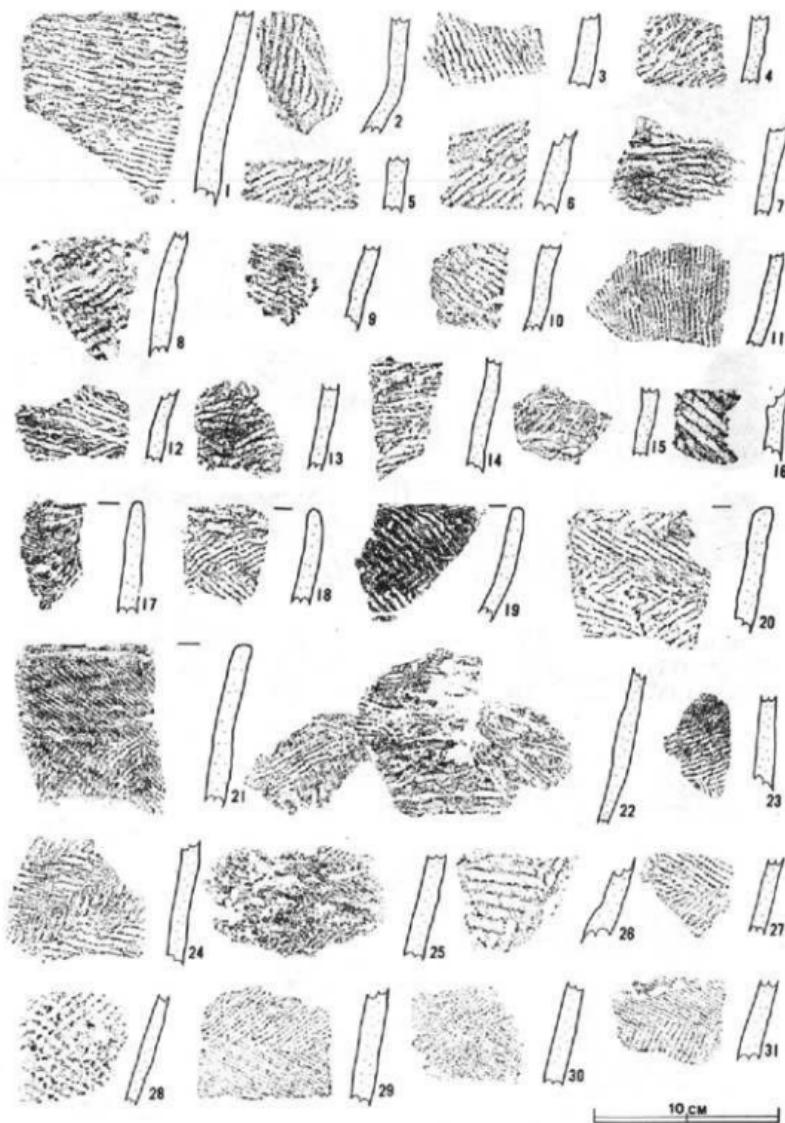
第54図 第11号住居跡出土遺物（2）



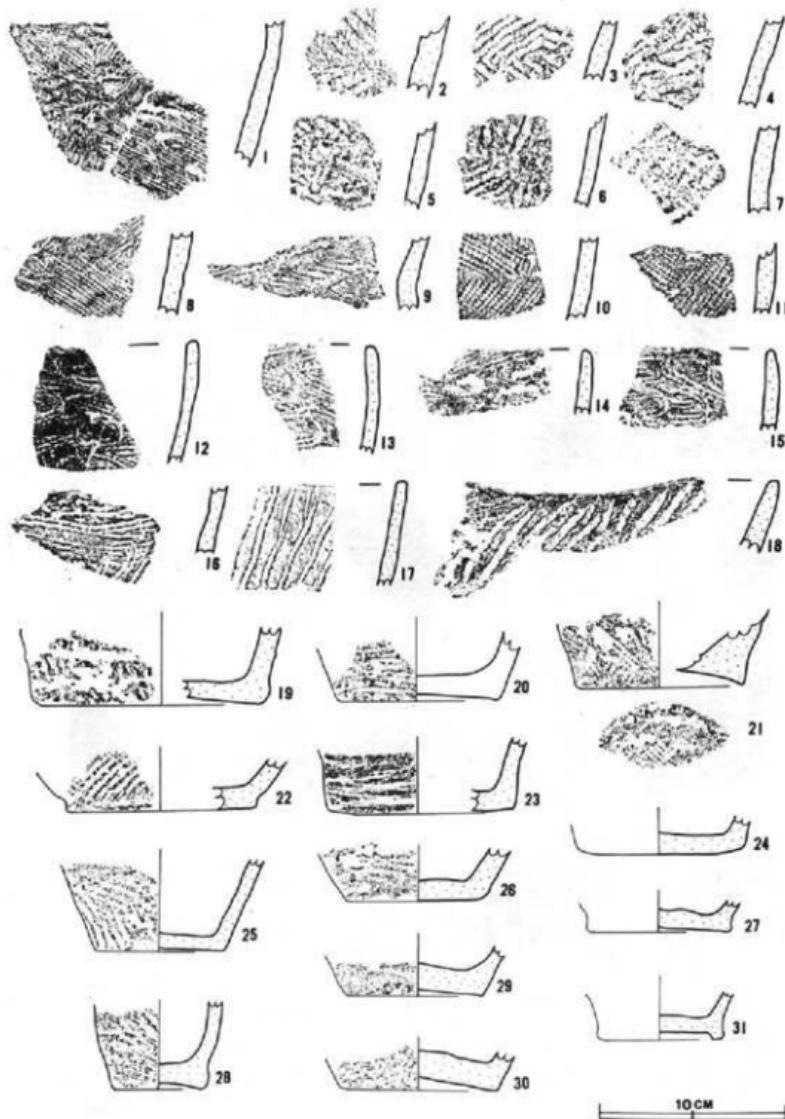
第55図 第11号住居跡出土遺物（3）



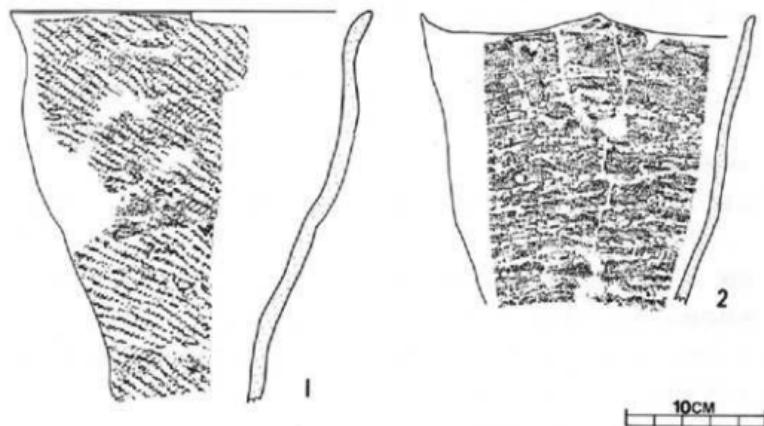
第56図 第11号住居跡出土遺物 (4)



第57図 第11号住居跡出土遺物（5）



第58図 第11号住居跡出土遺物 (8)



第59図 第11号住居跡出土遺物（1）

28・第54図1～27・第55図1～27・第59図は1種の土器群で、2類土器中で最も多い出土率を示し、第59図1はその器形が把握できる。口径26cm・現高28cmほどの深鉢形土器で、口縁部は外反し、胴上部が膨れて底部へ細く移行する。口縁部から胴下部まで $R < L$ の繩文が施文されている。第53図13も口縁部の形状が推定されるもので、推定口径約33cmで波状口縁を呈している。地文を $R < L$ の繩文とし、口辺部および胴上部に6条の沈線文が横位に施文された深鉢形土器である。同図14も口辺部に平行沈線文が施されたもので、口縁部は波状を呈するものであろう。繩文原体も太いものや粗雑なものも含まれ、さらに、0段多条の原体も含まれている。

第56図1～11は2類2種の土器で、9は0段多条である。

第56図12～29・第57図1～16は2類3種のうち無節繩文で全体的に施文は粗雑である。第56図23の口縁部は波状を呈し、27は口唇部に浅いスリットがみられる。

第57図17～31・第58図1～9は3種のうち羽状を呈した土器群である。第57図22については若干検討を要する。この22の土器は第58図12～16の単軸格子体による木目状痕を有する土器群と同

種のものとも考えられる。第58図10・11は附加条縫文を有する土器群である。また、同図17・18には撫糸文がみられる。

同図19~31は底部片であり、あげ底状を呈するものも多く含まれる。

## 2. 古 墓 時 代

### 第12号住居跡（第60図）

位置 B地区の南部（L46区）に位置し、第3号住居跡の北東コーナーを切り込んで構築されている。

規模 N-78° E 長軸7.08m 短軸6.6m 平面形状 方形 面積 42.6m<sup>2</sup>

各部の状況 壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は24~33cmで南北が高く、東西が低い。床面は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。南西コーナーに長軸70cm・短軸49cm・深さ54cmの長方形の貯蔵穴がみられる。

炉 床中央およびその西北側に焼土ブロックが少量みられる。

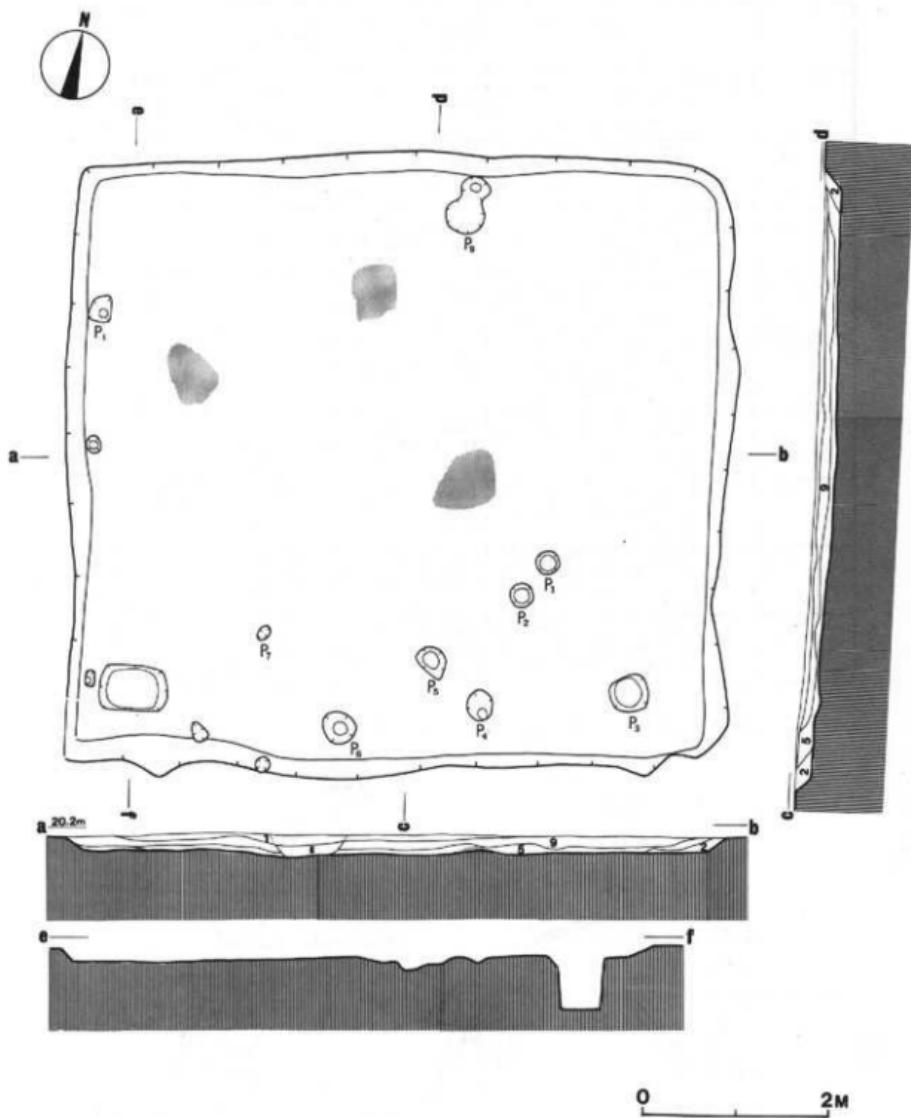
柱穴 9ヶ所確認され、主柱穴は明瞭ではないが、南東付近のP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>が考えられる。直径は25~45cmで、深さは12~30cmである。

覆土 上層は耕作土および暗褐色土で、下層はローム粒子を含む黄褐色土がみられ、部分的に擾乱が入るが自然流入の状態を示している。

遺物出土状況 遺物は土師器の完形品が多く、西北壁よりの床面に完形の甕（第62図1），その東側に横転して出土した高壙2点（第61図1・2），南西コーナー付近の床面に壺・壺等（第62図）が出土している。

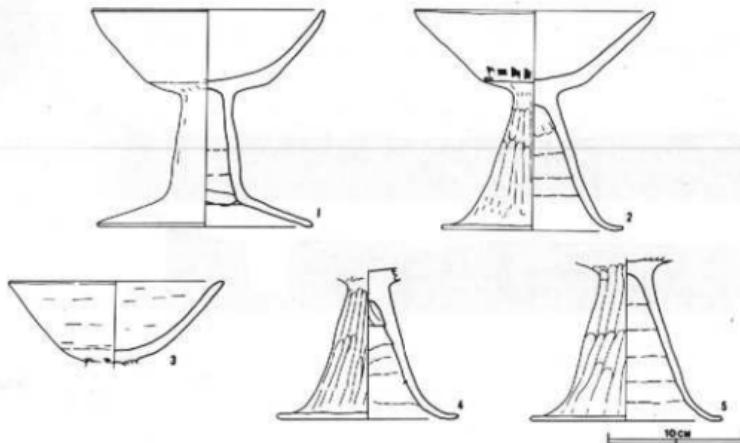
### 遺 物（第61・62・98・99図）〔法量は上から口径・器高（現高）・底径である〕

番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	装 飾 形 式	燒成・削土・色調	備 考
1 高 壙	壺	17.2	環部は内側方に開き、肩部部は円錐形をなす。底部は肩部部以下で強く屈曲し、大きくなる。壁厚は0.6~1.0cm。	环部内外とも読みがきがみられ、肩部部外側は腹位の読みがき。内面には輪摺痕がみられる。	青 濃 砂粒・微 赤褐色	
2 高 壙	壺	17.8 16.1 完 形	環部は直角的に大きく開き、肩部と直角的に開いている。 壁厚は0.6~1.0cm。	环部内面は格子状がみられ、外面は直角の読みがきのあと輪摺痕がなされている。肩部部から底部にかけて縦筋の強弱があり、内面には輪摺痕がある。	良 好 砂粒・微 黄褐色	
3 高 壙 脚欠	壺	35.0 6.3	环部は内側方に開いて立ちあがる。脚部欠損。壁厚は0.5~0.8cm。	环部内外面とも直角でがみられた。内面は基盤の剥落がひどい。	青 透 砂粒（多） 外側 明褐色 内側 栗色	
4 高 壙 脚欠	壺	11.1 13.4	环部を欠く。肩部部は底部にむかって傾き、腹部が大きく開いている。壁厚は0.5~1.0cm。	肩部部外側は肩部の強弱がみられる。内面には輪摺痕がみられる。脚部は直角でがみされている。	良 好 砂粒・微 黄褐色	

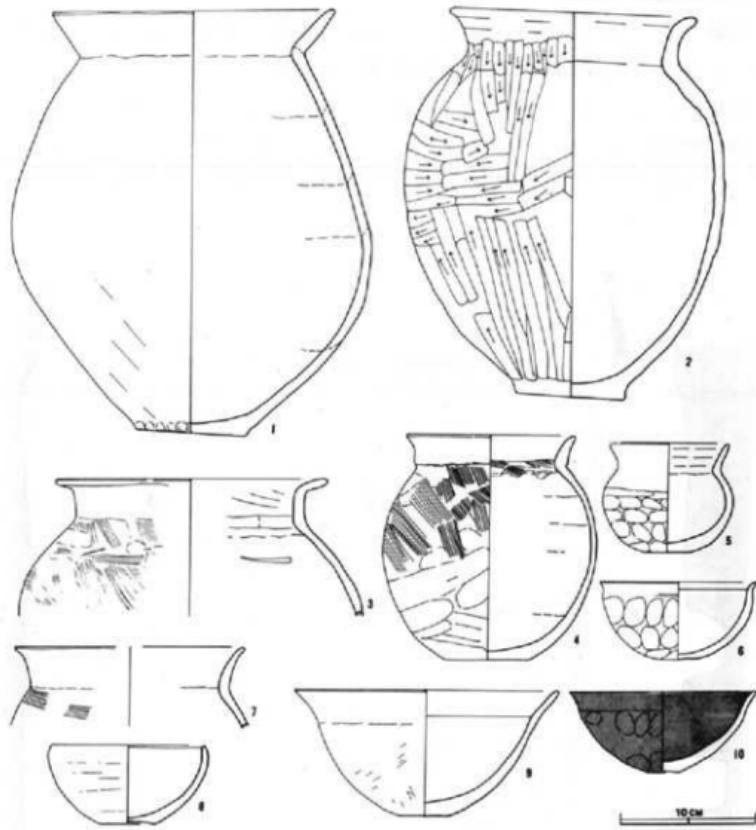


第60図 第12号住居跡実測図

5	高 環 部 次 另	(12.0) 14.4	環部を欠く。脚柱部は裾部にむかって開き、裾部は大きく開いている。壁厚は0.4~1.0cm。	脚柱部外側は上位から3段に裾部の施削りがみられ、内面には施削痕が5段ほどみられる。	良 好 砂粒・石英 外面 黄褐色 内面 增褐色	
62回 1	裏 另	21.0 30.8 8.0	口縁部は頸部よりやや内側して大きく開き、脚部最大径は下位にある。壁厚は0.7cm内外。	口縁部内外とも横なで。脚部は斜行施削り。	普 通 砂粒・礫 赤褐色	二次焼成をうけ施 成痕が口縁部から 肩部にかけてみら れる。
2	裏 完 形	17.4 28.0 7.9	口縁部は頸部から外反してたちあがり。頸部はやや長めの中段に最大径を有している。壁厚は0.6cm~1.3cm。	口縁部内外とも横なで。頸部外周以下は施削りがみられ、内面はなでがなされている。底面は施削り。	良 好 砂粒 (多) 褐色	
3	裏 另	20.0 (10.0)	頸部は直立ぎみに立ちあがり、口縁部は大きく外反している。脚下部欠損。壁厚は0.6~0.8cm。	口縁部内外とも横なで。脚上部は斜位あるいは横位の刷毛目底。	良 好 砂粒・礫 黄褐色	
4	小形 腰 另	12.6 16.5 6.3	口縁部は直立ぎみに立ちあがり、大きく外反している。頸部は斜行施削をなし、やや直径は大きい。壁厚は口縁部が最大1.0cmほどで、脚部は0.5~0.7cmほどである。	口縁部内外とも横なでがみられ、脚部上部は斜位の刷毛目底。下部は施削り。	良 好 砂粒・礫 淡茶褐色	二次焼成
5	小形 腰 完 形	8.9 8.1 3.2	口縁部は直立ぎみに立ちあがり、やや外反し、頸部はやや扁平状をなしている。壁厚は0.6~1.0cm。	口縁部から肩部にかけて横なでがみられ、脚下部外側は施削りがなされている。	普 通 砂粒 黄褐色	
6	底 付 完全形	11.7 5.8	底部は丸底で、体部は底部から内側して立ちあがり。口縁部は小さく外反している。壁厚は0.4~0.6cm。	口縁部内外とも横なでがなされ、体部外側は施削り、内面は横位の施削なでがみられる。	良 好 砂粒・礫 黄褐色	
7	腰 另	17.0 (6.0)	口縁部は頸部より外反して立ちあがり。頸部を欠く。壁厚は0.5~0.7cm。	口縁部内外とも横なでがみられ。肩部は斜位の刷毛目底が部分的にみられる。	良 好 砂粒・石英 淡灰褐色	
8	塊 完 形	11.3 5.8 4.2	体部は底部から内側して立ちあがり、口縁部は内側して立ちあがっている。底部はややくぼんでいる。壁厚は0.6~0.9cm。	口縁部内外は横なでがなされ。体部外側は横なでがみなら。内面は剥落している。底部はくぼんでいる。	普 通 砂粒・礫 黄褐色一部黒色	
9	環 另	19.6 9.2 4.0	体部は底部から大きく内側して開き、口縁部はさらに外反し、内面には棱をなす。壁厚は0.4~1.1cm。	口縁部内外とも横なでがみられる。体部は網目なでがみられる。	良 好 砂粒 外面 黄褐色 内面 赤褐色	



第61図 第12号住居跡出土遺物（1）



第62図 第12号住居跡出土遺物（2）

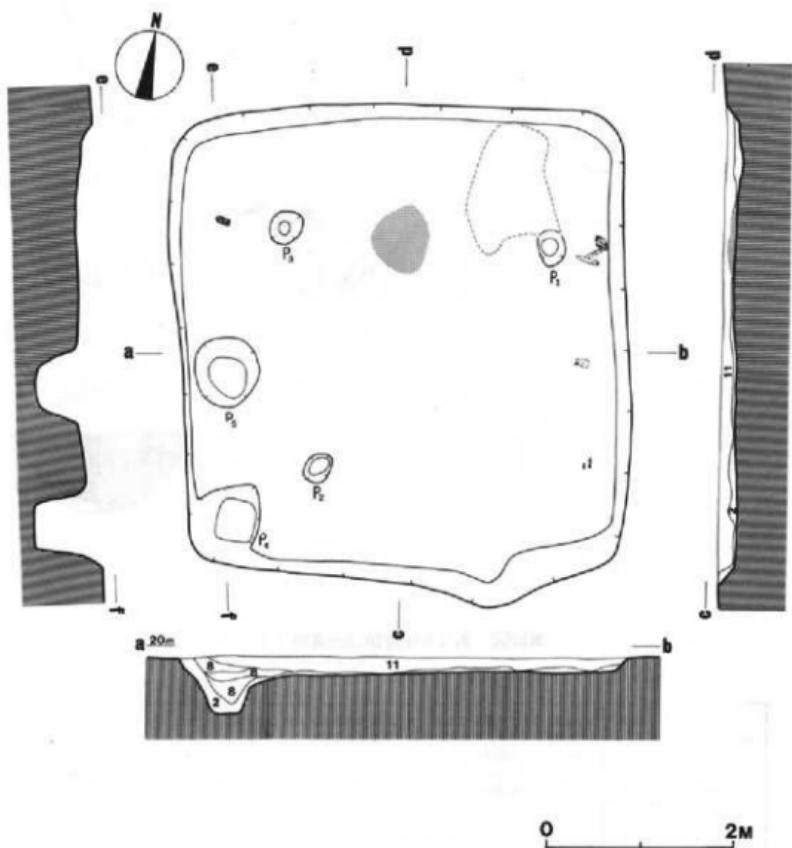
10	环 宍 形	13.8 5.9 2.2	9と同形の杯で体部は底部から大きくなびいて開き、口縁部はさらに外反する。底部はややくぼむ。	口縁部内外面とも横なでがみられ、 体部外面は箆削り。	良 好 砂 粒 赤褐色	内外面とも丹塗
99 回 1	球状土器 宍 形	長 2.9 幅 2.6 重 18.5g	球状をなし、孔径0.4cm		良 好 砂 粒 黄褐色	
98 回 7	石 斧	成長(2.1) 幅 2.9 厚 0.9 重 (7.5g)	覆土中より出土したチャート製の 小形磨製石斧。刃部を残す。他は欠損。 刃部には軸位の擦痕が認められる。			

第13号住居跡（第63図）

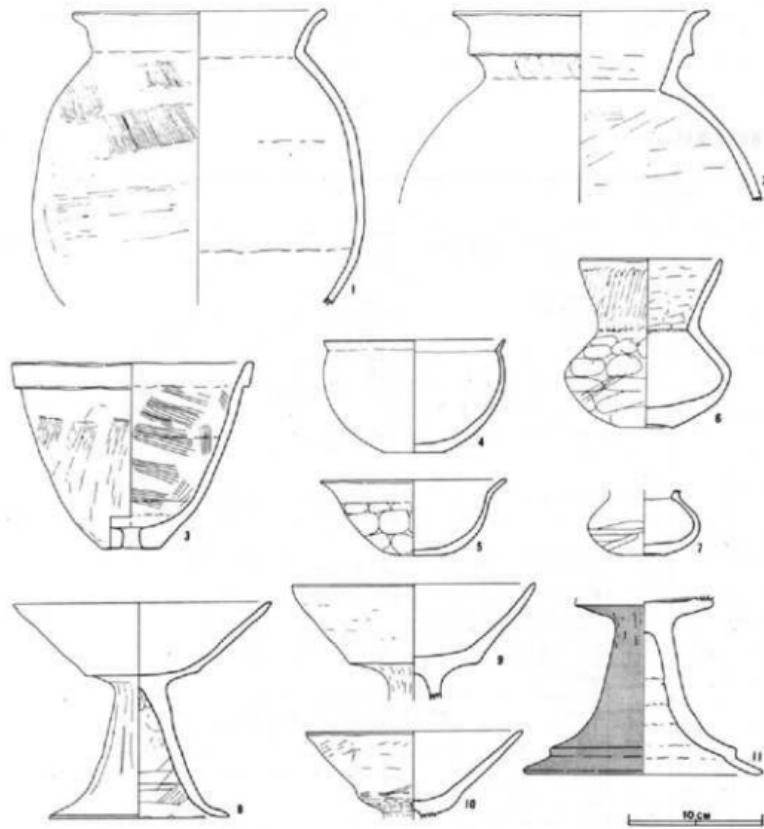
位置 B地区の南部（M45区）に位置し、近接する古墳時代の遺構は、北東部にやや大型の第15号住居跡、西北部に第14号住居跡、西南部に第12号住居跡がみられる。

規模 N-12.5°-W 長軸5.08m 短軸4.8m 平面形状 方形 面積 約21.6m<sup>2</sup>

各部の状況 壁はいずれも垂直ぎみな立ちあがりを示し、壁高は14~22cmほどで、西・北が高く、南・東部がやや低くなり、南壁の一部がはり出している。床はほぼ平坦であるが、全体的に



第63図 第13号住居跡実測図



第64図 第13号住居跡出土遺物

若干凹凸がみられ、やや軟弱である。南西コーナー部に接して貯蔵穴が位置している。

**炉** 中央やや北よりの床面に、不整形状の焼土が確認され、床はそれほど焼化されたものではない。

**柱穴** 6ヶ所確認され、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は主柱穴と考えられ、直径30cm内外で、深さ20～27cmほどである。P<sub>4</sub>は南西コーナーに接する貯蔵穴で、長軸90cm・短軸70cm・深さは40cmをはかる。P<sub>5</sub>は長径70cm内外の橢円形を呈する後世の攪乱である。

**覆土** 上層が黒色土で、下層はローム粒子を含む暗褐色土がみられ、自然流入の堆積状況を呈している。壁よりに少量の炭化材が検出され、火災に遭遇したものであろう。

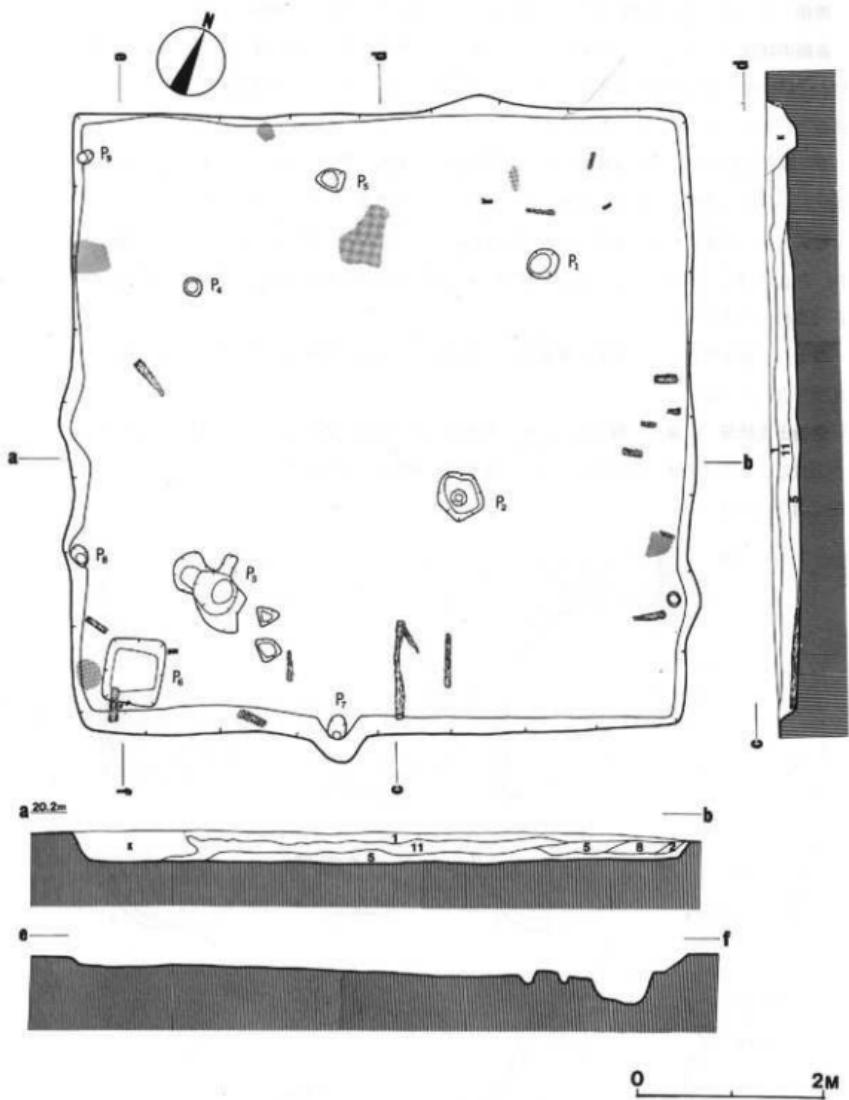
**遺物出土状況** 東南床面に倒立した複合口縁の壺（第64図2），貯蔵穴から完形の壺（第64図6）と環部を欠損する高环（第64図11）がみられ，貯蔵穴の北側の床面に甌（第64図3）がつぶれた状況で出土し，その西南に甌（第64図5）がみられた。

### 遺物（第64図）

番号	基種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	盤 形 法 法	焼成・施土・色調	備考
64図 1	壺	18.8 (21.6) 3.6	口縁部は底部から立ちきりにて外反し、底下半周を大損。内側は底付近でやや膨らむをなす。底部は直角。壁厚は0.6~0.8cm。	口縁部内外とも横なでがみられ。底部外側は底位の削けりがみられる。横位内側も底位の削けりがなされている。	普通 砂粒 赤褐色	
2	壺 部欠	19.0 (14.0)	口縁部は底部から改めて有して外反し底下半周を大損。壁厚は0.6~1.5cm。	口縁部内外とも横なでがみられ。底部外側は底位の削けりがみられる。横位内側とも底位なで。	良好 砂粒 赤褐色	
3	甌 空 瓶	17.9 13.5 5.4	口縁部は底部から立ちきりにて外反し、底下半周を大損。壁厚は0.6~1.5cm。	口縁部外側は削けりによるなで、内側は横なでからなる。底部外側は中段位には底位の削けりがなでがみられ、内面には底位の削けり跡がなされている。	普通 砂粒・礫(多) 外面 赤褐色 内面 黄褐色	口縁部に堆积層
4	壺 完 形	13.4 8.2 4.5	口縁部は底面的に外反し、体部は半球形を呈している。底部は平底。	口縁部内外とも横なでがなされ、体部内側は底位。	良好 砂粒 外側 黄褐色 内側 黄褐色	
5	甌 底付完形	13.8 5.4 3.4	口縁部は体部から大きくなして開き、体部はやや底下である。底部は平底。	口縁部内外は横なでがみられ、体部外側は削けりがみられ。内面に底位がきがなされている。	良好 砂粒 赤褐色	
6	甌 完 形	10.6 22.4 8.8	口縁部は底面より直腹的に開いて立ちあがり、底部は底付を呈し、最大径は中位にある。底付はややくぼんでいる。壁厚は0.5~1.0cm。	口縁部外側は底位の削けりがあり、内面は横位の差なでがなされている。底部外側には底削りがみられる。	良好 砂粒 黄褐色	
7	甌 口縁部欠	4.8 3.2	口縁部を欠き、側面に磨平の痕跡を呈し、最大径は中位よりやや下にある。底部はややくぼんでいる。壁厚は0.3~0.8cm。	脚上部外側は横なで、下部は横位の削けりがみられる。底部は底付。	良好 砂粒 黄褐色	
8	高 环 底付完形	19.0 15.7 13.3	环部は直面的に大きく開き、脚部を底部にむかって開き。脚部は大きく開いている。下部には底を有する。壁厚は0.4~1.2cm。	环部外側は底位で、脚部外側は底位の削けりがある。内面は底付。	普通 砂粒・長石 黄褐色	
9	高 环 脚部欠	18.0 8.4	环部は内側きみに大きく開いて立ちあがり、下部に底を有する。壁厚は0.5~1.2cm。	环部外側は横なで、脚部外側は底位の削けり。	普通 砂粒(多) 淡青褐色	全体的に堆積している。
10	高 环 脚部欠	16.0 (6.4)	环部は直面的に大きく開き、下部には底を有し、脚部を欠く。壁厚は0.5~1.2cm。	环部内外ともなで。後の下部に脚位の削けり。内面は剥落がけいし。	普通 砂粒・砾 茶褐色	
11	高 环 脚部欠	(13.0) 27.8	环部のほとんどを欠いているが、下部には直面的な脚部を有している。脚部部は直面にむかってやや開いている。底部には底を有して大きく開いている。	脚部部は複数の底削りがみられ、底部は底位で底形がなされている。内面には剥落がみられる。	良好 砂粒・砾 外側 赤褐色 内面 黄褐色	内部外面、裏外 面部

### 第14号住居跡（第65図）

**位置** B地区の南部（L44区）に位置し、古墳時代の住居跡は南方に向規模の第12号住居跡、北東にやや大型の第15号住居跡がみられる。



第65図 第14号住居跡実測図

規模 N-23°-W 長軸6.65m 短軸6.6m 平面形状 方形 面積 約41.2m<sup>2</sup>

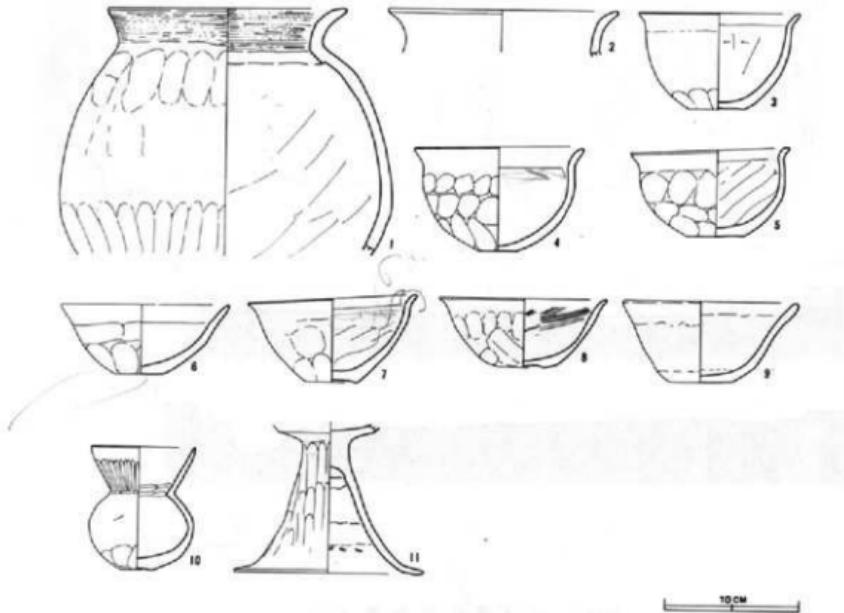
各部の状況 壁はいずれも垂直ぎみに立ちあがり、壁高は21~33cmで南が低く、西が高い。西壁および南壁の中央付近が張りだしている。床はほぼ平坦であるが、中央部付近がややくぼむ。南西コーナーの床には、小穴が多くみられる。

炉 床中央付近から焼土は検出されず、北西および南西に多くの焼土がみられ、その周辺から炭化材が床中心部向きに倒れた状態で検出され、火災に遭遇したものと考えられる。

柱穴 9ヶ所確認され、主柱穴はほぼ対角線上に並ぶP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>と考えられ、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は小規模だが、P<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>は直径1m内外となる。P<sub>6</sub>は長軸70cm・短軸60cm・深さ45cm内外の貯蔵穴であり、P<sub>7</sub>~P<sub>9</sub>は壁柱穴と考えられる。

覆土 上層は黒色土で、下層は多量のローム粒子を混入する黄褐色土からなり、焼土粒子・炭化物を含んでいる。

遺物出土状況 貯蔵穴の覆土中に完形の土師器の壺・埴等（第66図）が炭化材と共に出土し、中央付近から球状土錐（第94図2・3），南東部の床面より石製模造品の勾玉（第98図1・2）が出土している。



第66図 第14号住居跡出土遺物

遺 物 (第66・98図)

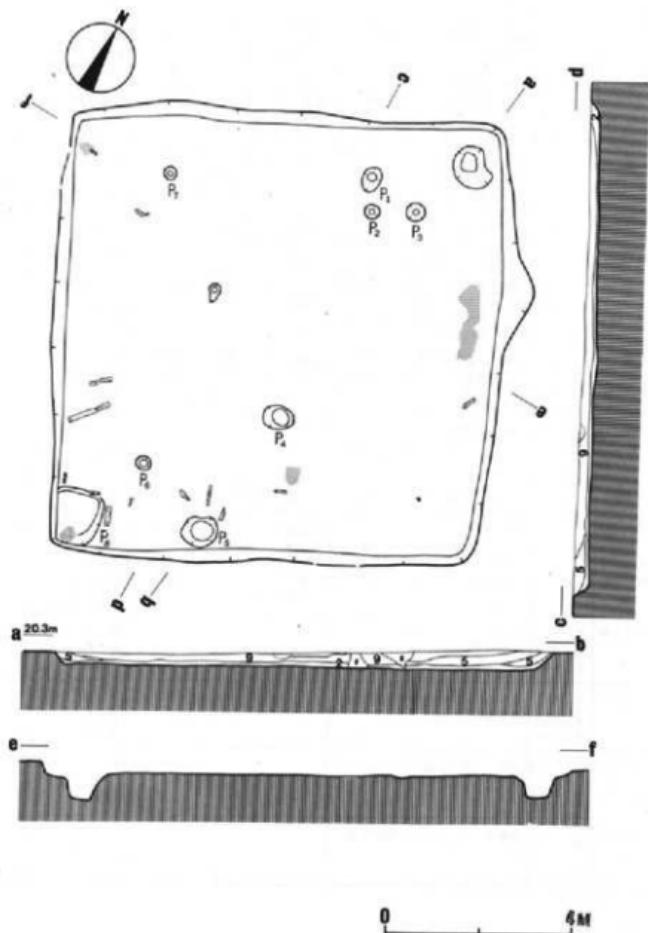
番号	草 紙	法量(cm)	卷 紗 の 特 徴	盤 形 技 法	施成・筋上・色調	備 考
66図 1	裏 下 部 次 口 線 部 筋	17.7 (18.0) 17.0 (3.4)	口縫部は頂部から大きく外反して開き、底部にやや下ぼくれをなし、下部を欠損している。	口縫部内外とも横なでて肩部および下部外側にに縫位の筋割りがみられる。筋角に筋位の差なので。	普通 砂紋・石英 外面 基褐色 内面 黒色	外面の一筋進行縫
2	裏 口 線 部 筋	12.0 7.1 4.1	口縫部で外反して聞く。	口縫部内外とも横なで。	良好 砂紋・石英 外面 基褐色 内面 黑色	
3	坏 筋	12.0 7.1 4.1	口縫部は体部から外反して開き、体部は半月状を呈し、底部はやや内側をなじでいる。	口縫部内外とも横なでがみられる。体部外側は筋割りがみられる。内側は筋なでがみられる。	普通 砂紋・石英 基褐色	一部に幾重筋
4	坏 完 形	12.6 7.5 2.8	口縫部は体部から大きく外反して開き、底部内面にかすかな筋を有している。体部は半月状を呈し底部は小さく半逆である。	口縫部内外は筋なで、体部外側は筋割りがみられる。体部内側はやや筋茎の割離がみられる。	良好 砂紋・石英 基褐色	
5	坏 完 形	11.8 6.6 4.2	口縫部は体部から外反して開き底部内側に縫位を有している。体部は半月状を呈し底部は半逆である。底部全体にひがみがある。	口縫部内外は筋なで縫位外側は筋割りがみられる。底部は筋なでがなされている。底部は筋割り。	良好 砂紋 外面 基褐色 内面 基褐色	
6	坏 ほほ完形	12.4 5.2 3.6	口縫部は底部から大きく開き、筋筋がひきにくげられる。底部内面には後をなし底部は半逆である。	口縫部内外とも横なでがなされ、体部外側に筋割りがなされ、内面は倒離がけいし。	普通 砂紋 基褐色	
7	坏 完 形	12.6 6.4 3.7	口縫部は体部から外反して開き底部内側にかすかな筋を有している。体部は直線的に底部へ転く。底部はやや内側をなす。	口縫部内外とも横なで。体部外側は筋割りがみられる。内面は筋毛目痕がみられる。	良好 砂紋 赤褐色	
8	坏 完 形	12.4 5.0 3.1	口縫部に底筋から聞いて立ちあがり。口縫部でさるに聞く。底部はやや内側をなす。	口縫部内外とも横なで。体部外側は筋割りがみられる。内面は筋毛目痕がみられる。	良好 砂紋 基褐色	
9	坏 完 形	13.1 6.0 4.6	口縫部は底筋からやや外反さみに聞いてたらあがり、底部は半逆である。	筋外側とともに。	良好 砂紋 基褐色	
10	坏 完 形	7.7 9.1 2.2	口縫部は頂部から直線的に開き、縫位は底筋を呈している。底筋はやや内側をなす。	口縫部内外は横なで、さらに外側には筋位の筋ながきがみられる。内面には筋位の筋なでがみられる。筋位は筋割りがみられる。	良好 砂紋・石英 基褐色	
11	坏 坏 筋	(10.9) 14.6	坏形のほほとんどを欠損し、両柱部は筋筋にむかって開き、筋筋で人さく開いている。	筋位部外側は筋位の筋なでで筋部も筋なでがみられる。内面は筋位の筋毛目などとがみられる。	良好 砂紋 外面 基褐色 内面 赤褐色	
98図 2	珠状土糸	2.2 織 量 11.0g	孔は0.3-0.4cmで底筋はやや内側をなっている。		良好 砂紋 明黄褐色	
3	珠状土糸	長 3.0 幅 3.2 重 36.2g	孔は0.3-0.5mmほどで表面には筋筋がみられる。		良好 砂紋 黄褐色	
98図 1	三製糸造品 (4.5g) 度 石	長 2.6 厚 0.5 孔 0.25 重 5.5g	頂部の一端を欠損している。			
2	石製糸造品 (4.5g) 度 石	長 2.2 厚 0.4 孔 0.18 重 3.6	表面には一方角への筋筋が跡跡にみられる。			

第15号住居跡（第67図）

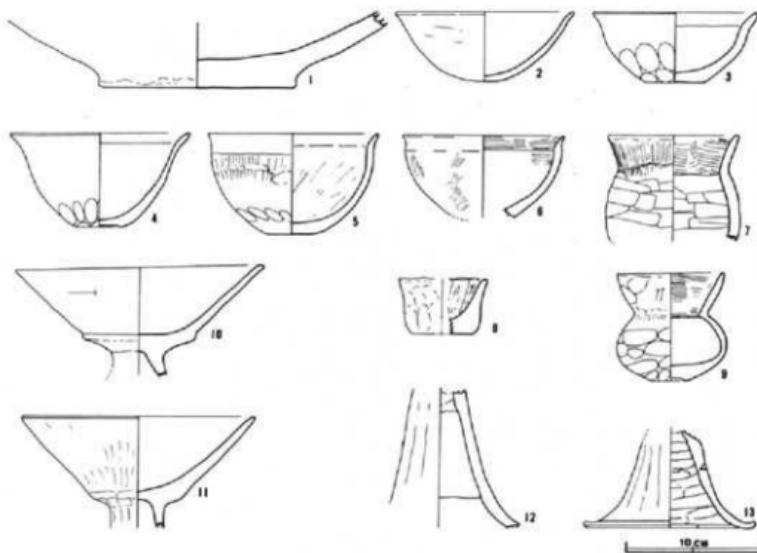
位置 B地区の南部（043区）に位置し、近接する古墳時代の住居跡は南西部に第13号住居跡、北西部に大型住居の第16号住居跡がみられる。

規模 N-24°W 長軸9.64m 短軸9.5m 平面形状 方形 面積 約82.4m<sup>2</sup>

各部の状況 壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがり、壁高は21~40cmで東壁が高く、西および北壁が



第67図 第15号住居跡実測図



第68図 第15号住居跡出土遺物

低い。また、北東壁が一部分張りだしている。床面はほぼ平坦であるがかなり擾乱がみられ、中央部付近が若干凹状をなす。

**炉** 北東壁ぎわに帯状の焼土が少量残存しているが、炉は検出されていない。また、炭化材が壁から中心部にかけて部分的にみられ、火災に遭遇したと考えられる。

**柱穴** 9ヶ所確認され、主柱穴は3~4個と考えられるが規格性がなく、直径20~30cmほどである。貯蔵穴は南西コーナーに接する長方形の掘り方が考えられるが、北東コーナ部にもやや小さいが同様な施設がみられる。

**覆土** 上層は少量のローム粒子・砂礫を含む暗褐色土で、下層は多量のローム粒を混入する黄色土、壁ぎわは黄褐色土のロームが流入している。

**遺物出土状況** 遺物は土師器の壺・高壺・小型壺等であり、北コーナー部付近に完形の壺（第68図2~5）、手捏土器（第68図8）がみられ、東北コーナーの床面に壺（第68図9）、南東壁ぎわに高壺の壺部（第68図11）が倒立した状況で出土している。床中央付近からはほとんど遺物がみられなかった。

#### 遺物（第68図）

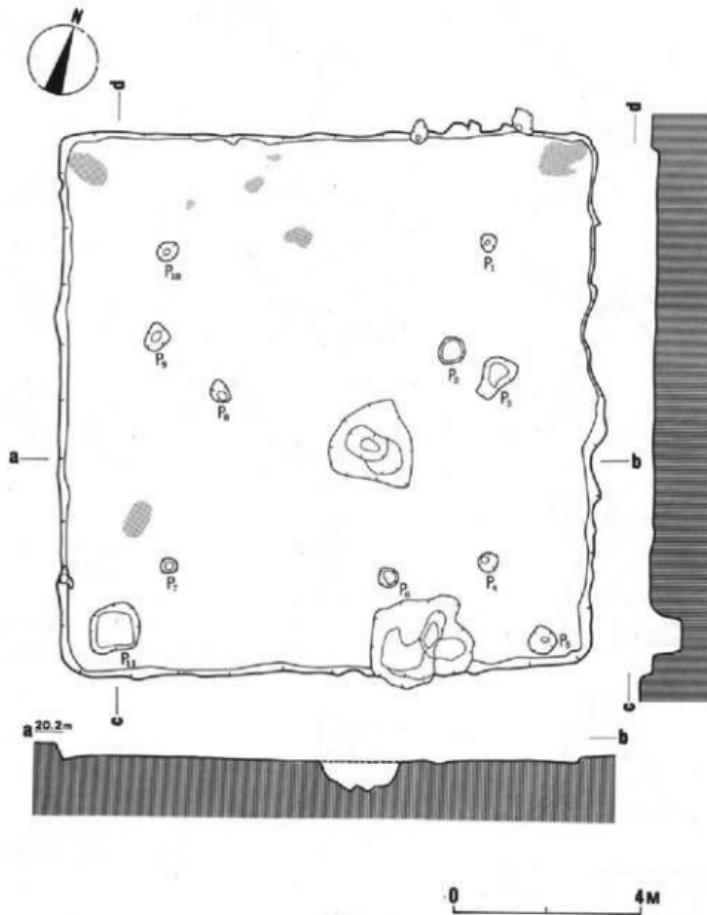
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
----	----	--------	-------	------	----------	----

5804 1	直 筒 形	( 5.5) 14.6	大型の底部で厚さは1.3~2.0cmほどである。	外面は剥離りがなされ、内面も同様に剥離りがみられる。	粗 糙 砂粒・砾 黄褐色	
2	以 定 形	13.3 5.1	底部は丸底で半円状に開き、口縁部はかづかに外反する。器厚は0.4~0.5cmほどである。	体部外向はなでがなされ、当面は剥落がはげしい。	良 好 砂粒・石英 黄褐色	
3	不 完 形	12.2 4.3	口縁部は体部から外反して開き、内面には接合をなす耳形に平底である。器厚は0.4~1.0cmほど。	口縁部内外面とも剥離りがなされ、体部下部は剥離りがみられ。体部内面は剥落がはげしい。	良 好 砂粒・石英 黄褐色	
4	不 完 形	13.2 6.0 3.3	口縁部は体部から外反して開き、内面には接合をなす耳形に平底である。器厚は0.3~0.7cmほど。	口縁部外向とも剥離りがなされ、内面は剥落がはげしい。底部は切削された跡である。	良 好 砂粒・石英 明黄色	
5	不 完 形	12.6 7.3 3.2	口縁部は直立立ちに外反して開き、内面には接合をなす耳形である。器部はやや深く底部は平底である。器厚は0.4~1.0cmほどである。	口縁部外向とも剥離りがなされ、内面は剥離りの後でなされ、底部には剥離れ跡の痕跡が二つに分かれ、内面は剥離の跡みがうなだれておいて。	良 好 砂粒 黄褐色	
6	不 底部欠 け	11.7 ( 6.0)	口縁部は直立立ちに外反して立ちあがり、内面には接合をなす。底部を欠いているが底部は半月状を呈している。器厚は0.3~0.9cmほど。	口縁部外向は横模様で、内面は切削の跡と重複形がみられる。底部は斜傾の跡と重複形がみられる。	良 好 砂粒 黄褐色	
7	小形 壺 底部欠 け	9.8 ( 7.7)	口縁部は直立立ちに外反して立ちあがり、内面には接合をなす。底部を欠いているが底部は半月状を呈している。器厚は0.6~0.9cmほどである。	口縁部外向は横模様で、内面には横模様の刷毛目がみられ、底部外側には横模様の剥離りがみられる。	良 好 砂粒 黄褐色	
8	手掘土器 (6) 等	6.5 4.0 4.6	口縁部は底部から直立立ちに立ちあがり、内面には接合をなす。底部は平底をなす。器厚は0.6~2.0cmほどである。	外側には剥離痕がみられ、内面は刷毛目を底部からかきだすような剥離痕が認められる。	良 好 砂粒・砾 黄褐色	
9	埋 充 形	7.9 7.9 2.5	口縁部は直立立ちに外反して立ちあがり、剥離りは横模様をなす。底部はやや深くある。器厚は0.4~1.0cmほどである。	口縁部外向は剥離り、内面は剥離りがみられる。剥離外向は剥離りがなされている。	良 好 砂粒 黄褐色	
10	高 环 状 等	18.4 ( 8.0)	器部は直角的に開いて上部に枝を有している。脚柱部の上部のみを残している。器厚は0.4~1.3cmほどである。	口縁部内側は剥離りがなされ、内部は剥離の跡と重複りがみられる。底部は脚柱部の剥離りがなされており、内面にいわいななでがみられるが剥離がはげしい。器厚は全体的に重複形が不良である。	良 好 砂粒 黄褐色	
11	高 环 状 等	17.3 ( 8.1)	器部は直角的に開いて上部に枝を欠き、脚柱部は二脚状を呈している。器厚は10.6~1.5cmほどである。	口縁部外向とも横模様がみられ、底部外向に刷毛目をなでがなされている。脚柱部は脚柱の剥離りがなされている。	良 好 砂粒・砾 黄褐色	
12	高 环 状 等	(10.2)	脚柱部で底部に心からつるやかに残っている。器厚は0.8~0.9cmほどである。	外側は脚柱の剥離りがみられ、内面にもやや長い剥離りがみられる。底部近くにまでなでがなされている。	良 好 砂粒 黄褐色	
13	高 环 状 等	( 7.3) 12.8	脚柱部から底部の腰部分で器部にむかってなだらかに凹形で器部は外反して開ける。脚柱部中間に器厚0.4cmほどの孔があらね。質造をしてない。器厚は0.4~0.9cmほどである。	脚柱部外向は板状の剥離りがみられ、内面は横模様の剥離りがなされている。底部内外ともむで整形がなされている。	良 好 砂粒 黄褐色	

### 第16号住居跡（第69図）

位置 B地区の南部（L41・L42・M41・M42区）に位置する大型住居跡で、近接する古墳時代の住居は南方に第12~15号住居跡がみられる。B地区ではこれ以北には占墳時代の住居は確認されていない。

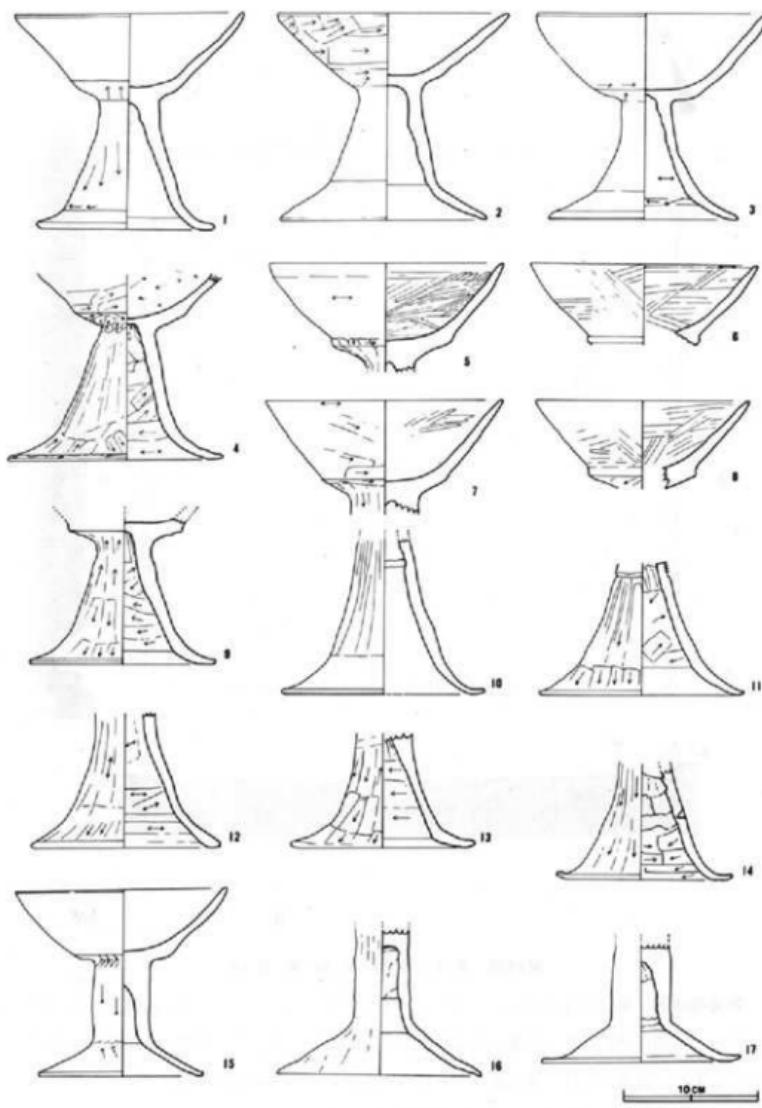
規模 N-18°-W 長軸11.50m 短軸11.40m 平面形状 方形 面積 131.1m<sup>2</sup>



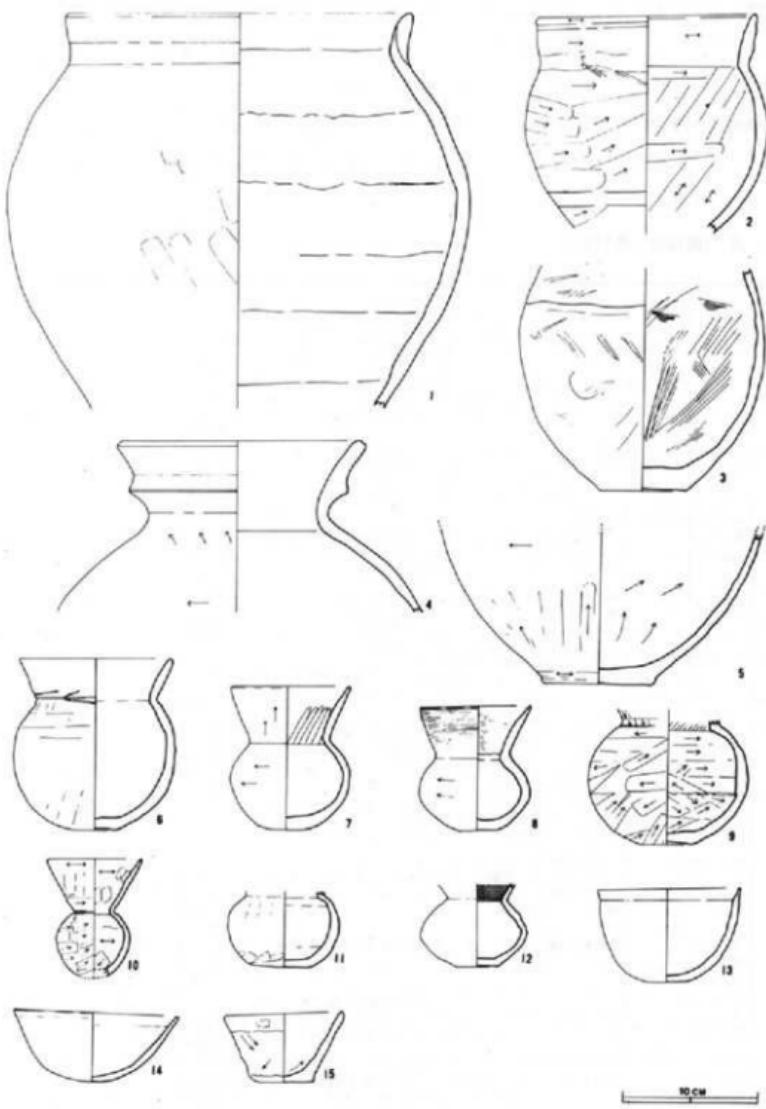
第69図 第16号住居跡実測図

**各部の状況** 壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は15~30cmほどで、西・南部が高く、北・東部が低い。床面は軟弱で多くの擾乱を受け凹凸がみられる。中央部と南壁やや西寄りに不整形の擾乱穴があり、後者からは「寛永通宝」1枚が検出され、近世開墾時の根掘り痕であろう。南西コーナーに一辺100cm、深さ60cmの方形の貯蔵穴がみられる。

**炉** 確認されなかったが、北西コーナーと北東コーナー間に6ヶ所、焼土・炭化材が確認され火災に遭遇したものと考えられる。



第70図 第16号住居跡出土遺物（1）



第71図 第16号住居跡出土遺物（2）

**柱穴** 11ヶ所確認され、主柱穴は6~7ヶ所と考えられる。直径は40~50cm内外で、深さは20~40cm内外である。その他床面に凹凸がみられるが、耕作時による後世の擾乱であろう。

**覆土** 上層は暗褐色上で、下層は褐色土の堆積がみられる。

**遺物出土状況** 北壁に接する床面に高壙等が出土し、南西コーナー付近からも多数の高壙（第70図）、壺（第71図14）等がみられ、西壁に近接して複合口縁の壺（第71図4）がみられる。

### 遺物（第70図・第71図）

番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特徴	整 形 方 法	焼成・施土・色調	備 考
1	高 壕	16.8 15.8 12.8	外部は大きく開き、脚柱部は脚部へ順次に開き、脚柱部は口縁部より少し厚い。全外縁に脚部はなく、	壺部は内外とも施削りがみられ、下部は施削りがなされている。脚柱部は脚部の施削りで壺部は施削りのながみられる。	普通 砂粒・石英 明黄褐色	
2	高 壕	16.9 15.2 15.1	壺部は直角的に開き、脚柱部は脚部にも少しあって少開き、底部まで大きく開いている。壺厚はやや厚い。	壺部は内側をみに開いて立ちあがり、脚柱部は脚部にむかって開いている。底部は厚い。器厚はやや厚い。(1cm内外である。	普通 砂粒・石英 黄褐色	
3	高 壕	17.0 15.1 14.0	壺部は内側をみに開いて立ちあがり、脚柱部は脚部にむかって開いている。底部は厚い。器厚はやや厚い。(1cm内外である。	壺部は内側をみに開いて立ちあがり、脚柱部は脚部にむかって開いている。底部は厚い。器厚はやや厚い。(1cm内外である。	普通 砂粒 明黄褐色	
4	高 壕	(18.7) 15.9	脚柱部は大きめ、脚柱部はやや内側をみに開いて立ちあがり、脚柱部は脚部へむかって開いている。壺厚は0.6~1.2cmほどである。	脚柱部は脚部の施削りがみられる。内側に施削りがなされている。脚柱部は脚部の施削りがみられる。	普通 砂粒 褐色	
5	高 壕	17.3 (8.0)	脚柱部は大きめで開いて立ちあがり、下部には段をもつ。やや新形に歪んでからんで、器厚は0.8~1.0cmほどである。	脚柱部は脚部の施削りがみられる。下部は施削りがなされている。内側は脚柱部の施削りがなされている。	好 砂粒 明褐色	二次焼成
6	高 壕	16.6 (6.0)	脚柱部は大きめで開いて立ちあがり、底部を少しきり、下部には段をもつ。器厚は0.5~0.7cmほどある。	脚柱部は脚部の施削りがみられる。下部は外縁ととも施削りがなされ、段部には施削りがみられる。	好 砂粒 (多) 赤褐色	
7	高 壕	17.4 8.4	脚柱部をつき、壺部は直角的に開いて立ちあがり、下部に接します。器厚は0.4~1.2cmほどである。器形のやや歪みがある。	脚柱部は脚部の施削りがみられる。内側は施削りがなされている。脚柱部は脚部の施削りがなされている。下部から脚柱部にかけては脚柱部の施削りがなされている。	普通 砂粒 明褐色	二次焼成
8	高 壕	15.9 (5.7)	壺部はほぼ直角的に開いて立ちあがり、下部に段をもつし、脚柱部をつき、下部に接します。器厚は0.5~1.0cmほどである。	脚柱部は脚部の施削りがなされ、段部には、施削りがみられる。	普通 砂粒 (多) 褐色	二次焼成
9	高 壕	(10.8) 13.7	表面をほりきり、脚柱部以下である。脚柱部は脚部にむかって開き、全体的にやや厚壁は厚い。	脚柱部外縁は脚部の施削りがみられる。脚柱部には施削りがなされている。内側には施削りがみられる。	普通 砂粒 (多) 明褐色	
10	高 壕	(11.2) 15.0	脚柱部で脚部にむかって開き、脚柱部から開いている。器厚は0.4~1.2cmほどである。	脚柱部外縁は脚部の施削りがみられる。内側は施削りがなされる。壺部はながみられる。	好 砂粒 明褐色	
11	高 壕	(3.7) 15.1	脚柱部をつき、脚柱部は脚部にむかって開いている。壺厚は0.7cm内外である。	外縁は脚柱部の施削りがみられる。内側は施削りがなされている。脚柱部は外縁を削り、内側は壺部はながみられる。	好 砂粒 (多) 褐色・無斑あり	
12	高 壕	(3.9) 13.3	壺部をつき、脚柱部は脚部にむかって開いている。器厚は0.6~0.8cm。	外縁は脚柱部の施削りがみられる。内側は脚柱部の施削りがなされている。	普通 砂粒 褐色	
13	高 壕	(8.3) 12.4	壺部をつき、脚柱部は脚部にむかって開いている。器厚は0.7~1.2cm。	外縁は脚柱部の施削り、内側脚柱部の施削りがみられる。壺部は壺部はながみされている。	普通 砂粒 (多) 褐色	

14	高 脚 柱 部 欠 乏	(8.7) 12.0	環部を欠き、脚柱部は脚部にむかって開き、脚部は大きくなり反する。脚厚は0.4~0.9cmほどで、脚柱部中央の1/2が孔が穿たれ、内側には輪脚板が留合である。	外側は脚柱の裏用り、内側は脚柱の裏用りがみられる。脚部は脚なしでつながなされている。	良 好 砂 粒 物質褐色	
15	高 耳 付 ばね定形	15.5 13.6 12.2	環部はわざかに直立しながら開いて立ちあがり、下部は段をなし、脚柱部は円筒状をなし、脚部は大きく開いている。厚さは0.6~1.2cmほどである。	脚部は外側ともなでがみられ、脚柱部は脚位の輪脚板がなされ、脚部内外側はなでがみられる。	普 通 砂 粒 物質褐色	
16	高 脚 柱 部 少	(11.8) 15.0	环部を欠き、脚柱部は三脚状を呈し、脚部で大きく開く。脚厚は0.5~0.8cm。	脚柱部外側は脚位の輪脚の範囲で、内側は脚柱との接合なし、裏用りがみられる。脚部は内外とも厚なでがみられる。	普 通 砂 粒 物質褐色	
17	高 脚 柱 部 多	(8.5) 14.7	環部を欠き、脚柱部は円筒状をなし、脚部は大きく開いている。脚柱部はやや厚さが厚く、内側には輪脚板がみられる。	脚柱部は脚位の範囲なでがみられ、脚部にも厚なでがみされている。	普 通 砂 粒 物質褐色	
7250	1 裏 脚 部 欠 乏	25.6 (29.0)	円筒部は脚部から直立ぎみに立ちあがり、脚部最大径は中位にあり、底部は傾いている。脚厚は0.7~1.0cmほどでやや厚い。内側には輪脚板が留合である。	脚部は内外とも厚なでがみられ、脚部内外は輪脚位は、脚部されたとみられる。	良 好 砂 粒 物質褐色	内面に多量の堆積層
2	裏 脚 部 欠	16.0 (16.0)	脚部は脚部から直立ぎみに立ちあがり、脚部はそれほど握り出したものではない。脚厚は0.8~1.0cmほどである。	脚部内外面は横脚のなでがみられ、脚部外側に横方向の裏用りがみられる。内側には脚位の輪脚りがみられる。	普 通 砂 粒 (多) 褐色	
3	裏 脚 部 欠 乏	(15.2) 6.3	脚部以下を欠き、脚部はそれほど握出したものではない。脚部は平底で直立ぎみがなされている。脚厚(0.5~1.2cm)ほどで底部は厚く、脚部は0.8cmほどである。	脚部外面は脚位の輪脚りがみられ、下部はなでがみされている。内面も、外側と同様な堅物質がみられる。	普 通 砂 粒 物質褐色	
4	脚 部 以下欠	17.5 (12.5)	脚部は底部から直立ぎみに立ちあがりして直線的で、脚部は中位以下を欠き、直線をなすものであろう。脚厚は0.9cm位で、脚部は0.8cmほどである。	脚部外面は脚部外側は脚位のなでがみられ、内側は同様のなでがみられる。脚部外側は握りがさがみられる。	普 通 砂 粒·石 英 物質褐色	
5	脚 部 少	(11.3) 7.8	脚部中位以下を欠き、やや球状を呈したのであり、底部は半球である。脚厚は0.6~1.0cmほどである。	脚部外蓋は下部に施削りがみられ、その上部には、輪脚のなでがみられる。内面は脚位の輪脚りがみられる。底部は輪脚りがなされていない。	普 通 砂 粒·石 英 物質褐色	
6	小 形 脚 部 少	11.0 12.5 3.2	脚部は直角から直線的に傾いて立ちあがり、脚部は球状をなし、底部はやや平底をなす。脚厚は0.6~1.0cmほどである。	脚部内外とも横脚のなでがみられ、脚部外側の上部は施削り、下部は輪脚りになでがみられる。内側は施削りがみられる。	良 好 砂 粒 物質褐色	
7	脚 部 以下欠形	8.5 11.5 2.4	脚部は直角から直線的に傾いて立ちあがり、脚部は球状をなし、底部は直角である。厚さは0.4~0.7cm。	脚部内外に脚位の箇所なしで、脚部外側は脚位の施削りがみられ、内側は施削りがなされている。	普 通 砂 粒·雲 母 物質褐色	二次成形
8	脚 部 欠 乏	7.9 9.1 2.9	脚部は直角から直線的に傾いて立ちあがり、脚部は球状をなし、底部はやや平底をなす。厚さは0.4~0.6cmほどである。	脚部内外とも横脚のなでがみられ、脚部は施削りとなでがみられる。	普 通 砂 粒·石 英 物質褐色	
9	小 形 脚 部 欠 乏	(9.8) 3.7	脚部を欠き、脚部は球状を呈し、内側中位に輪脚板がみられる。底部はやや平底をなす。脚厚は0.5~0.8cmほどである。	脚部内外は脚位の輪脚板がみられ、脚部は脚位の施削り、内側も脚位に輪脚り、なでがみられる。底部は施削りがみられる。	良 好 砂 粒 (多) 褐色	
10	脚 部 欠 乏	6.8 (8.6)	脚部は直角から直線的に傾いて立ちあがり。脚部は小さく直角を欠いている。脚部は直角と書く様に円形で厚さは薄い。	脚部内外とも横脚り、なでがみられ、脚部外側は脚位の輪脚りがみられる。	良 好 砂 粒 物質褐色	

11	埋 口縁部欠	(5.7) 4.8	口縁部を欠き、斜部は直線状を呈し、下部をなしてない。全体的にくびれ凸みかられ、斜部は不良、基厚は0.4~0.6cm。	外面は鋭削り、僅なでがみられ、底部は僅なでがみられ、底部は凹凸かられ、斜部は不良、基厚は0.4~0.6cm。	普通 砂 質 色	四脚隼形
12	埋 口縁部欠	(6.1) 3.15	斜部は直線状を呈し、底部はややあげ底を呈す。基厚10.3~0.5cmである。	外面は鋭削りと僅なでがみられ、外周及び内縁内側とも彫がされている。	良好 砂 質 暗赤褐色	月影(外曲)
13	环 劣	10.6 6.8 3.2	口縁部は底部から内側して立ちあがり、小さく外傾している。内面には縞をなし、底部は小さな凹みである。基厚は0.2~0.6cm。	口縁部内外は、僅なでがみられ、体部外側は鋭削り、内面はなでがみられる。	普通 砂 質 明褐色	
14	丸 充 丸 底	12.1 5.1 丸 底	口縁部は丸底から大きく開いて立ちあがり、基厚は0.4cm内外である。	口縁部内外は、僅なでがみられ、体部外側は僅なでがみられ、内面はなでがみられる。	普通 砂 質 明赤褐色	
15	环 劣	8.6 9.0 4.4	口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、基厚は0.5cm内外である。	口縁部内外は、僅なでがみられ、体部内外側は、鋭削りがみられる。	普通 砂 質 褐色	

### 第17号住居跡（第72図）

**位置** A地区の南部（127区）に独立して位置し、古墳時代の住居跡は北方22mに第18号住居跡がみられる。

**規模** N-44.5°-W 長軸6.7m 短軸6.4m 平面形状 方形 面積 約41.4m<sup>2</sup>

**各部の状況** 壁は垂直ぎみに立ちあがり、壁高は15~17cmをはかり南壁がやや高くなる。床はほぼ平坦であるが若干北方向に傾斜を示している。中央から西よりに多く炭化材が検出されている。南西コーナー部に接して、深さ45cmの貯蔵穴がみられるが一部擾乱を受けている。

**炉** 確認されなかったが、北壁および東・南壁に焼土が検出されており、火災に遭遇したものと考えられる。

**柱穴** 4ヶ所確認されているが、直径は20~35cm内外でP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は小さく、P<sub>3</sub>は長方形であり、P<sub>4</sub>以外はあまりしっかりしたものではない。

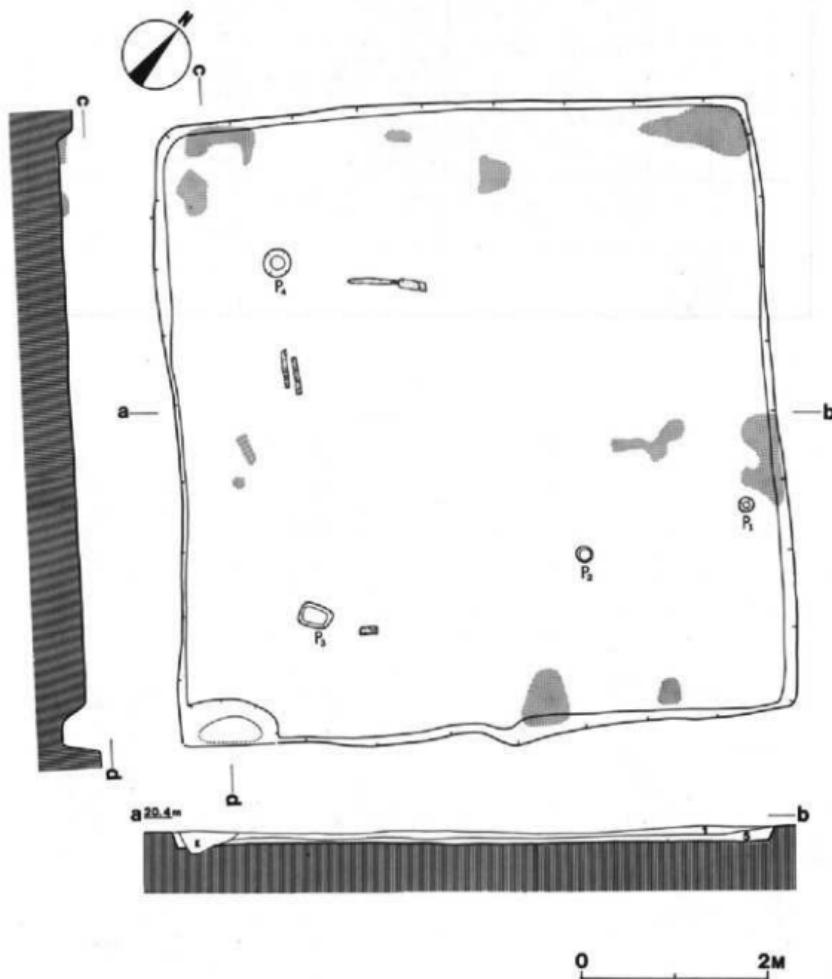
**覆土** 上層は少量のロームブロックを含む褐色土で、下層は多量のローム粒を含む黄褐色土が堆積し、自然流入の状態を示している。

**遺物出土状況** 南西コーナー付近から多数の球状土錐が床面よりやや浮いた状態で一括して出土し、さらに、北壁および東壁付近からも数点出土している（第74図）。また、中央やや南西よりの床面に剝形石製模造品が1点（第98図3）、北東壁ぎわの床面からも双孔円板が1点（第98図4）出土している。

### 遺物（第73図）

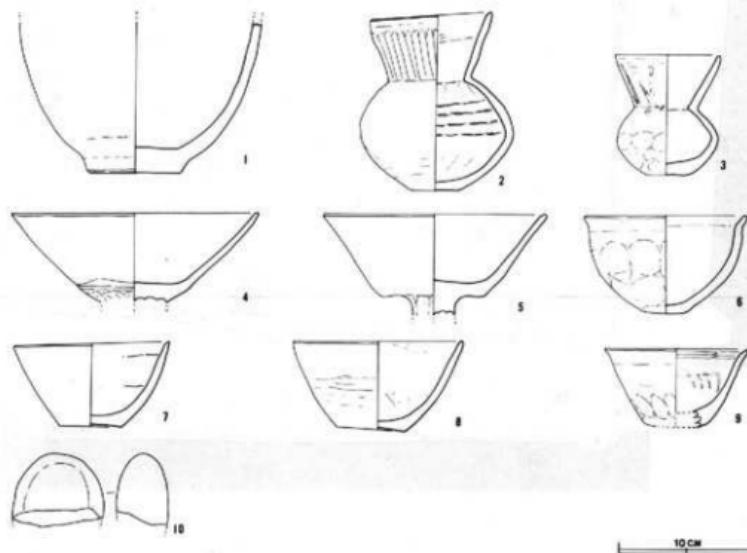
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	裏形特徴	焼成・胎土・色調	備考
73回 1	甕下部 残	(11.1) 6.7	底部上以上欠き、底部はやや円筒状で底へとゆるやかにねじまる。基厚は0.7~1.8cmほどである。	構造は、なでがみられ内面は剥落が見られる。	良好 砂 質 暗 褐色	

2	堆 はげ定形	8.9 13.1 3.6	口縁部は頭部から直線的に開いて立ちあがり、頭部はほぼ球状を呈し平底をなす。器厚は0.5~0.8cmほどである。	口沿部内外は擴なでがなきれ。外 面は頭部まで縱位の窪みがきがな されている。頭部外側も不鮮明な 窪みがなで認められ、内面には輪様 模様が4段ほど認められる。	食 好 砂 粒 外面 淡黄褐色 内面 黑 色	
3	堆 完 形	7.8 8.9 2.8	口縁部は頭部から直線的に開いて立ちあがり、頭部はほぼ球状を呈し平底をなす。器厚は0.5~0.8cmほどである。	口沿部内外は擴なでが見られ。外 面には頭部まで縱位の網毛目柄が 認められる。網上面にも少すかに認め られる。網下面は無柄りが認めら れる。	食 好 砂 粒 外面 黄褐色	

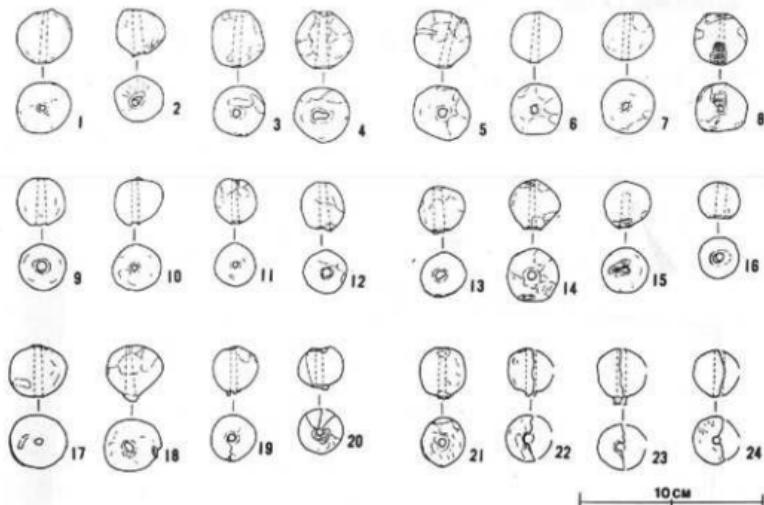


第72図 第17号住居跡実測図

4	高 环 脚 部 欠	18.2 ( 6.6)	环部は直線的に大きく開き、下位に棱をなし。脚柱部以下を欠いている。	环部外面は横なでがみられ。内面は箆なでがみされている。	良 好 砂 粒 赤黄褐色	蝶 付 着
5	高 环 脚 部 欠	16.6 ( 7.6)	环部は直線的に大きく開いて立ちあがるが角ばった感じである。脚柱部以下を欠き、器厚は0.5~1.0cmほどである。	环部内外ともなで笠形がなされ脚柱部上半には箆削りが認められる。	普 通 砂 粒・櫻 淡黃褐色	蝶 付 着
6	环 完 形	12.0 7.2 3.4	口縁部は体部から外反して開き、体部は底部へ尖はある。底部はやや丸味を帯びた平底である。器厚は0.4~0.7cmほどである。	口縁部内外は横なでがみられ。体部外面は箆削りがみられ。内部にも箆なでがみられる。	良 好 砂 粒・櫻 外面 茶褐色 内面 赤褐色	
7	环 残	11.5 6.3 4.7	口縁部は底部より直線的に開いて立ちあがる。底部はややあげ直状を呈し、器厚は0.3~0.9cmほどである。	口縁部内外は箆なでがみされていいる。体部内外は不鮮明であるが箆なでが見られ。内面調査は密である。	良 好 砂 粒 明基褐色	
8	环 完 形	12.6 6.9 5.0	口縁部は底部より直線的に開いて立ちあがり、底部はややあげ直状を呈し、器厚は0.4~0.8cmほどである。	口縁部内外は横なでがみられる。体部内外とも箆なでがみられる。内面の調整は密である。	良 好 砂 粒 茶褐色・一部黒斑あり	
9	环 残	10.7 5.7 3.4	口縁部はやや小さく外反して開く。体部は底部から直線的に開き底部を欠いている。器厚は0.3~1.1cmほどである。	口縁部内外は横なでがみられ。体部外面は箆削りがなされている。	良 好 砂 粒 黄褐色	
10	磨 安 山 石	長 (5.2) 寬 6.7 厚 3.8 重 (59g)				



第73図 第17号住居跡出土遺物



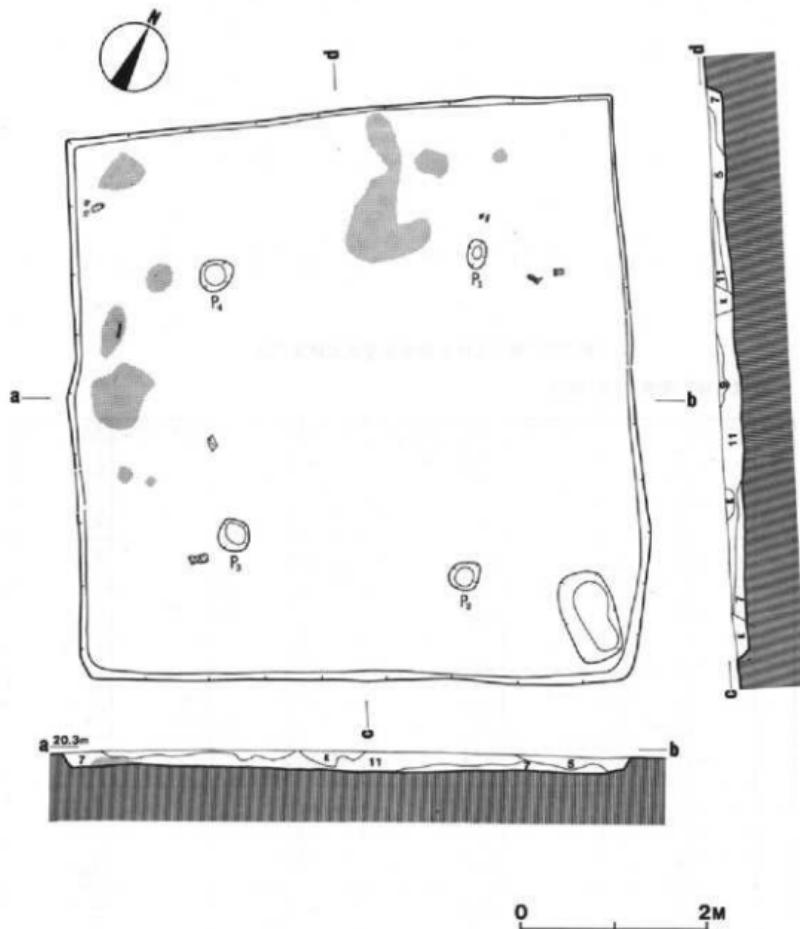
第74図 第17号住居跡出土球状土錐実測図

球状土錐計測表（第74図）

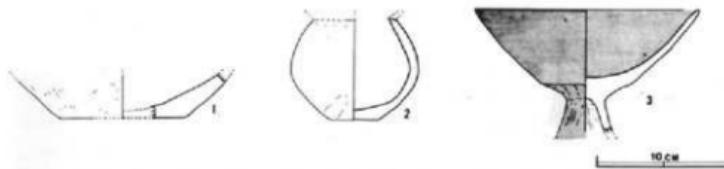
番号	器種	法 量(cm)	器形の特徴	地成・胎土・色調	番号	器種	法 量(cm)	器形の特徴	地成・胎土・色調
1	球状土錐	長 幅 厚 孔径 径 孔径 0.4		青 透 灰 褐色	13	球状土錐	長 幅 厚 孔径 0.4~0.6		青 透 灰 褐色
2	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.4~0.6		青 透 灰 褐色	14	球状土錐	長 幅 厚 孔径 0.2~0.4		青 透 灰 褐色
3	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.4		青 透 灰 褐色	15	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.4~0.5		青 透 灰 褐色
4	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.4~0.8	頂部孔は双円状 孔は一方に上って いる。	青 透 灰 褐色	16	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.5	頂部磨滅	青 透 灰 褐色
5	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.2~0.4		黒褐色 灰褐色	17	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.4~0.5		青 透 灰 褐色
6	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.2~0.4	やや磨滅してい る。	青 透 灰 褐色	18	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.3~0.5	頂部に毛穴があ りあり。 細網状	青 透 灰 褐色
7	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.3~0.4		青 透 灰 褐色	19	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.3~0.4		青 透 灰 褐色
8	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.2~0.3	やや磨滅してい る。	青 透 灰 褐色	20	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.3~0.4		青 透 灰 褐色
9	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.2~0.5		青 透 灰 褐色	21	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.3		青 透 灰 褐色
10	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.3~0.4		青 透 灰 褐色	22	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.5		青 透 灰 褐色
11	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.2~0.4		青 透 灰 褐色	23	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.4		青 透 灰 褐色
12	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.3~0.6		青 透 灰 褐色	24	球状土錐	長 幅 厚 孔 径 孔 径 0.4		青 透 灰 褐色

第18号住居跡（第75図）

位置 A地区のほぼ中央部（K15区）に位置し、近接する古墳時代の住居跡は北東約8mに長方形状の第19号住居跡がみられる。



第75図 第18号住居跡実測図



第76図 第18号住居跡出土遺物

規模 N-31°-W 長軸6.10m 短軸6.0m 平面形状 方形 面積 約34.8m<sup>2</sup>

各部の状況 壁は垂直ぎみに立ちあがり、壁高は11~16cmで西壁が他に比して低くなり、北東コーナー一部が張りだしている。床面は軟弱で凹凸が多くみられ、北東壁の中央部と南西壁の一部が搅乱を受けている。南東コーナーに96×56cm、深さ45cm内外の長方形形状の貯蔵穴がみられる。

炉 確認されていないが、北西コーナー付近に多量の焼土および炭化材が検出され、火災に遭遇したものと考えられる。

柱穴 主柱穴はほぼ対角線上に4ヶ所確認され、直径は30cm内外の楕円形で、深さは28~34cmほどである。

覆土 上層は砂粒を含む黒色土であるが、部分的に搅乱がみられる。下層は黄褐色土でロームブロック・焼土を含んでいる。

遺物出土状況 覆土中から土師器の小片がわずかに出土している。（第76図）

### 遺 物（第76図）

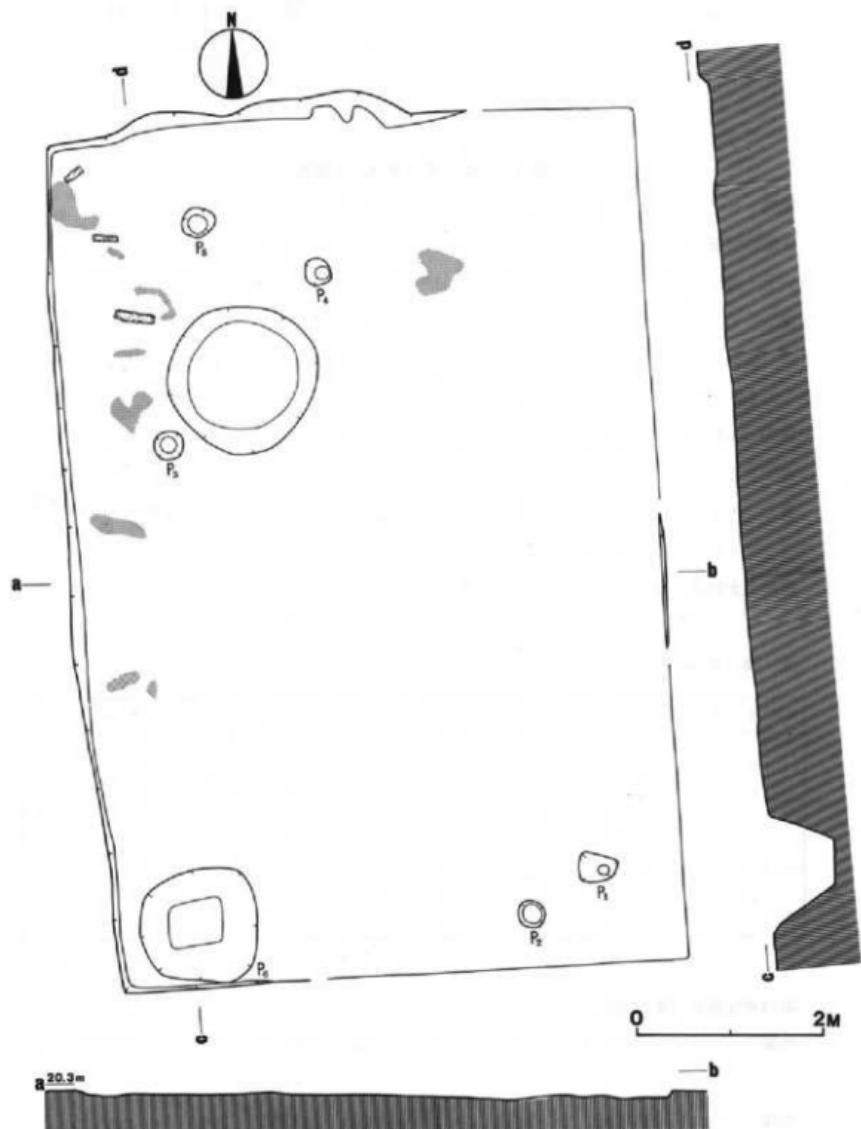
番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	質 形 技 法	焼成・胎土・色調	備 考
7608 1	甕 底 部 片	(3.3) 9.0	底部片であり大きく開いている。	外面はなでがみられる。	粗 猥 砂 粒 暗茶褐色	
2	壺 口縁部欠 片	(7.6) 3.4	口縁部を欠き、胴部は球状をなし、胴部最大径は中位にある。平底で器厚(2.0.5~1.0cm)ほどである。	胴部外面はなでがみられ、下部は剥落がなされ、内面は剥落がけいしい。	普 通 砂 粒 明褐色	
3	高 环 脚 部 欠 片	16.6 (9.1)	环部は底部より内脇ぎみに大きく開き下部に接をする。脚柱部はほとんどが欠損している。器厚は0.4~1.1cm。	体部はなでが内外にみられ、接以下は粗面の剥削りがみられる。	良 好 砂 粒 赤褐色	丹 彩

### 第19号住居跡（第77図）

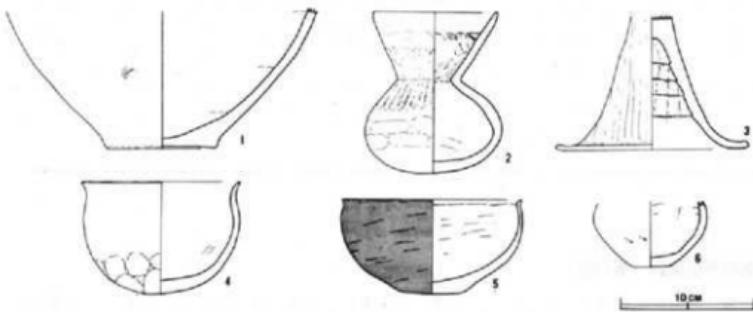
位置 A地区の中央やや東(N13区)に位置し、古墳時代の住居跡は南西21mに第18号住居跡がみられる。

規模 N- -W 長軸9.3m 短軸6.4m 平面形状 長方形 面積 約56.8m<sup>2</sup>

各部の状況 壁高は6~10cm内外と浅く、東方に向かうにしたがいほとんど確認できなくなる。



第77図 第19号住居跡実測図



第78図 第19号住居跡出土遺物

床面は凹凸が多くみられ、西壁中央付近がややくぼみ、全体的にかなり擾乱を受けている。南西コーナー部に長径117cm・短径75cmほどの方形状の貯蔵穴がみられる。その覆土上面に多量の焼土、炭化材が検出されている。また、同穴の南壁外辺部から灰色粘土ブロックが確認されている。床の北西付近に位置する直径160cm内外の円形の土壙は覆土からみて後世の所産と考えられる。

**炉** 確認されないが、北西コーナー付近から南にかけて、多量の焼土および炭化材が検出され火災に遭遇したものと考えられる。

**柱穴** 南側に2ヶ所、北西コーナーに3ヶ所みられるが主柱穴は不明である。直径は30cm内外で深さは11~22cmほどである。南西コーナー付近は擾乱により不明である。

**覆土** 5~10cmほどの暗褐色土がわずかに残存する。

**遺物出土状況** 遺物は少量の土師器片で、貯蔵穴から埴（第78図2）・塊（第78図4・5）が出土している。

### 遺物（第78図）

番号	目 標	法量(cm)	器 形 の 特 徴	型 形 仕 法	焼成・粘土・色調	備 考
1	埴 底 片	(10.0) 8.0	胴部以下の片面で底部はややあげ底状をなし胴部はやや内側して立ちあがる。 器厚は0.5~0.7cmほどである。	胴部外面には部分的に刷毛目板がみとめられ、内面はなでて整形がなされている。	良 好 砂 粒 黄褐色	内面部爆発着
2	埴	9.1 11.8 3.9	口縁部は瓶底から直線状に開いて立ちあがり、胴部はやや扁平な球状を呈し丸底を呈している。 器厚は0.4~0.8cmほどである。	口縁部には擦痕でかみわれ。下部外面には擦痕でかみわれ。内面には刷毛目板がみとめられる。第1型形と同様に口縁部の横でかみされたものである。 胴部上面には擦痕の擦削りがみられる。	良 好 砂 粒 赤褐色・一部黒斑あり。	
3	高 脚 部	(9.8) 14.4	脚部以下で胴部へ開がり、胴部はさらには大きくなっている。脚部内面には4段の輪積痕が認められ。器厚は0.4~1.1cmほどである。	脚部外面は擦痕の擦削りがなされ、脚部は内外面ともなでがみられる。	良 好 砂 粒 表面 赤褐色 内面 赤褐色	
4	塊	11.8 8.2	脚部は体部が外反して開き、体部は丸底から内側して立ちあがっている。器厚は0.3~1.0cmほどである。	口縁部および体部上面は擦痕でかみわれ。下部は擦削りがなされている。	良 好 砂 粒 淡黄褐色	

5	环 (焼) 泥 形	13.3 6.9 4.7	口縁部は本体から小さく外反し、 本体は不安定な底面から内側にて 立ちあがっている。 器厚は2.2~1.0cmほどである。	本体は内外面とも横なでがみられ、 内面は剥落がすんでいる。	青 通 砂 壤 外面 赤褐色 内面 黑褐色	外周 丹羽 一部焼付着
6	堆 灰 壕 形	( 4.7 ) 2.6	底部下部で扁平の球状を呈し、 平底をなす。 器厚は0.4~0.5cmほどである。	腹部内外面とも斜傾のなでがみられ、 内面は剥落がすんでいる。	青 通 砂 壤 石 灰 赤褐色	

### 第20号住居跡（第79図）

位置 A地Xの中央やや西より（II 9区）に位置し、古墳時代の住居跡は北東56mに第21号住居跡がみられる。

規模 長軸(5.7)m 短軸(5.1)m 平面形状 方形(?) 面積 推定29m<sup>2</sup>

各部の状況 かなり擾乱を受けていることと、西側はエリア外となり未調査のためプランを明確にすることはできず、駆の追求も困難であった。床はほぼ平坦であるが軟弱である。北東コーナーに不定形状の掘り込みがみられ、規模は1.5×2.1m、深さは20~30cm内外で、東壁よりに多量の焼土が検出され、焼上には灰色粘土が部分的に確認される。窓の機能を有している可能性がみられる。柱穴および壁溝は確認されていない。

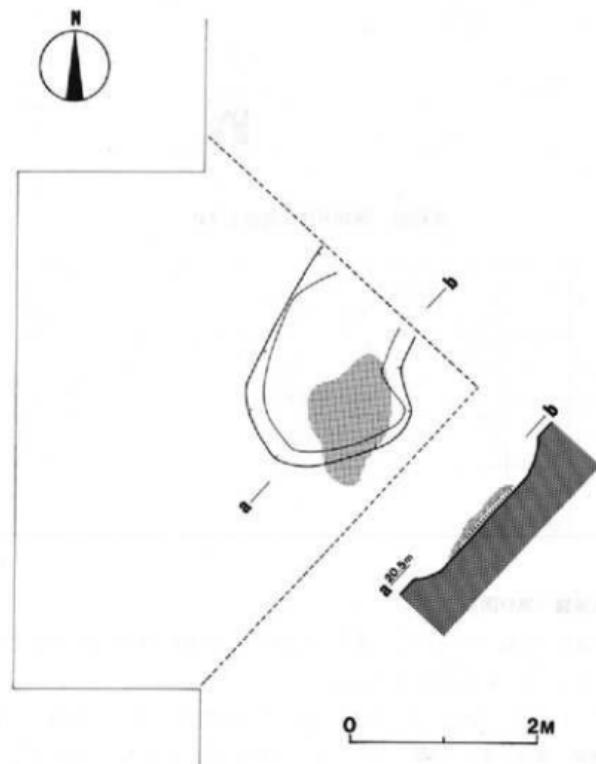
覆土 暗褐色土が浅く堆積しているが、ほとんど擾乱を受けている。

遺物出土状況 遺物は少量の土師器片と砥石（第80図12）がみられる。

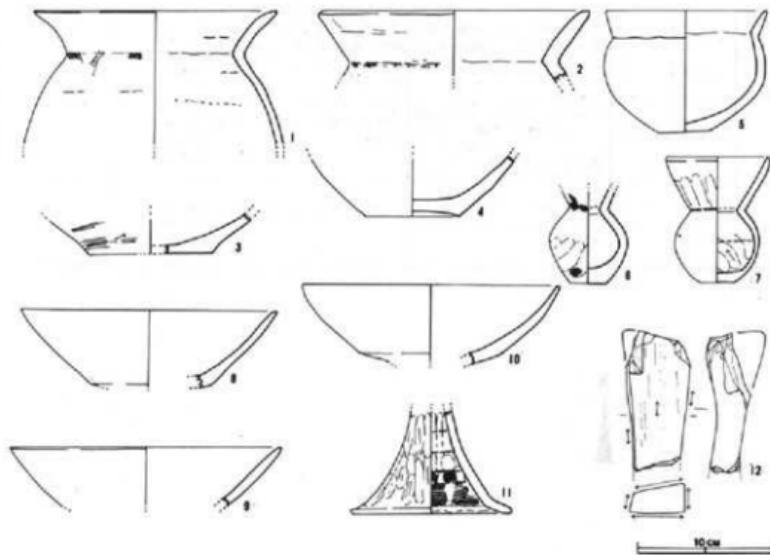
### 遺 物（第80・99図）

番号	鉢 盆	法量(cm)	器 形 の 特 徴	整 形 特 徴	施成・粘土・色調	備 考
80-1	甕 盆	28.1 ( 9.8 )	口縁部は底部から「く」の字状に開き、腹部以下を欠いている。器厚は0.7~0.9cmほどである。	口縁部内外は横なでがなされ、腹部外側には削毛目痕がみとめられる。 腹部内面には底面剥落が進んでいる。	青 通 砂 壤 外面 赤褐色 内面 黑褐色	口縁部焼付着
2	甕 口縁部欠 失	20.1 ( 8.3 )	口縁部は底部から「く」の字状に開き、腹部以下を欠いている。器厚は0.7~1.1cmほどである。	口縁部内外とも横なでがなされ、腹部外側には削毛目痕が認められる。	良 好 砂 壤 外面 赤褐色 内面 黑褐色	内面焼付着
3	甕 底 盆	( 2.9 ) 9.0	底部片で、底厚は0.6cm内外である。	脚下部外側に横傾のなでがみられ、内面には底が付着している。	青 通 砂 壤 外面 赤褐色 内面 黑褐色	内面焼付着
4	甕 底 盆	( 4.2 ) 7.0	底部丸で、あげ底状を呈し、器厚は0.6~0.8cmほどである。	腹部内外とも横なでがなされている。	青 通 砂 壤 底 灰褐色	
5	甕 %	12.0 9.0 3.6	口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、腹部はやや上位に最大膨らみを有している。平底をなし、器厚は0.5~0.6cm。	口縁部内外は横なでがみられ、脚部下半は横なでがみられ、内面は剥落がしき。	良 好 砂 壤・石 灰 赤褐色	口縁部ややがみあり。
6	甕 口縁部欠 失	( 6.8 ) 2.8	口縁部は欠いているか、底部から直線的にひいて立ちあがるものでなく、腹部は下部に膨らみを有する。底面は平底である。	口縁部内外には横傾の剥毛山がみらる。内面は横なでがなされている。脚下部には施削りがなされている。	青 通 砂 壤 底 灰褐色	

7	堆 はは定形	7.5 9.2 2.4	口縁部は頸部からやや内側ぎみに開いて立ちあがり。頸部は珠状を呈し、平底をなしている。器厚は0.3~0.6cmほどである。	口縁部内外ともなで、下部外面は頸部の薬剤がみられる。頸部内外面ともなでがみられ、内面はより顯著である。	良 好 砂 粒 黄褐色	
8	高 环 部 瓦	19.0 ( 5.7 )	环底部以下を欠損し、环部は底部からやや内側ぎみに開いて立ちあがっている。环下部は棱をなし、器厚は0.4~1.0cmほどである。	内外面とも横なでがみられ。内面は剥落がすすんでいる。	普 通 砂 粒 黄褐色	
9	高 环 部 瓦	20.0 ( 4.3 )	环部の口縁部で直線的に開いている。器厚(20.4~0.7cm)ほどである。	内外面とも横なでがなされている。	普 通 砂 粒 黄褐色	



第79図 第20号住居跡実測図



第80図 第20号住居跡出土遺物

	高 環 部 36	19.0 (5.8)	环底部以下を欠損し、环部は底部からやや内側して開いて立ちあがっている。环下部には縁をなし、器厚は0.3~1.0cmほどである。	内外面とも楕円形でみられ、内面は剥落している。	普通 砂・石・瓦 外面 黄褐色 内面 黄褐色	外面堆积着
11	高 舞 部	(7.5) 11.9	舞柱部以下で、裾部へ開いている。器厚は0.5~0.7cmほどである。	外面は裾部の範囲でみられ、内面には輪積目がみられる。裾部には縁なしで、内面には網目状が認められる。	良好 砂 板 黄褐色	
12	砾 石 凝 灰 岩	鉢(1.2) 瓶(1.8) 壺(2.7) 計(77.5)g	破損品であり、中央部が細くくびれています。各面には擦痕が認められる。			
9928 4	埴 土 舗	長 1.4 幅 2.6 厚 1.4g 計(93.3-0.1)				

### 第21号住居跡（第81図）

**位置** A地区の北端（L5区）に位置し、古墳時代の住居跡は南西56mに第20号住居跡がみられるが、これより北からは確認されていない。

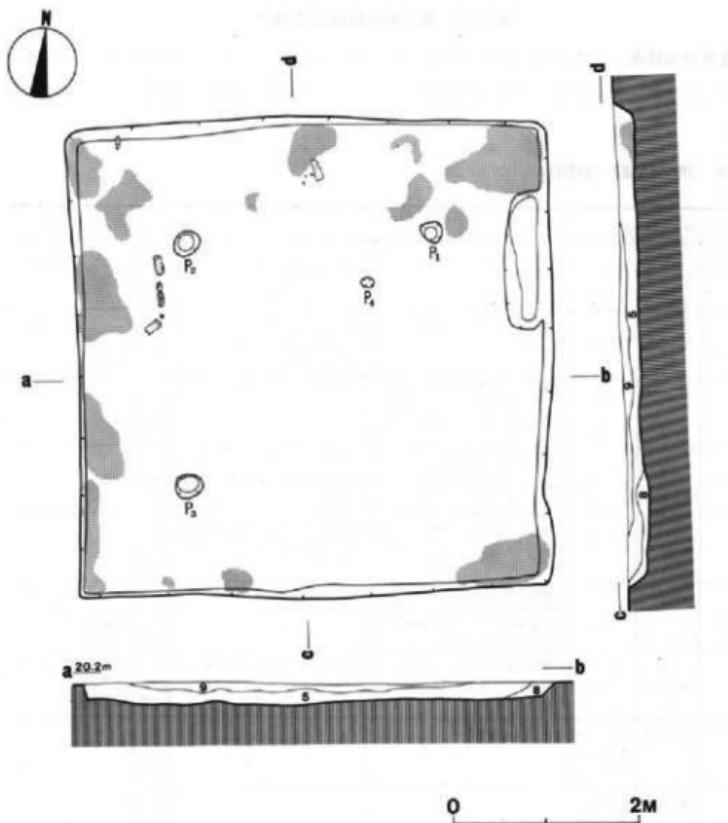
**規模** N-75°-W 長軸 5.1m 短軸 5.0m 平面形状 方形 面積 約24m<sup>2</sup>

**各部の状況** 壁はいずれも垂直に立ちあがり、壁高は15~22cmほどで東壁が低く、南・北がやや高くなる。床は若干凹凸がみられるがほぼ平坦で、南東コーナー部分が一部擾乱を受けている。また、北東コーナーの東壁に接して溝が帯状に140cmほど南北に走る性格は不明である。

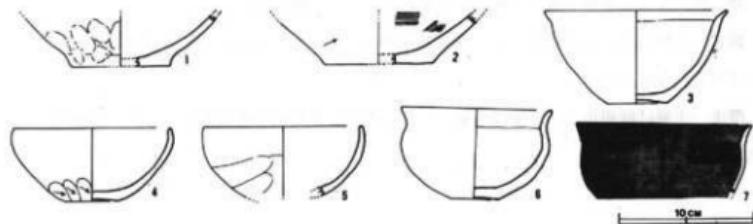
**炉** 壁にそって多量の焼土が検出されているが、炉は確認されていない。

**柱穴** 主柱穴は3ヶ所確認され、直径20~30cm、深さ10~28cmほどであるが南東コーナー一部には認められなかった。

**覆土** 上層は暗褐色で、下層は多量のロームを含む黄褐色・褐色土がみられ、自然流入の堆積状況を示している。



第81図 第21号住居跡実測図



第82図 第21号住居跡出土遺物

**遺物出土状況** 遺物は覆土および床面より少量の土師器が出土し、北東コーナーと南東コーナー一部からは壺（第82図4）・壺（第82図3・5～7）・球状土錘等（第99図5～8）が出土している。

#### 遺物（第82・99図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整 形 技 法	焼成・胎土・色調	備 考
82図 1	壺 底部 片	(3.7) 7.2	底部片で、器厚は0.4～0.9cmほどである。	脚下部外面は、荒削りがなされ、内面に塵が付着している。	普通 砂粒 灰褐色	煤付着
2	壺 底部 片	(3.6) 8.0	底部片で平底をなし、器厚は0.8cm内外である。	脚部外面上には、斜位の墨なで、内面には刷毛目痕がみられる。また内面には塵付着。	普通 砂粒 外面褐色 内面黒褐色	煤付着
3	壺 完 形	13.6 6.8 4.2	口縁部は、体部から外反して開き、わずかに縦を有している。底部はあげ底状をなし、器厚は0.3～0.6cmほどである。	口縁部、内面とも横なでがなされている。	良好 砂粒(少) 茶褐色	
4	壺 口縁光形	11.8 5.4 3.8	口縁部は底部から内側して立ちあがり、さらに口縁部で直立立ちに内側する。底部はあげ底状をなし、器厚は0.4～0.6cmほどである。	口縁部内外面は横なでがなされ、体部下端は荒削りがなされ、内面は剥落している。	普通 砂粒・石英 黄褐色	
5	壺 底部欠 片	11.8 (5.1)	口縁部は、体部から内側して立ちあがり、底部を欠いている。器厚は0.4～0.6cmほどである。	口縁部内外面および体部内面は横なで、体部外下面下部には、荒削りがなされている。	良好 砂粒 赤褐色	
6	壺 完 形	11.2 6.7 3.4	口縁部は底部から外反して開き、体部は扁平な球状を呈し、底部はあげ底状をなしている。器厚は0.5～0.6cmほどである。	器面は内外とも横なでがなされている。	良好 砂粒 外面黄褐色 内面暗褐色	
7	壺 底部欠 片	13.0 (5.0)	口縁部は複合状をなして外反して立ちあがり、器厚は0.4cm内外である。	外面はなで、内面は体部に横位の刷毛痕がみられる。	良好 砂粒(少) 赤褐色(丹影)	内外丹影
99図 5	球状土錘	長 2.6 幅 2.5 重 17g 孔径 0.4 ～0.5	指なで底が顯著		良好 砂粒 灰褐色	
6	球状土錘	長 2.8 幅 2.6 重 20g 孔径 0.4 ～0.5			良好 砂粒 灰褐色	
7	球状土錘	長 2.4 幅 2.5 重 13.5g 孔径 0.6 ～0.8	指なで底が顯著。		良好 砂粒 灰褐色	

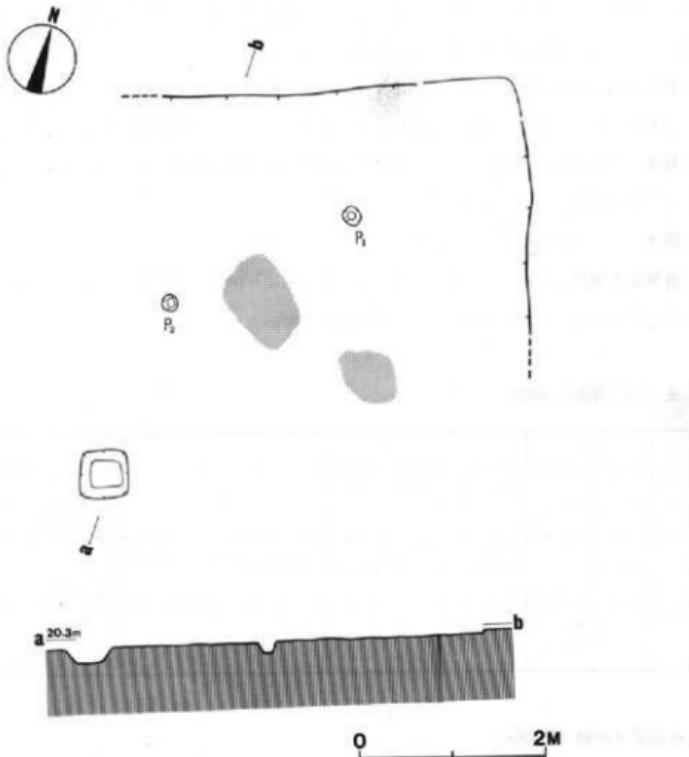
8	球状土器	長 3.6 幅 3.7 高 16.5 重 180.5 厚 0.6	底底あり			真好 砂粒 灰褐色	
---	------	--	------	--	--	-----------------	--

### 第22号住居跡（第83図）

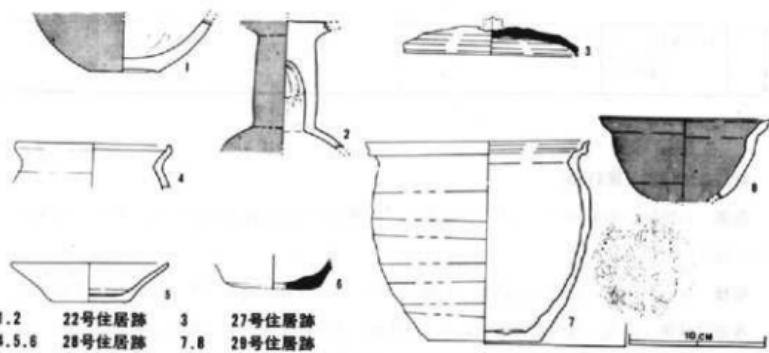
位置 D地区の南東端（E 3区）に位置し、古墳時代の住居跡は西北2mに大型の第23号住居跡が隣接している。

規模 N-21°W 長軸(5.14)m 短軸(5.13)m 平面形状 方形 面積 推定25.2m<sup>2</sup>

各部の状況 南北に耕作用の畝が走り、住居跡の遺存度は悪く、北東および北西壁の一部がわ



第83図 第22号住居跡実測図



第84図 第22・27・28・29号住居跡出土遺物

すかに確認できるのみで、南東・南西はほとんど確認できない。床面の状況も悪く、わずかに南西コーナーに一辺50cm内外の方形状の貯蔵穴がみられる。

**炉** 床面の中央部およびその東側に少量の焼土が確認されているが、炉として使用されていたとは考えられず、周囲に少量の炭化材がみられたことから火災に遭遇したものと考えられる。

**柱穴** 中央付近の西側に2ヶ所の小穴がみられ、直径20cm内外で深さ13~35cmを測る。その他にピットは検出されていない。

**覆土** わずかに暗褐色土がみられる。

**遺物出土状況** 遺物はわずかで、覆土および床面より少量の土師器が出土し、貯蔵穴付近より高环（第84図2）と球状土錐の小片（第99図9）が出土した。

### 遺物（第84・99図）

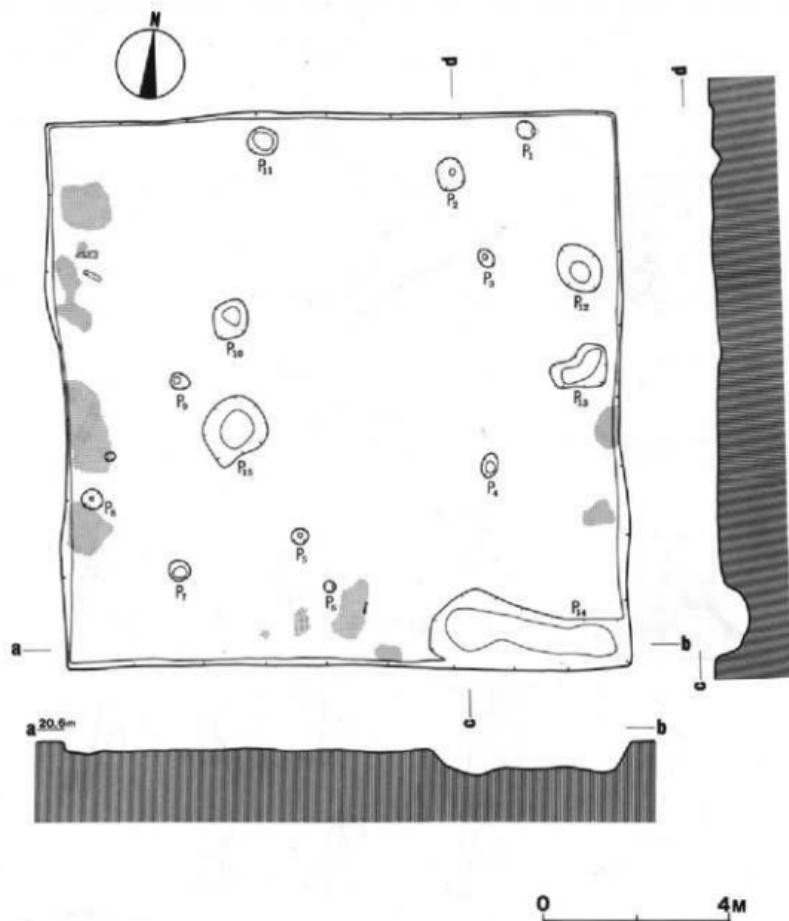
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形様法	焼成・粘土・色調	備考
84図 1	壺 底部	(4.0) 3.2	底部片であげ底状をなし。厚さは0.7~1.0mmほどである。		普通 砂粒・石英 外面 赤褐色 内面 淡褐色	丹彩
2	高环 舞柱部	(9.3)	舞柱部のみでやや円筒状を呈し、環部で大きく聞くものと考えられる。	外面は確認の限られて、内面は瓦による塑形痕が認められる。	普通 砂粒 外面 赤褐色 内面 淡褐色	丹彩
99図 9	球状土錐	長 2.2 幅 0.6 重 10.5g 孔径 0.3 ~0.4			粗粒 砂粒 茶褐色	

### 第23号住居跡（第85図）

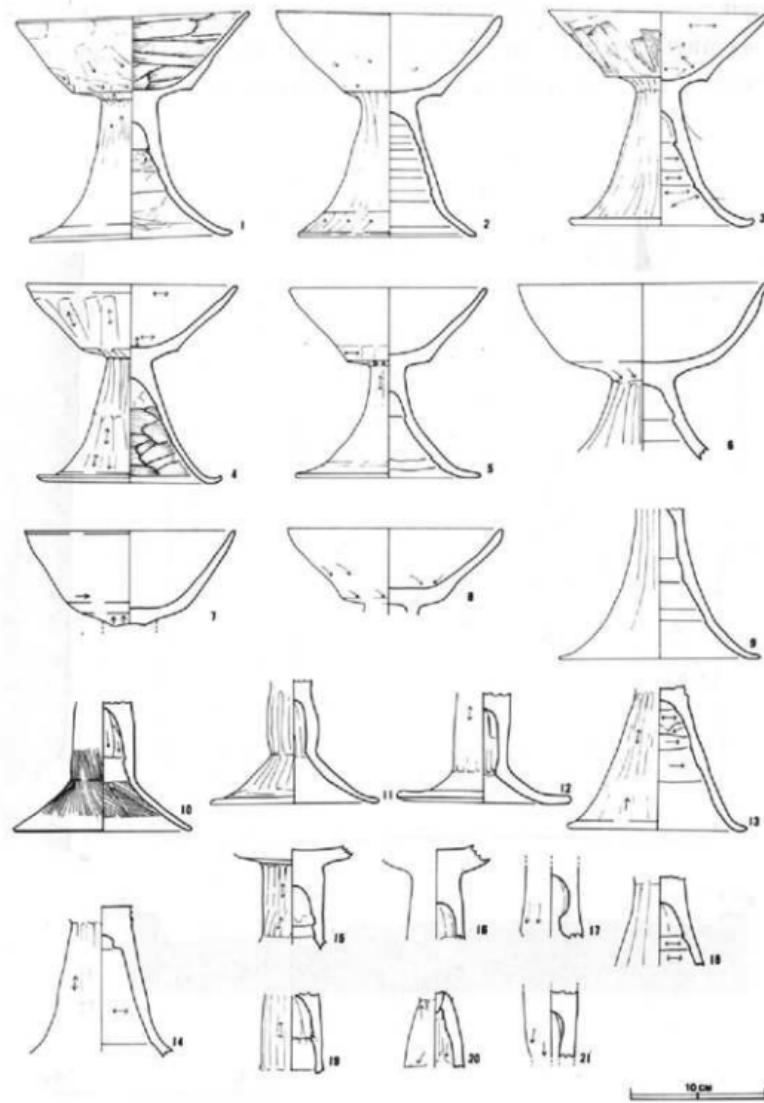
**位置** D地区の中央部（C1区）に位置し、近接する古墳時代の住居は南東2mに第22号住居跡がみられる。

規模 N - 9° - W 長軸11.82m 短軸11.48m 平面形状 方形 面積 約135.2m<sup>2</sup>

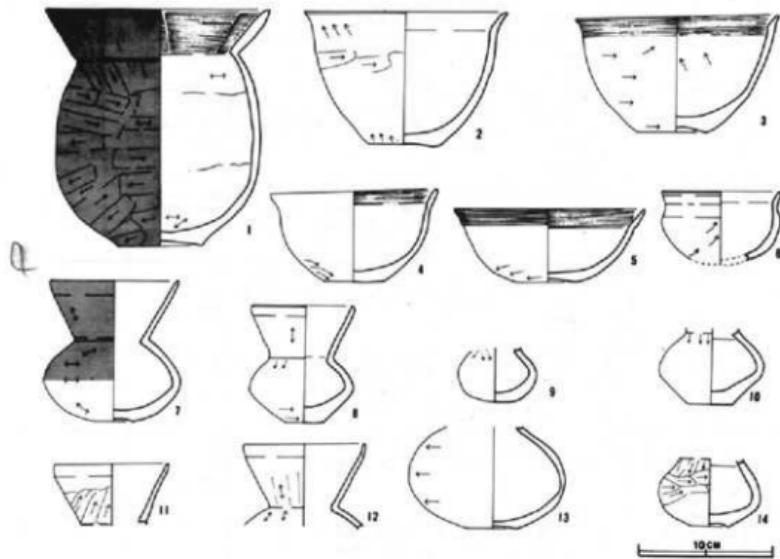
各部の状況 方形の大型住居跡であるが、耕作による歓が北西より南東にかけて走り、全体的に擾乱をうけている。壁は垂直ぎみに立ちあがり、壁高は10~20cmほどで、西・南部が高く北部



第85図 第23号住居跡実測図



第86図 第23号住居跡出土遺物（1）



第87図 第23号住居跡出土遺物（2）

が低い。床面はかなり擾乱されているが、南東コーナー部に2ヶ所の貯藏穴が接してみられ、多数の高环・埴・环・壺等が出土している。また、南壁部には長径4.3m、短径1.2m、深さ0.6~0.7mほどの不定形状の土壙が複合している。

**炉** 西壁および南東部に焼土が検出されているが炉は確認されていない。

**柱穴** 大小あわせて15ヶ所確認され、柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>16</sub>と考えられる。いずれも直径は20~50cm内外で深さも30~60cmほどである。P<sub>1</sub>~P<sub>16</sub>はその規模も大きく、土層その他から後世の所産と考えられる。

**覆土** 暗褐色・黒色土がみられるがかなり耕作による擾乱を受けている。

**遺物出土状況** 床面より出土した遺物は少量で、北壁よりのP<sub>11</sub>付近に、完形の甕（第87図1）、鉢等（第87図2・3）が3点出土し、南東コーナーの貯藏穴から多くの高环（第86図）が出土している。

### 遺物（第86・87・98・99図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
86図 1	高环	18.9	环部は直線的に開き、下部に縫を有し、脚柱部から振部に大きく開いている。内面には輪様痕がみられる。沿岸は20.5~1.0cmほどである。	环部外側は口縫部無にて、下部に脚柱ありがみられる。内面には刷毛目痕なる輪印ありがみられる。振部外側はその輪印などがみられる。内面は刷毛目痕無にてがみられる。	普通 砂粒 褐色	
	完形	16.2 14.9				

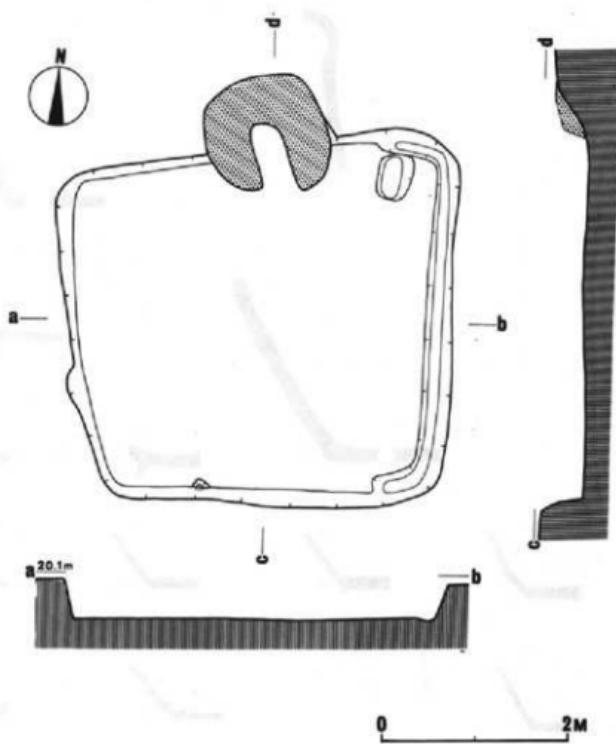
2	高 环 完 形	15.3 15.3 16	环部はやや内側で開き、下部に後をなし。翼柱部は腹部へ開かり内正面には輪脚痕がみられる。鰓厚は0.5~0.8cmほどである。	环部内外面とも、葉剛りがみられ、脚柱部外側は、腹位の脚剛り。筋部は横なので、内側にはなでがみられる。	普通 砂 色 褐色	
3	高 环 完 形	16.2 15.6 12.8	环部は直線的に開き、下部に後をなし。脚柱部は腹部へ開かり、さらに大きくなり反する。脚柱部内面には、輪脚痕がみられ、鰓厚は、0.6~0.8cmほどである。	环部外側は挺位の脚毛と、内側もなでがみられ、脚柱部外側には脚剛りがみられ、内側は脚毛がみられる。	良好 砂 色 青褐色	
4	高 环 完 形	13.3 14.45 13.5	环部はやや内側的に大きく開き、下部には後をなし。脚柱部は腹部で大きく外反している。鰓厚は0.3~0.9cm。	环部外側は腹位の脚毛と、内側もなでがみられ、脚柱部外側は腹位の脚剛り、筋部は脚毛と、内側は横位の脚毛がみられる。	良好 砂 色 (良好) 褐色	
5	高 环 另	16.2 13.9 13.60	环部は直線的に開いて立ちあがり、下部に後をなし。脚柱部から筋部に大きくなっている。脚柱部は内面には、輪脚痕がみられる。鰓厚は0.5~0.8cmほどである。	环部内外ともなでがみられ、筋部は尾剛りがなされ、脚柱部外側は腹位の筋剛りがなされている。	普通 砂 色 深褐色	
6	高 环 脚柱欠	18.4 (12.8)	环部は内側で環丸に立ちあがり、脚柱部は筋部にひかって大きく開いている。内面には輪脚痕がみられる。鰓厚は0.6~0.9cmほどである。	环部内外ともなでがみられ、脚柱部外側は腹位の脚剛りがみられ、内面はなでがみされている。	普通 砂 色 暗褐色	
7	高 环 缺	16.5 (7.1)	脚柱部を欠き、环部はやや内寄さぬに開き、鰓厚は0.5~0.8cmほどである。	口脚部外側は横なので、下は尾剛りがあられ、内面にはなでがみられる。	普通 砂 色 浅黄色	
8	高 环 脚柱缺	15.9 (5.2)	环部はやや内寄さぬに開き、下部に後を有し、脚柱部以下を欠いている。鰓厚は0.6~1.1cmほどである。	环部外側脚部は横なのでがみられ、下は腹位の脚剛りがなされている。内面はなでがみられる。	普通 砂 色 褐色	
9	高 环 翼柱部	(11.0) 15	环部を欠き、筋部にむかって大きく開き、内面には輪脚痕がみられる。	脚柱部外側は腹位の脚剛りがなされ、内面はなでがみられる。	普通 砂 色 褐色	
10	高 环 脚柱部 另	(8.5) 13	脚柱部は筋欠けなし、筋部は直線的に大きく開いている。鰓厚は0.8~1.0cmである。	脚柱部及び筋部には脚毛がみられ、下端に筋なので、筋部内面にも脚毛がみられる。	普通 砂 色 褐色	
11	高 环 脚柱部 另	(8.8) 12.3	脚柱部は中央部で大きくなり、筋部は外反して大きく開き、鰓厚は0.3~0.8cmである。	外側は腹位の筋なので、内面はなでがなされている。	普通 細砂粒 浅褐色	
12	高 环 脚柱部	(8.0) 12.9	脚柱部は、筋部で輪脚痕が大きく外反している。鰓厚は0.5~0.8cmである。	外側腹位の筋なので内面は横なのでがなされている。	良好 砂 色 (多) 褐色	
13	高 环 脚柱部 另	(10.5) 13.4	环部を欠き、脚柱部から筋部へやや外反して開いている。内面には輪脚痕がみられ、鰓厚は0.4~0.7cmほどである。	外側は挺位の尾剛りがなされ、内面はなでがみされている。	普通 細砂粒 青褐色	
14	高 环 脚柱部	(11.0)	环部及び筋部を欠き、脚柱部は筋部にむかって開き、鰓厚は0.5~0.8cmほどである。	外側は腹位の尾剛りがみられ、内面はなでがなされている。	普通 砂 色 (多) 褐色	

15	高 脚 柱 部	(7.7)	环部から脚部は筒状にのり、脚部を欠いている。内面には輪肋状があらわる。脚厚は0.5~1.0cmほどである。	外表面は環位の荒削り。 内面は脚位の荒削り。	普通 砂粒 板(多) 褐色	
16	低 脚 柱 部	(7.0)	环部及び脚部を欠き、脚柱部は円筒状を呈している。环部の厚度はやや厚く、脚柱部はそれほどでない。	内外面にもなでがみられる。	普通 砂粒 (多) 明褐色	
17	高 脚 柱 部	(5.2)	脚柱部分で円柱状をなし、厚度はやや厚い。	外表面は環位の荒削りがあらわる。内面は脚位の荒削り。	普通 砂粒 明褐色	
18	低 脚 柱 部	(6.5)	环部及び脚部を欠き、内面に輪肋状があらわし、厚さは0.5~0.6cmほどである。	外表面は環位の荒削り、内面ながらみられる。	良好 砂粒 (多) 褐色	
19	高 脚 柱 部	(6.0)	脚柱部分で円柱状をなし、内面に輪肋状があらわる。	外表面は環位の荒削りがあらわる。内面は指むでがみられる。	良好 砂粒 黄色	
20	高 脚 柱 部	(6.8)	脚柱部で脚部にむかってやや傾かる。厚さは脚柱部へはめこんでつくられている。脚厚は0.8cm内外。	外表面は環位の厚なでがみられる。内面は指むでがみられる。	普通 砂粒 板(多) 明褐色	
21	高 脚 柱 部	(5.3)	脚柱部分で円筒状をなし、厚度はやや厚い。	外表面は環位地割りがあらわる。内面はしばり感があらわる。	普通 砂粒 板(多) 褐色	
27① 1 完 形	壁	16.3 17.3 6.2	口縫部は底部から大きく開き、側面はいくつ状をなしている。底部はあげ底。脚厚は0.6~0.8cm。	口縫部外側など、脚部外表面は荒削り、内面はなでがみられる。	良好 砂粒・石英 赤褐色	外骨髄 二次癒合
2 ほぼ完形	壇	14.8 9.7 5.4	底部からやや開きをみるが、側面はあげ底。脚部でやくびげたはね型は外反する。脚厚は0.6~0.8cm。	口縫部内外とも横なで、体部外表面は荒削り。	普通 砂粒・石英・灰岩 暗褐色	
3 完 形	壇	15 8.4 4.7	あげ底の底部から口縫部へやや変じて立ちあがり、口縫部やや外反する。脚厚0.4~0.8cm。	口縫部内外とも横なで、体部は内外とも荒削りがあらわる。	普通 砂粒・石英・雲母 赤褐色	
4 完 形	壇	12.2 6.6 4.2	底部から開いて立ちあがり、口縫部は外反している。脚厚は0.4~0.6cmほどである。	口縫部内外とも横なで、体部は荒削りがあらわる。	普通 砂粒 暗褐色	
5 ほぼ完形	壇	14 5.3 3.9	あげ底の底部から開いて口縫部に立ちあがる。口縫部にはかすかな段差有し。脚厚は0.3cm内外である。	口縫部内外とも横なでがみられ、体部外表面は荒削り、内面は洗みがきがなされている。	普通 砂粒・石英 褐色	
6 未 熟次 第	壇	8.9 (5.0)	口縫部は頂部から直角的に立ちあがり、側面はやや輪状を呈する。底部は丸底状をなすものであろう。脚厚は0.3~0.6cm。	口縫部内外とも横なでがみられ、体部外表面は荒削りがあらわる。	普通 砂粒 褐色	
7 ほぼ完形 %	壇	9.3 10.25 2.0	口縫部は底部から直角的に立ちあがり、側面はやや輪状を呈する。底部は丸底状を呈する。脚厚は0.3~0.8cmほどである。	口縫部は横なでがみられ、下部は輪状の輪肋状があらわる。脚部は輪状の輪肋状があらわる。底部は荒削りがあらわる。側面には外側に開いている。	良好 砂粒(細沙) 赤褐色	丹形
8 完 形 %	壇	7.4 8.6 2.8	口縫部は頂部から直角的に立ちあがり、側面は輪状を呈する。底部は丸底状を呈する。	口縫部は横なでがみられ、側面は荒削りがあらわる。底部は荒削りがなされている。	普通 砂粒 褐色	
9	井 口縫部欠 け	(3.9) 2.9	脚部は底状をなし、底部は丸底状を呈し、脚厚は0.4~0.7cm。	脚部外表面は荒削りがあらわる。内面はなでがみられる。	普通 砂粒・長石 黑色	
10	相 口縫部欠 け	(5.5) 3.3	脚部は扁平な形状をなし、底部は半球である。脚厚は0.4~0.6cmほどである。	脚部外表面は荒削りがあらわる。内面はなでがみられる。	普通 砂粒・灰岩・雲母 暗褐色	

11	井 11 枝部	8.2 (4.4)	口縁部のみで底部から直線的に開いて立ちあがり、高厚比0.3~0.5cm。	口縁部内外とも横なれ、外部下部は下から上への傾斜。	良 好 砂(多) 褐色	
12	L 枝 部	8.8 (6.0)	口縁部は、底部から開いて立ちあがり、側部はやや緩やかな傾斜をなしている。底筋はあげてある。高厚比0.3~0.8cmほどである。	口縁部内外とも横なれ、下部外側は部位の厚なれ、内面は丁字となる。	良 好 砂(多) 明赤褐色	
13	J 11枝部欠	7.5. 3.7	側部はやや扁平な傾斜をなし、底部はあげて少し、厚厚は0.3~0.5cmである。	側部外側は荒削りがみられる。	普通 砂粒・石突・芯付 褐色	
14	J 11枝部欠	15.0. 2.8	側部は緩やかな傾斜をなし、底部はあげてある。高厚比0.4~0.8cmである。	底部外側は荒削りがみられ、内面はなでがなされている。	普通 砂粒・石突・芯付 褐色	
96.24	球状土器	長 2.7 幅 2.3 重 12.5g 孔 0.3		墻筋は不良であり、中筋の浮注筋がみられる。	普通 砂粒 明赤褐色	
10	球状土器	長 1.9 幅 2.45 重 10.5g 孔 0.5		全体的に横なでがみられる。	普通 砂粒 明赤褐色	
11	球状土器	長 2.1 幅 2.9 重 10.4g 孔 0.5		全体的に横なでがみられる。	普通 砂粒 明赤褐色	
12	球状土器	長 2.5 幅 2.5 重 13.5g 孔 0.6		全体的に横なでがみられる。	普通 砂粒 褐色	
13	球状土器	長 3.3 幅 3.1 重 28g 孔 0.5		全体的に横なでがみられる。	普通 砂粒 褐色	
14	球状土器	長 2.9 幅 3.15 重 22.5g 孔 0.5		全体的に横なでがみられる。	普通 砂粒 褐色	
15	球状土器	長 2.7 幅 3.2 重 22g 孔 0.6		全体的に横なでがみられる。	普通 砂粒 褐色	
16	球状土器	長 3.15 幅 3.5 重 (21.2)g 孔 0.4		全体的に横なでがみられる。	普通 砂粒 褐色	
17	球状土器	長 3.1 幅 3.1 重 26g 孔 0.6		全体的に横なでがみられる。	普通 砂粒 褐色	
18	球状土器	長 3.1 幅 3.1 重 (24.4)g 孔 1.0		全体的に横なでがみられる。	普通 砂粒 褐色	
19	球状土器	長 3.1 幅 3.2 重 26g 孔 0.6		全体的に横なでがみられる。	普通 砂粒 明黄褐色	
96.24 (8)	球 瓶	底径3.5 幅 2.1	実物品ではないが、3cm以上が直立して伸びた状態を示し、茎部を有するものと、三角窓がみられる。壁はそれほど進んだものではない。			
8	右葉模造品	長 3.6 幅 1.3 重 0.6 孔 0.8	側部のもので側部の一部を欠き、3mmほどの孔を有している。全体的に擦痕が頗る。	滑石質		

### 3. 歴史時代

第24号住居跡（第88図）



第88図 第24号住居跡実測図

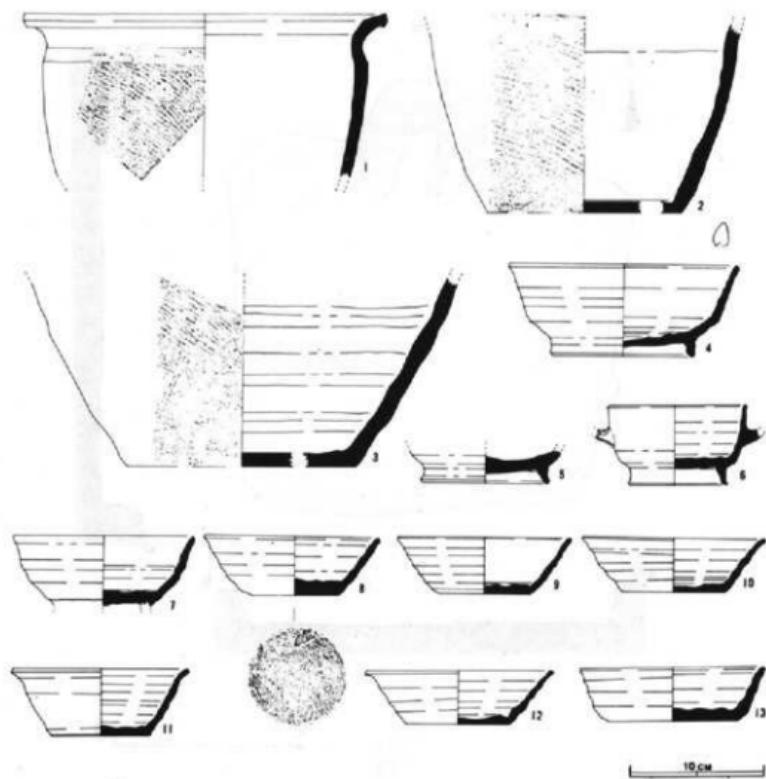
**位置** B地区の南端(H46区)に位置し、歴史時代の住居跡は南方2mに第25号住居跡が隣接し、東方23mに第26号住居跡、北東33mに第29号住居跡がみられる。

**規模** N-7°-W 長軸4.3m 短軸4.0m 平面形状 方形 面積 約15.5m<sup>2</sup>

**各部の状況** 壁は垂直に立ちあがり、壁高は40~45cm内外で東側の南東コーナー一部が外側に張り出し、方形というよりはやや台形状を呈している。床面はほぼ平坦でよく踏み固められている。北東コーナーに50×35cmほどの長方形状の掘り込みがみられる。

**竈** 北壁のほぼ中央部に位置し、軸線はN-25°-Wを向き、住居に対しかなり斜めに設置されている。煙道部および燃焼部は、北壁を130cmの幅で80cm程掘り込んで構築され、砂・粘土によって袖部をつくりだすが遺存度は悪い。

**柱穴** 床面では確認されていない。



第89図 第24号住居跡出土遺物（1）

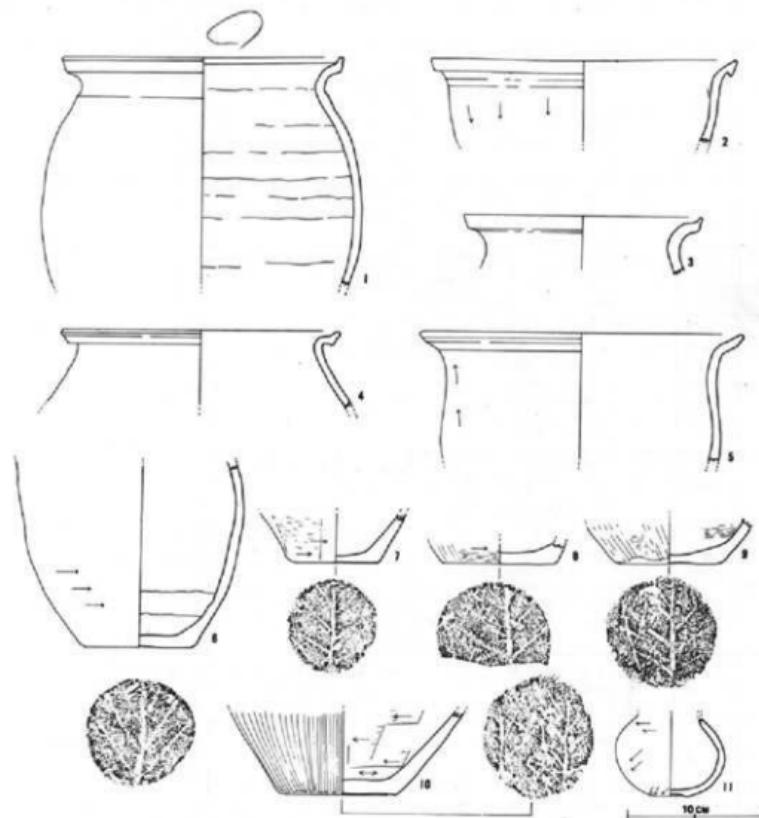
**覆土** 上層は黒褐色で、下層はロームブロックを含む暗褐色土の堆積がみられる。

**遺物出土状況** 遺物は住居跡中央付近から竈にかけて覆土中からの出土が多い。竈周辺から多数の管状土錐（第100図1～17）の出土がみられ、また、須恵器の环（第89図）が比較的多い。他に竈付近より鉄製品（第98図5）が出土している。

#### 遺 物（第89・90・100図）

番号	部 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	整 形 技 法	焼成・胎土・色調	備 考
89図 1	底 部 欠	26.8 (12.0)	口縁部は須恵器から外反し、口沿部は縫を有している。胴部はそれはどふくらまずに底部へ移る。厚さは1.0cm内外である。	口縁部内外は横なでがみられ、胴部外面には印目がみられる。	普 通 砂 粒・雲 母 灰白色	

2	腰（底） 胸上部欠	(13.0) 14.3	底部からやや内側して立ちあがる 胸部を有し、上部以上は欠いている。器厚は1.0~1.3cmほどである。	胸部外側には叩目がみられ、底部 近くには、斜位の鋸削りがみられる。 内面は鋸と指頭による整形痕 がみられる。	普通 砂粒・長石 灰白色	
3	底 部	(13.8) 16.8	大型の土器で、胸部以下の破片。 底面の一部を欠いている。器厚1.0 ~1.2cmほどである。	胸部外側には叩目がみられ、下端 は斜位の鋸削りがなされ、内面に はロクロ回転に沿った指頭による 整形痕がみとめられる。	普通 砂粒・長石 灰白色	
4	台付环 河	15.8 6.8 10.6	口縁部は直線的に開いて立ちあが り、底面には貼付高台がつけられ、 器厚は0.4~0.6cmほどである。	内外面とも水引き痕が認められる。	普通 砂粒 明灰色	
5	台付环 高台部	(2.5) 9.4	高台部片で貼付高台である。器厚 は0.6cm内外である。	内外面に水引き痕が認められる。	良好 砂粒・長石 灰白色	



第90図 第24号住居跡出土遺物（2）

6	青付 环 (3手付 环)	10.1 5.8 7.6	口縁部は底部から立ちあがり、内面には横筋を有する。又、底部中央には、肥厚する付し、本厚は約0.6cmである。断厚はやや薄い。	体部外縫は水引き抜いていよいになされており、 内縫は水引き抜いていよいくなされており、 本厚は約0.6cmである。	普通 砂粒 黄灰色	
7	青付 环 (2部矢)	13.4 (5.2)	口縁部を引き、口縁部は底部から立ちあがり、断厚は0.4~0.6cmほどである。	内外面とも水引き抜きが頗るである。	普通 砂粒 黄褐色	
8	环 %	12.9 4.3 5.3	口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、断厚は約0.6cm内外で、断面がよい。	内外面とも水引き抜きがみられ、外縫は底部は荒削りがなされている。 底部は直線形がみられる。	普通 砂粒・石英 黄褐色	
9	环 %	12.8 4.1 7.0	口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、断厚は0.4~0.6cmほどである。	内外面とも水引き抜きがみられ、外縫は底面に粗なで底が詰められる。	普通 砂粒 黄灰色	
10	环 %	13.5 4.0 7.6	口縁部は底部から反きみに引き、断厚は0.3~0.6cmほどである。	内外面とも水引き抜きが頗るで、底面は荒削形がなされている。	普通 砂粒・灰石 黄灰色	
11	环 %	12.9 4.3 6.3	口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、断厚は0.4cm。	内外面とも水引き抜きが認められ、外縫下縫部は荒削りがなされ、底部も粗底りがなされている。	普通 砂粒・灰石 黄褐色	
12	环 底 刷	14.2 4.1 7.4	口縁部は底部から直線的に開き、断厚は0.4cm内外である。	内外面にはけクシによる水引き抜きが認められ、下縫には粗なで底が詰められる。	普通 砂粒・石英 黄灰色	
13	环 %	13.4 3.9 9.0	口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、断厚はやや厚めである。	内外面とも水引き抜きが認められ、外縫下縫部には荒削りがみられる。	普通 砂粒 黄灰色	
9000	裏 写	22.3 (16.8)	断下縫を引き、口縁部は直角の丸鋸形にしてある。断縫部はそれと並んで縫を有するものではなし、本厚は0.6cm内外。	口縫部内外は横なでがみられ、縫部内外はなでがなされている。	良好 砂粒(多) 黄褐色	
2	口縫部 %	22.4 (6.2)	口縫部は外縫として立ちあがり、折返し状を呈している。断縫は透部へとほまる。断厚は0.6cm内外。	口縫部内外とも横なでがみられ、縫部外縫は側面の削削りがなされている。	良好 砂粒 黄色	
3	口縫部 %	17.5 (4.1)	口縫部は直角から外縫に、さらに直立的に立ちあがる。内外ともに縫を有する。断厚は0.5~0.6cm。	内外底とも横なで。	普通 砂粒(多) 褐色	
4	口縫部 %	26.2 (5.7)	口縫部は直角から大きく外縫に變をなし、内面にもゆるやかな縫を有している。断縫に直立的に隣がある。断厚は0.5cm内外である。	口縫部内外は横なでがみられ、縫部外縫はなでがみられる。	良好 砂粒(多) 褐色	
5	口縫部 %	23.6 (9.3)	口縫部は直角から立ちあがり、断厚は0.5~0.7cm。	口縫部内外は横なで、縫部外縫に削削り、内縫にはなでがみられる。	普通 砂粒 褐色	
6	裏 口縫部 %	26.0	口縫部は直角から立ちあがり、内面には横筋を有する。断縫に直立的に隣がある。断厚は0.5~0.7cm。	外縫になでおよび荒削りがみられ、内縫にはなでがみられ、底部には木葉板がみられる。	不良 砂粒(多) 黄褐色	底部木葉板
7	裏 部	(3.7) 6.2	断縫は底部から開いて立ちあがり、断厚は0.5~0.8cmほどである。	断縫下縫は横削りがみられ、内縫はなでがみられる。	普通 砂粒・石英(多) 褐色	
8	裏 部	(1.6) 8.5	底部片で底部に木葉板がみられる。		普通 砂粒・石英(多) 褐褐色	底部木葉板
9	裏 部	(3.4) 7.5	断縫は底部から開いて立ちあがり、断厚は0.6~0.8cmほどである。	断縫下縫は横削りがみられ、内縫はなでがみられ、底部には木葉板がみられる。	普通 砂粒・石英 褐色	底部木葉板

.0	度 数 率	強 度 (6.2) 8.5	底部で底部へやや聞いて立ちあがり。基部は0.6~1.0cmほどである。	外面は底位の凹割り、内面は底位の凹なでがなされ、底部には木瘤状がみられる。	普通 砂 粒 色	底形木葉模
II	弱 L.標本大 号	(5.0) 2.1	口縁部を大きめに底部は浅く少し底部は先端がみられ、おげ足である。基部は0.5cm内外。	側面外側は横位あるいは斜位の底割り、内面はなでがなされる。	普通 砂 粒 色	
120回 1	管状二頭 管	長 幅 厚 重 孔径 孔深	7.2 3.1 0.2 1.1 -0.6	私はややつぶれています。	底なでがなられ、横にころがして整形。	良好 砂 粒 淡黃褐色
2	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	6.9 2.9 0.45 5.2 1.0	孔はややつぶれています。	なでがなられ、横にころがして整形。	普通 砂 粒 淡黃褐色
3	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	9.2 3.0 0.85 8.0 1.0		横にころがして底でなで整形。	普通 砂 粒 色
4	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	2.0 3.5 0.57 5.2 0.9		横にころがして整形。	良好 砂 粒 淡黃褐色
5	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	8.0 3.0 0.58 8.0 0.9		横にころがして整形。指跡あり。	良好 砂 粒 淡黃褐色
6	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	8.9 2.9 0.68 8.0 1.1 -1.3		横にころがして底なで。	普通 砂 粒 暗褐色
7	# M	長 幅 厚 重 孔径 孔深	7.4 2.7 0.67 7.5 1.0		横にころがして整形。指跡あり。	普通 砂 粒 色
8	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	7.3 2.4 0.63 5.6 1.0		横にころがして整形。指跡あり。	普通 砂 粒 淡黃褐色
9	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	7.4 2.5 0.7 6.1 1.0 重20.0g		横にころがして整形。指跡あり。	普通 砂 粒 色
10	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	6.6 3.4 1.3 6.9 0.5		横にころがして整形。指跡あり。	普通 砂 粒 淡黃褐色
11	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	7.1 3.0 0.9 6.7 0.5		横にころがして整形。指跡あり。	普通 砂 粒 色
12	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	5.1 3.0 0.7 5.1 0.5		横にころがして底で整形。	良好 砂 粒 淡黃褐色
13	# M	長 幅 厚 重 孔径 孔深	6.2 2.55 0.7 6.1 0.5		横にころがして整形。底なでがなられる。	普通 砂 粒 灰白色
14	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	5.31 2.5 0.9 5.24 0.5		横にころがして整形。指跡あり。	普通 砂 粒 淡黃褐色
15	#	長 幅 厚 重 孔径 孔深	5.2 2.2 1.0 5.05 0.5		横にころがして整形。指跡あり。	普通 砂 粒 淡黃褐色

15	青状土器 片	長 4.7 幅 0.2 孔 0.9 重 14.0 g		縁にころがして整形。指痕あり。	青 細 砂 褐 褐色	二次焼成窓あり。
17	青状土器 片	長 4.3 幅 2.35 厚 0.8 重 3.4 g		縁にころがして整形。指痕あり。		
3888 丸	青 瓷 品 片	長(8.0) 幅 2.3 厚 0.4	鉢底としと考えられる。 先部7.6cm、莖部は一部残存。縁 は済んでいる。			

### 第25号住居跡（第91図）

**位置** B地区の南方（H47区）に位置し、近接する歴史時代の住居跡は北方2mに第24号住居跡がみられる。

**規模** N-22.5° W 長軸4.3m 短軸4.1m 平面形状 方形 面積 約15.5m<sup>2</sup>

**各部の状況** 壁は垂直に立ちあがり、壁高は30~40cmほどで東壁がやや低く、西側の北西コーナー部が張り出す方形状を呈している。床は平坦で特に中央部が踏み固められている。南東コーナー部からは、焼土・砂質粘土等が廃棄された状態で検出されている。

**竈** 北壁の中央に位置しN-32.5° Wを向いて設置されている。竈の遺存度は悪く、北壁を約1mの幅で50cmほど掘り込み、天井部は崩落し、袖部は砂まじりの粘土で構築されている。中央の燃焼部に土製支脚が置かれ、火床は15cmほど掘り進められているにすぎない。

**壁溝** 西壁にそって幅20cmほどの側溝が南北に1.6mほど掘られ、P<sub>4</sub>に接して消滅する。東壁側の壁溝は南東コーナーの灰・焼土などを廃棄した落ち込みに続く。

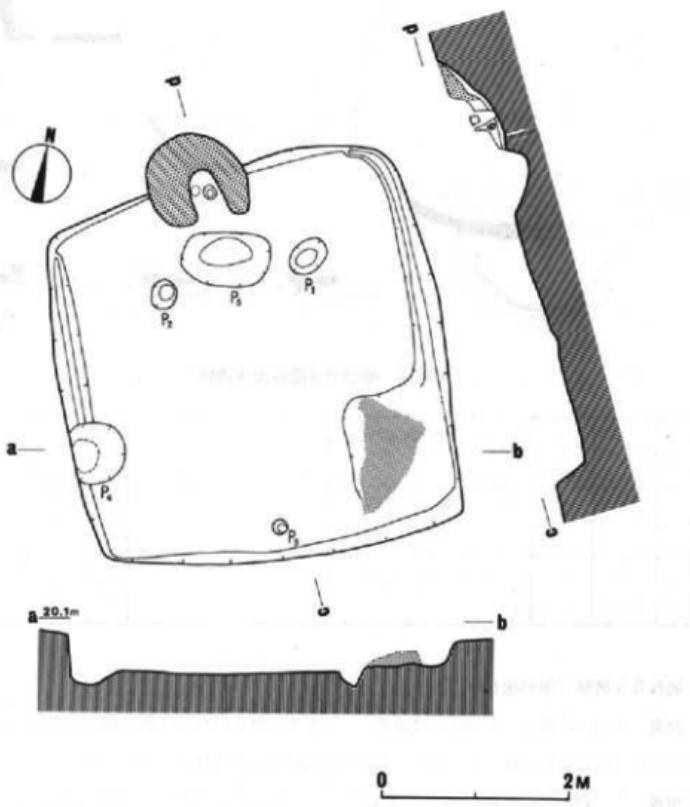
**柱穴** 竈の前に位置するP<sub>4</sub>は94×60cmの長方形状を呈し、竈方向にわずかに傾斜を示し、灰のかき出し場として利用されたものであろうか。柱穴は竈の前に2ヶ所、中央に1ヶ所みられる。

**覆土** 上層は暗褐色土・黒褐色土で、下層はロームブロック混りの褐色土が堆積し、自然流入の堆積状況を示している。

**遺物出土状況** 遺物は多く上師器と須恵器で、ほとんどは覆土中から出土している。床面中央付近より須恵器の蓋（第92図8）が出土している。

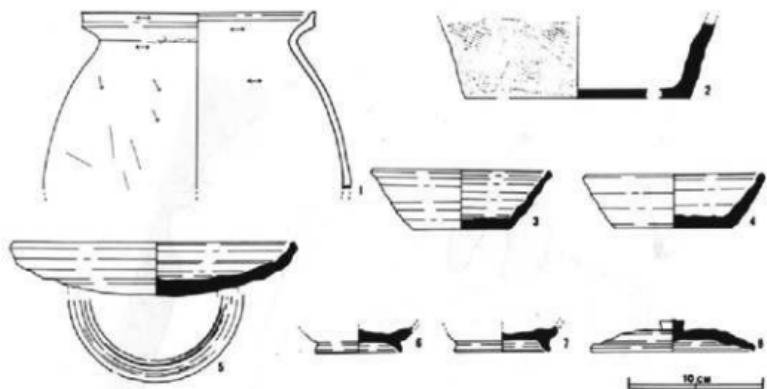
### 遺物（第92図）

番号	種 標	法 直(m)	器 形 の 特 徴	壁 形 造 法	施成・施土・色調	備 考
3888 1	青 瓷 品 片	17.4 (13.1)	口縁部は外延して立ちあがり、さらには直立する。口部に縁を有する。厚さ0.6cmほど。	口縁部内外とも横なで。断面外周は削定のもの。	青 細 砂 褐 褐色	



第91図 第25号住居跡実測図

	2 底 部	(5.6) 16.5	底部は大きく、底部の一部を欠く。 底部外面には叩目痕がみられ、内 面は粗雑なまでがなされている。	普 通 砂 粒 灰褐色	填 充 器
3	环 完 形	13.0 4.5 7.1	口縁部はゆるく外反してロクロに よる水引きがなされ、底部は既切 り、厚さは0.3~0.7cmほどである。	普 通 砂 粒 灰白色	填 充 器
4	环 はね完形	12.8 3.9 8.55	口縁部はゆるく内壁ぎみに立ちあ がり、ロクロによる水引きがなさ れ、底部内面に左巻の渦巻状の水 引き痕がみられる。	普 通 砂 粒 長石 にまき褐色	内外面埋付着 填 充 器
5	台付 台 部欠 失	20.5 (3.9)	盤部は口縁部が直立ぎみに立ちあ がり。器厚は0.5~1.1cmほどで、 台部は貼付高台である。ロクロに よる水引き。	普 通 砂 粒 長石 暗灰褐色	填 充 器



第92図 第25号住居跡出土遺物

6	台付環 底	1.9 6.35	台部片で、台は貼付がなされ、器 内はロクロ底が残る。		普通 砂粒・長石 灰黄色	須恵器
7	台付環 底	1.8 6.95	台部片で台は貼付がなされている。 ロクロ		良好 砂粒 灰色	須恵器
8	蓋 ほは完形	12.0 2.3 1.65	ロクロによる水引きがなされ、口 縁は軽く立ちあがる。器厚はやや 厚い。		良好 砂粒・長石 灰色	須恵器

#### 第26号住居跡（第93図）

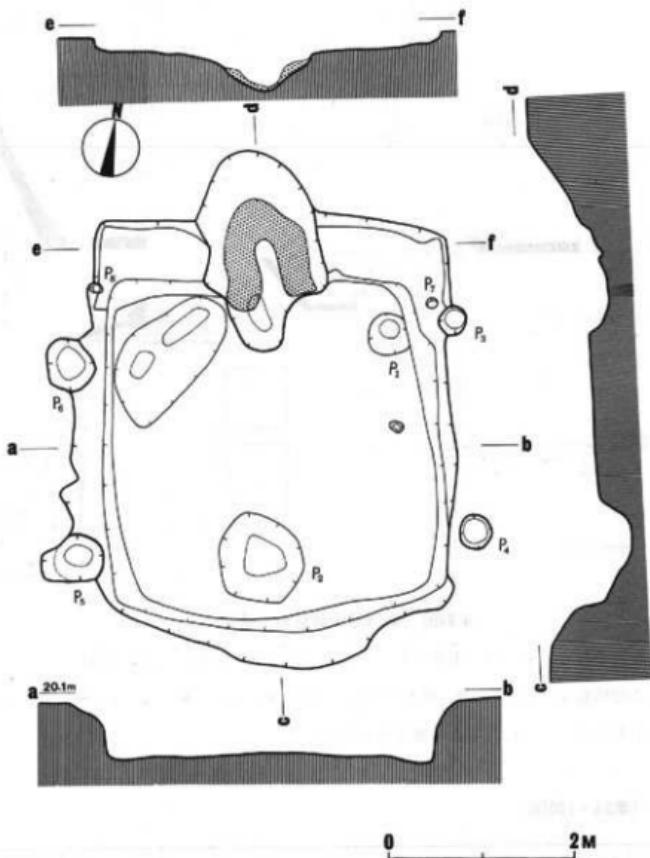
**位置** B地区の南端（J47区）に位置し、近接する歴史時代の住居は西方20mに第24号住居跡、東方29mに第27号住居跡、北方29mに第29号住居跡がほぼ等間隔にみられる。

**規模** N-14°W 長軸4.8m 短軸4.2m 平面形状 方形 面積 約14.2(11.5)m<sup>2</sup>

**各部の状況** 壁は垂直ぎみに立ちあがり、壁高は50~70cmほどで、北西コーナーおよび南壁の外辺部がゆるい傾斜をもって立ちあがる。床はほぼ平坦でよく踏み固められ、中央部はわずかに盛りあがっている。

**竈** 北壁の中央部に位置し、北壁を125cmの幅で約50cmほど斜めに掘りこんで煙道部とし、煙道部は砂質粘土によりU字状に構築され、天井部は壊れ、焚口部も破壊されている。竈の両側は北壁より一段低い平場とし、テラス状の施設として利用している。規模は西側117×55cm、東側が130×54cmである。住居の北西コーナー部には灰・粘土・焼土が多量に堆積し、竈内の廃棄物の処理場と考えられる。

**柱穴** 床面にはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>がみられるが、両方から多量の灰・焼土等が検出され主柱穴とはあまり

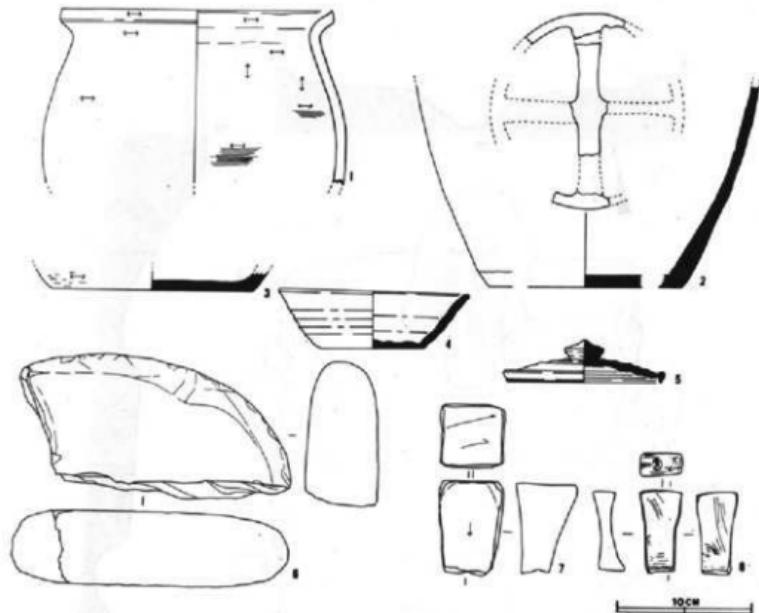


第93図 第26号住居跡実測図

考えられないが、壁外辺に位置するP<sub>5</sub>～P<sub>8</sub>は屋外施設の主柱穴と考えられる。直径は30～50cm内外で、深さ20～50cmほどである。P<sub>5</sub>が最も深く、P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>は小穴でテラス状の遺構の補助的なものと考えられる。

**覆土** 上層は黒色土で、下層は黒褐色土である。堅ぎわは多量のローム粒を混入する黄褐色土の流入がみられ、自然堆積を示している。

**遺物出土状況** 遺物は覆土および床面よりみられ、北側より投棄されたような状況が遺物の出



第94図 第26号住居跡出土遺物

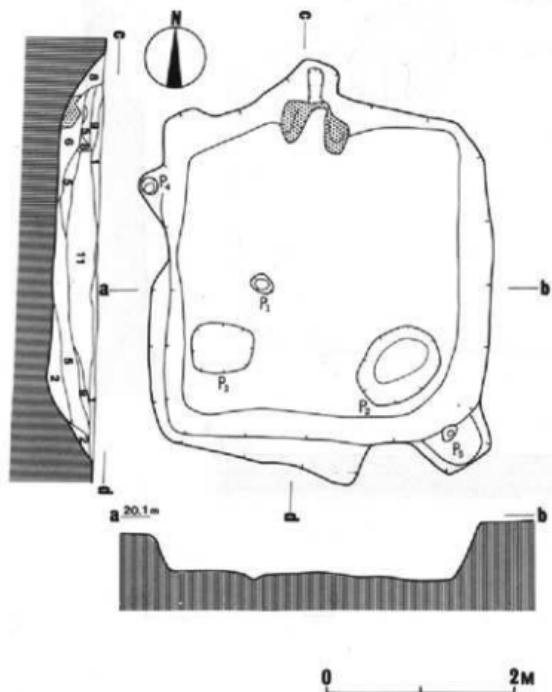
土状態から推測される。その他、東壁ぎわより小型の砂質凝灰岩製の砥石（第94図8）が出土している。（この砥石は、長さ5.9cm、最大巾3.1cm、最大厚1.95cm、最小厚0.85cmで、表・裏ともすり減って中央に強くくびれ、4面の使用痕がみられる。）

#### 遺 物（第94・100図）

番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 撮	整 形 技 法	焼成・施土・色調	備 考
94図 1	甌 胴下部欠 片	20.0 (12.7)	口縁部は外反して立ちあがり、胴部は下半部を欠いている。器厚は0.7cm内外である口縁部内面に擦がみられる。	口縁部内外とも横なでがみられ、胴部にもなでがみられる。外面に運行道。	良 好 砂粒 橙色	焼付器
2	甌 胴下部 片	(14.8) 14.2	底部からやや内側して胴部へ立ちあがり。底部は十字形の構造部を有する。底保部の各面は擦削りがある。器厚は0.6~1.5cmほどである。	ロクロ整形の水引き瓶が認められる。胴下端部には、直削り瓶が認められる。	良 好 緻密・砂粒 暗灰色	須恵器
3	甌 底 部	(1.5) 14.8	底部は大きく、胴下端部には直削りがある。内面にはなで整形がなされている。		良 好 砂粒 灰褐色	須恵器
4	甌 完 形	13.9 4.2 7.6	底部から直線的に聞いて立ちあがり。器厚は0.5~0.7cmほどである。	内外面ともロクロによる水引き瓶が認められ、底部は直削りがなされている。	普通 砂粒・紫 灰褐色	須恵器

	番	蓋	II.4 3.3	口縁部は直立しており宝珠はやや大きい。	ロクロによる水引き痕が認められる。	普通 長石・砂粒 青灰色	填土器
5	6	砥 石	長 20.3 幅 (9.7) 重量1700g	表面が平面に磨かれ、砥石として使用されたものと考えられる。			
7	8	砥 石 1/2	長 (6.8) 幅 4.7 重量175g	中央部のくびれ部で研削したもので、各面とも中央部にくびれがみられる。また各面とも縦位の溝跡が認められる。			
9	1003B 19	砥 石 1/2	長 5.9 幅 3.1 重量 (33.2) g	表面が平面に磨かれ、砥石として使用されたものと考えられる。			4面の使用痕
		管状土器 1/2	長 5.8 幅 2.4 重量 (23.1) g	一部を欠き、器面はやや粗雑な面がみられる。		良好 砂粒 暗褐色	

第27号住居跡(第95図)



位置 B地区の南部  
(N47区)に位置し、  
近接する歴史時代の住  
居跡は西方28mに第26  
号住居跡、北方18mに  
第28号住居跡がみられ  
る。

規模 N - 2°W  
長軸3.6m 短軸3.6m  
平面形状 正方形 面  
積 約9.14m<sup>2</sup>

各部の状況 壁は垂  
直に立ちあがり、壁高  
は40~60cmで東部が高  
く、西部が低くなり、  
南壁がややゆるい傾斜  
を示して立ちあがる。  
床はほぼ平坦で固いが、  
南にやや傾斜を示して

第95図 第27号住居跡実測図

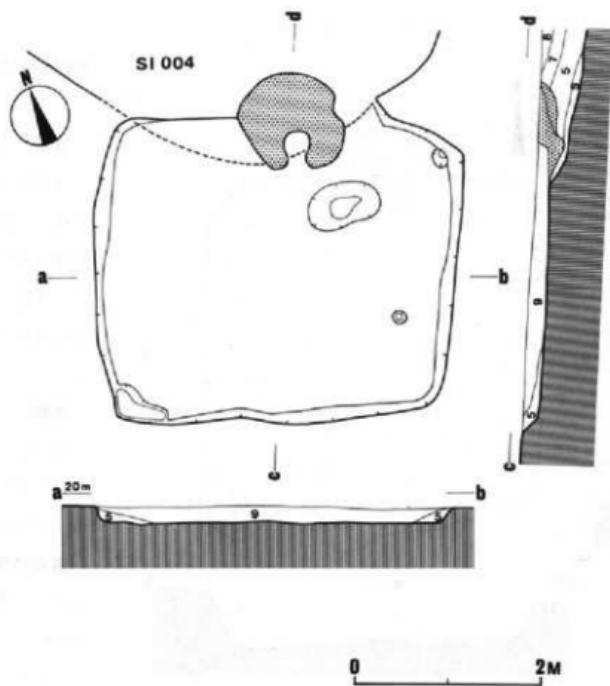
いる。また、南東コーナーおよび南西コーナー部分に長方形状の浅い掘り込みがみられる。

窓 北壁の中央に位置し、北壁を80cmの幅で約40cmほど斜めに掘り込んで煙道部とし、袖部は30~40cmほどU字状に突出している。床は皿状にわずかに掘り深めている。

柱穴 中央床の西側に直径25cm内外、深さ12cmの小穴P<sub>1</sub>がみられるだけで、屋外施設も検出されなかったが、北壁上に直径20cm内外の小穴P<sub>2</sub>がみられる。

覆土 上層はローム粒子を混入する黒色土・暗褐色土がみられ、下層はロームブロック等を含む黄褐色土がレンズ状に堆積している。

遺物出土状況 遺物は少量で須恵器の蓋と少量の土師器片がみられる。



第96図 第28号住居跡実測図

## 遺物 (第84・99図)

番号	器種	法線(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・粘土・色調	備考
84号 3	壺 釜	12.8 (2.1)	口縁部は廣くやや直立並みに立ちあがりを呈し、実底部を欠いている。器厚10.2~0.7cmほど。	ロクロサル。	良好 硬 杏 褐色	須恵器 自然物あり
99号 20	灰状土器	法 線 2.2 幅 17.2 高 0.5 厚 0.7	爆竹器		普通 砂 褐	

## 第28号住居跡 (第86図)

位置 B地区の南部 (N45区) に位置し、北側に隣接する縄文時代の第4号住居跡の南壁を切って竪が構築されている。

規模 N-26°-E 長軸3.8m 短軸3.3m 平面形状 長方形 面積 約11.1m<sup>2</sup>

各部の状況 壁は垂直ぎみに立ちあがるが、壁高は20cm内外で浅くやや軟弱である。床はほぼ平坦で固く踏み固められている。南西コーナー部に浅い溝状の落ち込みがみられるが、側溝とはならなかった。北側は第4号住居跡と重複して明瞭でない。

竪 北壁のはば中央に位置し、規模は1.34×1mほどであるが確認面から浅いため遺存度は悪く、煙道部も不明瞭である。燃焼部は砂質粘土によって構築され、床はわずかに掘り込まれている。

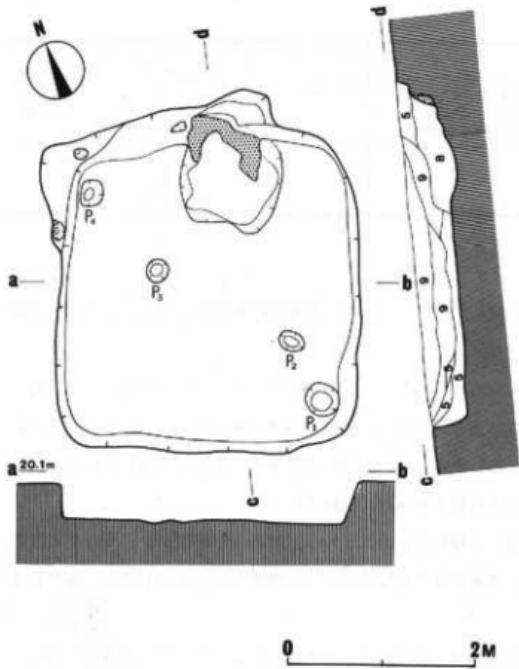
柱穴 東壁より、直径15cm内外の小穴が2ヶ所確認されるだけで他にはみられないが竪の南東に78×44cmほどの橢円状の掘り込みがみられる。

覆土 暗褐色土の堆積がみられ、堅ぎわに黄褐色土が流入している。

遺物出土状況 極少量で、西よりの床面に須恵器の片 (第84図6) が出土している。

## 遺物 (第84図)

番号	器種	法線(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・粘土・色調	備考
84号 4	壺 口縁部	31.2 (3.1)	口縁部は底部から突いて立ちあがり、口唇部はほぼ直立する。実部以下を欠いている。器厚は0.5cm内外。	口縁部内外とも横なでがみられる。	普通 砂 褐 色	二次焼成
5	壺 36	11.45 2.8 5.5	底部から外反して開いている。器厚は20.4mm。	体部内外とも木引き痕がかかるにみられ、底面は凹凸面。	普通 砂 褐 色	
8	平 底 35	(2.4) 7.1	裏縁片で底部から口縁部にむかって閉く。	体部は水引き残がかかるにみられ、底面は凹凸面。	良好 砂粒(少) 可燃灰色	須恵器



第29号住居跡(第97図)

位置 B地区の南部

(J 44区)に位置し、この住居跡より北には同時期の遺構は確認されていない。

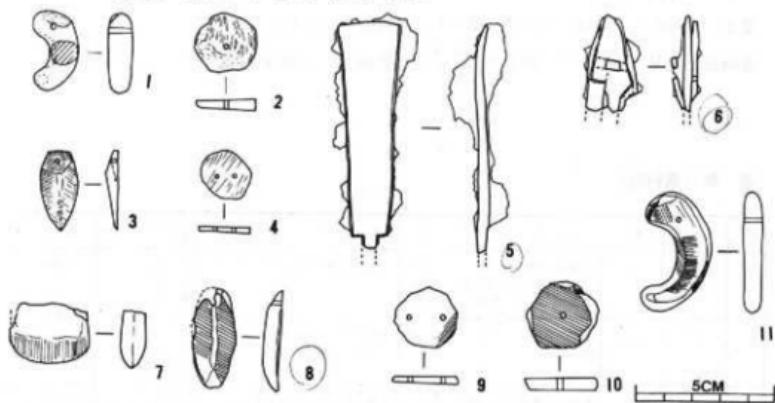
規模 N-21°-E

長軸3.5m 短軸3.2m

平面形状 方形 面積約9.5m<sup>2</sup>

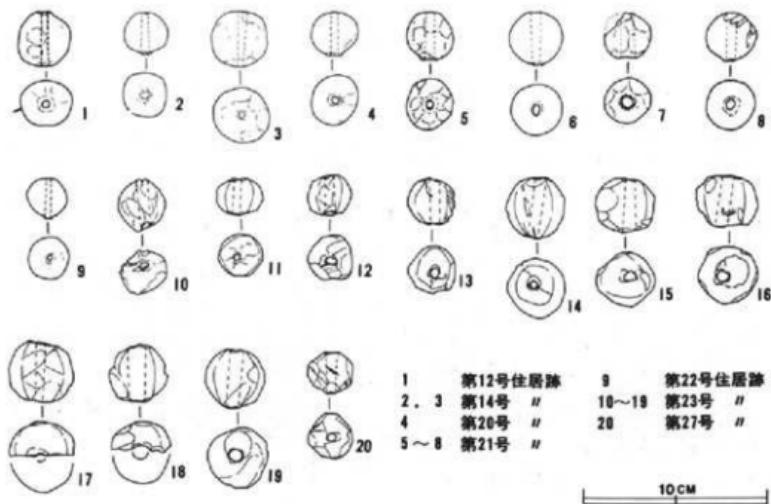
各部の状況 壁は垂直直ぎみに立ちあがるが、北西コーナーから北壁の外辺部は外傾ぎみとなり、壁高は37~47cmほどで東が高く、西が低くなる。床はほぼ平坦でよく踏み固められている。

第97図 第29号住居跡実測図



1・2 第14号住居跡 5 第24号住居跡 7 第12号住居跡 11 第2号土壤  
3・4 第17号住居跡 6・8 第23号住居跡 9・10 グリット

第98図 石器類及び鉄製品実測図



第99図 球状土錠実測図

**竈** 北壁のほぼ中央に位置し、主軸方向はN-38°Eを向き、遺存度は悪い。わずかに北壁に焼土・粘土等が残存する。北壁を30cmほど掘り込み、焼成部は床面をわずかに掘りくぼめている。

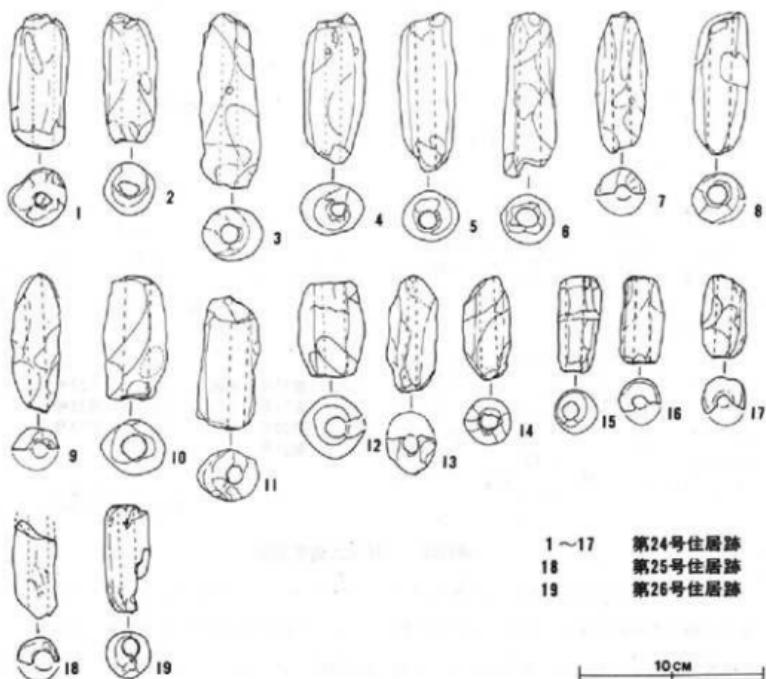
**柱穴** 北西コーナーから南東コーナーを通る対角線上に、ほぼ並んで直径30cm内外、深さ20cmほどの柱穴がみられる。

**覆土** 上層は暗褐色土、下層はローム小ブロックを含む黄褐色土がみられ、自然流入的な堆積である。

**遺物出土状況** 遺物は須恵器・土師器が出土しているがそれほど多くはない。竈の東側の床面より土師器の小型甕（第84図7）が出土している。

#### 遺物（第84図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
848 7	甕 完形	16.5 14.75 8.25	口縁部は頸部から開き、さらに直立させた立ちあかる。底盤は平底で、木葉痕がみられ、器厚は0.3~1.0cmほどである。	口縁部内外とも横なでがみられ、胴部内外面は磨削り、外面は見みがきがなされている。	良好 砂粒(多) 褐色	埋付着 底部木葉痕
8	环 36	12.6 (6.0)	口縁部は全体から外反して開き、底盤は底部へすばまる。底盤を欠き、器厚は0.6cm内外である。	内外面とも見みがきがなされ、丹彩されている。	普通 砂粒 赤褐色	埋付着 丹彩



第100図 管状土錐実測図

## 第2節 土 壤

### 1. 繩文時代

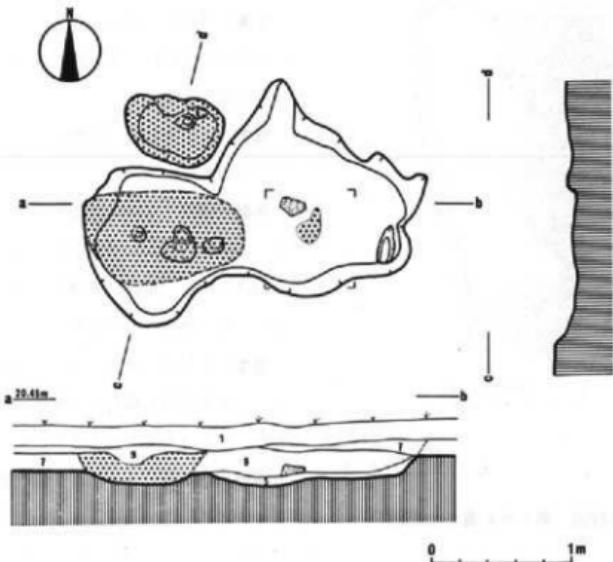
#### 第1号土壤(第101図)

位置 B地区のはば中央部(N38区)に位置するが、近接する住居跡はみられない。

規模 N-71° E 長軸2.42m 短軸1.52m 平面形状 不整形

各部の状況 壁は13-23cmほどでゆるやかに立ちあがり、壁および壇底とも軟弱であり、東側の不定長方形をなす土壤を西側の楕円形状の掘り込みが切っているが、それほど時間差はないと考えられる。また、北西に長軸0.7m、短軸0.5mの楕円形の小穴がみられる。

覆土 第2層の褐色土より掘り込み、上層はローム粒を混入する褐色土で、繊維を混入する円筒形の土器がみられ、下層はローム粒を含む黄褐色土である。西側のヤマトシジミを混入する掘



第101図 第1号土壤実測図

り込みは上層が暗褐色土で、下層は混貝土層でわずかに焼土および灰等の混入が看取される。

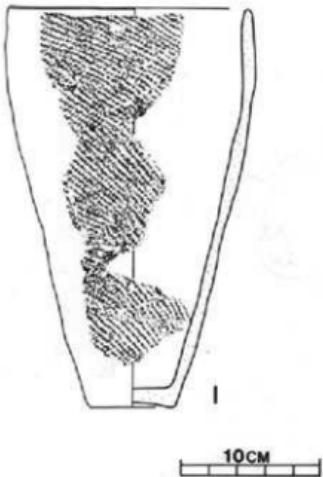
**遺物出土状況** 中央付近より深鉢形土器（第102図）の底部が出土し、P<sub>1</sub>の南側に同土器の口縁部分がみられる。その周辺にヤマトシジミが散在しその数は約1000点、極小破片は別にして、右殻が603点、左殻が397点で投棄されたシジミは603点以上であると考えられる。殻長・殻高とも1.5~3cm内外で、2~2.5cm内外のものが最も多い（第104図）。また焼土および灰等が検出され、シジミの殻もかなり、軟弱であり、一次的に火をうけている。

#### 遺物（第102・103図）

本土壤から出土した土器はすべて第I群土器であり、器形が把握される第102図1以外はすべて破片である。1は口径17.5cm・器高28.5cm・底径6cmほどの深鉢形土器で、口縁部は直立ぎみに立ちあがる円筒状を呈している。器外面にはR<sub>L</sub>の繩文が全体に施文されている。

第103図1~3は2群1種の土器であり、14~21は羽状構成を呈している。また、14はやや外反して立ちあがる口縁部である。22~29は無節の繩文を有する土器群で、直線的に外へ開く口縁部と、やや内傾ぎみに立ちあがるもののがみられる。30・31は底部片である。

### 第3号土壙（第105図）



第102図 第1号土壙出土遺物(1)

位置 D地区の西部（A2区）に位置し、近接する縄文時代の住居跡は南東23mに第11号住居跡がみられる。

規模 N-16°W 長軸1.75m 短軸1.45

m 平面形状 橢円形

各部の状況 壁は壙底よりゆるいカーブを持って立ちあがり、壁高は86-100cm内外で、東西はゆるく、南北は垂直ぎみに立ちあがる。また、壁・壙底ともやや軟弱である。

覆土 上層は暗褐色土で、下層はロームブロックを中量含む褐色土の堆積がみられ、人為的に埋土されていると思われる。

遺物出土状況 覆土上層から多数の縄文土器片が出土しているが、壙底からの出土は稀である。

### 遺物（第106図）

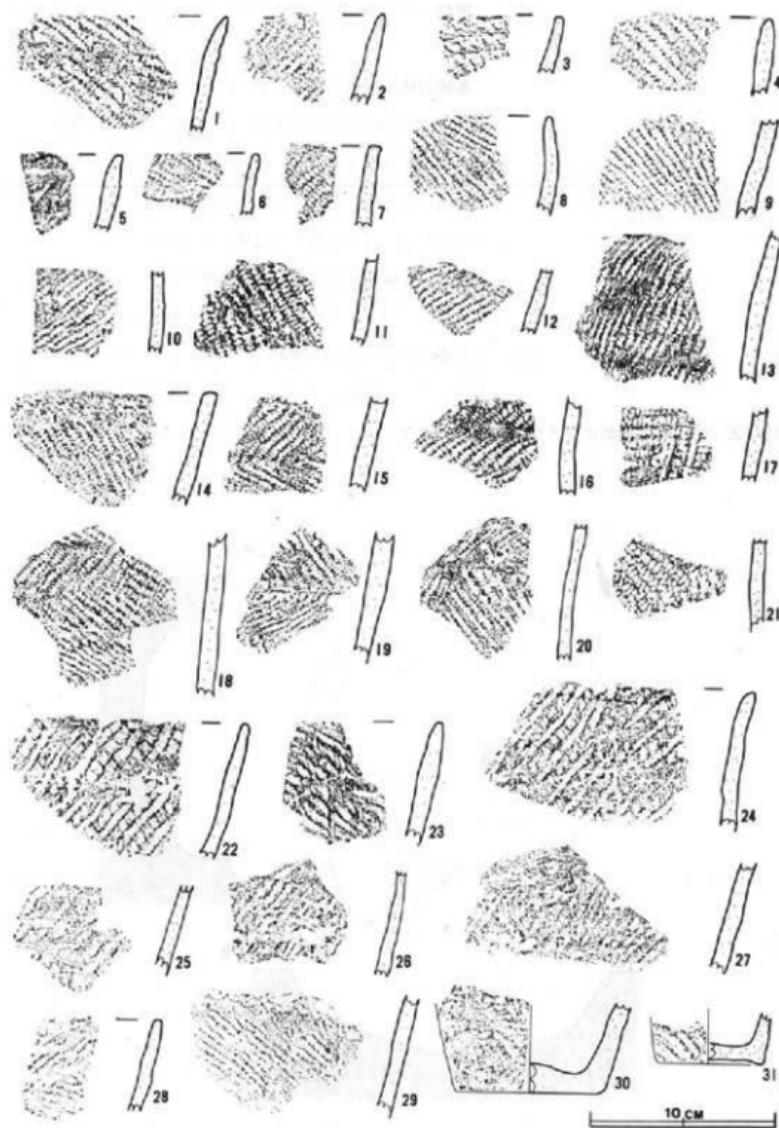
本土壙から出土した土器はすべて第I群土器であり、ほとんどが覆土上層から出土している。第106図1・2はいずれも器形が推定されるものであり、大形の深鉢形土器である。

1は推定口径約65cmほどの大形の土器で、口縁部は波状を呈し、波頂部に3ヶ所ずつ小突起がみられ、さらに口唇部にはスリットがみられる。胴上部はくびれて口縁部は開き、さらに内彎している。口辺部は櫛歯状工具による縦区画がみられ、区画間それぞれには弧状文が6段ずつ施され、縦区画横目文上には、弧状文同様竹管文が施されている。胴下部はR<sup>L</sup>の縄文がみられ、くびれ部には横目文が周回し、その上には同じ工具の刺突がみられる。2は胴部で胴上部には半截竹管による有節沈線文が斜格子状に描かれ、胴上部はL<sup>R</sup>の縄文が施されている。周回する4段の有節沈線によって文様帯は区分され、縄文区の上部には竹管刺突が2段に施されている。1同様大形の土器であるが、1・2とも焼成は良好で、内面の整形もきわめて良好である。

## 2. 古墳時代

### 第2号土壙（第107図）

位置 A地区の東端（Q17区）に独立して位置する。



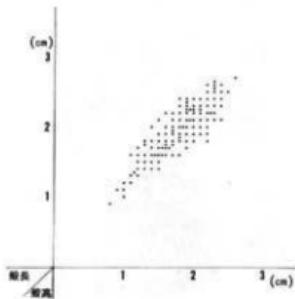
第103図 第1号土壤出土遺物（2）

規模 N-58°E 長軸1.4m 短軸1.3m 平面形状  
橢円形

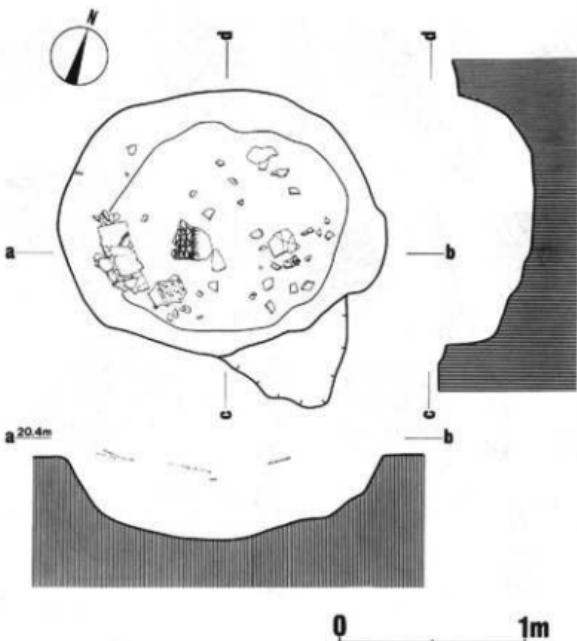
**各部の状況** 壁は壇底よりゆるいカーブを持って立ちあがり、壁高は30-36cmほどである。壇底は若干の凹凸があり、すり鉢状を呈しそれほど固いものではない。

**覆土** 上層はロームブロックを含む暗褐色土で、下層はローム粒子を含む褐色土の堆積がみられる。

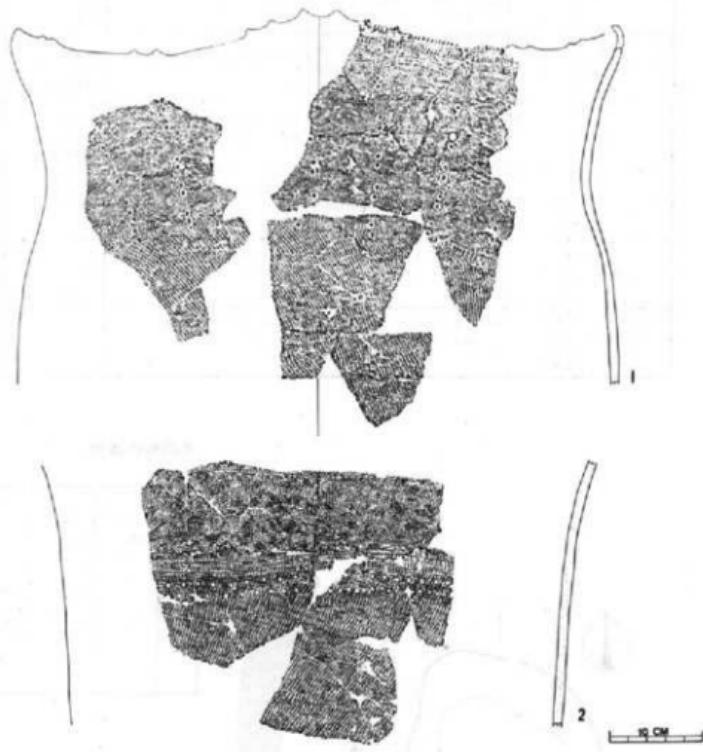
**遺物出土状況** 壇底中心から東壁にかけて数個の土師器が一括して出土している。その状況は複合口縁の壺を中心とし底部を欠損する壺がまわりに4個、壺が1個、高环の脚部が2個、石製模造品の勾玉が1個、その他シダ類の付着する焼土塊が出土している。祭祀関係に類する土壤と考え



第104図 第1号土壙出土貝グラフ



第105図 第3号土壙実測図



第106図 第3号土壤出土遺物

られる。

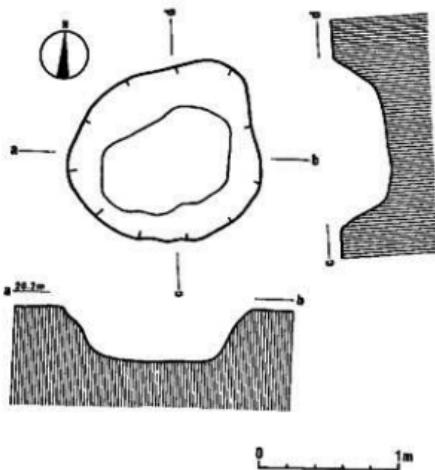
### 遺 物 (第98・106図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	施成・胎土・色調	備考
106図 1	壺 宍 形	17.8 34.1 6.9	口縁部は肥厚して複合口縁状を呈し、頸部から大きく外反して開いている。肩部はやや長い形状を示し、器厚10.7~1cmほどある。	口縁部内外とも横健の刷毛目がみられ、胴部はなで後に荒削りがなされている。内面はなでがみられ、輪積み痕がみられる。	青油 砂粒・石英 明褐色	
2	甕 宍 形	17.8 32.1 5.9	器形はやや変形しており、左右の基底が異なる。口縁部は大きく外反して立ちあがり、胴部中央に較大部を有する。底盤は小さく、器厚は0.8~1cmほどである。	口縁部内外とも横なで、胴部外面には荒削りがみられ、内面はなで整形がなされ、輪積み痕がみられる。	普通 砂粒・雲母 褐色	

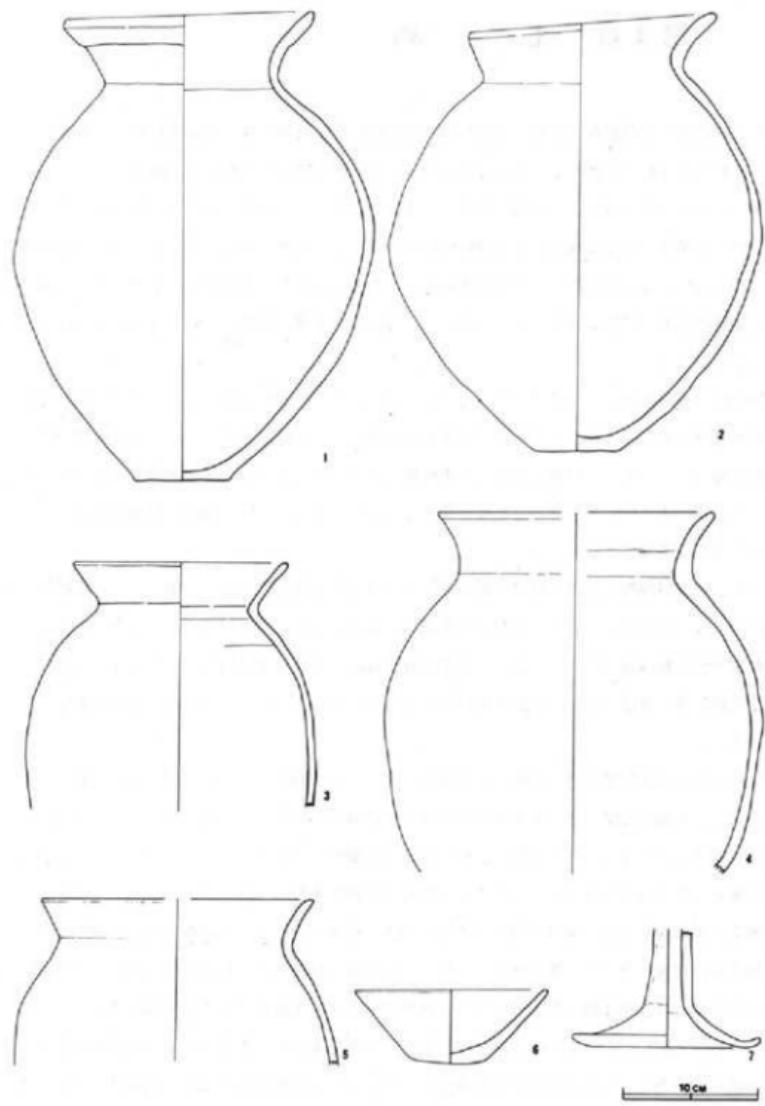
3	茎 取下部欠 け	15.5 (18.0) 6.9	口縫部に隔壁から直線的に開き、隔壁部はやや長く、底部を欠いている。厚さは10.5~0.8cmである。	口縫部内外は荒なでがみられ、隔壁も隔壁が認められる。	普通 砂粒・石英・長石 赤褐色	
4	茎 倒下部欠 け	20.0 (26.0)	口縫部は外反して立ちあがり、隔壁部はやや複数を有する。隔壁は0.8~1.5cmほどである。	口縫部内外とも複数でがみられ、隔壁部は隔壁が認められる。内面は平ら。	普通 砂粒・石英 淡黃褐色	二次構成
5	茎 倒下部 欠け	19.7 (12.0)	口縫部は底部からやや外反して開き、隔壁中位以下を欠き、厚さは0.6~0.8cmほどである。	口縫部内外とも複数でがみられ、隔壁部は隔壁が認められる。	普通 砂粒・石英 淡黃褐色	
6	茎 % %	11.4 5.2 5.1	直角又はやや丸味を有し、口縫部にむかって直線的に開き、隔壁は0.6~1.2cmほどである。	内外表面はなで整形が認められる。	普通 砂粒・石英 無	
7	茎 倒下部	(8.5) 10.0	隔壁部は円筒状を呈し、表面で大きく開きを有し外反する。	隔壁部は隔壁の壁なでがみられ、隔壁も荒なでがみられる。	普通 砂粒・石英 無	
98区 11	円型 横造品	枝 0.4 厚 0.7 孔 0.15 重 9.5g	端平な形状を呈し、表面には細かい微面である。	側面部の整形にやや粗面。		

### その他の遺物

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴
98区 9	石製 横造品	長 2.1 幅 2.2 厚 0.2 重 3g	やや小整の円形状を呈し、2mmほどの孔がある認められる。表面面とも擦痕が認められる。
10	石製 横造品	長 2.6 幅 3.3 厚 0.4 重 4.5g	不整の円形状を呈し、厚い。中央部に2mmほどの孔を有し、表面面とも擦痕顕著。



第107図 第2号土壤実測図



第108図 第2号土壤出土遺物

## 第4章 まとめ

大生郷遺跡の発掘調査の結果、縄文時代の住居跡11軒、古墳時代の住居跡12軒、歴史時代の住居跡6軒の計29軒の住居跡と、縄文時代の土塙2基、古墳時代の土塙1基が確認された。これら遺構の分布は、台地西側に入りこむ幅の広い沖積地をひとつの生活基盤としていたようにみられる。西の沖積地の北谷頭東部には古墳時代住居跡のひとつのまとまりがみられ、台地南部の東に入り込む浅い支谷の谷頭周辺にも住居跡のまとまりがみられた。南部地区のまとまりは、縄文時代～歴史時代の住居跡が複合したものであり、各時代の遺構・遺物については次のようにまとめることができる。

縄文時代の住居跡は、すでに述べてあるように楕円形の平面形を有するもの2軒、隅丸方形の平面形を有するもの3軒、長方形状の平面形を有するもの6軒である。これらの住居跡の内容を詳細に検討してみると、堀跡がほとんど不明鮮であり、柱穴についても規格性はあまりみられない。さらに、床についてもそれほど硬い状態を示すものはなく、居住期間が短期間であったのであろうと推察することができる。

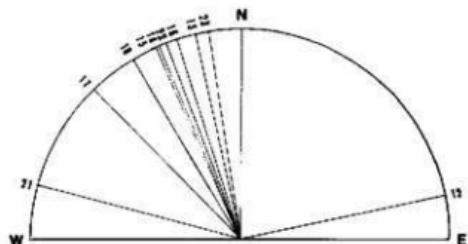
これらの住居跡群は、南部地区の東へ浅く入り込む谷頭周辺に分布し、第1～9号住居跡が谷頭に向くように位置している。第11号住居跡は、北部のブロックに位置しているが、そのほかに同時期の住居跡は確認されていない。北部の谷頭部は、調査対象区域外ということもあり、第11号住居跡以外の遺構の存在を明確に把握することはできなかったが、住居跡の存在を推定するにとどまった。

これら第10号住居跡以外の10軒の住居跡から出土した土器群は、すべて胎土中に纖維を含む土器であり、文様的特徴などから前期の黒浜式土器に編年的位置づけができるものである。遺物の出土状況は、ほとんどが覆土上層で、同一個体でも散在して出土している。これらの土器群は器形の推定できるものは少なく、ほとんどが破片で深鉢形土器の一部である。

縄文土器は、胎土中に纖維を含む第I群土器と、纖維を含まない第II群土器に大別したが、第I群土器は沈線を有する1類と縄文を主体とした2類に分類した。住居跡から出土した土器の主体となるものは、第I群2類1種であり、沈線文を有する土器群よりも出土量が多い。その中でも、 $R < \frac{L}{1}$  の原体を横位に回転したものが多く、0段多条のものも含まれる。羽状構成を呈する土器群もやや多く、羽状は普通から粗雑なものがみられ、回転方向が変えて羽状化したものが多くみられる。沈線文の土器群は、半截竹管による文様施文が多くみられ、コンバス文・波状文・平行沈線文などが主体である。コンバス文はやや形の退化したものが多く、前型式にみられるものよりも後出的な様相を呈している。土器以外の遺物はほとんどみられず、大生郷遺跡の特徴と

いうことができる。

第10号住居跡出土土器は第II群土器で、北部地区に単独で検出された住居跡から出土したもので、人生郷遺跡においては本住居跡以外に認められていない。住居跡は方形の平面形を呈し、柱穴・炉跡などは確認されず、住居跡として不明瞭な



第109図 住居跡主軸表(大生郷第III期)

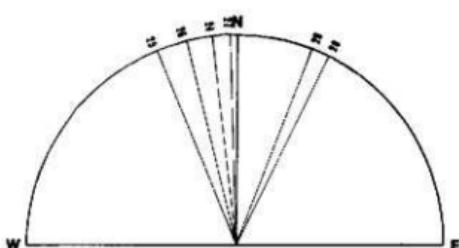
部分も多くみられる。出土土器は前述のように第II群土器で、微隆帯によって曲線的な区画がなされて縄文が施文される中期末の加曾利EIV式土器である。

縄文時代のその他の遺構として土壙2基があげられる。第1号土壙は南部地区的谷頭の奥に位置し、ヤマトシジミが検出され、さらに下層の床付近からは灰と焼土が検出されている。出土土器は第I群土器2類1種で、住居跡同様黒浜期のものと考えられる。床付近の灰・焼土は煮沸用のものと考えられるが、ヤマトシジミが出土したことから土壙の用途が推察できる。第3号土壙は北部地区的谷頭東部に位置し、第11号住居跡と隣接して確認された土壙である。出土土器は胎土中に繊維を含む第I群土器であるが、文様構成的には諸磕a式土器のものと近似している。また、復元実測の結果、大形の深鉢形土器であることが判明した。これらの土器群は、勝田市遠原貝塚出土の第3群土器中の一部に類似が認められ、今後の資料の増加を待つものである。

古墳時代の住居跡は12軒が確認され、南部地区においては縄文時代の住居跡群と同様に東に入り込む浅い支谷の奥に分布している。また、北部地区においては北の谷頭を中心として広範囲に点在している。これらのまとめりは、南の第13~16号住居跡、第18~21号住居跡、第22・23号住居跡で、第17号住居跡が中央部に位置している。

各住居跡はほとんど方形を呈し、第19号住居跡は長方形を呈している。全体的に床は軟弱なもので、炉跡もほとんど不鮮明である。柱穴も基本的には4柱の主柱穴がみられるが、不鮮明なものも含まれている。貯蔵穴はほとんどの住居跡にみられ、南西コーナー部に位置しているものが多く、全部の住居跡が火災に遭遇した痕跡を残している。規模としては、一辺6~7mほどの大きさを有するものが一般的で、第15・16・19・23号住居跡が大型の住居跡である。主軸方向は北を中心として西に傾くものが多く、北北西方向のものがほとんどである。

住居跡のまとめりの状況から南のグループをA群、北のグループをB群として2分してそれぞれの群内での特徴をみれば、大型住居跡の存在があげられる。A群において第16号住居跡は11.5



第110図 住居跡主軸表(大生郷第IV期)

×11.4mの方形の平面形を有し、さらに、第15号住居跡は9.6×9.5mの規模を有している。B群においては第23号住居跡が最大規模のもので11.9×11.7mの大きさを有している。さらに、第19号住居跡が9.3×6.4mで第15号住居跡と類似している。A・B両群において

は大型住居跡の存在が注目され、A群における第15・16号住居跡とB群における第19・23号住居跡の共通性を充分考慮すべきであろうと考えられる。

各住居跡の遺物についてみれば、壺形土器・彫形土器・環形土器・高環形土器・鉢形土器・壺形土器などの器種がみられ、それぞれの住居跡でのセット関係は多様である。これらの上器群で注目されるのは高環形土器であり、A群第16号住居跡から多数出土している。さらに壺形土器も他の住居跡と比較すると多く、祭祀的な性格の濃い住居跡と考えられる。B群の第23号住居跡は、第16号住居跡と同規模の住居跡であるが、他の住居跡と比較すればやはり高環形土器の出土量が多く、性格的に第16号住居跡との類似性が多くみられる。

第17号住居跡はA・B群のほぼ中間に位置した住居跡で、球状土錐が24個ほど検出されている。この球状土錐は、手網などの錐として利用されたもので、飯沼水系での当時の漁撈活動の一端をうかがうことができる。そのほかの遺物としては石製模造品があり、第14・17・23号住居跡から出土している。

古墳時代に位置づけられたこれらの住居跡は、前期的な様相を一部に残しているが和泉式土器の特徴を示した上器群を出土し、和泉期に編年されるものである。住居跡以外では第2号上塙を同時期のものと考えられ、1.5m内外の楕円形を呈する本土塙内から壺形土器・彫形土器が出土している。その性格については明確に理解されていないが、貯藏穴のなものとも考えられるが、覆土中より出土した石製模造品(勾玉)の存在が注目される。

歴史時代の住居跡は6軒が南部地区に確認され、縄文時代および古墳時代A群と同様に分布が認められる。これらもひとつのまとまりとしてとらえることが可能であり、規模は3.5~4.8mほどの方形を呈した平面形を示している。主軸方向は北方向を示したものが多く、竈も北壁に構築されている。床は良く踏み硬められた状態を示したものが多い。柱穴は明確に床面に確認されるものは少なく、住居跡外縁にその存在を求めるなければならない。

出土遺物は完形品およびそれに近い状態の出土は少なく、土師器と須恵器が伴出している。これらの破片の出土量を分類すると、須恵器の出土率はほとんど10%内外であり、第25号住居跡においては45%の比率がみられた。また、完存率の高いものは、第24号住居跡において須恵器80%・土師器20%であり、破片の比率は6%・94%と逆転している。この須恵器と土師器の比率の問題は、器種などの差によっても異なるが、今後充分に検討しなければならない問題点であろう。そのほか、第24号住居跡から管状土錐が17個ほど出土し、古墳時代第17号住居跡同様に漁撈活動を考慮する必要がある。

大生郷遺跡から検出された集落跡は、それぞれ時間的な間隔をおいて営まれたということができ、概略的にⅠ～Ⅳ期に分類すれば第Ⅰ期は縄文時代前期の黒浜期の住居跡群で、ヤマトシミを出土した上塙もこの時期に位置づけることができる。第Ⅱ期はそれほど明確なものではないが縄文時代中期末の加曾利EⅣ期である。第Ⅲ期は古墳時代中期の和泉式土器を出土する住居跡群が位置づけられる。大生郷遺跡の第Ⅲ期にはA・Bの2つの住居跡群がみられ、それらの例からみて5～6軒ほどの住居跡がひとつの集落単位を構成するものであると考えられる。しかし、A・Bの群についての同時性を明確に把握することはできない。これらの群における大型住居跡は、その群の主体的な住居として存在していたと考えられる。第Ⅳ期は6軒からなる集落で、第Ⅰ・Ⅲ期同様に單一時期の集落としてとらえることができ、8世紀中葉から8世紀後半の時期に位置づけることができる。

これらの遺構については、今後も充分な検討が必要であり、周辺地域の資料の増加とともに分析していく資料となりうるであろう。

住居跡一覧表

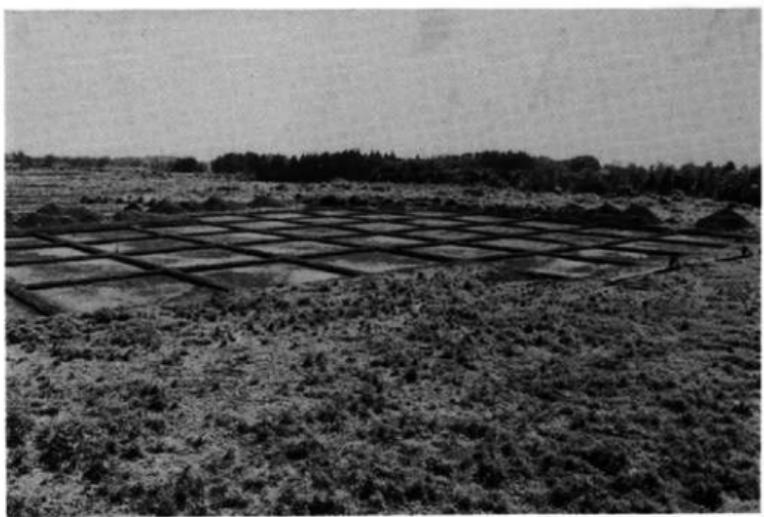
地番	地区	上種方河	面積	規模(m)	面積(cm)	剖面	特徴	火坑	出土遺物	時期
1	G48区	N-8T-E	格子形	5.6×5.1	19.6	5			縄文土器 1446片 石22	縄文時代 后期
2	L49区	N-28-W	隅丸形	4.46×5.05	22.0				石 1261片 鐘石1	新
3	L50区	N-8T-W	張方形	5×3.5	12.2	1			石 368片 石4	新
4	N46区	N-35-W	比肩形	6.3×5.6	26	2			石 2137片 石11	新
5	I47区	N-8T-E	中二間	6.5×5.6	23.8	5			石 219片 鐘石1	新
6	I48区	N-15-E	隅丸形	5.8×5.3	20.0	13			石 520片 石2	新
7	I42区	N-4-E	隅丸形	5.7×5.4	21.1	16			石 661片 鐘石2	新
8	K39区	N-25-E	方 形	3.8×3.5	10.4				石 133片	新
9	R36区	N-4-E	不定形	5.5×6	19.0	7			石 34片	新
10	K9区	N-33-W	方 形	4.1×3.6	10.7					中期
11	D5区	N-25-W	方 形	4.08×5.02	20.6	6			石 1584片	新 前期
12	L48区	N-78-E	方 形	7.08×6.6	42.6	9			○ (土器器) 縄文小形1,高62 厚3.5,第1	古墳時代 和風期
13	M43区	N-12-E-W	方 形	5.38×4.8	21.6	6	90×70×40	○ "	○ (土器器) 縄文小口盤邊1 厚1.5,小形1,高3	新
14	L44区	N-23-W	方 形	6.65×6.5	41.2	9	70×60×45	○ "	○ (土器器) 縄文,土2,第1,第2	新
15	O43区	N-24-W	方 形	9.64×9.5	82.4	9		○ "	○ (土器器) 縄文2,高2,厚2	新
16	L41-L42区 M41-M42区	N-18-W	方 形	1.59×1.4	131.1	11	100×100×60	○ "	○ (土器器) 縄文2,高1,厚1 高环18,器 2	新
17	I27区	N-44-W	方 形	6.7×6.4	41.4	4	105×55×45	○ "	○ (土器器) 縄文2,高4,厚2 环状1,器 2	新
18	K10区	N-31-W	方 形	6.1×6.0	34.8	4	96×56×45	○ "	○ (土器器) 縄文1,小形	新
19	N13区	N-	張方形	3.3×6.4	156.81	2	137×75	○ "	○ (土器器) 縄文2,器 1,土1	新
20	H9区	N-	方 形	5.7×5.1		○			○ (土器器) 縄文2.5,第1,土1	新
21	E-5区	N-23-W	方 形	5.1×5.0	24.0	3			○ (土器器) 縄文2,高2,厚2 堆土1	新
22	E-3区	N-21-W	方 形	5.14×5.13	25.2	2	50×50	○ "	○ (土器器) 縄文2,高2,厚2 堆土1	新
23	C1区	N-5-W	方 形	3.9×1.7	135.4	15			○ (土器器) 縄文4,高2,厚3,器1	新
24	H46区	N-7-W	方 形	6.3×4.0	15.5	○ 2			(漆器器) 漆1 (土器器) 縄文2,香料1	歴史時代 国分期
25	E47区	N-28-W	方 形	4.3×4.1	15.5	○ 2			(漆器器) 漆2,器1	新
26	J47区	N-18-W	方 形	4.8×4.2	(11.5)	○ 8			○ (土器器) 縄文1,器 1	新
27	N47区	N-25-W	方 形	3.6×3.6	9.14	○ 4			(漆器器) 漆1 (土器器) 縄文1,器 1	新
28	N45区	N-26-E	長 方 形	3.8×3.5	11.1	○ 2			土器器片	新
29	J48区	N-23-E	方 形	3.5×3.2	9.5	○ 1			土器器 小形號1	新

# 図 版

（遺物写真下の番号は、遺構番号及び図版番号）  
（例） 12-(2) 1 第12号住居跡の図版(2)-1  
SK 2-1 第2号土壙の図版-1



P L I 航 空 写 真 (遺跡遠景)



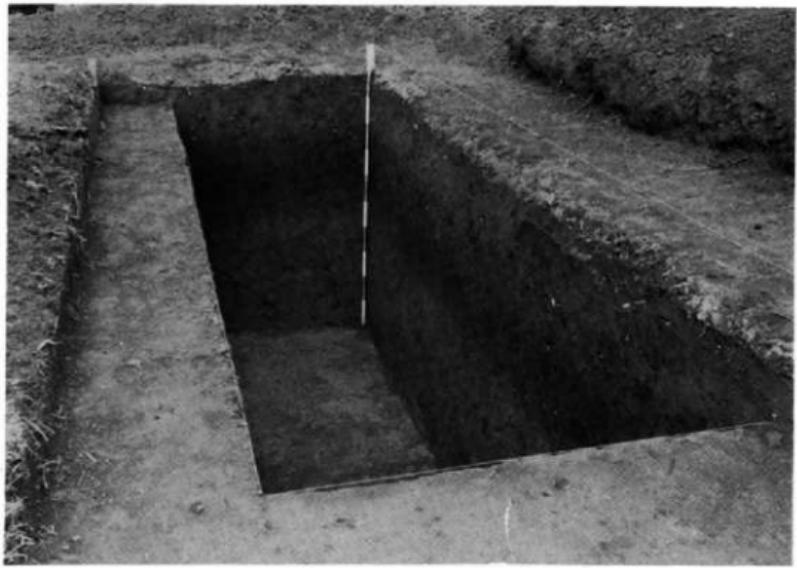
PL2 A地区グリット全景



PL3 B地区北部トレンチ全景



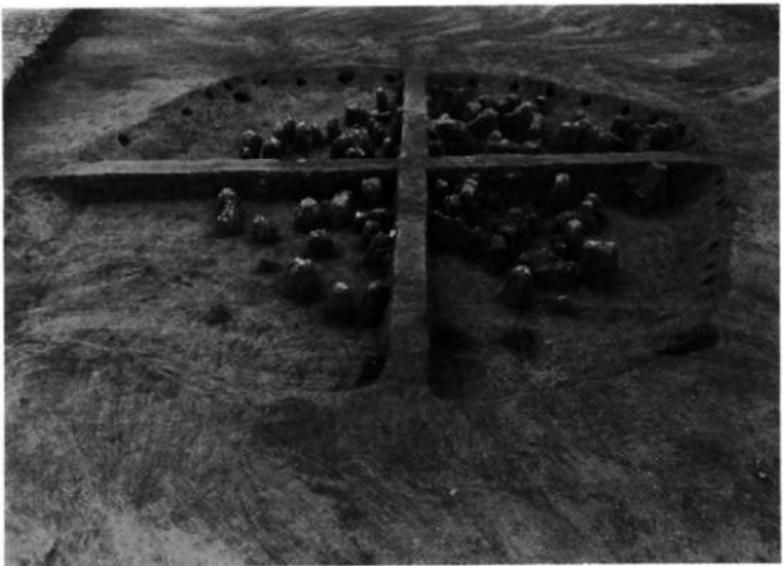
PL4 D地区グリット全景



PL5 テストビット



PL 6 第1号住居跡遺物出土状況



PL 7 第2号住居跡遺物出土状況



PL II 第 2 号住居跡



PL 9 第 4 号住居跡遺物出土状況



PL10 第5・6・7号 住居跡（手前より）



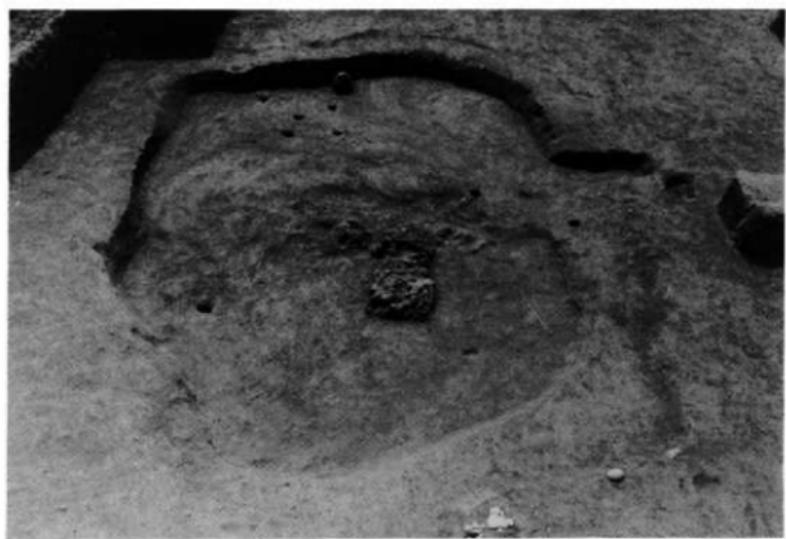
PL11 第 6 号住居跡遺物出土状況



PL12 第 7 号住居跡



PL13 第 8 号住居跡遺物出土状况



PL14 第 8 号住居跡



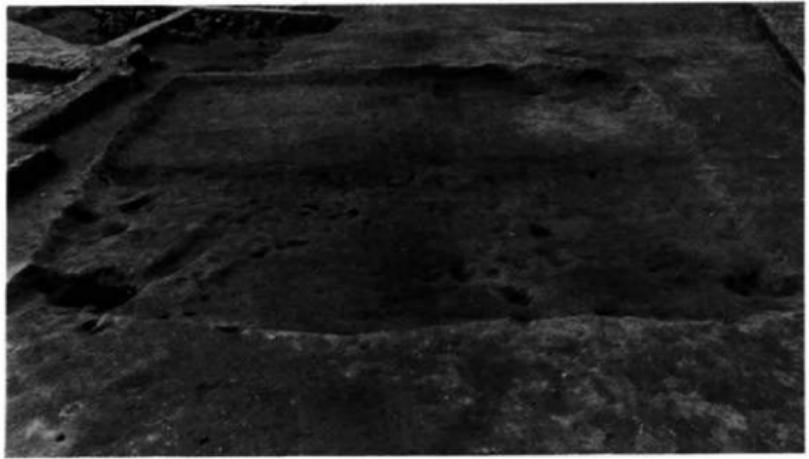
PL15 第 11 号 住居 跡 遺物 出土 状況



PL16 第 12 号 住居 跡



PL17 第 13 号 住 居 踪 遺 物 出 土 状 況



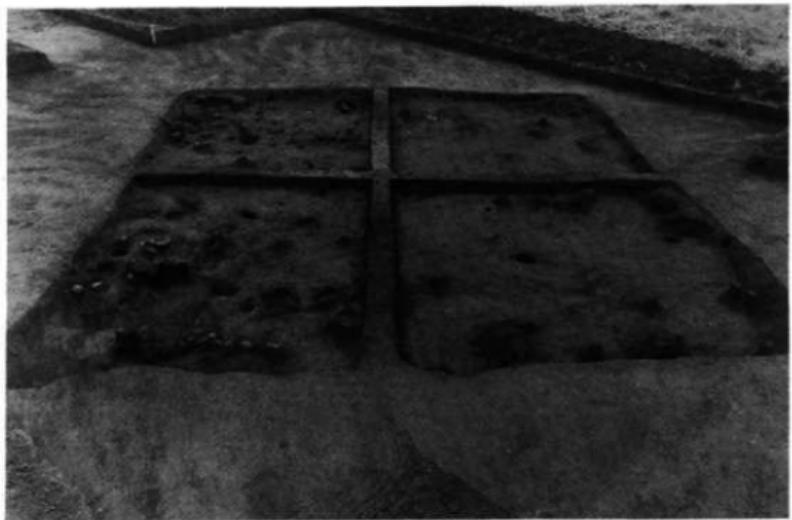
PL18 第 14 号 住 居 踪



PL19 第15号住居跡遺物出土状況



PL20 第16号住居跡



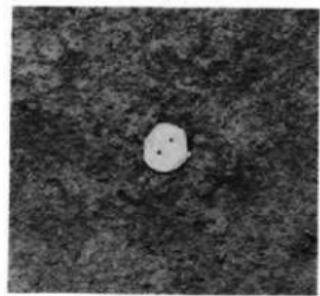
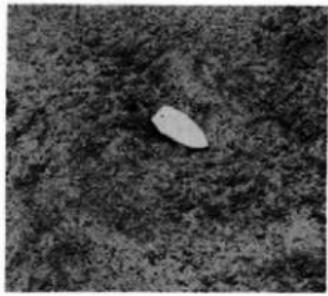
PL21 第17号住居跡遺物出土状況(1)



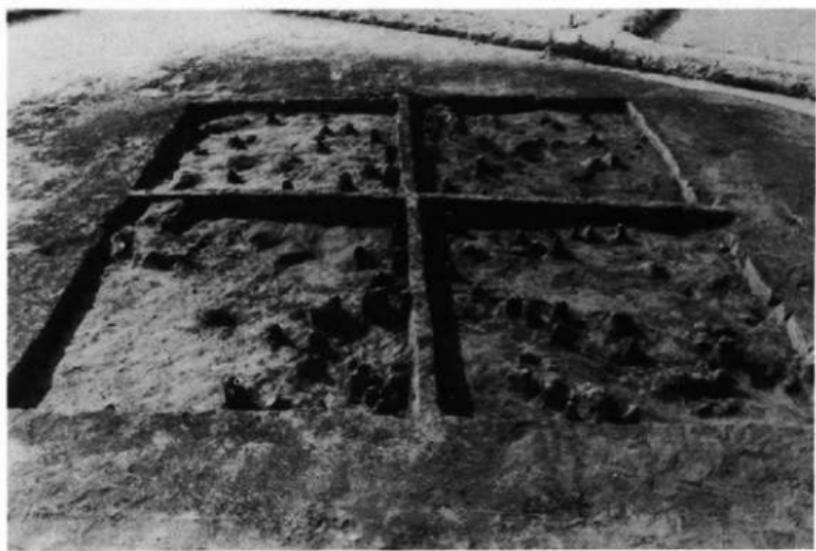
PL22 第17号住居跡遺物出土状況(2)



PL23 第17号住居跡球状土錐出土状況



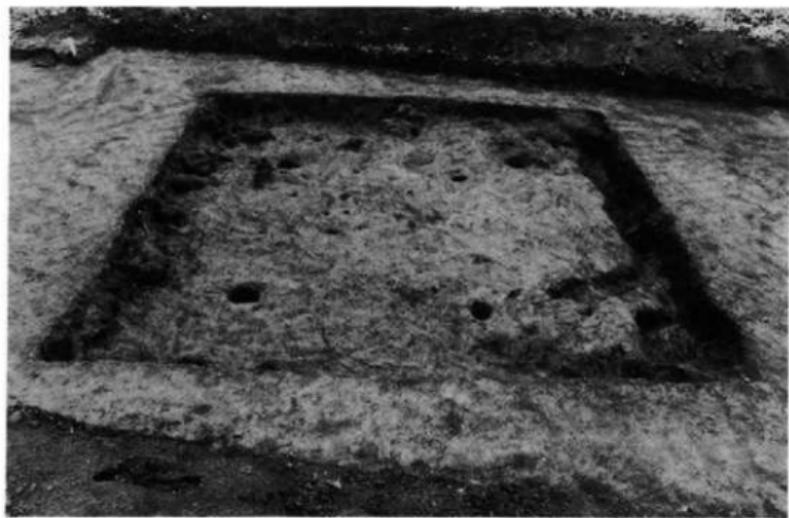
PL24 第17号住居跡石製模造品出土状況



PL25 第 18 号住居跡 遺物出土状況



PL26 第 19 号住居跡



PL27 第 21 号 住 居 跡



PL28 第 22 号 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況



P L 29 第 23 号 住 居 跡



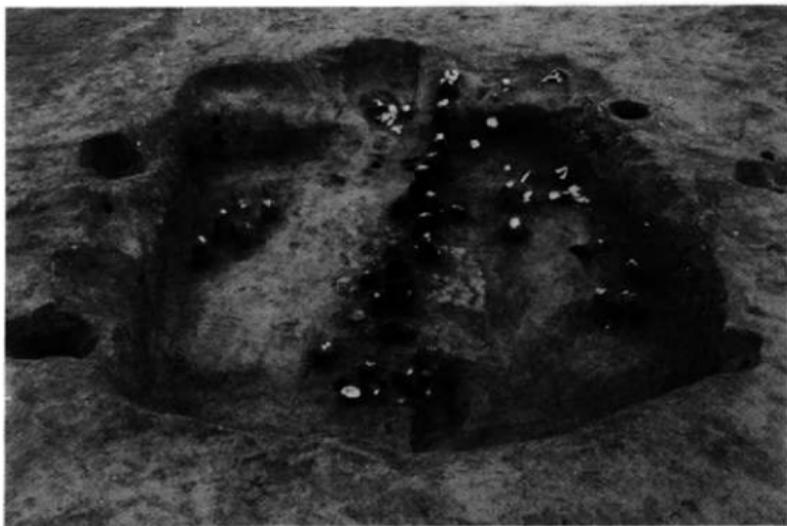
P L 30 第 23 号 住 居 跡 遺 物 出 土 狀 況



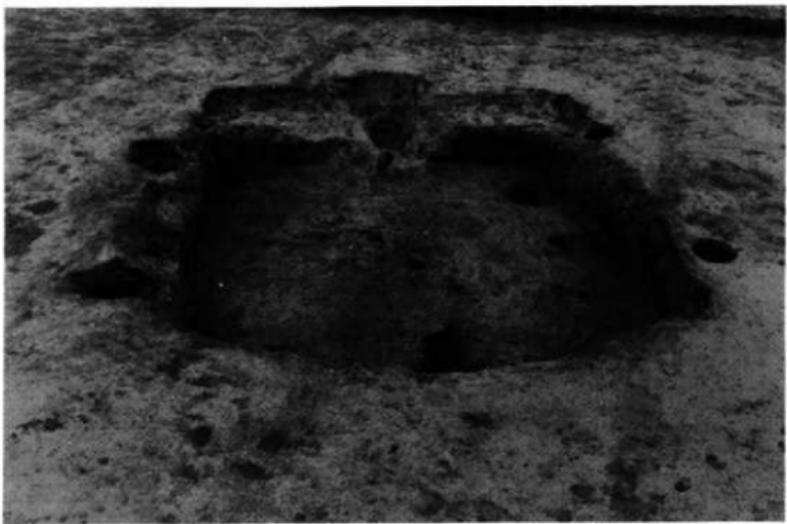
PL31 第24·25号住居跡遺物出土状況



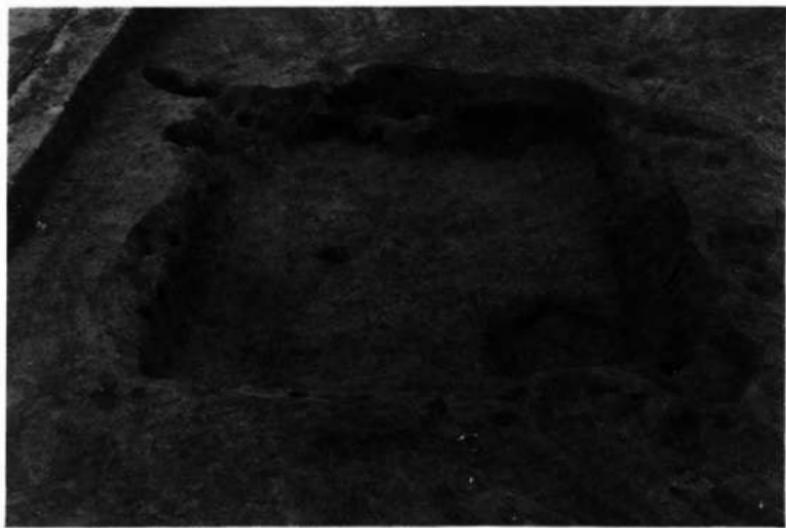
PL32 第24·25号 住居跡



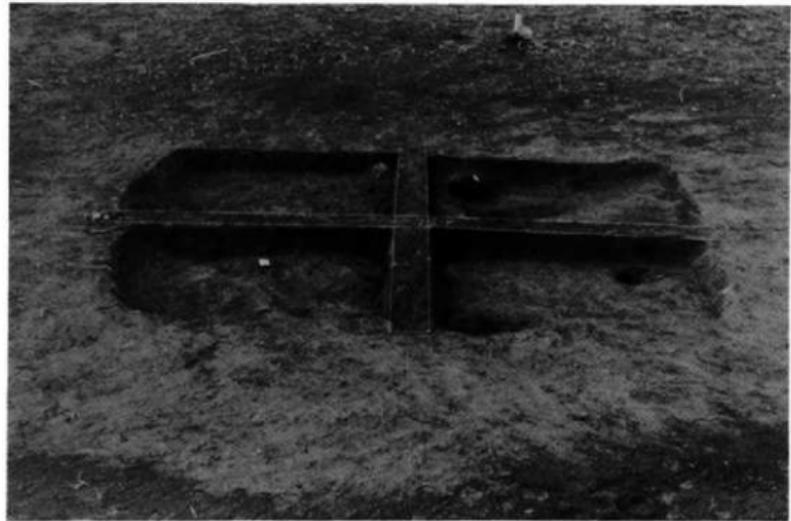
PL33 第28号住居跡遺物出土状況



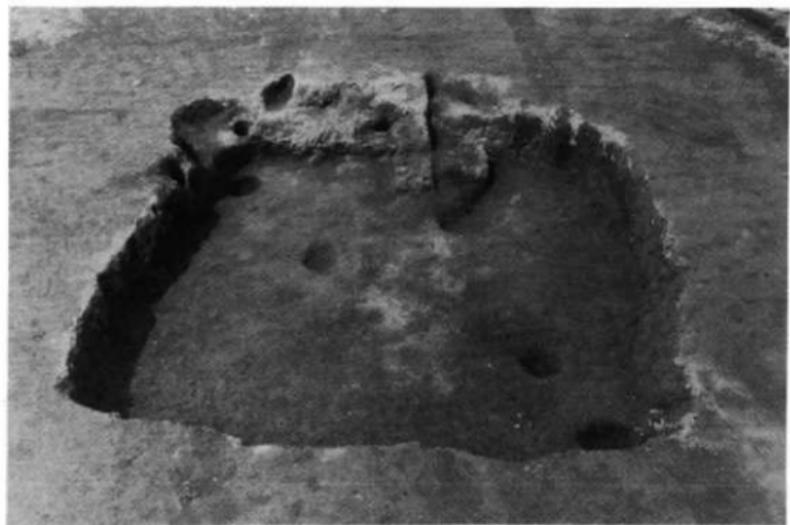
PL34 第28号住居跡



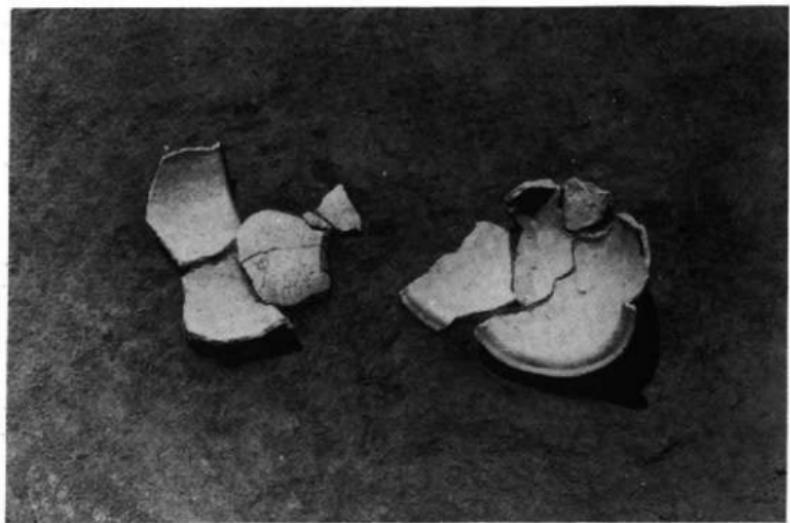
PL35 第 27 号 住 居 踪



PL36 第 28 号 住 居 踪 土 层 断 面



PL37 第 28 号 住 居 踪



PL38 第 28 号 住 居 踪 遺 物 出 土 状 況



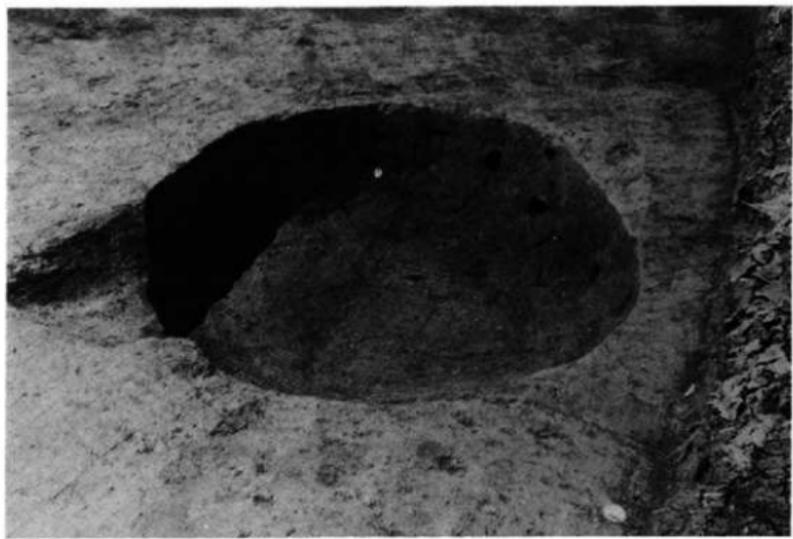
PL39 B 地区 トレンチ 拡張区



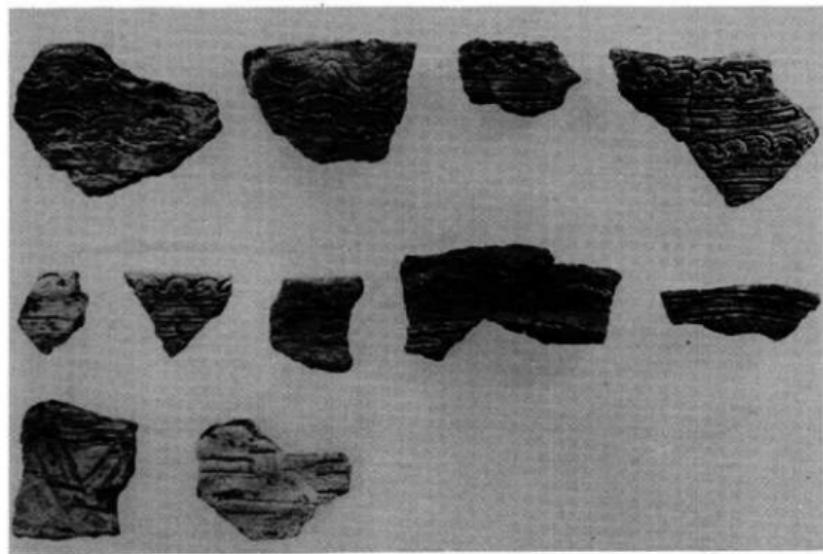
PL40 第 1 号 土 壤



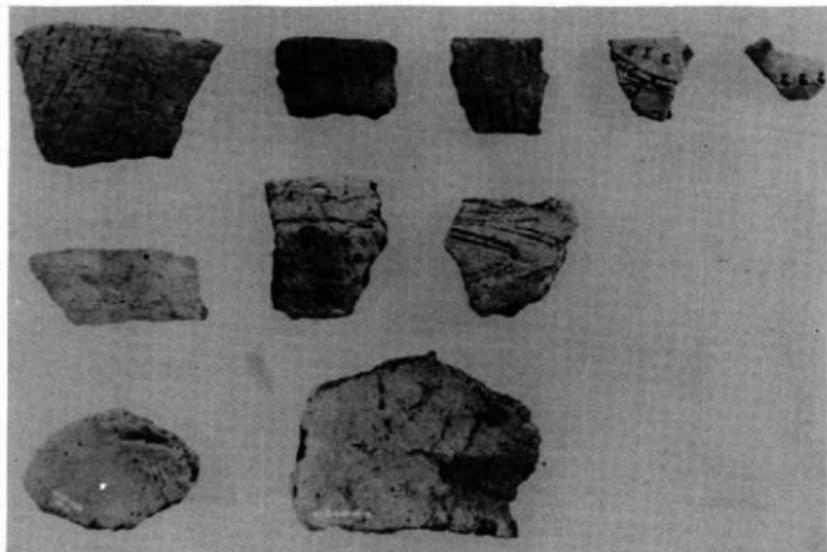
PL41 第 2 号 土 壤



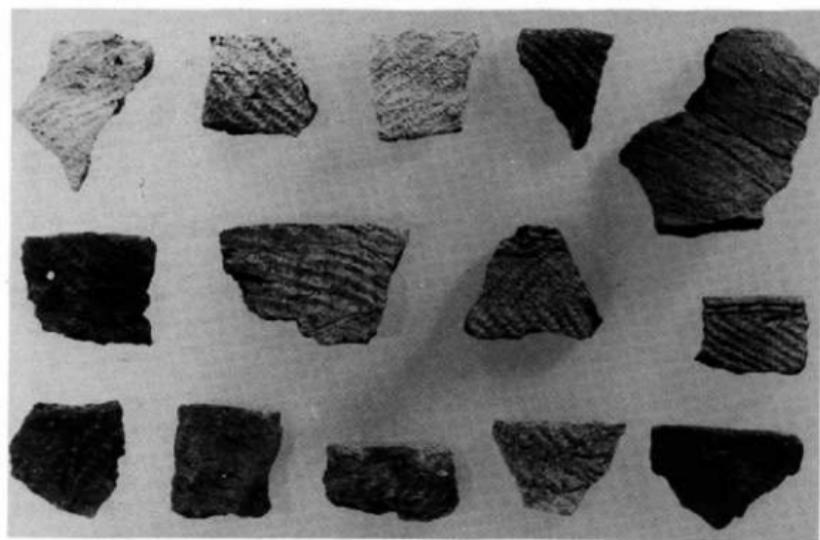
PL42 第 3 号 土 壤



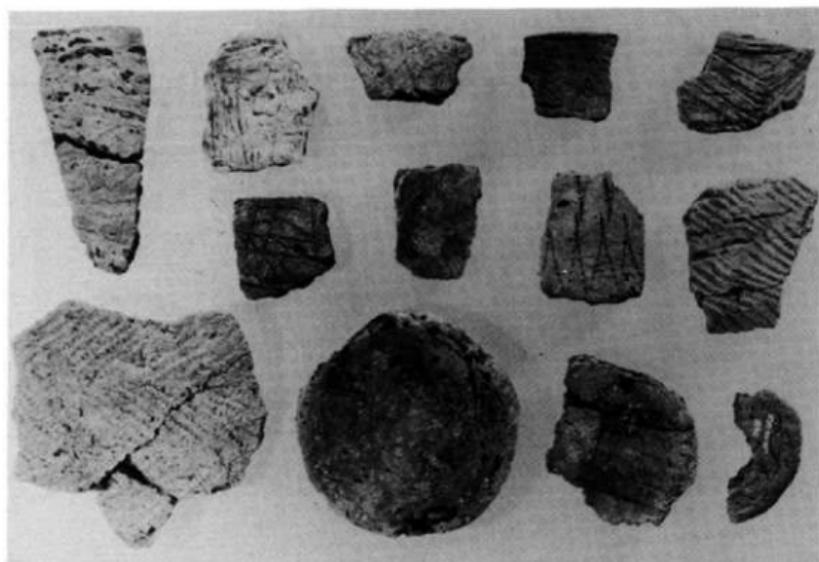
PL43 第1号住居跡出土土器



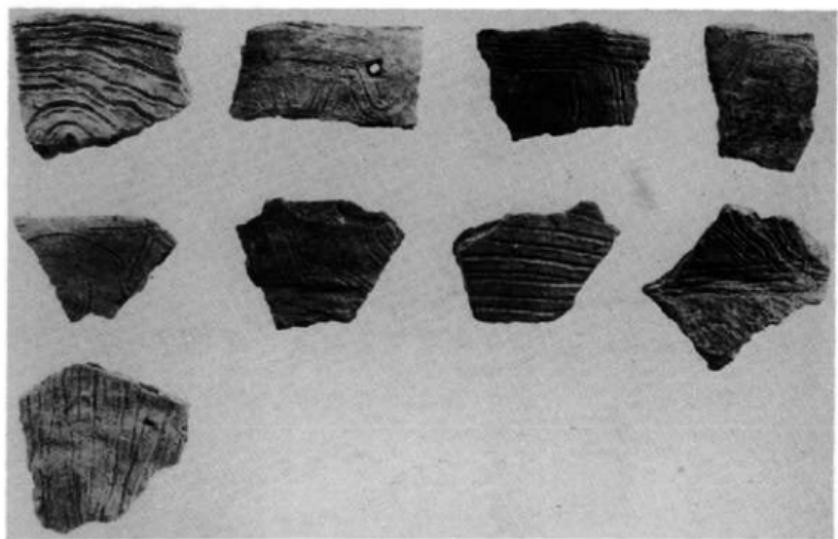
PL44 第1号住居跡出土土器



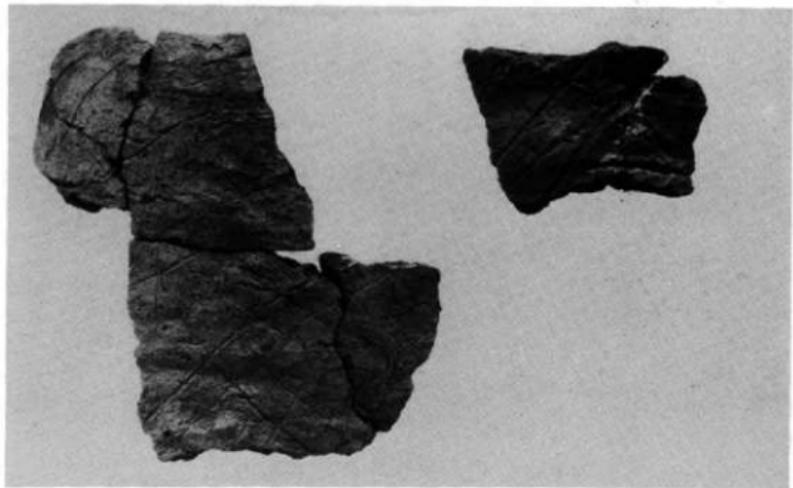
PL45 第2号住居跡出土土器



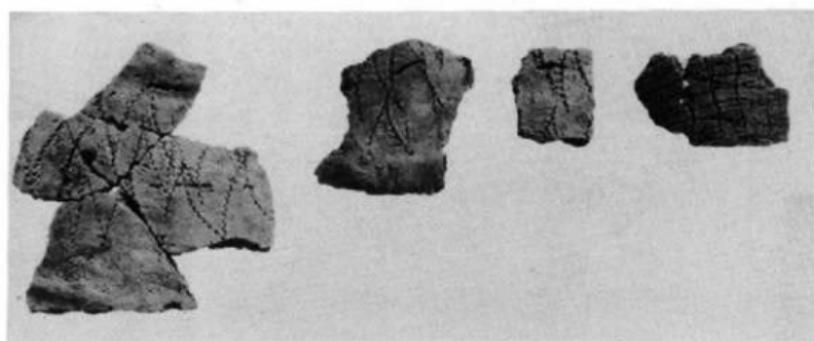
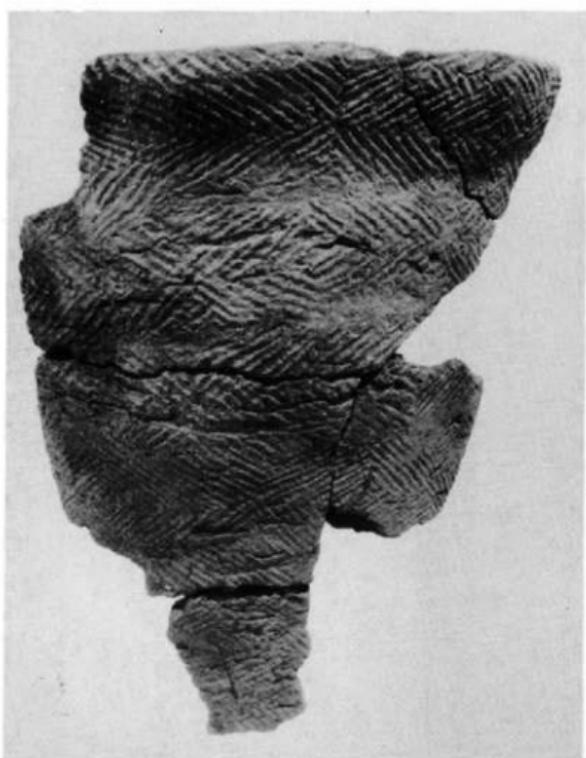
PL46 第2号住居跡出土土器



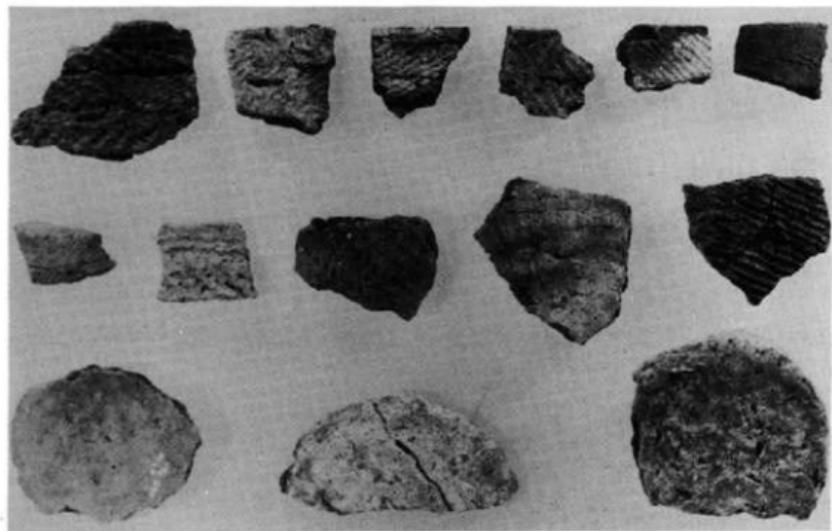
PL47 第4号住居跡出土土器



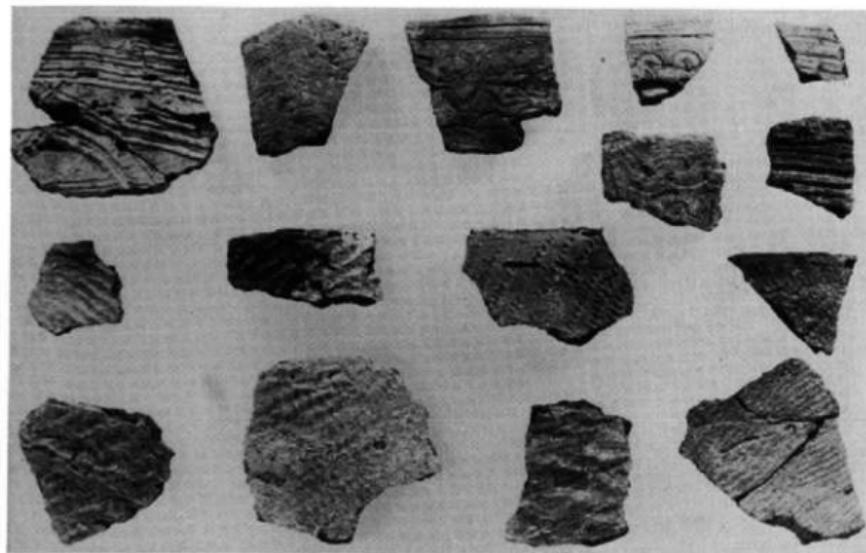
PL48 第4号住居跡出土土器



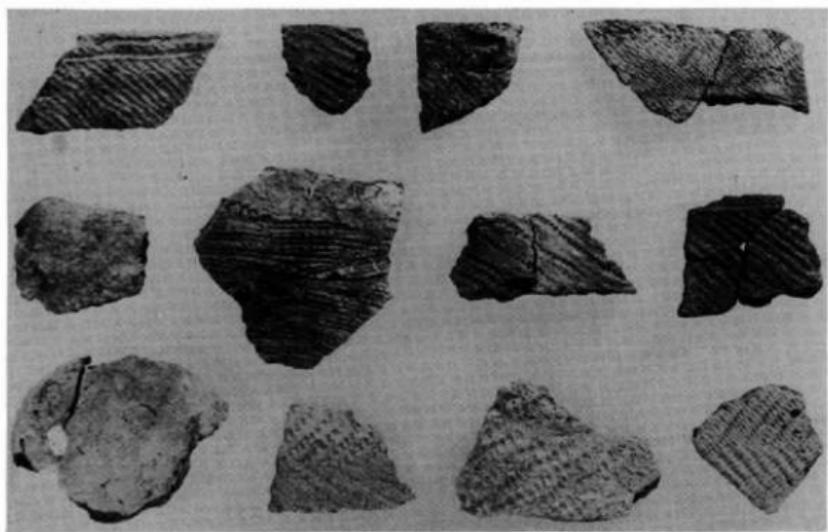
PL49 第4号住居跡出土土器



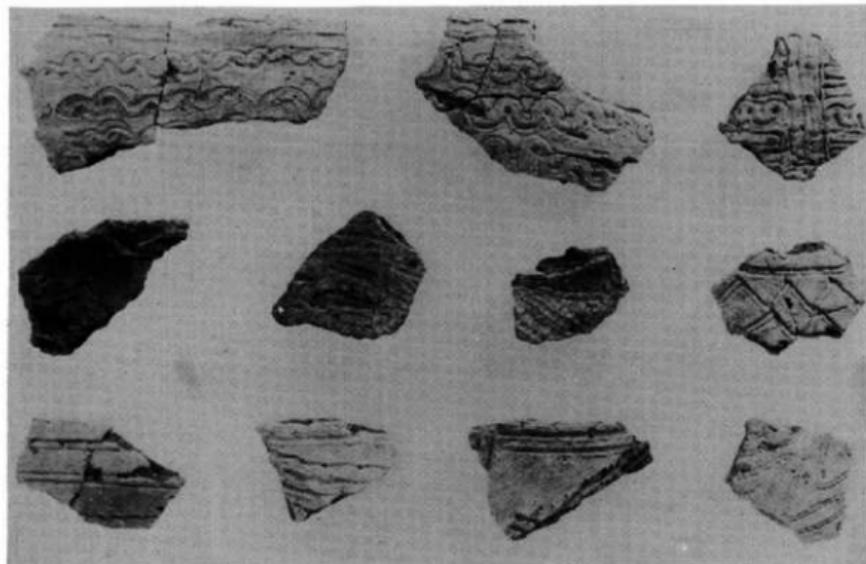
PL50 第3号住居跡出土土器



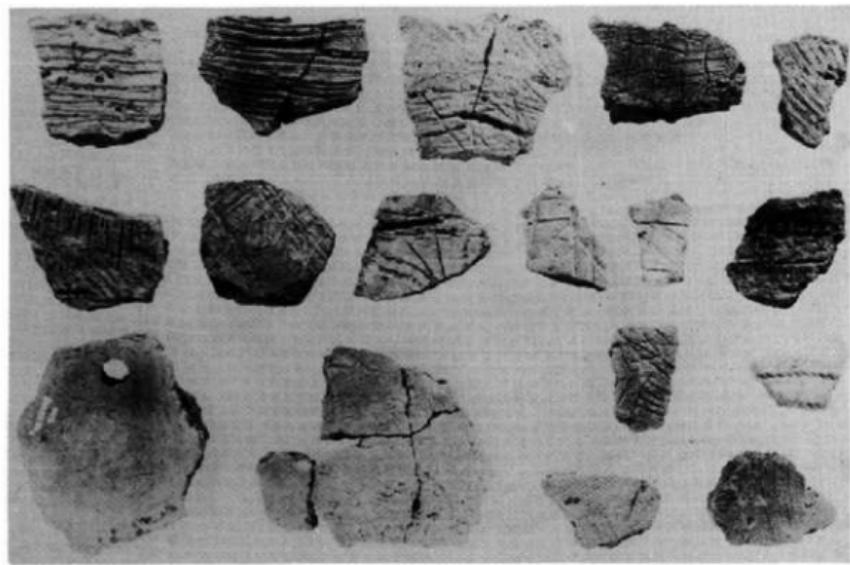
PL51 第5号住居跡出土土器



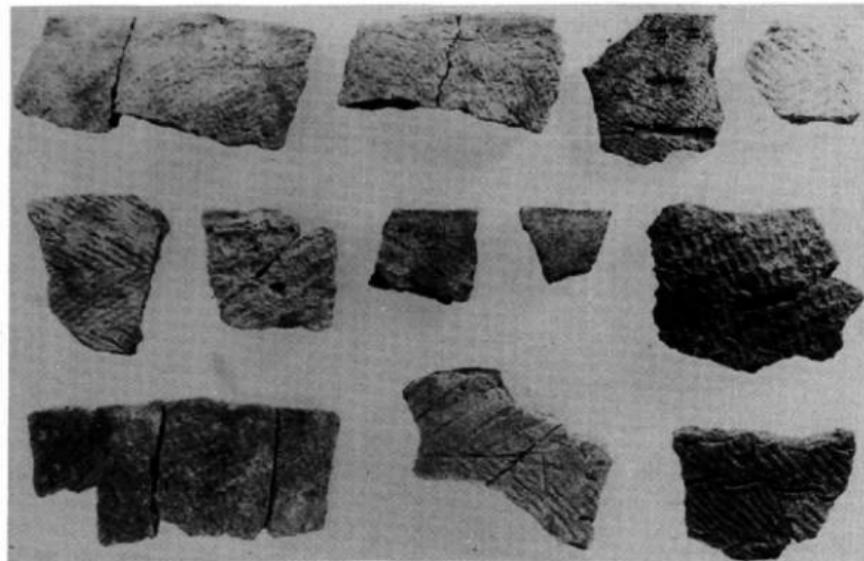
PL52 第 6 号 住居跡 出土土器



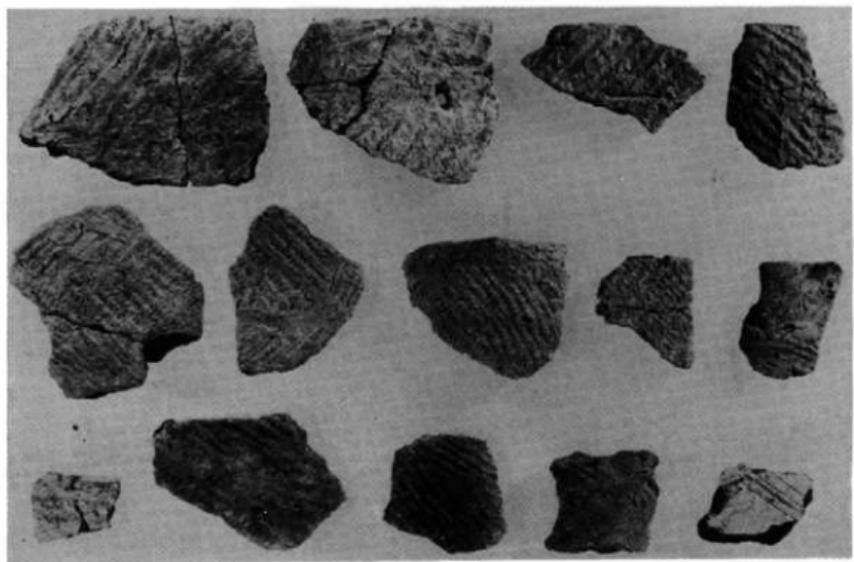
PL53 第 6 号 住居跡 出土土器



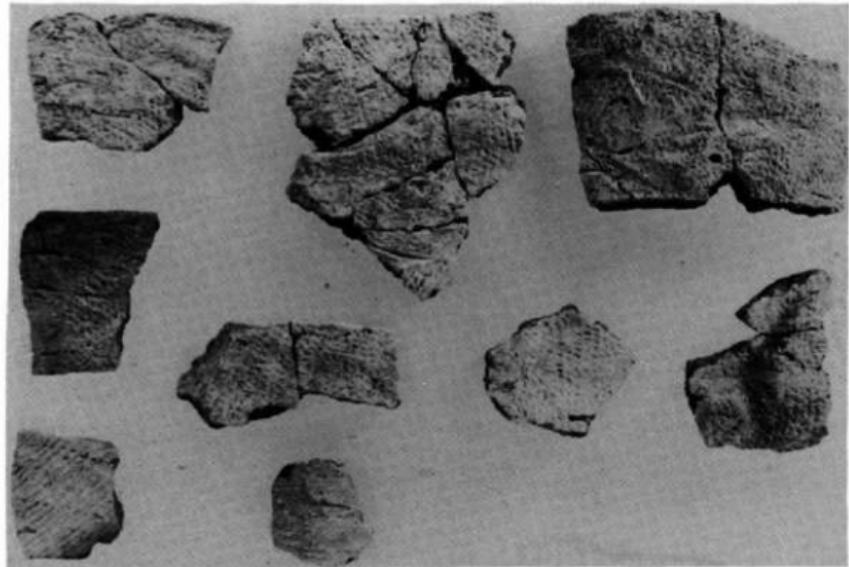
PL54 第7号住居跡出土土器



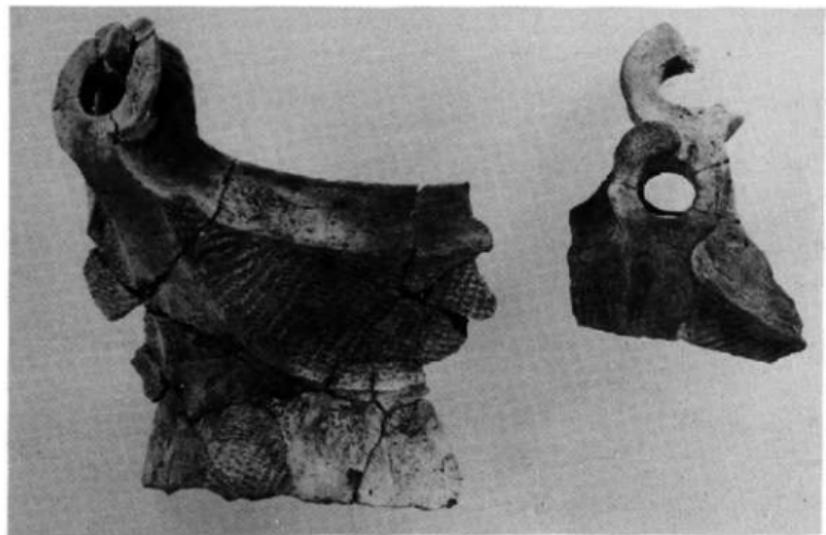
PL55 第7号住居跡出土土器



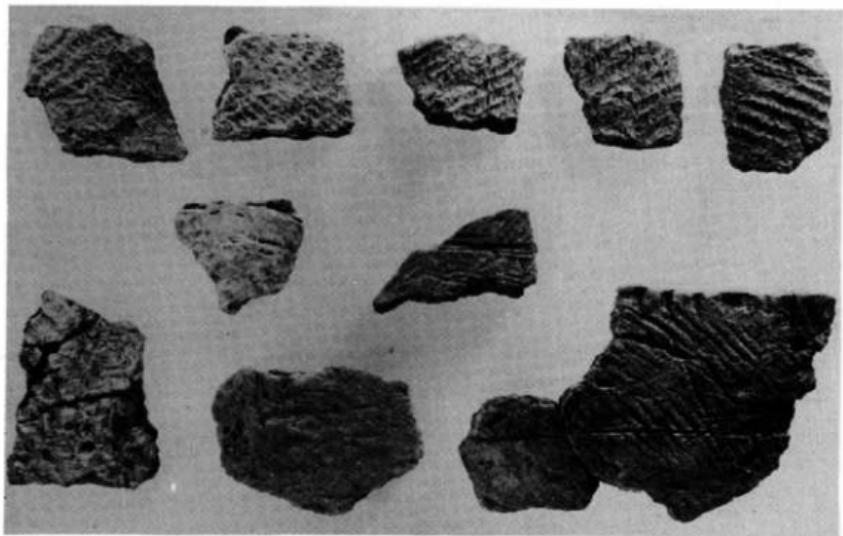
PL56 第8号住居跡出土土器



PL57 第9号住居跡出土土器



PL58 第10号住居跡出土土器



PL59 第11号住居跡出土土器



11-(7) 1



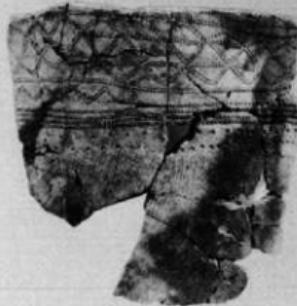
11-(7) 2

PL60 第11号住居跡出土土器



SK3-1

PL61 第3号土壤出土土器



SK3-2 (S=1/4)

一一一



(S=½)



(S=¼)

PL 62 第1号土壤出土ヤマトシジミ



12-1



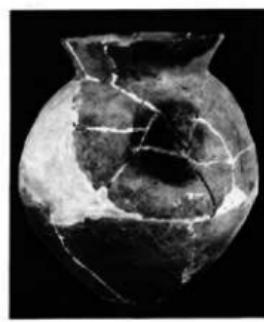
12-2



14-1



SK 2-1



SK 2-2



13-1



SK 2-4



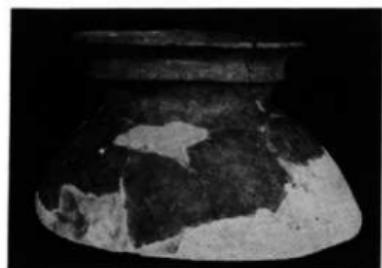
SK 2-3



SK 2-5

PL 63 住居跡出土土器

(S=36)



13-2



16-4



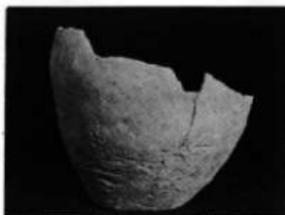
12-4



23-1



16-2



24-6



28-7

PL 64 住居跡出土土器

(S=1/4)



12-(1) 1



12-(1) 2



13-8



16-(1) 2



16-(1) 12



16-(1) 15



23-(1) 1



23-(1) 2



23-(1) 3



23-(1) 4



23-(1) 5



13-11



15-10



23-(1) 13



16-(1) 14



17-5



16-(1) 16



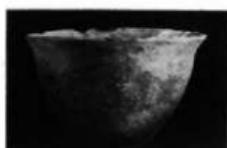
23-(1) 12

P L 85 住居跡出土土器

(S=1/6)



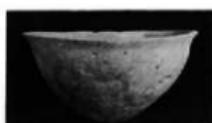
12-(2) 9



23-(2) 2



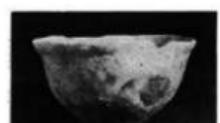
23-(2) 3



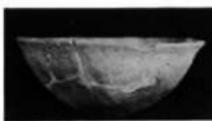
21-3



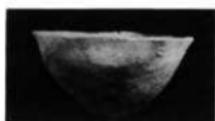
15-4



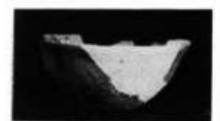
23-(2) 4



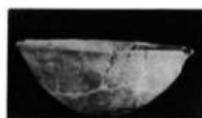
12-(2) 6



14-7



15-8



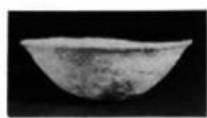
12-(2) 10



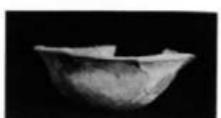
15-2



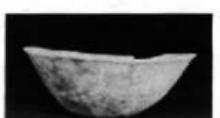
16-(2) 14



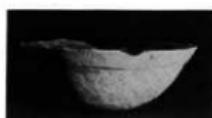
15-3



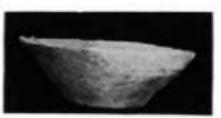
13-5



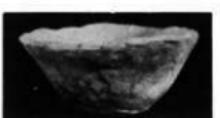
14-6



23-(2) 5



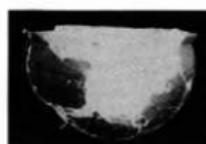
SK 2-6



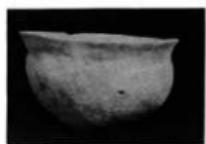
14-9

PL 66 住居跡出土土器

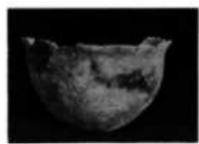
(S =  $\frac{1}{4}$ )



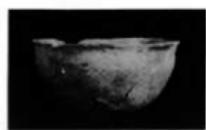
13-4



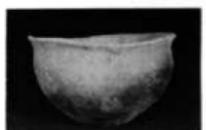
14-3



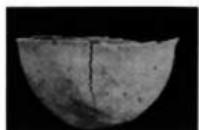
14-4



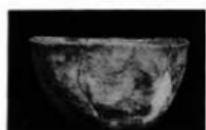
14-5



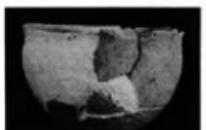
14-8



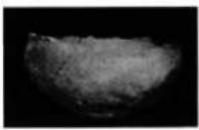
15-5



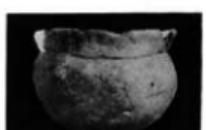
17-6



18-4



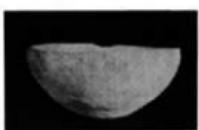
19-5



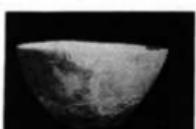
20-5



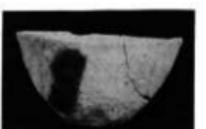
12-(2) 8



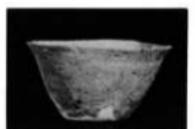
21-5



17-7



17-8



17-9

P L 67 住 居 踪 出 土 土 器

(S=1/4)



13-6



14-10



15-9



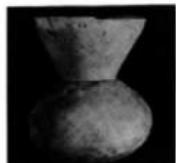
16-(2) 7



16-(2) 8



23-(2) 7



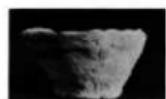
19-2



23-(2) 8



17-2



16-(2) 15



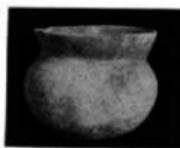
15-8



13-3



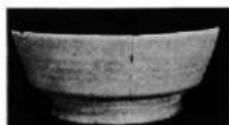
16-(2) 6



12-(2) 5

PL 68 住居跡出土土器

(S=1/4)



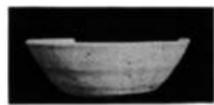
24-(1) 4



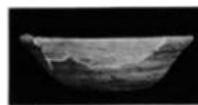
24-(1) 6



24-(1) 7



24-(1) 8



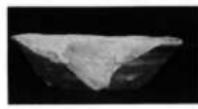
24-(1) 9



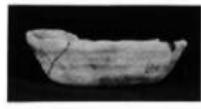
24-(1) 10



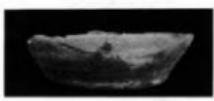
24-(1) 11



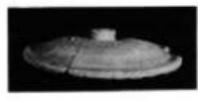
24-(1) 12



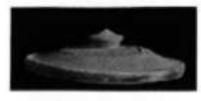
24-(1) 13



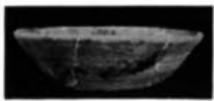
25-4



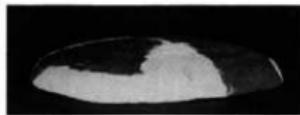
25-8



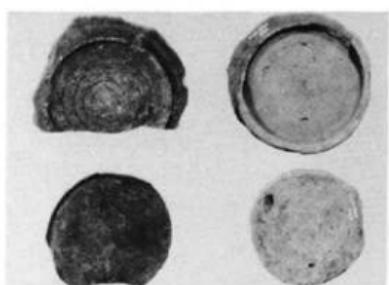
26-5



26-4



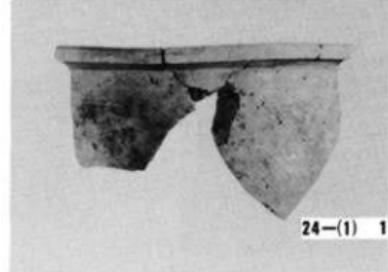
25-5



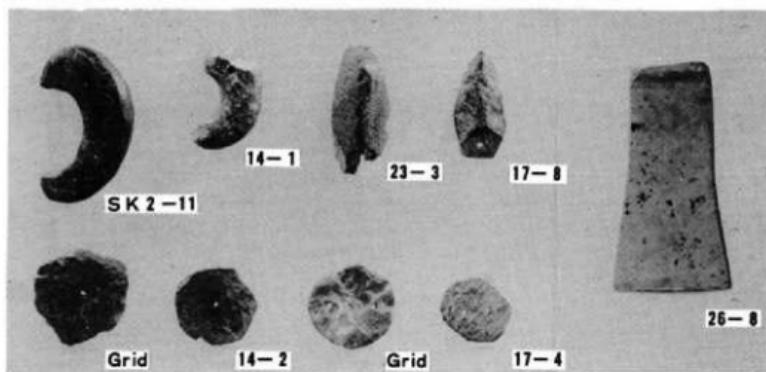
24-底部

P L 89 住 居 跡 出 土 土 器 (須惠器)

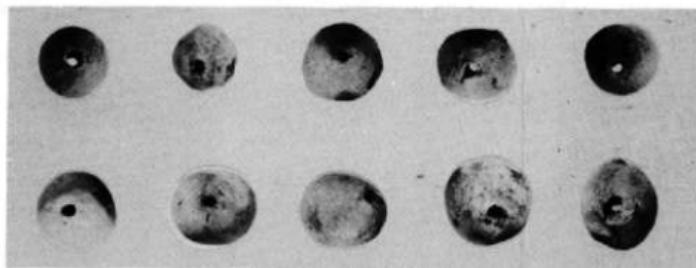
(S=1/4)



24-(1) 1



石製品



第17号住居跡出土球状土錘



第24号住居跡出土管状土錘 (S=3/1.5)

PL 70

大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書  
—大生郷遺跡—

昭和56年9月27日 印刷

昭和56年9月30日 発行

発行 財團法人 茨城県教育財團

水戸市南町3-4-57

印刷 川田プリント